ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 70

富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

－一番町共同ビル（仮称）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2014

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告 70

富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

－一番町共同ビル（仮称）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2014

富 山 市 教 育 委 員 会

調査区遠景（南から）

調査区遠景（西から）

調査区近景（南西から）

調査区近景（東から）

SD01［上層面背割水路］近景（東から）

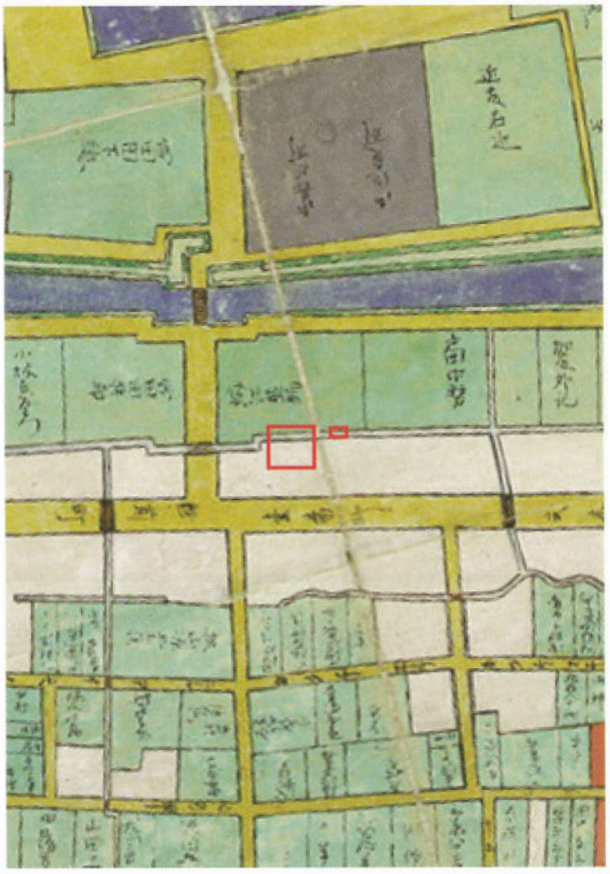
SD03［下層面背割水路］近景（西から）

SD03［下層面背割水路］石積み近景（西から）

「万治年間富山旧市街図」万治年間（1658～1661年頃）

「御調理富山絵図」寛文六（1666）年

「御城内外御焼失御絵図面」天保年間（1830～1844年）



「越中富山御城下絵図」安政元（1854）年

富山城下「一番町」周辺の絵図（富山県立図書館蔵）

絵図の中央付近に東西に延びる「背割水路」が描かれる。※赤枠：本調査区の位置

例　言

1　本書は、朝日印刷株式会社と株式会社北陸銀行による一番町共同ビル(仮称)新築工事に伴う富山城下町遺跡主要部の発掘調査報告書である。

2　本調査は、朝日印刷株式会社と株式会社北陸銀行の発注を受け、富山市教育委員会埋蔵文化財センター監理のもと、株式会社アーキジオが実施した。

3　本調査の概要は次のとおりである。

・調査期間　　発掘作業　平成25（2013)年11月21日～平成26（2014)年　2月28日
　　整理作業　平成26（2014)年　3月　1日～平成26（2014)年　8月29日
・調査面積　　423㎡
・監理担当者　　野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）
・調査担当者　　酢谷恭子、基峰　修（株式会社アーキジオ）

4　発掘調査から報告書の作成において、次の各氏・機関よりご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略)。

浦畑奈津子　神島伸郎　坂森幹浩　能登有紀　林　勝彦　南谷長俊　渡辺　晃
清水建設・石黒建設・近藤建設・前田建設共同企業体　富山市郷土博物館

5　出土遺物・原図・写真は富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

6　本書に掲載した絵図資料の使用については、富山県立図書館・富山市郷土博物館の許可を得た。

7　自然科学分析は、動物遺存体分析を納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター嘱託)が行い、その他の分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。分析結果は第4章に掲載した。

8　本書の執筆は、第1･2章、第5章第5節を野垣、第5章第3節を関　容子（株式会社アーキジオ)、第4章第2～4節を除くその他を酢谷の協力を得て基峰が行った。各々の文責は文末に記した。編集は基峰が行った。

凡　例

1　方位は真北、水平基準は海抜高である。

2　座標は公共座標（世界測地系第Ⅶ系)を使用し、南北をＸ軸、東西をＹ軸とする。

3　遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで表記する。

SD（溝）　SE（井戸）　SK（土坑）　SP（ピット・柱穴）　SX（その他遺構）

4　縮尺は全体平面図1/200、遺構平面図及び断面図1/80・1/40、遺物実測図1/4を基本とし、縮尺の異なる遺物はスケールで個別に表記した。

5　出土遺物の番号は、遺物実測図・遺物観察表・図版ともに対応する。

6　土層及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準拠した。

7　挿図中のトーンは次のことを表す。

■：地山　　■：赤漆　　□：黒漆　　■：油煙・炭化

目　次

巻頭図版
例言・凡例

第１章　調査の経過 …… 1
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　発掘作業と整理作業の経過 …… 1
第3節　調査日誌抄 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第1節　地理的環境 …… 3
第2節　歴史的環境 …… 6

第３章　調査の方法と成果 …… 10
第1節　調査の方法 …… 10
第2節　基本層序 …… 11
第3節　遺　構 …… 12
第4節　遺　物 …… 35

第４章　自然科学分析 …… 73
第1節　概　要 …… 73
第2節　古環境及び植物利用について …… 73
第3節　木製品について …… 93
第4節　動物遺存体分析について …… 104

第５章　総　括 …… 109
第1節　町屋構成遺構の構造と性格 …… 109
第2節　肥前陶器（朝鮮唐津）瓶について …… 115
第3節　越中瀬戸印花丸皿について …… 117
第4節　背割水路出土の土人形「狆抱き」について …… 120
第5節　本調査の総括と周辺調査との比較 …… 123

引用・参考文献 …… 128
図版
報告書抄録

図　目　次

第１図　富山平野の地形分類図 …… 4
第２図　富山城縄張現況比較と本発掘調査区位置 …… 5
第３図　江戸時代の絵図にみる本調査区の位置 …… 9
第４図　基本層序 …… 11
第５図　下層遺構全体平面図 …… 13
第６図　SD02（背割水路）　平面・立面図 …… 14
第７図　SD03（背割水路）　平面・立面・断面図 …… 15
第８図　SD03（背割水路）　断面図 …… 16
第９図　SD03（背割水路）内上水施設　平面・断面図 …… 17
第10図　SD05・06　SE03・04　平面・断面図 …… 18
第11図　SE06　SK31・32　平面・断面図 …… 20
第12図　SK08・09・10・13・14・16・17・18・22　平面・断面図 …… 22
第13図　SK23・25・26・27・29・30・33　SP03　平面・断面図 …… 24
第14図　SX03・04・05・09　平面・断面図 …… 26
第15図　SX07・08　平面・断面図 …… 27
第16図　SX10　SK21　SP04・05・06　平面・断面図 …… 29
第17図　上層遺構全体平面図 …… 31
第18図　SD01（背割水路）　平面・立面・断面図 …… 32
第19図　SD01（背割水路）　エレベーション図 …… 33
第20図　遺物実測図１　［下層面：肥前磁器］ …… 42
第21図　遺物実測図２　［下層面：肥前磁器］ …… 43
第22図　遺物実測図３　［下層面：肥前磁器、肥前系磁器］ …… 44
第23図　遺物実測図４　［下層面：肥前系磁器、唐津、唐津系磁器、瀬戸系磁器、瀬戸・美濃］ …… 45
第24図　遺物実測図５　［下層面：瀬戸系磁器、瀬戸・美濃］ …… 46
第25図　遺物実測図６　［下層面：瀬戸系磁器、瀬戸・美濃］ …… 47
第26図　遺物実測図７　［下層面：越中瀬戸］ …… 48
第27図　遺物実測図８　［下層面：越中瀬戸、土師器、信楽系磁器、丹波系陶器］ …… 49
第28図　遺物実測図９　［下層面：越前、瓦質土器、輸入陶磁器、不明陶磁器］ …… 50
第29図　遺物実測図10　［下層面：土人形、泥面子、土製品他、羽口］ …… 51
第30図　遺物実測図11　［下層面：羽口、鉄滓、石製品］ …… 52
第31図　遺物実測図12　［下層面：石製品、銭貨、煙管、金属製品他］ …… 53
第32図　遺物実測図13　［下層面：漆器、下駄］ …… 54
第33図　遺物実測図14　［下層面：下駄］ …… 55
第34図　遺物実測図15　［下層面：その他木製品］ …… 56
第35図　遺物実測図16　［下層面：その他木製品］ …… 57
第36図　遺物実測図17　［下層面：その他木製品］ …… 58
第37図　遺物実測図18　［下層面：その他木製品］ …… 59
第38図　遺物実測図19　［下層面：その他木製品、瓦］ …… 60

第39図　遺物実測図20　［上層面：統制磁器、九谷磁器、信楽系磁器、不明磁器、土製品他、銭貨、金属製品、木製品、瓦］…… 61
第40図　主要珪藻化石群集 …… 76
第41図　花粉化石群集 …… 78
第42図　植物珪酸体群集 …… 80
第43図　大型植物遺体群集 …… 82
第44図　SK26（№530）出土メロン類種子の大きさ …… 83
第45図　SK26（№530）出土メロン類種子の長さ …… 83
第46図　珪藻化石・植物珪酸体 …… 88
第47図　花粉化石 …… 89
第48図　大型植物遺体（1） …… 90
第49図　大型植物遺体（2） …… 91
第50図　大型植物遺体（3） …… 92
第51図　赤漆片のＸ線回折図 …… 96
第52図　木材（1） …… 99
第53図　木材（2） …… 100
第54図　木材（3） …… 101
第55図　木材（4） …… 102
第56図　漆塗膜 …… 103
第57図　出土動物遺存体 …… 108
第58図　江戸大下水の構造 …… 110
第59図　出土下駄の分類 …… 112
第60図　遺構の変遷 …… 113
第61図　江戸時代後期（19c前半）の町屋構成 …… 114
第62図　肥前陶器（唐津）瓶 …… 116
第63図　見込み内底面に十六弁菊を印花する主な越中瀬戸丸皿 …… 119
第64図　主な土人形「狆抱き」と生産地 …… 121
第65図　描かれた土人形「狆抱き」 …… 122
第66図　背割水路（Ⅱ期）の底面構造と現地表面の標高 …… 124
第67図　絵図にみる背割水路の変化 …… 125

表　目　次

第１表　遺構一覧表 …… 62
第２表　下層面：陶磁器・土器遺物観察表 …… 63
第３表　下層面：土製品他遺物観察表 …… 68
第４表　下層面：鍛冶関連遺物観察表 …… 69
第５表　下層面：石製品遺物観察表 …… 69
第６表　下層面：金属製品遺物観察表 …… 69
第７表　下層面：木製品遺物観察表 …… 70

第 8 表　下層面：瓦遺物観察表 …… 71
第 9 表　上層面：磁器遺物観察表 …… 72
第10表　上層面：土製品他遺物観察表 …… 72
第11表　上層面：金属製品遺物観察表 …… 72
第12表　上層面：木製品遺物観察表 …… 72
第13表　上層面：瓦遺物観察表 …… 72
第14表　分析試料一覧（土壌・種実遺体） …… 73
第15表　珪藻分析結果 …… 77
第16表　花粉分析結果 …… 79
第17表　植物珪酸体含量 …… 80
第18表　微細植物片分析結果 …… 81
第19表　種実同定結果 …… 83
第20表　樹種同定結果 …… 93
第21表　分析試料一覧（漆塗膜・顔料分析） …… 95
第22表　上層面出土動物遺存体集計表 …… 107
第23表　下層面出土動物遺存体集計表 …… 107
第24表　撹乱出土動物遺存体集計表 …… 107
第25表　遺跡出土の主な土人形「狆抱き」 …… 121

図　版　目　次

図版 1　下層面遺構（1）
調査区全景（上から）　調査区全景（北西から）
図版 2　下層面遺構（2）
SD03［背割水路］全景（南西から）
SD03北側石積み西部（南から）　SD03北側石積み中央部（南から）
SD03南側石積み中央部（北から）　SD03南側石積み西部（北から）
図版 3　下層面遺構（3）
SD01・SD02・SD03［背割水路］断面（東から）
SD03内上水施設（東から）　SD03内上水施設（北から）
上水施設設置によるSD03石積みの改修（南東から）
図版 4　下層面遺構（4）
SD02［背割水路・中央の石列］の検出（西から）
SE03完掘（東から）　SE04下部側板完掘（南東から）　SE06完掘（東から）
SK23断面（東から）　SK25断面（東から）　SK29断面（南から）
図版 5　下層面遺構（5）
SK26完掘（東から）　SK30遺物出土状況（南から）　SX03完掘（北から）
SX07完掘（西から）　SX10・SK21完掘（南東から）　曲物底板出土状況（北東から）
調査区北壁層位（南から）

図版 6　下層面遺構（6）
調査区［B区］全景（西から）　調査区［B区］近景（西から）
SD03［背割水路］南側石積み根石（西から）　SD06完掘（南から）
図版 7　上層面遺構
調査区全景（東から）　SD01［背割水路］完掘（東から）
SD01北側石積み東部・胴木（南から）　SD01 C-C′ 断面（東から）
図版 8　下層面遺物（1）
SD02・03　SD03
図版 9　下層面遺物（2）
SD03　SE06　SK16　SK18　SK25　SK30　SX03
図版10　下層面遺物（3）
SX07　SX10　SD02・03　SD03　SK30　包含層
図版11　下層面遺物（4）
SD03　SE03　SK16　SK18
図版12　下層面遺物（5）
SK26　SK30　SX10　SD02・03　SD03
図版13　下層面遺物（6）
SD03　SK30　SX04
図版14　下層面遺物（7）
SX04　SD03　SD02・03　包含層
図版15　下層面遺物（8）
SX07　SX09　SD02　SD02・03　SD03　SK29　SX03　包含層　試掘トレンチ
B区撹乱
図版16　下層面遺物（9）
包含層　SD02　SD02・03　SD03　SK09　SK13　SK16　SK30
図版17　下層面遺物（10）
SD02　SD02・03　SD03
図版18　下層面遺物（11）
SD05　SK25　SK30　包含層　SD02・03
図版19　下層面遺物（12）
SD02・03　SD03　SD03内上水施設　SK18　SK26　SX03　SX04　SX07　包含層
曲物底板
図版20　上層面遺物
SD01　SX01　包含層

第1章　調査の経過

第1節　調査に至る経緯

富山城下町遺跡主要部は、平成25年度に富山市教育委員会が実施した試掘調査で確認した遺跡である。城下町のうち旧北陸街道沿いの町屋主要部を埋蔵文化財包蔵地として、平成25年7月に『富山市遺跡地図』に搭載した。本調査区の北部はもともと「富山城跡」の範囲に含まれているが、実態は城下町にあたることから標記のとおり呼称する。

平成24年11月に設計会社から当該地での朝日印刷株式会社・株式会社北陸銀行の共同ビル建設について、埋蔵文化財取扱いの問合せがあり、事前協議の場をもつこととなった。建築計画は地上9階建ての鉄筋コンクリート造とされた。今後の工事のスケジュールを確認するとともに、試掘調査を要すること、その方法・時期等について協議を行った。

平成25年5月22日に工事主体者である両社から文化財保護法93条に基づく届出が提出されたことを受け、試掘調査を6月6・7日に行った。対象面積756.16㎡の範囲に4本のトレンチ（総延長64.2m）を設定し、遺構・遺物の所在状況を確認した。対象地の東半部は、約20年前まで6階建ての鉄筋コンクリート造の建物が建っていたため、ほぼ全域で地下約2mまで撹乱が及んでいたが、北東部の一角のみ遺跡の残存がみられた。西半部は、比較的残りが良く、近代とみられる背割水路を確認したほか、その下層に江戸時代後期を中心とする溝や土坑が所在していた。遺跡所在面積は合計465㎡であった。

試掘結果を受けて工事主体者側と協議を行ったが、建物が敷地のほぼ全域を占め、建物構造上も遺跡の保存が不可能なことから、損壊を受ける423㎡について記録保存のための発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、工事主体者が民間発掘調査会社へ委託し、埋蔵文化財センターが工事主体者からの監理依頼を受け調査の監理にあたった。

発掘調査は、朝日印刷株式会社・株式会社北陸銀行から発注され、同年11月15日から平成26年8月29日を業務期間として株式会社アーキジオが受託した。11月15日に富山市教育委員会、朝日印刷株式会社、株式会社北陸銀行、株式会社アーキジオの四者で協定を締結し、調査に着手した。

第2節　発掘作業と整理作業の経過

平成25年11月15日から準備作業と調査範囲の設定を行い、21日から発掘作業に入った。調査区は2地区に分かれ、西側調査区をA区（387㎡）、東側調査区をB区（36㎡）とした。降雪前にできるだけ調査を進捗させるため主体となるA区を先行して実施した。排土置場の関係から、A区の調査完了後、埋戻しを行い、その後B区の調査に移った。

A区の表土掘削は11月21日から23日まで行った。上層の背割水路を検出した面でいったん掘削を止め遺構検出・遺構掘削作業を行った。上層面における遺構は、背割水路が中心で、撹乱が多くみられた。測量までの作業を12月25日に終えた後、引き続き下層への調査に取りかかった。下層までの遺物包含層は厚く、粘土質であることにくわえ、冬期間の作業であったため掘削に困難を伴った。包含層は相当量の遺物を含むことから、遺物の出土状況を考慮しながら重機と人力を併用して慎重に掘削を行った。

平成26年1月14日から下層面の遺構検出と遺構掘削を行った。作業効率上、最初に背割水路を集中的に掘削し、その後、他の遺構の掘削を行った。これらの作業と併行して写真撮影･測量を行った。

2月11日には市民を対象とした現地見学会を実施し、背割水路を中心に紹介した。真冬の開催にもかかわらず、400名以上もの参加者があり、関心の高さがうかがえた。

現地見学会終了後に空中写真撮影を実施、精査を経て2月17日にA区の調査を完了した。

A区の埋戻し後、B区の調査に入った。B区は下層面近くまで撹乱が及んでおり、遺構検出面まで重機による掘削を行った。遺構数は少なく短期間で完了した。2月24日に埋蔵文化財センター所長による終了確認を経て、2月27日には撤収を終えて、工事主体者へ現地を引き渡した。

発掘作業中はおよそ2週間に1回、工程会議の場を設け、協定を結んだ四者にビル建設にあたる共同企業体を含めた五者が、調査の進捗と以後の予定、調整事項を協議しながら進めた。

その後､整理作業を実施し､平成26年8月29日に発掘調査報告書(本書)を刊行した。　　(野垣)

第3節　調査日誌抄

平成25年
〔11月〕
21日：バックホウでの表土掘削を開始。
23日：表土掘削終了、発掘道具及び機材搬入。
25日：基準点測量及びグリッド杭打ち。
　　人力による掘削及び遺構検出を開始。
30日：SD01(背割水路)検出、掘り下げの開始。
〔12月〕
3～9日：SD01(背割水路)掘り下げ、断面図作成。
16～18日：SD01(背割水路)平面図作成、断ち割り。
20～23日：土坑等検出と掘り下げ、断面図・平面図作成。
25日：上層面清掃、全体写真撮影、上層面調査終了。
26～28日：バックホウでの排土移動。
平成26年
〔1月〕
7～8日：ダンプによる排土搬出。
9～13日：包含層掘削。
14日：下層面遺構検出の開始、グリッド杭打ち。
16～18日：SD03(背割水路)検出、掘り下げ開始。
20～27日：SD03(背割水路)掘り下げ、断面図作成。
28～31日：土坑等掘り下げ、断面図作成。
〔2月〕
1～6日：溝等掘り下げ、断面図・平面図作成。
7日：SD03(背割水路)清掃、全景写真撮影。
11日：現地見学会開催、空中写真撮影。
13日：調査区全体平面図作成。
14～17日：SD03(背割水路)断面図作成、A区下層面調査終了。
18日：B区バックホウによる表土掘削。
19～21日：B区下層面遺構検出、掘り下げ、断面図作成。
22～24日：B区全体写真撮影、平面図作成、B区下層面調査終了。
25～27日：機材搬出、現地調査完了。

現地見学会

SD03（下層面背割水路）掘り下げ

SD01・02・03（背割水路）断面測量

発掘作業・整理作業の従事者(男女別・五十音順)
石田哲雄・鏡　武夫・柿岡和義・紺井　茂・近藤智秀・斎藤勝利・
砂原憲彦・道口昭三・西川精一・林　達雄・宝田紀代春・船木藤夫・
丸山大貴・山口　治・山口俊明・横川厚雄
菅頭明日香・関　容子・中山佳子・藤井美紀・藤岡美由紀・堀田伊通子

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

富山市は、平成17年の市町村合併により、富山県の中央から南東部まで県域の三分の一近くを占める広大な市域となった。北は富山湾、東は立山連峰、西には丘陵・山村地帯が連なり、南は岐阜県境に接して森林が広がる。

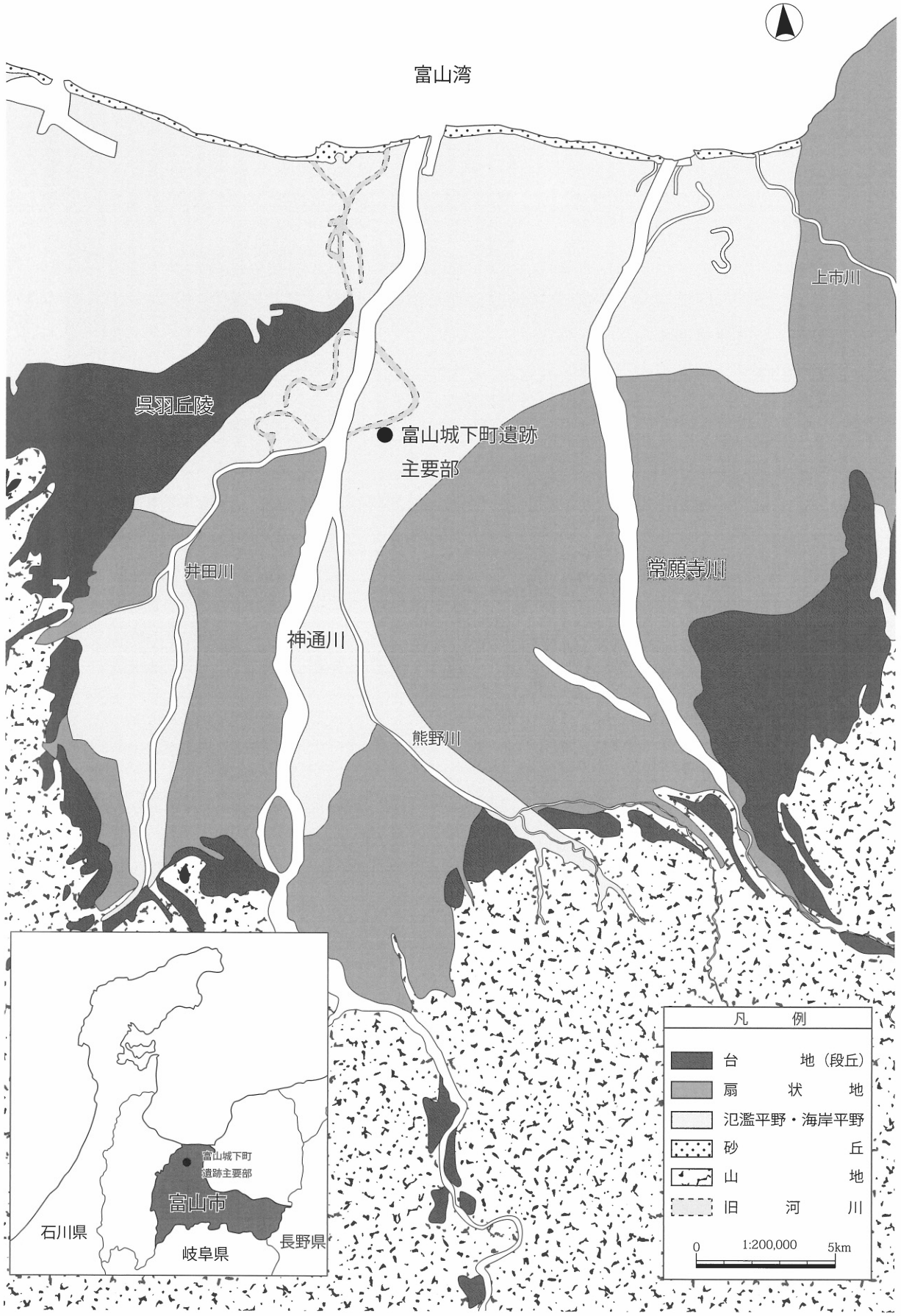
富山城下町遺跡主要部は、市域北部の中心市街地に位置する。調査地は富山市一番町である。市域を南北に縦断する国道41号線と旧北陸街道にあたる平和通り交差点の北西角にあたり、都市化・商業化が進んだ地域である。

富山県の平野は、県域の中央を南北に延びる呉羽丘陵により東西に分けられ、それぞれ「呉東平野」、「呉西平野」と呼び慣らわされる。呉東平野は、さらに東から黒部平野、新川平野、中部平野に細分され、富山市中心市街地はこのうちの中部平野に位置する。この中部平野を狭義の意味での富山平野と呼ぶこともある（新越中風土記刊行会1978）。以下、富山平野とする場合は、この狭義の場合を指す。富山平野は、東側は新川平野と接し、西側は呉羽丘陵で限られている。常願寺川、神通川、井田川などの扇状地と氾濫平野・海岸平野が発達する。特に常願寺川は県南東部の山岳地帯に水源を持ち、上流には立山カルデラの大崩壊地があることから莫大な量の砂礫が供給され、広大な扇状地を形成している。急流河川でもあることから流域では過去に何度も洪水の被害に見舞われている。富山城はこの常願寺川の扇端付近に位置している。立山連峰や常願寺川水系からの伏流水が扇端に位置する富山城下町付近で湧水し、周辺の発掘調査でも多くの井戸が検出されている。

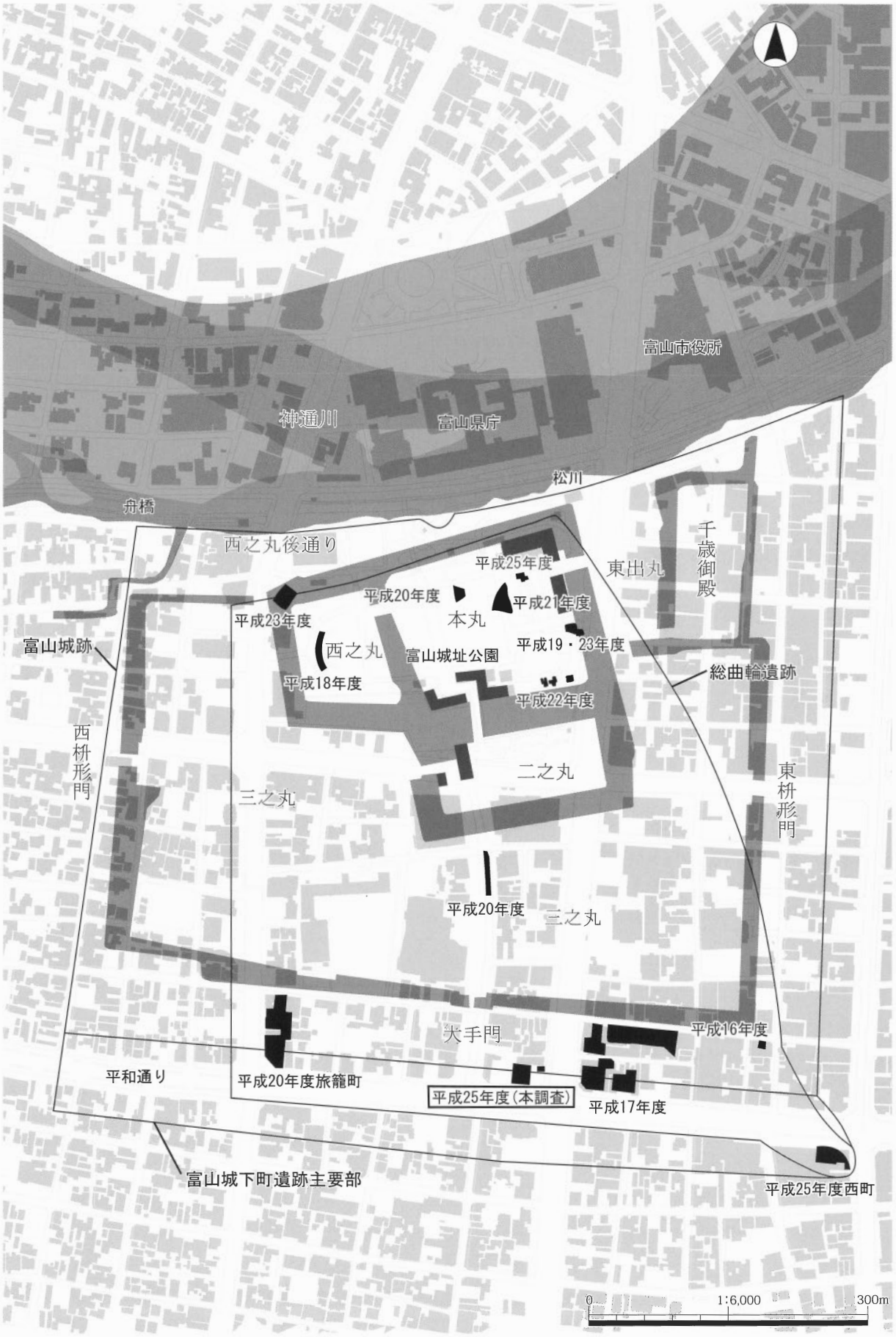
一方、富山城は神通川下流の右岸に位置し、神通川との関係も深い。富山市街地以北は、幾筋もの旧流路が認められ、自然堤防が発達している。現在、神通川は富山城の西側を真っ直ぐに北流するが、江戸時代以前は瘤状に蛇行し、富山城のすぐ北を湾曲して流れていた。富山城の東は鼬川が流れ、西・北・東の三方を川で囲まれる要害をなしていた。現在城址公園となっている旧本丸・西ノ丸は標高約10mの神通川の自然堤防上にあり、南に位置する二ノ丸、三ノ丸、城下町はやや低い標高8.8m前後の後輩湿地に立地する。こうした立地環境に対応して、本丸・西ノ丸はしまりの強い砂礫質土からなり、城下町部分は水分の多い粘質土・シルトを主体とする。さらに、城下町の微地形を標高からみると、南よりも北、東よりも西が低い傾向があり、全体としては南東から北西に向かって低くなる（國香1995）。

蛇行した神通川は、洪水の被害を度々生じさせたため、明治から昭和初期にかけて流れを直線的に変える馳越工事が行われた。工事により富山城北側を流れていた旧河道は、廃川地となって大部分が埋め立てられ、県庁や市役所が建つこととなった。旧河道は規模を縮小して現在松川としてその名残をとどめている。

本調査区に南面して東西に延びる現在の平和通りは、江戸時代の北陸街道と重なり、本調査区の約250m東で飛騨街道の起点と交わる。越中の産物が神通川や鼬川を利用して富山城下町に集まり、これらの街道を通って飛騨方面や各地に運ばれた。富山城下町は、水陸交通の要衝に位置していたことがうかがえる。（野垣）



第1図　富山平野の地形分類図



第2図　富山城縄張の現況比較と本発掘調査区位置（富山市郷土博物館作成図を改変）

第2節　歴史的環境

(1) 富山城・城下町域における室町時代以前の様相

これまでの富山城と城下町の発掘調査で、築城前にあたる室町期以前の遺構・遺物を一部確認している。

平成19年度に行った本丸東部の発掘調査で、土塁下部から刀装具（笄）や赤漆椀、陶磁器が出土し、室町期の武家居館に関わる遺構の存在が推測された。その下層では平安時代の湿地の存在が明らかになり、築城前の微地形が明らかになった。平成22年度には城址公園西部（旧西ノ丸）の工事立会で、「宅持」と墨書された奈良時代後期の須恵器が出土した。付近に官衙関連施設が存在した可能性がある。

室町期以前の遺構・遺物は、現在のところ点的な確認にとどまっているが、早くから当該地が重要な位置を占めていたことが推定できる。

なお、富山城築城前にあたるこれらの遺跡は「総曲輪遺跡」とし、「富山城跡」や「富山城下町遺跡主要部」とは別の埋蔵文化財包蔵地としている。

(2) 戦国時代の富山城

戦国期富山城の概要　富山城は、越中守護代神保長職により築造されたのをはじまりとする。天文12（1543）年のことと考えられている。ここから前田氏の居城となるまでのおよそ60年は、17世紀以降の近世富山城の縄張りと大きな違いがある。

戦国期富山城は頻繁に城主の入れ替わりが生じた。神保長職は、富山平野南部の太田保への進出の足がかりとして富山城を築いたが、永禄3（1560）年には上杉謙信が神保長職を追い、富山城を攻略した。その後、反上杉勢力である一向一揆による占拠などがあったものの、天正4（1576）年、謙信は一揆勢を富山周辺から排除し、越中全域をほぼ支配下におさめた。謙信の死後は織田信長の勢力が越中への進出を強めた。その中心となったのが信長に仕える神保長住とその支援のため越中に派遣された佐々成政である。佐々成政は、本能寺の変後、豊臣秀吉から越中支配を認められたが、後に成政は徳川家康・織田信雄に味方するなどして秀吉と対立した。このため天正13（1585）年、秀吉による征討を受け、富山城は破却された。

戦国期富山城は、城址公園の1kmほど南の星井町付近にあったとする説が有力であったが、平成14年度から行った城址公園整備に伴う一連の試掘調査・本調査によって、当該期の遺構が良好に残っていることが明らかになり、近世富山城と同じ現城址公園に存在していたことが確実となった。

発掘調査の成果　城址公園の中央では、城を東西に分けるとみられる堀が確認され、標高差から東側の郭が本丸、西側が二ノ丸と推定している（富山市教委2004）。城址公園の北部ではこれに直交する東西方向の薬研堀を検出した。これら堀の配置から推定される縄張りは、近世富山城と大きく異なっている。

このほか、本丸東部で土採り跡とみられる鍬先による凹凸面や（富山市教委2006a・2008）、北東部で井戸（富山市教委2009）を検出した。二ノ丸では鍛冶遺構とみられる焼土が見つかり、周辺からは羽口、鍛造剥片、鉄滓、土壁片が出土した。砥石や刃物の表面の仕上げに使う雲母も見つかり、研磨までの工程を行っていたと推定できる（富山市教委2004）。

また、近世の城下町範囲にあたる旅籠町地内の平成20年度調査では、15世紀後葉から16世紀後葉の溝・土坑を検出している（富山市教委2010）。溝は直交し、区画溝の可能性がある。戦国期富山

城と直接結び付くか断定はできないが、城下町遺構の可能性がある。

戦国期富山城の遺構はなお点的な把握にとどまっており、全体構造を把握するまでに至っていない。

(3) 近世の富山城

近世富山城の概要　慶長2（1597）年に富山城に入った加賀二代藩主前田利長は、翌年家督相続のため金沢に移ったが、慶長10（1605）年、隠居により再び富山城に入った。このとき城の大規模な改修が行われ、富山城は近世城郭として整備された。ところが、慶長14（1609）年、大火によって富山城は焼失し、その後しばらく再建されず、元和元（1615）年、一国一城令により廃城となった。

寛永16（1639）年、加賀藩から10万石を分与されて富山藩が成立する。初代藩主となった前田利次は、当初百塚の地に新城を建設する予定であったが断念し、廃城となっていた富山城を居城と定めた。寛文元（1661）年から幕府の許可を得て本格的な整備を行った。幕府からは新たな天守のほか、櫓3ヶ所、櫓門3ヶ所などの新築が許可されたものの、最終的に天守や櫓は建てられず、櫓門も1ヶ所にとどまった。三ノ丸外周の外堀は位置をずらし拡張された。また、外堀外周には武家屋敷が一列に並べられた。城下町は、全体のおよそ八割にあたる範囲を囲郭し惣構を新設するとともに、東西に外町を置いて拡張した。

なお、寛文期以降の本丸等内郭の縄張りは、絵図にみえる慶長期のそれと規模・形状が異なることから、承応3（1654）年の神通川氾濫に伴う修復で本丸・西ノ丸・二ノ丸に大幅な変更が加えられたとする説がある（古川2006）。

本丸・西ノ丸・二ノ丸・三ノ丸の発掘調査　城址公園整備や路面電車敷設、民間開発に伴って複数の調査を行っている。

平成14年度から継続している城址公園整備に伴う調査は、本丸・西ノ丸を対象に行い、井戸・石組みの溝・廃棄土坑など多くの遺構が見つかっている。平成21年度調査では、寛文元（1661）年に建てられた本丸御殿の縁側に置かれた沓脱石あるいは飛び石とみられる石材を確認した。また、石垣解体修理に伴う発掘調査では石垣の構造や積替えの過程が明らかになった。

平成19年度と平成22年度は、本丸南東部の土塁の調査を行い、約40°の傾斜をもつことや盛土の造成方法が明らかになった。

西ノ丸北西部の内堀の跡地で平成23年度に雨水貯留施設設置に伴う発掘調査を行ったところ、現地表面から約5.8m下で堀底を確認した。

二ノ丸・三ノ丸は、主に平成20 年度からの路面電車敷設工事に伴う発掘調査・工事立会で成果が得られている。二ノ丸の二階櫓門や三ノ丸の大手門では石垣の基底部を検出し、位置や規模が判明した。また、三ノ丸南部においては寛文期以降の絵図に表れない堀を検出し、拡張する前の慶長期外堀とみられている（富山市路面電車推進室・富山市教委2009）。

城下町の発掘調査　近年、民間開発に伴う発掘調査が相次ぎ、北陸街道沿いを中心とする城下町主要部の様相が明らかになりつつある。

本調査区から国道41号線を挟んだ東側隣接地では、平成17年度に2811㎡の発掘調査を行った（富山市教委2006ｂ）。遺構の中心は19世紀前半から幕末期である。この調査で初めて武家屋敷地と町屋敷地を分ける背割水路を検出し、その存在が注目されることとなった。背割水路は石組みで幅約1.5～2.8m、深さ0.6mである。本書報告の下層の背割水路（SD03）と一連のものとみられる。石組みの背割水路が構築される前には、素掘りの溝が掘られており、背割水路が素掘りから石組へ変化したことも明らかになった。また、背割水路北側の武家屋敷地は、絵図から「戸田式部屋敷」と判明した。

幕末期の廃棄土坑から大量の木製品や陶磁器が出土するとともに、「戸田式部」と書かれた木札も出土し、絵図との対比を裏付けている。背割水路南側の町屋では、幕末期の鞴羽口や鍛冶滓が多く出土し、小鍛冶を行っていたことが明らかになった。

本調査区の約250ｍ西で行った平成20年度調査でも背割水路を検出した（富山市教委2010）。ここでは上下2層で背割水路を確認した。水路北側の武家屋敷地側は、井戸や土坑が密集し、建物の裏庭に相当すると考えられる。町屋敷側は、遺構密度がきわめて高く、遺構が複雑に切り合う状況が認められた。18世紀後葉以降が主体である。

平成16年度に外堀の南東角沿いで行った発掘調査では、1640～50年代の井戸・溝と1663～90年代の井戸・溝・廃棄土坑を確認した。前者の時期の遺構は、『越中富山古城之図』（正保4（1647）年）によると町屋に伴い、後者は『万治年間富山旧市街図』（1658～1661年）、『寛文六年十月御調理富山絵図』（1666年）により岩田宇兵衛屋敷に伴う遺構と考えられる（富山市教委2005）。

また、平成25年度に行った北陸街道南側の町屋の調査（西町南地区市街地再開発組合・富山市教委2014）では、井戸・トイレ等の遺構を検出した。建物跡の検出がなかったことから町屋の庭にあたると考えられる。木製品の素材や端材が大量に出土し、付近に木材加工場が存在したことが推測されている。

以上のように、外堀に面する武家屋敷地と北陸街道沿いの町屋において重要な成果が相次いでいる。本調査区もこの範囲に含まれる。

(4) 近代以降の富山城

近代以降の富山城の概要　明治4（1871）年の廃藩置県により、旧藩庁に富山県庁が置かれた。明治6年には明治政府から廃城令が出され、富山城は廃城となる。同19年には浄土真宗の門徒の奉仕により外堀の一部が埋め立てられた。また、戦後にかけてその他の堀の埋め立てや土塁の取り壊しも進み、城址公園となった旧本丸と西ノ丸を除いて市街地化が進んだ。昭和29（1954）年の富山産業大博覧会の際、犬山城や彦根城を参考に本丸石垣上に模擬天守が建設された。

現在は旧本丸と西ノ丸が富山城址公園となり、二ノ丸・三ノ丸・東出丸は市街地となっている。城下町も市街地化が進み、近代富山の商業の中心地となった。

発掘調査の成果　重要な近代遺構については一部調査を行っている。

城址公園整備に伴う西ノ丸の工事立会では、県会議事堂の基礎にあたるレンガ積み遺構を検出した。また前記した城下町の近世背割水路は、近代に造り直され、昭和初期頃までは存続していたようである。本書で報告するSD01はこの時期のものである。

(5) 絵図からみた本調査区の位置

本調査区は外堀南辺に近い城下町主要部に位置する。絵図と対比すると、富山藩の初代藩主前田利次が改修を行った寛文期（1661年）以降とそれより前で土地利用に違いがある。

寛文期より前　寛文期より前を描いた絵図として『越中富山古城絵図』（正保4（1647）年）があり、前田利長が整備した慶長期の富山城を反映したものと考えられている。この絵図では、外堀の南辺沿いは町屋として描かれ、本調査区も町屋の範囲に含まれている。

寛文期以降（第3図）　寛文期の改修によって外堀南辺沿いが武家屋敷地に変更された。背割水路もこのとき構築されたものとみられる。本調査区を寛文期以降の絵図と照合すると、背割水路を挟んで武家屋敷地と町屋にまたがる。町屋側の町名は「一番町」あるいは「壱番町」とされる。

武家屋敷地側は以下の絵図において次のように表現される。

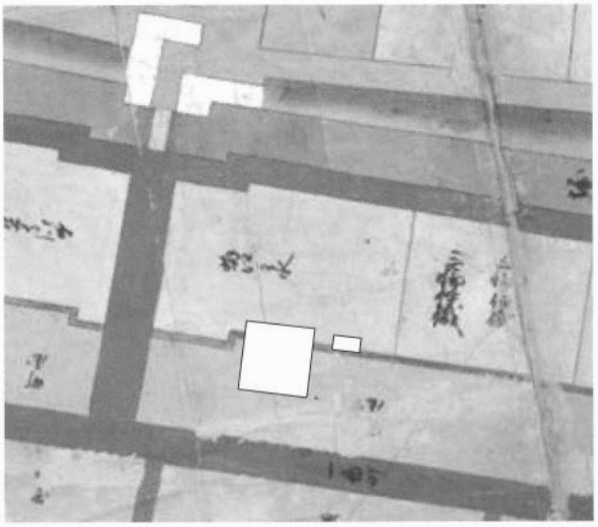
・『万治年間富山旧市街図』(万治年間（1658～1661年頃）) …「蟹江主水」

・『御調理富山絵図』(寛文六（1666）年) …「蟹江主水」

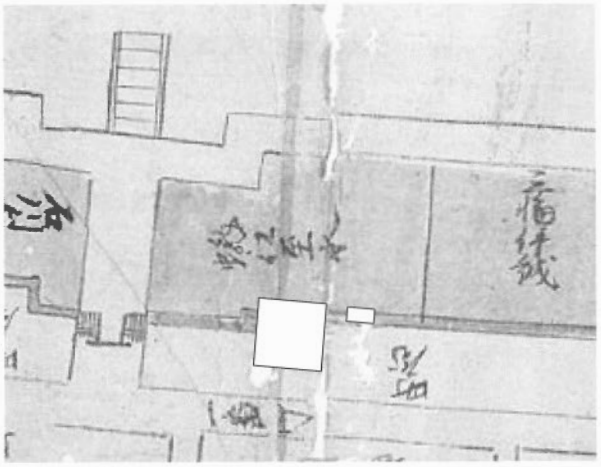
・『御城内外御焼失脚絵図面』(天保年間（1830～1844年）) …「蟹江」

・『越中富山御城下絵図』(安政元（1854）年) …「蟹江監物」

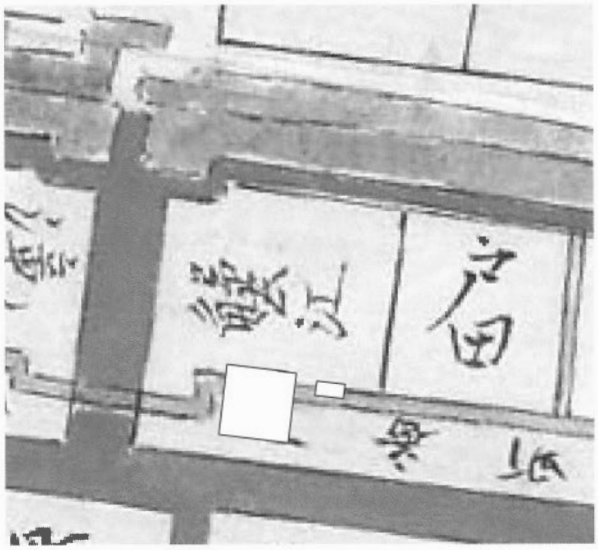
以上のとおり、いずれも蟹江とあり、寛文期から幕末まで蟹江家が屋敷を構えていたとみられる。蟹江主水は『富山藩武鑑』では1500石の馬廻頭、蟹江監物は『安政二年富山御藩中分限帳』で1400石の家老とされる(高瀬編1987)など、上級武家にあたる家柄であった。　(野垣)



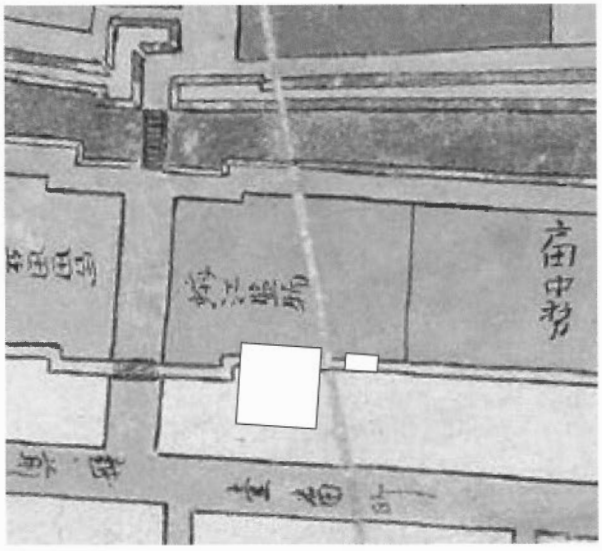
『万治年間富山旧市街図』万治年間（1658～1661）頃



『御調理富山絵図』寛文六年（1666）



『御城内外御焼失御絵図面』天保年間（1830～1844）



『越中富山御城下絵図』安政元年（1854）

第3図　江戸時代の絵図にみる本調査区の位置（絵図はいずれも富山県立図書館蔵）

第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

目　的　発掘調査は、建物によって損壊を受ける423㎡について、試掘調査の結果に基づき上層面と下層面の2面を対象として実施した。試掘調査の成果と絵図や既往の発掘調査によって、武家屋敷地と町屋敷地の境に位置する背割水路の検出が予測できたため、背割水路を中心とした遺構について、記録保存を目的とした発掘調査を行った。

発掘区とグリッドの設定　調査区は2地区に分かれ、西側調査区（387㎡）をA区、東側調査区（36㎡）をB区とした。調査区全体（上層面と下層面の2面）について、上層面は表土の掘削後、下層面は包含層の掘削後に座標軸に基づいた5m×5mのグリッドを設定した。グリッドの呼称は、X軸に北から1・2・3…の数字、Y軸に西からA・B・C…のアルファベットを付し、グリッド名称として使用した（第5・17図）。グリッド座標は、トータルステーションを使用して周辺に位置する世界測地系の公共座標から測定し、設定した。

表土の掘削と遺構の検出　上層面の調査では、調査担当者の立ち会いのもと表土の掘削をバックホウを使用して行った。表土の掘削後、人力でジョレンなどを使用して精査を行い、遺構の検出を行った。上層面に多くみられた近代以降の撹乱は、平面プランのみおさえ、掘削は行っていない。表土の掘削時に出土した遺物は、グリッドごとに上層面包含層出土遺物として取り上げを行った。下層面の調査では、上層面の遺構検出層であったⅥ層が厚く堆積し、遺物を多く含むことから、調査担当者の立ち会いのもと遺物の出土状況を考慮しながらバックホウと人力を併用して慎重に掘削を行った。包含層の掘削後、人力でジョレンなどを使用して精査を行い、遺構の検出を行ったが、雨雪や粘土質の土質の影響から何度か繰り返す必要があった。包含層の掘削時に出土した遺物は、グリッドごとに下層面包含層出土遺物として取り上げを行った。

B区は下層の遺構検出面まで撹乱が及んでいたため、下層面までバックホウによる掘削を行い、人力でジョレンなどを使用して遺構の検出を行った。

遺構掘削　背割水路は1～5の各区に区分して、堆積土を確認するための畦を残して掘り下げを行った。背割水路からは多くの遺物が出土したため、上層から15cmの厚さを基準に順番に掘り下げを行い、主要な遺物の出土状況について写真撮影後、遺物の取り上げを行った。背割水路は上下層で造り直しが行われていたことから、断面図を作成してその構造と変遷過程の確認に努めた。下層面の背割水路（SD03）については、3D測量機材による石組みの平面図と展開図の作成を行った。土坑などの遺構は半截での掘り下げを行い、手測による断面図を作成した後に完掘を行った。遺物を多く含む遺構については、出土状況図と写真撮影による記録後、遺物の取り上げを行った。

A区の完了後、埋戻しを行い、B区の調査にかかった。B区の遺構数は少なく、短期間で完了した。

写真撮影　写真撮影は、発掘作業の当初から終了まで行い、表土の掘削・遺構検出・遺構掘削などの工程ごとに行った。全体写真の撮影は、上層面の完掘後と下層面の完掘後に行い、下層面の完掘後にはラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。写真撮影には、6×7フィルムを使用した中判カメラと35ミリカメラ、デジタルカメラを使用し、空中写真撮影には6×7フィルムを使用した中判カメラとデジタルカメラを使用した。

自然科学分析　下層面の古環境を検討するため、Ⅵ層と下層面の背割水路（SD03）内部に堆積す

る土、井戸（SE03）内部の土などを、調査担当者が試料採取を行った。また、木製品の樹種同定と漆器の塗模分析を通して、木材利用について検討を行った。動物遺存体も一定量が出土していることから、同定と考察を行った。

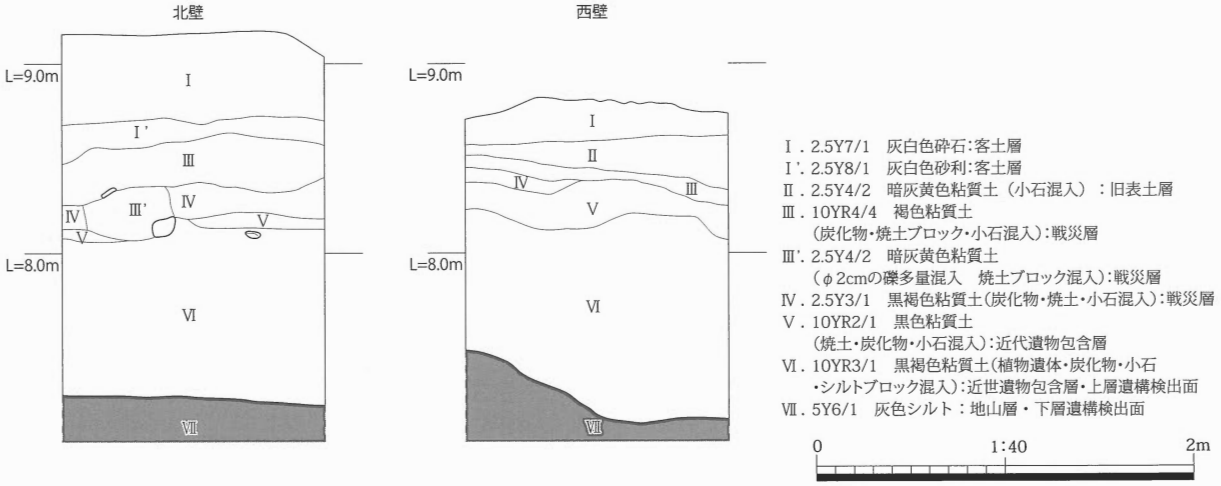
整理作業　発掘作業の終了後、出土遺物の洗浄・注記を行い、出土した陶磁器については接合と復元作業を行った。注記はジェットマーカーを使用した。遺構ごとに出土遺物を区分し、遺構の性格と年代を考慮して遺物を選択し、拓本、実測とトレース、遺物写真撮影を行った。木製品と金属製品の一部については、保存処理を行った。遺構図と遺物図のトレースはイラストレーターCS5（作図ソフト）などを使用し、遺構・遺物図版の作成はデジタル図版とした。遺物写真撮影は、デジタルカメラを使用した。あわせて発掘調査成果について原稿執筆・編集を行い、報告書（本書）を刊行した。（基峰）

第2節　基本層序（第4図、図版5）

基本層序は、調査区の北壁（B1グリッド）と西壁（A3グリッド）の2地点で作成した。北壁及び西壁ともに太平洋戦争に伴う戦災層の下に、江戸時代末～近代の遺物包含層が堆積し、その下に江戸時代後期の遺物包含層（北壁：約0.9m、西壁：約1.1m）が厚く堆積する状況が確認できた。

北壁での基本層序は、上層から順に、Ⅰ層:灰白色砕石（客土層）、Ⅰ’層:灰白色砂利（客土層）、Ⅲ層：褐色粘質土（戦災層）、Ⅲ’層：暗灰黄色粘質土（戦災層）、Ⅳ層：黒褐色粘質土（戦災層）、Ⅴ層:黒色粘質土（江戸時代末～近代遺物包含層）、Ⅵ層:黒褐色粘質土（江戸時代後期の遺物包含層・上層面の遺構検出面）、Ⅶ層：灰色シルト（地山層・下層面の遺構検出面）である。

西壁での基本層序は、上層から順に、Ⅰ層:灰白色砕石（客土層）、Ⅱ層:暗灰黄色粘質土（旧表土層）、Ⅲ層：褐色粘質土（戦災層）、Ⅳ層：黒褐色粘質土（戦災層）、Ⅴ層：黒色粘質土（江戸時代末～近代遺物包含層）、Ⅵ層：黒褐色粘質土（江戸時代後期の遺物包含層・上層面の遺構検出面）、Ⅶ層：灰色シルト（地山層・下層面の遺構検出面）である。（基峰）



第4図　基本層序

第3節　遺　構

(1) 下層面（江戸時代）の遺構

下層遺構は、調査区北部で石組の背割水路を検出した。町屋敷地にあたる背割水路南側において井戸や土坑が集中する。北側の武家屋敷地では確実な遺構は認められなかった。

SD02（背割水路、第6・8図、図版3・4）

A2～D2グリッドにかけて位置する。

東西方向に延びる石組の背割水路である。後述するSD03の造り替えで構築されたものである。本遺構については最下段の石材の一部のみを確認し、底面レベルから判断すると上層面ないしはその付近のレベルから掘り込んでいる可能性が高い。したがって、本来は上層遺構として扱うべきかもしれないが、掘り込み面が確定できないことや、後述するようにSD03の出土遺物が多く混在しているとみられるため、ここでは下層面遺構に含めて報告する。

石積みは、北側の根石付近及び南側の一部が残存し、その他は後世に造り直されたSD01で失われる。検出長約12.80ｍ、内幅約1.20～1.30ｍ（尺換算で、内幅四尺～四尺三寸）、最も残りの良い部分で底面までの深さは約0.30ｍを測る。SD03より若干南側に位置をずらして石積みを構築している。石材には、河原石（自然石）を使用し、斜めに用いながら積み上げる。

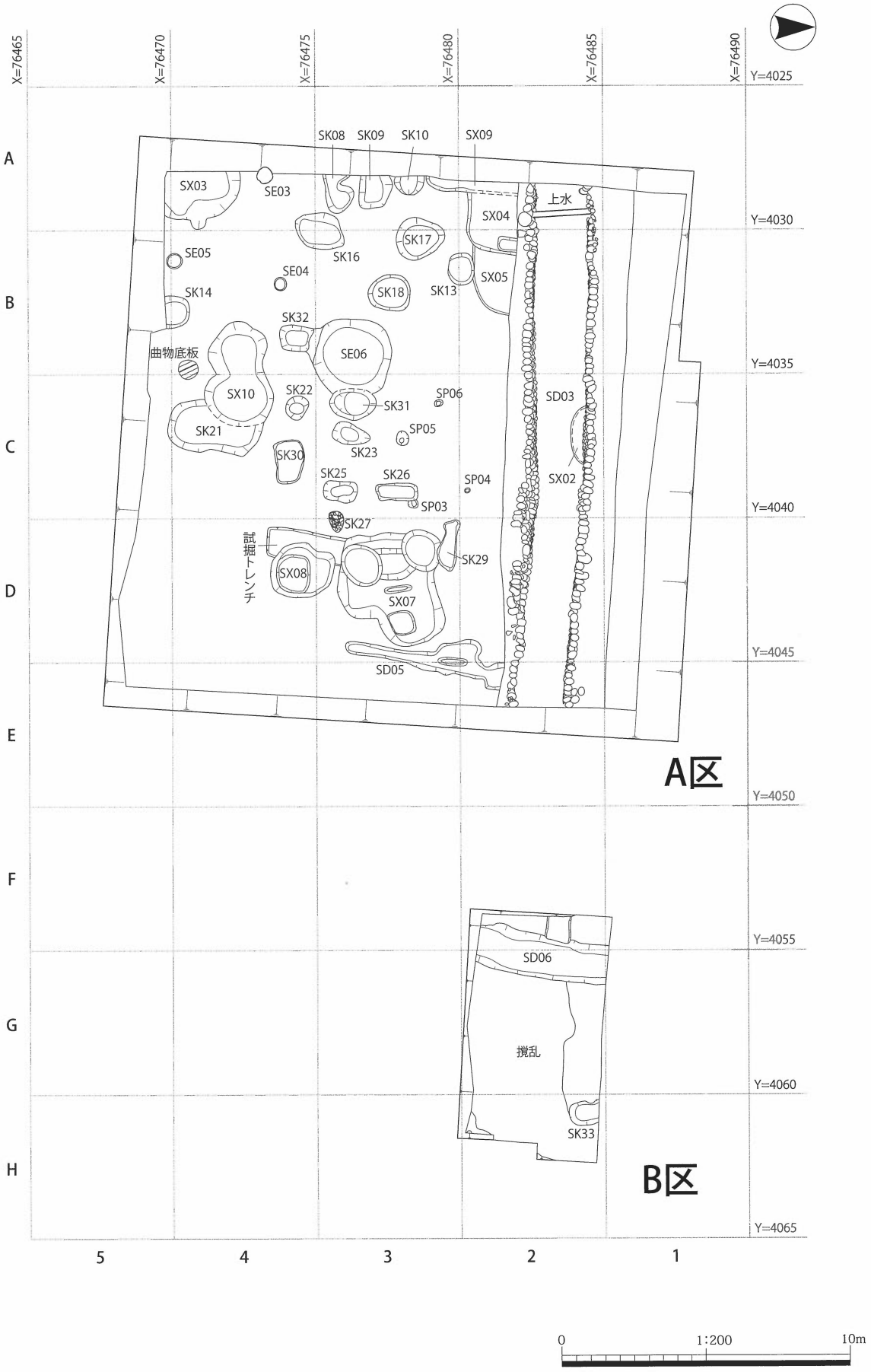
陶磁器及び土器、土製品、石製品、金属製品、漆器、木製品が数多く出土した。SD02石積み底面までで出土した遺物は、本遺構に伴うと考えたが、本遺構はごく一部しか残存せず、下部のSD03埋土との違いが明確でない部分があり、SD03に伴う遺物が混入している可能性が高い。本遺構から出土した陶磁器は、19世紀後半のものが多い。SD03・SD01といった他遺構との重複関係や遺物から、19世紀後半に構築されたと考えられる。

SD03（背割水路、第7・8図、図版2・3）

A2～E2グリッドにかけて位置する。

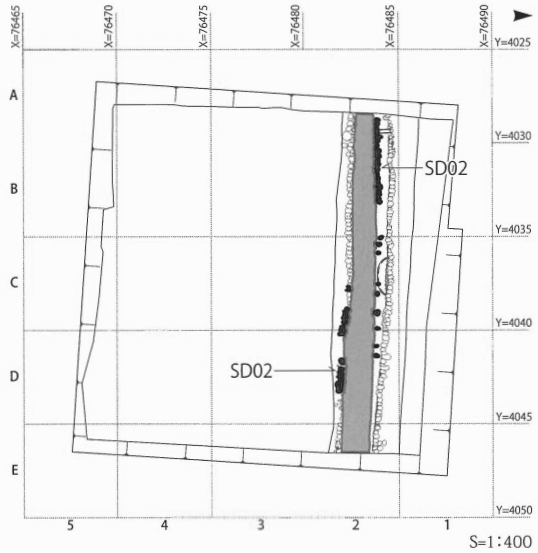
東西方向に延びる石組の背割水路である。検出長約18.20ｍ、内幅約1.50～1.90ｍ（尺換算で、内幅五尺～六尺三寸）を測る。H2グリッド（B区）の南東隅でも南側石積みの根石１石を検出した。底面までの深さは約0.50～0.90ｍを測る。

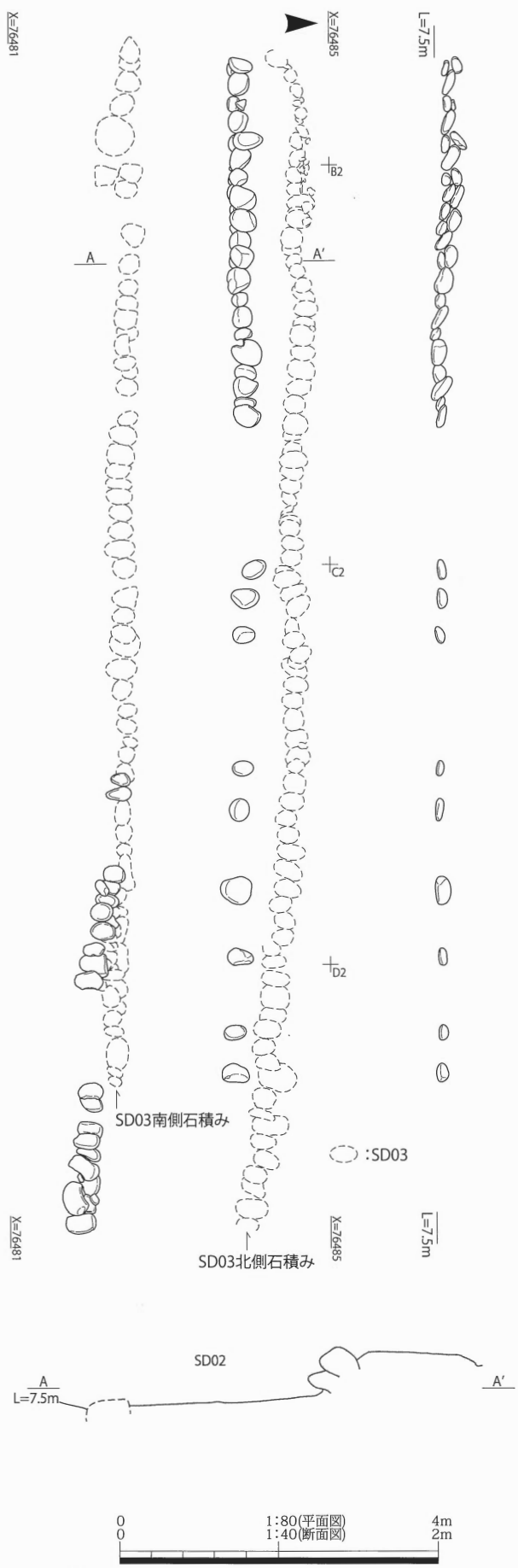
石積みは、北側・南側ともに約15～35㎝程度の大きさの河原石（自然石）を使用するが、一部に石臼が転用されていた（第31図237・図版15）。石の積み方は、横の目が通るように積まれた布積状で、隙間には間詰石が見られる。石は3～8段が残る。石の積み上げは、底面から天端石に向かって、比較的直に立ち上がる。場所によっては緩やかに開いて立ち上がるような積み方の箇所がみられる。このような場所は、崩落などによる改修が行われた箇所と推定でき、後述する上水施設（木樋）の設置を含めて、部分的な改修がある。根石が底面のⅦ層（地山）に深く潜り込んでおり、石積みの重圧によるものとも考えるが、根石設置にあたって溝状に掘り込んでから設置した可能性もある。ただし、底面では、流水や湧水の影響があるため、溝状に掘り下げを行った痕跡は確認できなかった。裏込めには、黒色粘質土（10YR2/1）やオリーブ黒色粘質土（7.5Y2/2）などの堆積が認められる。ただし、調査区西壁断面の観察では、明確に裏込め痕跡を判断することができず、地点によって、Ⅳ層と裏込めの区分ができない箇所がある。底面の標高は西側6.92ｍ・中央6.85ｍ・東側6.83ｍで、東側の方が9㎝程度低くなる。東側に向かって、水が流れていたとみられる。溝内には、大概として小礫や砂を含む黒褐色粘質土（5YR3/1）が堆積し、5～8層ほどの粘質土及び砂質土の堆積に細分できるが、長い年月をかけて徐々に堆積し



0　1:200　10m

第5図　下層遺構全体平面図





第6図　SD02（背割水路）平面・立面図

たというよりも、短期間の間に埋もれたような状況である。蓋に相当する板（石）などの出土及びその痕跡は認められず、開渠と考えられる。

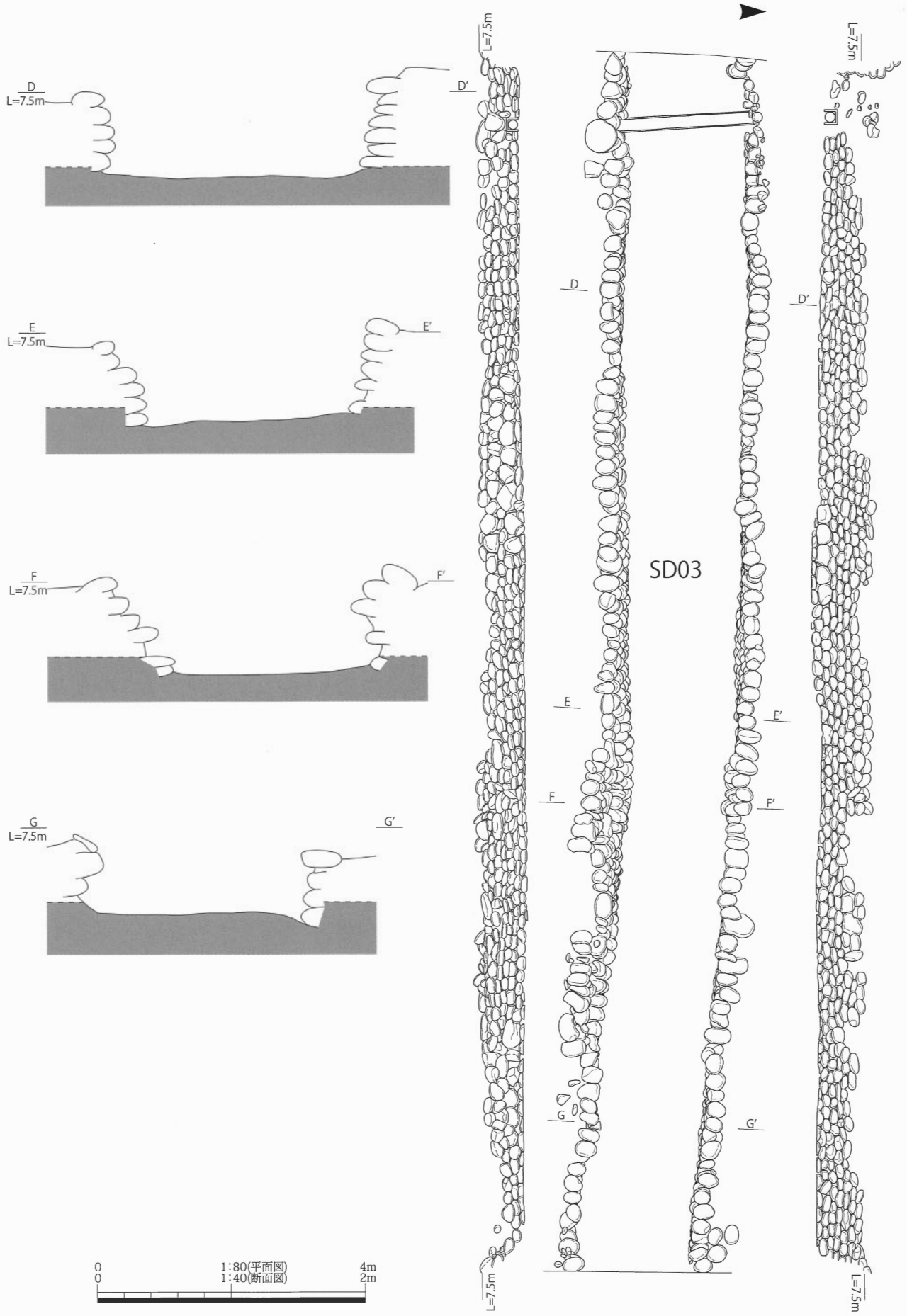
遺物は、検出面～約50cmの層に集中し、底面付近からはほとんど出土しない。陶磁器及び土器が多く、他に石製品、漆器、木製品が出土した。17世紀前半～後半に該当する遺物があるが、出土した陶磁器は、18世紀後半～19世紀中頃のものが多い。層位及び遺物から、19世紀前半以前に構築され、部分的な改修を経た後、19世紀中頃に埋没したと考えられる。

SD03内上水施設（第9図、図版3）

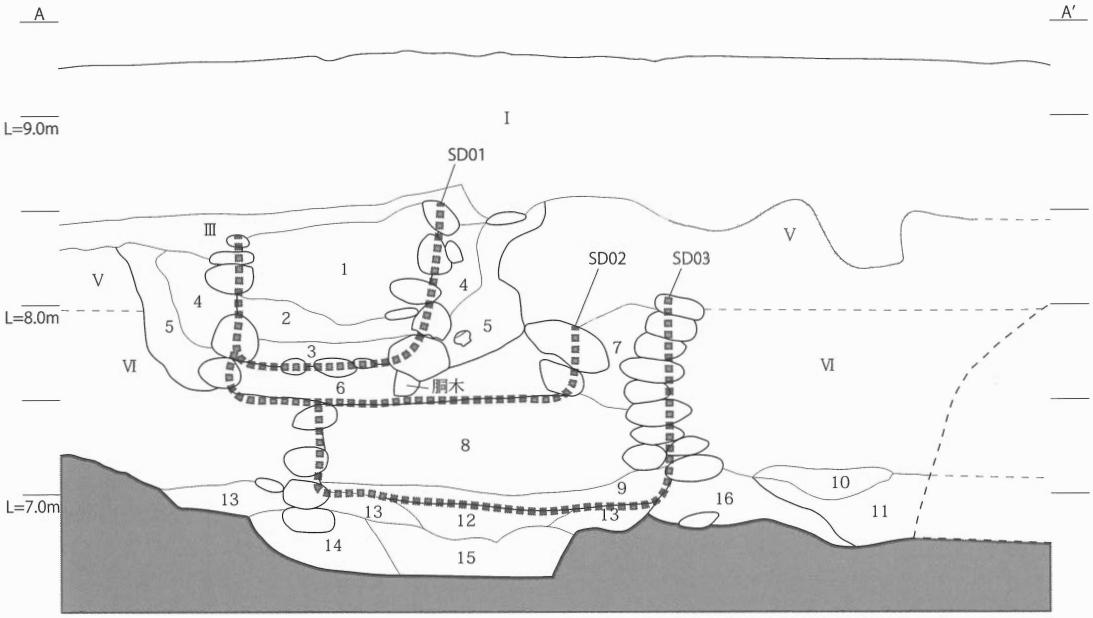
A2グリッドに位置する。西側の調査区域外へ延びる。

SD03西端の底面付近で、南北方向に延びる竹樋と木樋を使用した上水施設と考えられる。南北約3.95m、幅約0.19mを測る。本施設の設置又は改修のために、SD03北側石積みでは、内側に向かって石積みが突出し、積み直しが行われた状況を確認できる。また南側石積みも、石材の大きさや並びに乱れがあり、積み直しを行ったとみられる。

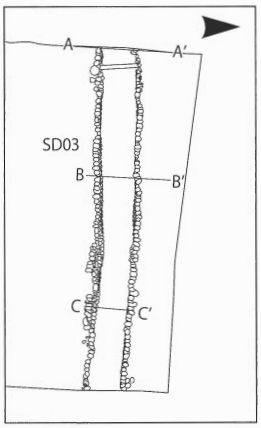
構造は、竹の節を抜いた竹樋に繊維を巻き付けて、土筒で覆った後に、上面と側面を角釘で接合した板材で覆ったものである。内部の竹樋が破損しないように、土筒と板材で補強を施したものである。石積みの裏込め内は竹樋のまま

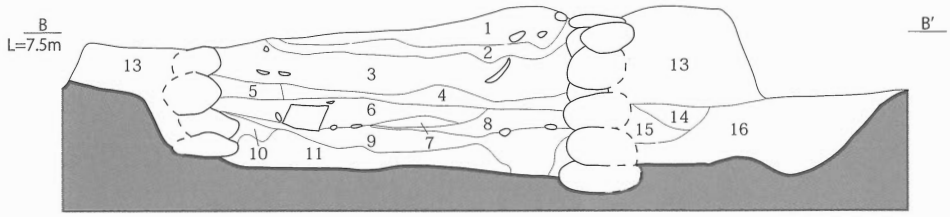


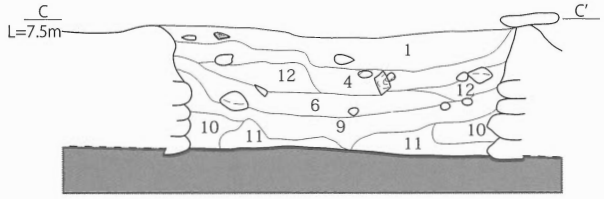
第7図　SD03（背割水路）平面・立面・断面図



SD01・02・03（背割水路）A-A′
Ⅰ．2.5Y7/1　灰白色砕石：客土層
Ⅲ．10YR4/4　褐色粘質土（炭化物・焼土ブロック・小石混入）：戦災層
Ⅴ．10YR2/1　黒色粘質土（焼土・炭化物・小石混入）：近代遺物包含層
Ⅵ．10YR3/1　黒褐色粘質土（植物遺体・炭化物・小石・シルトブロック混入）：近世遺物包含層
＊① Ⅳ層途中に分層線の存在が予測できるが、土壌の状況から分層の判断はできなかった。
② SD03裏込めについても、土壌の状況から分層が明確にできなかった。
1．2.5YR3/6　暗赤褐色粘質土（粘性中　しまり強　瓦・モルタル・レンガ・砕石・炭化物混入　焼土多量混入）：戦災層
2．5YR4/3　にぶい赤褐色粘質土（粘性中　しまり弱　焼土・炭化物混入）
3．5YR4/4　にぶい赤褐色砂質土（粘性中　しまり弱）：SD01底面
} SD01埋土
4．7.5YR5/2　灰褐色砂質土（粘性中　しまり弱　砂多量混入）
5．7.5YR4/2　灰褐色粘質土（粘性中　しまり強　炭化物少量混入）
} SD01裏込
6．5YR2/2　黒褐色粘質土（粘性中　しまり強　炭化物・植物遺体混入）：SD02埋土
7．10YR3/2　黒褐色粘質土（粘性中　しまり強　φ5cmの小礫・炭化物多量混入）：SD02裏込
8．5YR3/1　黒褐色粘質土（粘性中　しまり強　小礫・砂混入）
9．10YR3/2　黒褐色粘質土（粘性中　しまり強　黄色土・小礫・炭化物・植物遺体混入）
} SD03埋土
10．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土（粘性中　しまり強　シルト混入）
11．2.5Y3/1　黒褐色粘質土（粘性中　しまり強　砂・植物遺体混入）
12．10YR4/1　褐灰色粘質土（粘性中　しまり強　小礫・細砂・植物遺体多量混入）
13．2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土（粘性中　しまり強　シルト多量混入）
14．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土（粘性中　しまり強　シルト混入）
15．2.5Y3/2　黒褐色粘質土（粘性中　しまり中　シルト多量混入）
16．2.5Y3/2　黒褐色粘質土（粘性中　しまり強　シルト・炭化物混入）
} 別遺構の可能性



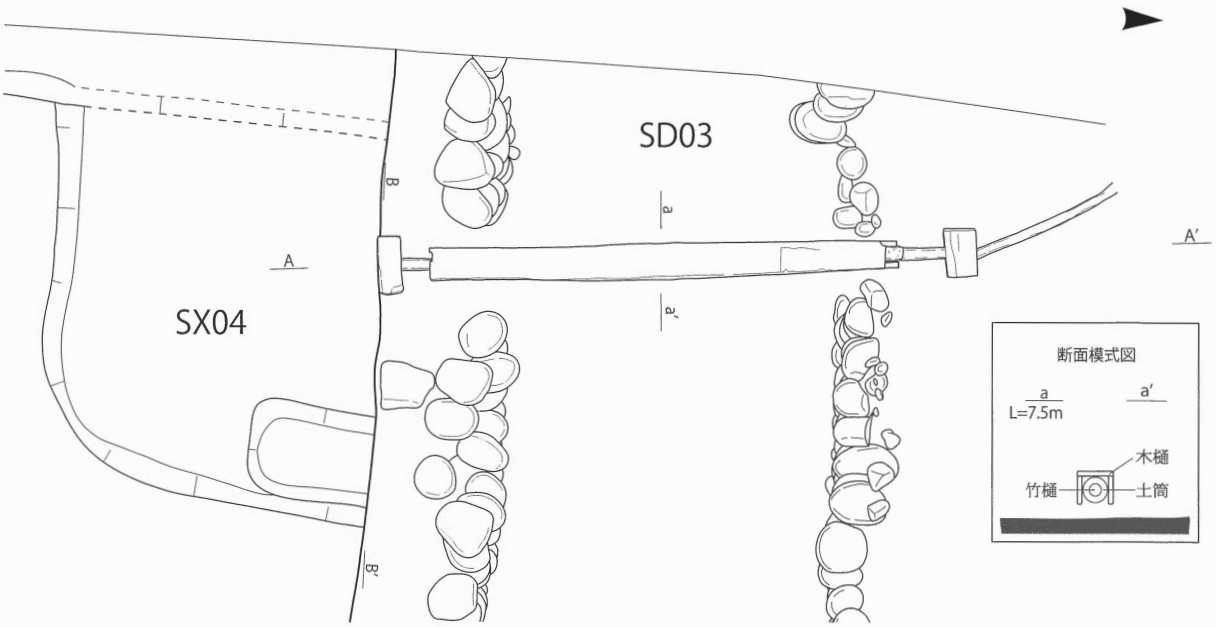


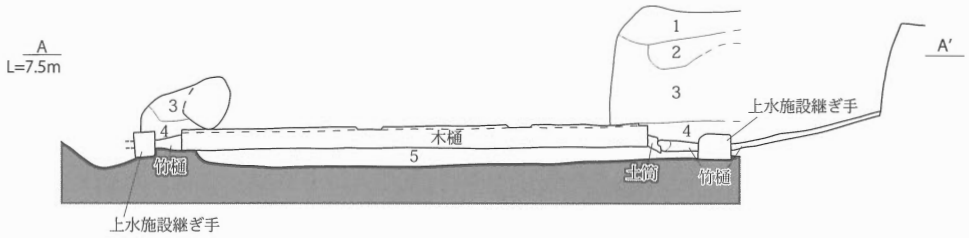


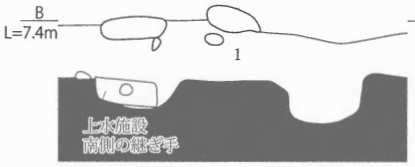
SD03（背割水路）：B-B′　C-C′
1．7.5Y3/1　オリーブ黒色土（粘性中　しまり強　植物遺体・砂混入）
2．10Y5/1　灰色砂質土（粘性中　しまり強　砂多量混入）
3．7.5Y3/1　オリーブ黒色土（粘性中　しまり強　植物遺体・陶磁器・炭化物混入）
4．10Y4/1　灰色砂質土（粘性中　しまり弱　炭化物・植物遺体混入）
5．10Y3/1　オリーブ黒色土（粘性中　しまり強　炭化物混入）
6．10Y4/1　灰色砂質土（粘性中　しまり中　植物遺体・陶磁器混入）
7．7.5Y2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり強　植物遺体混入）
8．10Y4/1　灰色砂質土（粘性中　しまり弱　砂多量混入）
9．10Y2/1　黒色粘質土（粘性強　しまり強　シルト・炭化物粒子混入）
10．10Y6/1　灰色シルト（粘性強　しまり中　黒色粒子混入）
11．10Y6/1　灰色シルト（粘性強　しまり強）：地山
12．7.5Y5/1　灰色砂質土（粘性中　しまり弱　植物遺体混入）
13．10YR2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり強　シルト多量混入）
14．7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土（粘性中　しまり弱　砂多量混入）
15．7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土（粘性中　しまり強　シルト混入）
16．7.5Y2/2　オリーブ黒色粘質土（粘性中　しまり強　シルト混入）

0　1:40　2m

第8図　SD03（背割水路）断面図

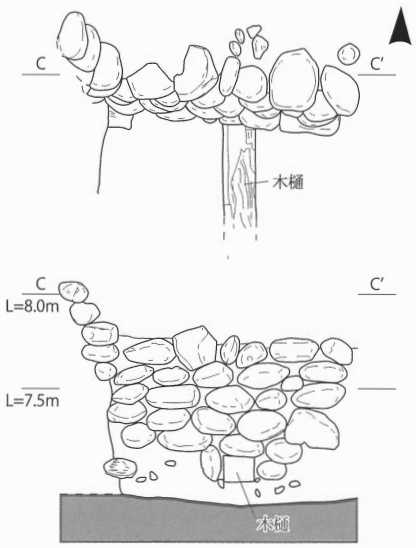




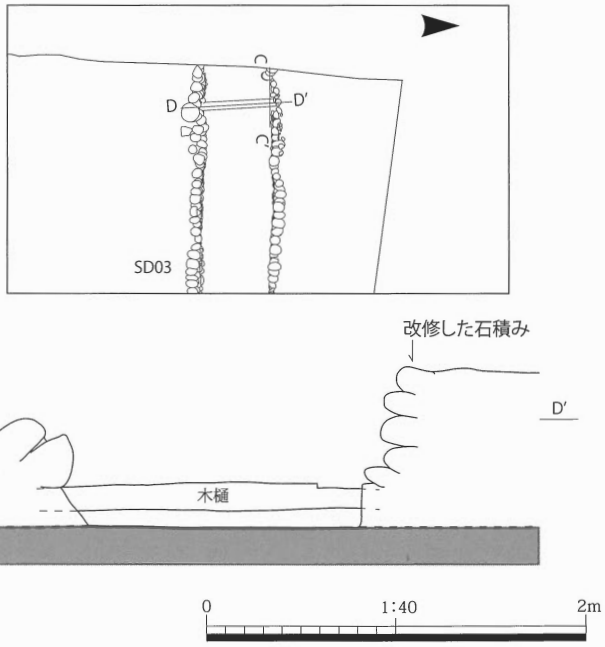


SD03（背割水路）内上水施設（南側）
1. 7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土
（粘性中　しまり強　シルトブロック・炭化物混入）

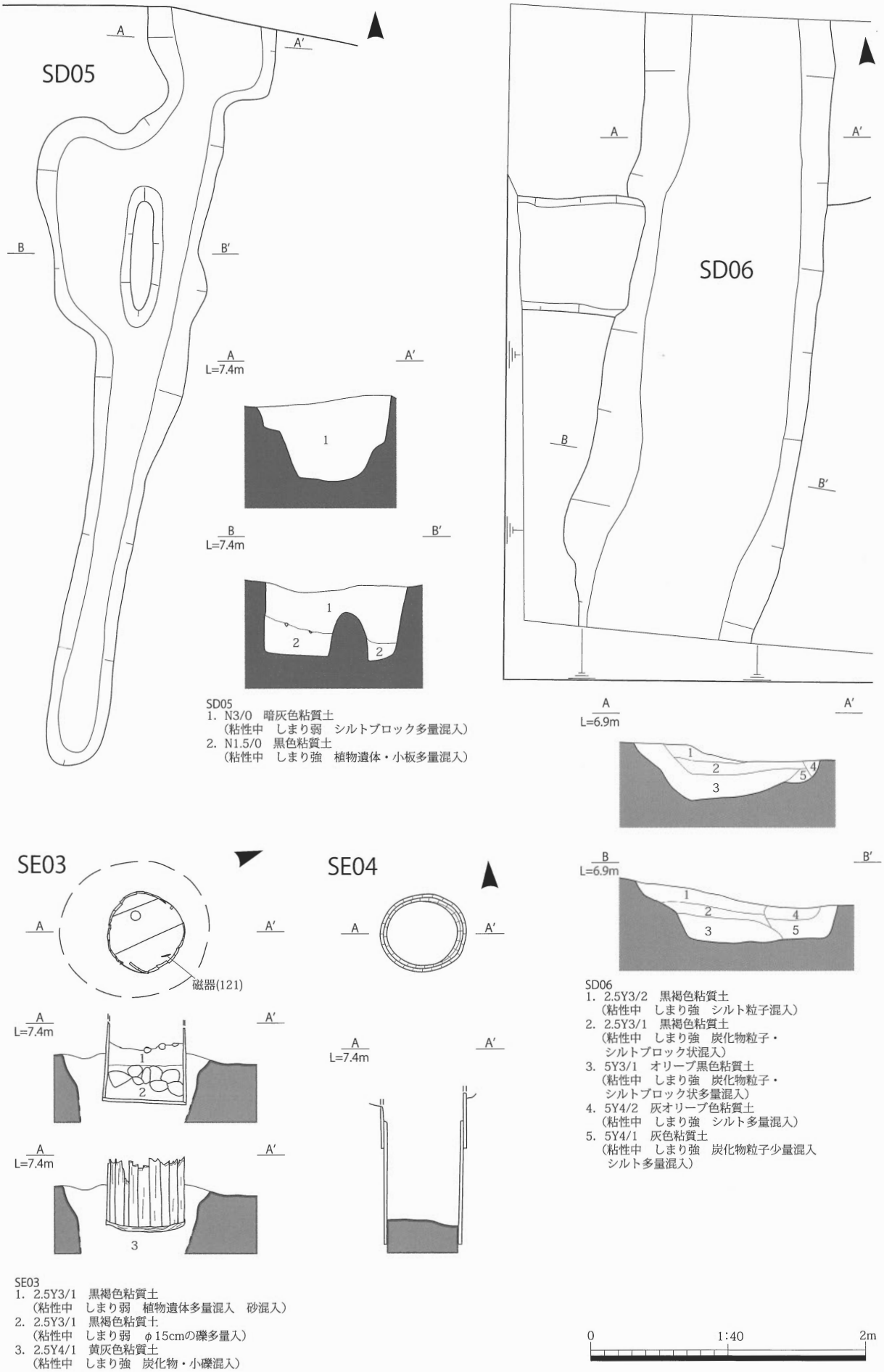
SD03（背割水路）内上水施設A-A′
1. 5Y4/1　灰色粘質土
（炭化物　焼土　3cm大の小石まばらに混　非常に固い　SD03改修裏込）
2. 5Y3/1　オリーブ黒色砂質土
（φ5cmの小石　砂利多混　しまり悪）
3. 7.5Y4/1　灰色粘質土
（炭化物　シルト混　しまり良　SD03改修裏込）
4. 7.5Y2/2　オリーブ黒色粘質土
（シルト多　炭化物まばらに混　しまり良　上水施設の設置土）
5. 5Y3/2　オリーブ黒色シルト
（φ3～10cm大の小石まばらに混　SD03底面堆積土）



上水施設の設置に伴う北側石積みの改修



第9図　SD03（背割水路）内上水施設　平面・断面図



第10図　SD05・06　SE03・04　平面・断面図

で、円形の挿入孔を設けた継ぎ手として角形木材（第36図337・338・図版19）が使用される。竹樋の設置された高低差から、取水口は武家屋敷地側（北側）と考えられる。

石積みの撤去時に、陶磁器と土器が出土した。SD03の構築時期から、19世紀前半～中頃にかけて設置されたと考えられる。

SD05（第10図）

D2・D3・E2・E3グリッドに位置する。北側でSD03に接する。

南北方向に伸びる溝で、検出長約5.58m、幅約1.28m、検出面からの深さは約0.59mである。底面は平らで、途中で二股に分かれるが、北側と南側では一筋になる。SD03に接する北側では、溝幅が広くなる。溝底が二股に分かれる地点を中心に植物遺体や板片を多量に含む黒色粘質土（N1.5/0）がみられたが、堆積土のほとんどはシルトブロックを多量に含む暗灰色粘質土（N3/0）であった。

土器と木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SD06（第10図、図版6）

F1・F2・G1・G2グリッドに位置する。調査区域外へ広がるため、全体像は不明である。

南北方向に伸びる溝で、検出長は約4.52m、幅約1.30～1.60m、検出面からの深さは約0.39mで、底面はなだらかに窪む。溝底には、シルトブロックを多量に含むオリーブ黒色粘質土（5Y3/1）及びシルトを多量に含む灰色粘質土（5Y4/1）が堆積する。

遺物の出土はないが、SD03の下層に位置することから、背割水路設置前の17世紀前半以前の遺構と考えられる。

SE03（第10図、図版4）

A4グリッドに位置し、調査区西壁に接する。

平面円形で、長軸約0.60m×短軸約0.58m、深さ約0.52mを測る。井戸底の標高は6.83mである。側板を桶状に組み、底板を設置する。底板は３枚板の組合せで、取水孔（円形・長軸約7.2cm×短軸約7.1cm）が設けられ、繊維状の付着物の痕跡から竹樋などが下層に差し込まれて、湧水を取水していたと考えられる。

井戸底から、約10～15cmほどの大きさの礫に混じって、瀬戸・美濃系の陶磁器などが出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SE04（第10図、図版4）

B4グリッドに位置する。

平面円形で、直径約0.62m、残存で深さ約1.10mを測る。井戸底の標高は6.11mである。24枚の側板を桶状に組み、上下2段に積み重ねる。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

SE06（第11図、図版4）

B3・C3グリッドに位置し、SK31・SK32と重複する。SK31・SK32よりも古い時期と考えられる。

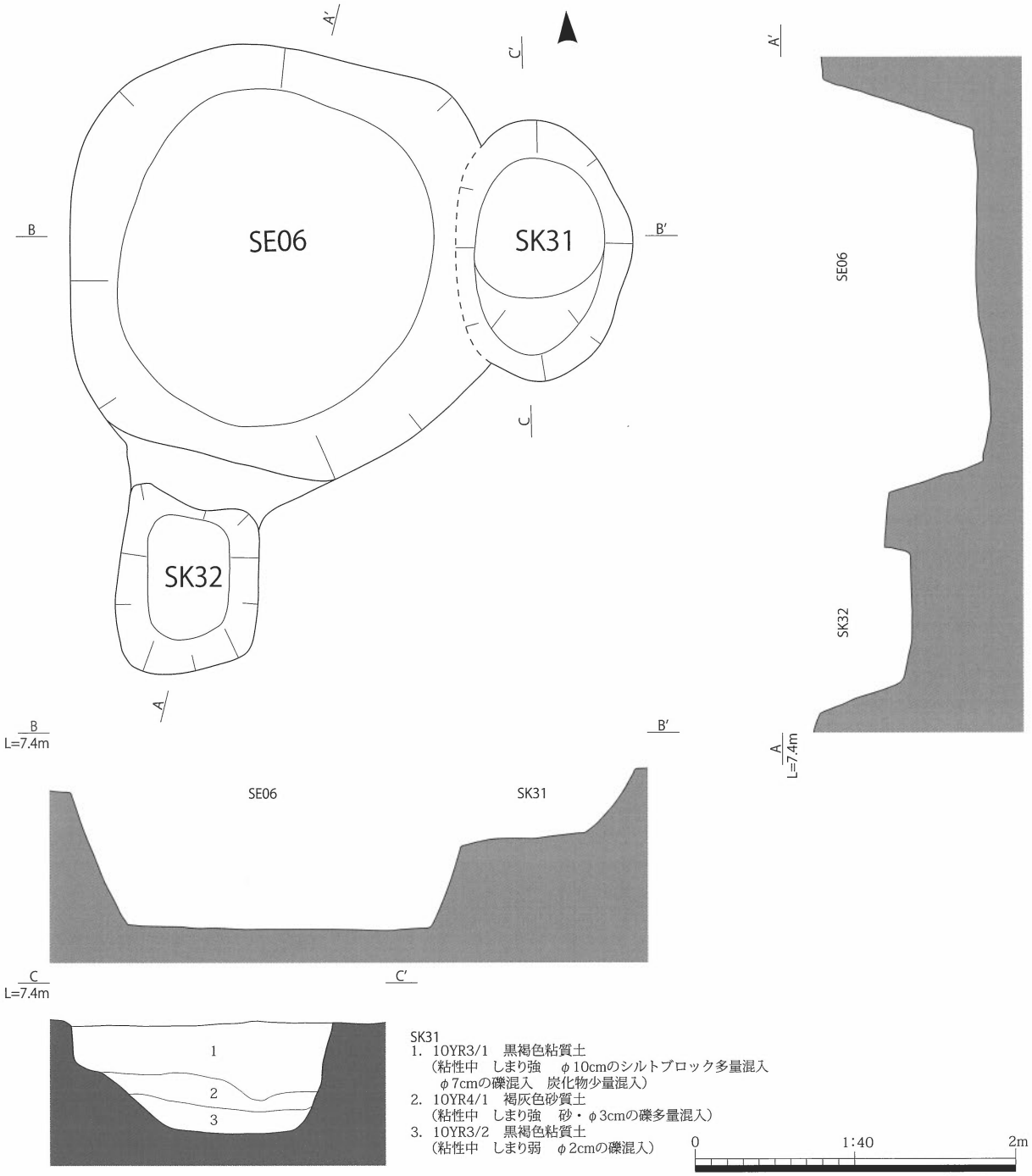
平面は不整円形で、長軸約2.92m×短軸約2.85m、検出面からの深さ約0.95mを測る。底面は平坦で、底面の標高は6.11mである。井戸の掘り方あるいは井戸枠の抜き取り痕跡と考えられる。

肥前磁器と木製品が出土した。遺物から、SE03・SE04に先行する17世紀代と考えられる。

SK08（第12図）

A3グリッドに位置する。調査区西壁に接し、調査区域外（西側）へ広がる。

平面不整形で、検出長約1.32m、短軸約0.55m、検出面からの深さ約0.42mを測る。底面は東



第11図　SE06　SK31・32　平面・断面図

西で二股に分かれ、堆積土にも相違が認められることから、本来は重複する二つの遺構であった可能性がある。

SK09（第12図）

SK08と同様にA3グリッドに位置する。調査区西壁に接し、調査区域外（西側）へ広がる。

平面不整長円形で、検出長約1.14m、短軸約1.12m、検出面からの深さ約0.58mを測る。底面は平坦で、底面には黒色粘質土（7.5Y2/1）及び植物遺体・炭化物を含む灰白色砂質土（5Y7/1）が堆積する。

底面付近から漆器が出土した。時期は不明である。

SK10（第12図）

SK08とSK09と同様にA3グリッドに位置する。調査区西壁に接し、調査区域外（西側）へ広がる。

平面不整円形で、検出長約1.04m、短軸約0.65m、検出面からの深さ約0.30m、底面は平坦である。

金属製品が出土したが、時期は不明である。

SK13（第12図）

B2・B3グリッドに位置する。SX05と重複し、SX05より新しい。

平面楕円形で、長軸約1.12m×短軸約0.92m、検出面からの深さ約0.58mを測る。底面は平坦で、黒色粘質土（7.5YR2/1）が堆積する。

石製品と漆器が出土したが、時期は不明である。

SK14（第12図）

B4・B5グリッドに位置し、調査区南壁に接する。調査区域外（南側）へ広がる。

平面不整円形で、検出長約1.14m、短軸約0.82m、検出面からの深さ約0.21mを測る。底面は平坦で、黒色粘質土（7.5Y2/1）が堆積する。

肥前磁器と瀬戸系磁器、漆器が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SK16（第12図）

A3・A4・B3・B4グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約1.90m×短軸約1.25m、検出面からの深さ約0.40mを測る。底面は平坦で、黒色粘質土（10YR1.7/1）が堆積する。

肥前磁器、瀬戸・美濃磁器、瀬戸・美濃、木製品が出土した。初期伊万里と考えられる碗（第21図42・図版9）を含むが、他の遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SK17（第12図）

A3・B3グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約1.70m×短軸約1.50m、検出面からの深さ約0.42mを測る。底面は平らで、炭化物と植物遺体を含む黒褐色粘質土（10YR2/2）が堆積する。

肥前磁器、越中瀬戸、瓦質土器、木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SK18（第12図）

B3グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約1.45m×短軸約1.25m、検出面からの深さ約0.25mを測る。底面は南に向かって緩やかに下がる。南側に焼けた礫や炭化板などを含む黒褐色粘質土（7.5YR3/1）、北側に褐灰色粘質土（7.5YR4/1）が堆積する。

肥前磁器、瀬戸・美濃、石製品、木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

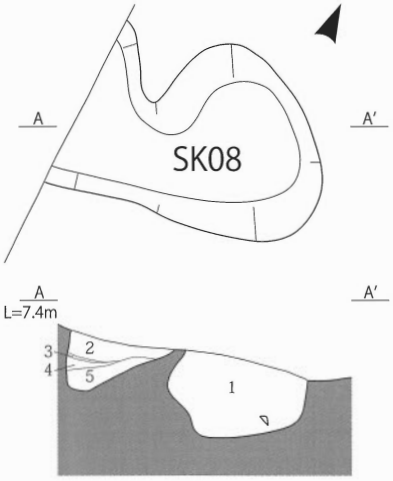
SK21（第16図）

C4グリッドに位置する。西側でSX10と重複し、SX10より古い。

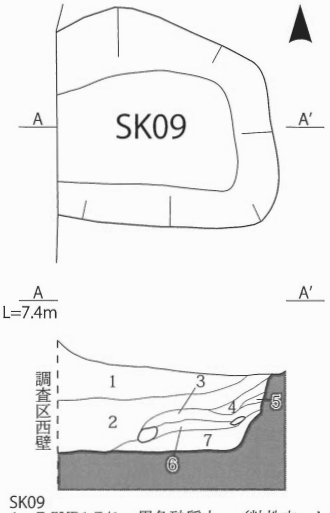
平面不整長円形で、長軸約3.25m×短軸約1.82m、検出面からの深さ約0.44mを測る。全体的に灰色粘質土（7.5Y4/1）が堆積する。

瀬戸・美濃が出土した。SX10との切り合い関係から、18世紀後半以前と考えられる。

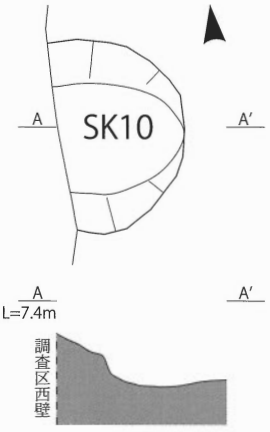
SK22（第12図）

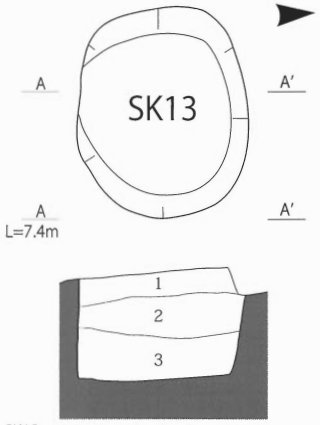


SK08
1. 7.5Y2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり中）
2. 10Y3/1　オリーブ黒色粘質土（粘性中　しまり中）
3. 10Y3/1　オリーブ黒色粘質土（粘性中　しまり中）
4. 7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土（粘性中　しまり中）
5. 10Y2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり中）

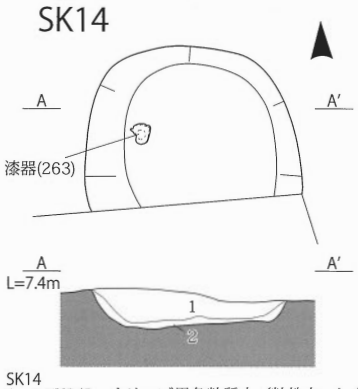


SK09
1. 7.5YR1.7/1　黒色砂質土　（粘性中　しまり弱　φ5cm黄色土ブロック・黒色土混入　砂多量混入）
2. 7.5Y2/1　黒色粘質土　（粘性中　しまり弱　炭化物・焼土ブロック・φ1cmシルトブロック混入）
3. 10YR3/1　黒褐色粘質土　（粘性中　しまり弱　植物遺体多量混入）
4. 2.5Y5/1　黄灰色粘質土　（粘性中　しまり強　シルト多量混入）
5. 2.5Y2/1　黒色粘質土　（粘性中　しまり弱　炭化物多量混入）
6. 5Y 7/2　灰白色砂質土　（粘性中　しまり弱　砂・シルト・炭化物多量混入）
7. 5Y 7/1　灰白色砂質土　（粘性中　しまり弱　砂多量混入　植物遺体・炭化物混入）

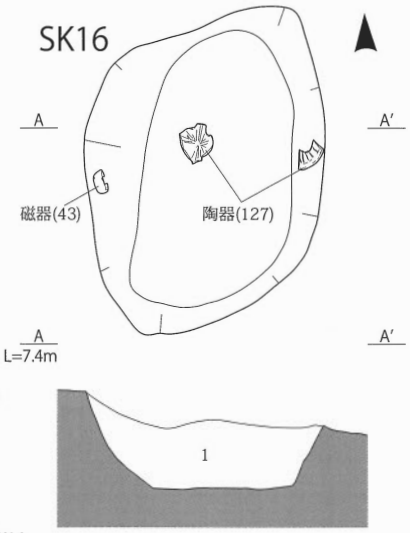




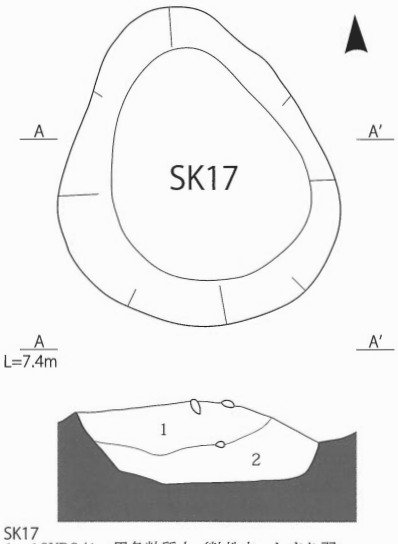
SK13
1. 7.5YR2/1　黒色粘質土
（粘性中　しまり強　焼土・炭化物混入　小礫多量混入）
2. 10YR2/1　黒色粘質土
（粘性中　しまり中　φ10cmのシルトブロック・φ10cmの礫混入）
3. 7.5YR2/1　黒色粘質土
（粘性中　しまり中　焼土ブロック・φ10cmの礫・小礫多量混入）



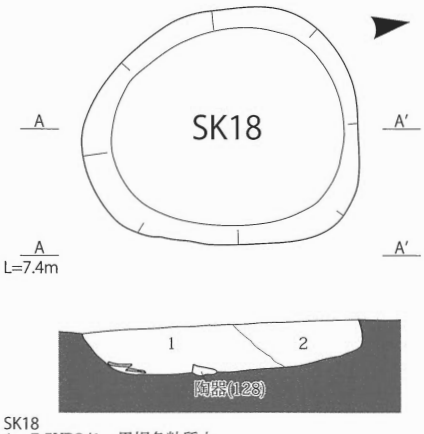
SK14
1. 7.5Y3/2　オリーブ黒色粘質土（粘性中　しまり中）
2. 7.5Y2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり中）



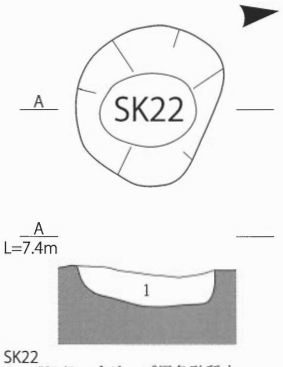
SK16
1. 10YR1.7/1　黒色粘質土（粘性中　しまり弱　砂混入）



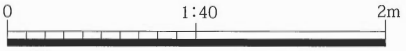
SK17
1. 10YR2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり弱
φ2cmシルトブロック・植物遺体混入　炭化物多量混入）
2. 10YR2/2　黒褐色粘質土（粘性中　しまり弱
シルトブロックを1より多量混入　炭化物混入
植物遺体少量混入）



SK18
1. 7.5YR3/1　黒褐色粘質土
（粘性中　しまり弱　φ2～3cm・10cmの焼けた礫多量混入
炭化板状木製品混入）
2. 7.5YR4/1　褐灰色粘質土
（粘性中　しまり中）



SK22
1. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質土
（粘性中　しまり強
φ2～3cm礫少量混入）



第12図　SK08・09・10・13・14・16・17・18・22　平面・断面図

C4グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.85m×短軸約0.82m、検出面からの深さ約0.17mを測る。底面はなだらかで、全体的にオリーブ黒色粘質土（5Y3/2）が堆積する。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

SK23（第13図、図版4）

C3グリッドに位置する。

平面不整長円形で、長軸約1.35m×短軸約0.75m、検出面からの深さ約0.21mを測る。底面は中央付近がなだらかに窪む。底面の窪みには、植物遺体を少量含む黒色粘質土(5Y2/1)が堆積する。

底面から瀬戸・美濃と木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SK25（第13図、図版4）

C3グリッドに位置する。

平面不整長円形で、長軸約1.19m×短軸約0.75m、検出面からの深さ約0.35mを測る。底面はなだらかで、植物遺体を含む黒色粘質土(10YR2/1)が堆積するが、堆積土中には多くの礫と陶磁器・木片が縞状に含まれる。

肥前磁器、瀬戸・美濃、木製品が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SK26（第13図、図版5）

C3グリッドに位置する。SP03と重複し、SP03より新しい。

平面不整長方形で、長軸約1.45m×短軸約0.60m、検出面からの深さ約0.48mを測る。底面は平らで、底面に礫を多量に含むオリーブ黒色粘質土（5Y3/1）が堆積する。

底面から瀬戸系磁器、越中瀬戸、メロン類の種子（第4章第2節参照）が多量に出土した。他に、金属製品と木製品が出土した。遺物から、19世紀後半の時期と考えられる。

SK27（第13図）

C3・D3グリッドに位置する。

平面不整楕円形で、長軸約0.72m×短軸約0.50m、検出面からの深さ約0.09mを測る。底面は浅くなだらかで、表面には礫が集中し、集石遺構のような様相を呈する。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

SK29（第13図、図版4）

D3グリッドに位置する。南側でSX07と重複し、SX07より新しい。

平面不整長方形で、長軸約1.80m×短軸約0.70m、検出面からの深さ約0.13mを測る。底面は平らで、黒色粘質土（5Y2/1）の上に、礫を含むオリーブ黒色砂質土（5Y3/2）が堆積する。

多くの木製品が出土した。遺物とその出土状況などから、18世紀後半～19世紀中頃のごみ穴と考えられる。

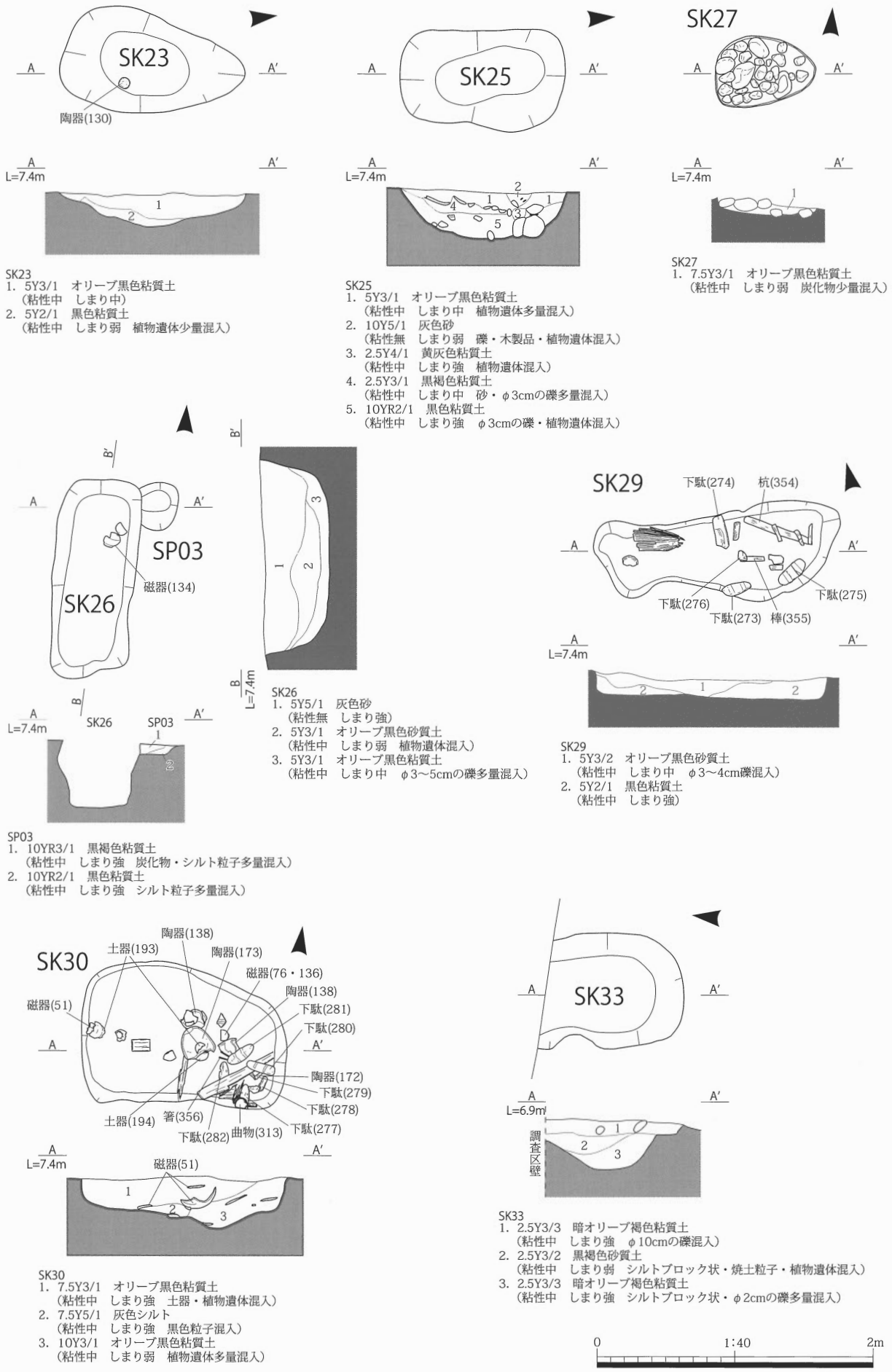
SK30（第13図、図版5）

C4グリッドに位置する。

平面不整長方形で、長軸約1.50m×短軸約1.01m、検出面からの深さ約0.38mを測る。底面はなだらかに窪み、植物遺体を多量に含むオリーブ黒色粘質土（10Y3/1）の上に、植物遺体を含むオリーブ黒色粘質土（7.5Y3/1）が堆積する。

土坑の中で、最も多く遺物が出土した。遺物中に初期伊万里と考えられる皿（第21図51・図版9）があるが、他の遺物や出土状況から、18世紀後半～19世紀中頃のごみ穴と考えられる。

SK31（第11図）



第13図　SK23・25・26・27・29・30・33　SP03　平面・断面図

C4グリッドに位置する。西側でSE06と重複し、SE06より新しい。

平面不整楕円形で、長軸約1.62m×推定短軸約1.10m、検出面からの深さ約0.45mを測る。底面はなだらかで、平坦に近い。底面には礫を含む黒褐色粘質土（10YR3/2）が堆積し、その上に礫を多量に含む褐灰色砂質土（10YR4/1）、シルトブロックを多量に含む黒褐色粘質土（10YR3/1）が堆積する。

遺物の出土はないが、SE06との切り合い関係から、18世紀代以降と考えられる。

SK32（第11図）

B4グリッドに位置する。北側でSE06と重複し、SE06より新しい。

平面不整方形で、長軸約1.19m×短軸約0.90m、検出面からの深さ約0.55mを測る。底面は平坦である。

遺物の出土はないが、SK31同様にSE06との切り合い関係から、18世紀代以降と考えられる。

SK33（第13図）

H2グリッド（B区）に位置する。調査区北壁に接し、調査区域外（北側）へ広がる。

平面不整長円形で、検出長約1.01m、短軸約0.85m、検出面からの深さ約0.37mを測る。底面は窪み、シルトブロックと礫を多量に含むオリーブ褐色粘質土（2.5Y4/3）の上に、シルトブロック及び焼土粒子・植物遺体を含む黒褐色砂質土(2.5Y3/2)、礫を含む暗オリーブ褐色粘質土(2.5Y3/3)が堆積する。

検出時に、胎土に金雲母を含む土製品（第29図222）が出土した。近代以降の撹乱によって、上層から混入したものと考えられる。他に遺物の出土はない。SD03が撹乱によって壊されているが、本来はSD03の下層に位置することから、18世紀後半以前と考えられる。

SX02

C2グリッドに位置する。SD03の底面で確認し、SD03北側石積みの下（北側）へ広がる。

平面不整楕円形で、検出長約2.04m、検出幅約0.48mを測る。SD03石材撤去や湧水・積雪等の影響で、全体像を把握することはできなかった。

遺物の出土はない。層位及び出土状況から、18世紀以前と考えられる。

SX03（第14図、図版5）

A4・A5グリッドに位置する。調査区の南壁・西壁に接しており、調査区域外（南西側）へ広がる。

平面不整楕円形で、検出長約2.62m、検出短軸約2.00m、検出面からの深さ約0.52mを測る。底面はなだらかに窪む形状で、全体的にシルトと炭化物及び焼土粒子を含む赤黒色粘質土（2.5YR1.7/1）が堆積する。

肥前磁器、瀬戸系磁器、土師器、漆器、木製品などが出土した。出土遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SX04（第14図）

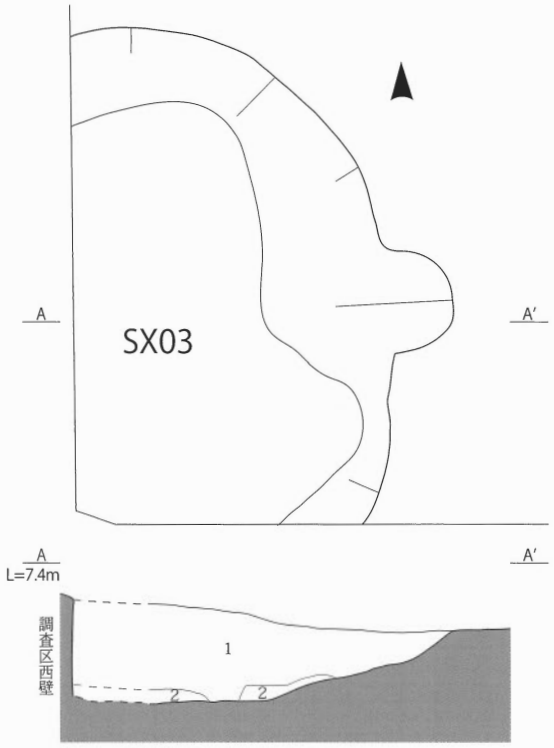
A2・B2グリッドに位置する。東側でSX05、西側でSX09と重複し、北側ではSD03と接する。SD03・SX09より古く、SX05より新しい。

平面不整方形で、検出長軸約2.00m×検出短軸約1.71m、検出面からの深さ約0.18mを測る。底面はほぼ平らで、西側に炭化物及びシルト・小礫をまばらに含む褐色粘質土（7.5YR4/3）、東側にシルトを多量に含む褐灰色粘質土（10YR6/1）が堆積する。北東隅にSD03上水施設に関連すると考えられる平面不整長方形で、検出長0.65m、短軸約0.60mの穴が重複する。

瀬戸・美濃、越中瀬戸、丹波系陶器、木製品が出土した。遺物と重複遺構との切り合い関係から、

SX04
1. 7.5YR4/3　褐色粘質土　（粘性中　しまり強　炭化物・シルト・小礫まばらに混入）
2. 10YR6/1　褐灰色粘質土　（粘性中　しまり弱　シルト多量混入）
SX05
3. 10YR6/2　灰黄褐色粘質土　（粘性中　しまり弱　炭化物・シルト粒子混入）

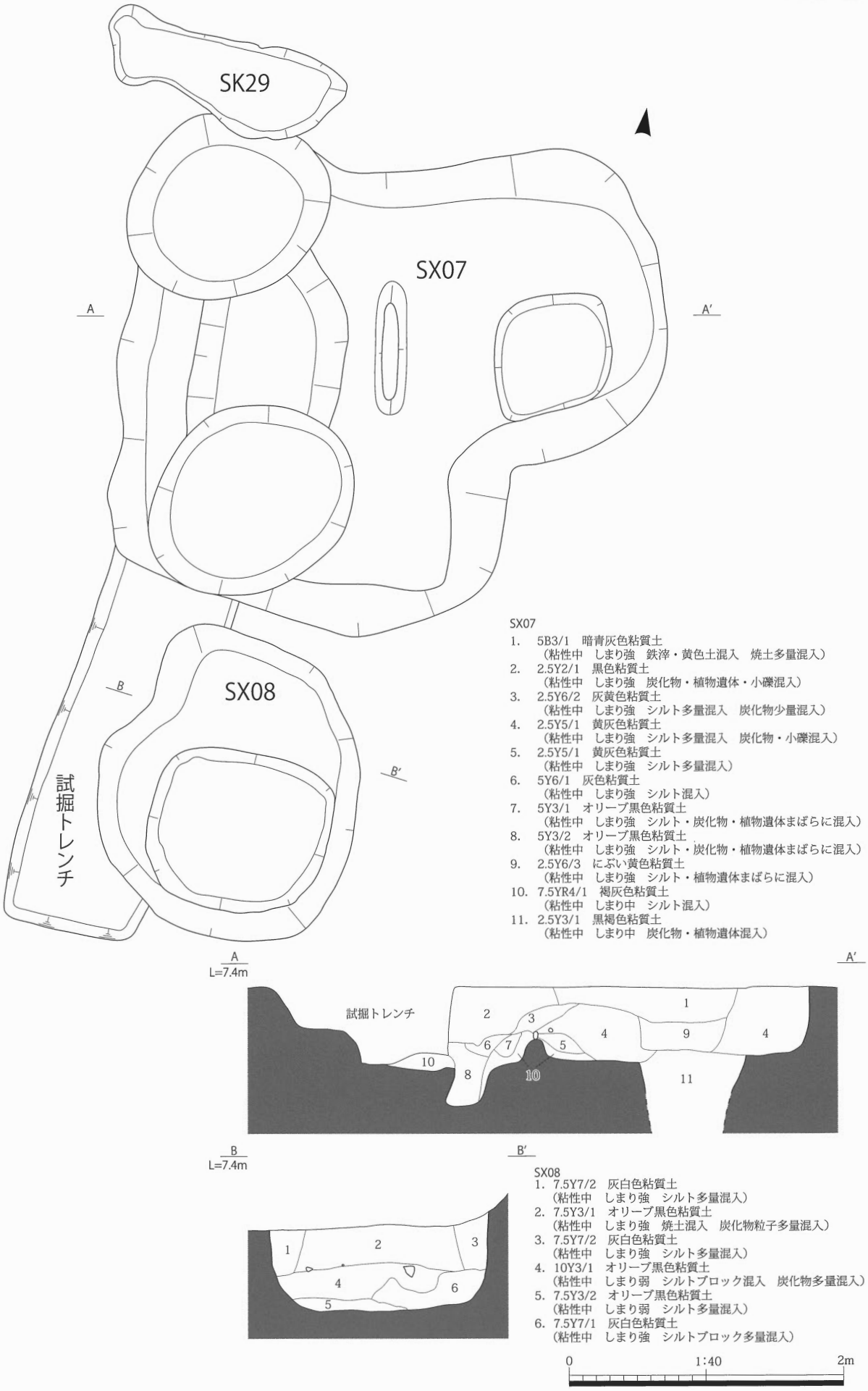
SX09
1. 7.5YR3/2　黒褐色粘質土（粘性中　しまり強　炭化物・焼土・鉄滓まばらに混入）
SX04
2. 7.5YR4/3　褐色粘質土（粘性中　しまり強　炭化物・シルト・小礫まばらに混入）



SX03
1. 2.5YR1.7/1　赤黒色粘質土
（粘性中　しまり中　シルト・炭化物・焼土粒子混入）
2. 5YR1.7/1　黒色粘質土
（粘性中　しまり強　シルトブロック多量混入）

0　1:40　2m

第14図　SX03・04・05・09　平面・断面図



第15図　SX07・08　平面・断面図

17世紀後半と考えられる。

SX05（第14図）

B2グリッドに位置する。西側でSX04、南側でSK13と重複し、北側ではSD03と接する。SD03・SX04・SK13より古い。

平面不整楕円形で、検出長軸約2.22m×検出短軸約1.50m、検出面からの深さ約0.08mを測る。底面は平坦である。全体的にシルト粒子と炭化物を含む灰黄褐色粘質土（10YR6/2）が堆積する。

遺物の出土はないが、重複遺構との切り合い関係から、17世紀後半以前と考えられる。

SX07（第15図、図版5）

D3グリッドに位置する。北側でSK29と重複し、SK29より古い。

平面は不整方形で、北東側が張り出す形状を呈する。長軸約4.00m×短軸約3.40m、検出面からの深さ約0.55mを測る。底面の北西隅に平面楕円形で長軸約1.53m×短軸約1.32m、南西隅に平面楕円形で長軸約1.60m×短軸約1.34mの窪みが存在し、その間を南北方向の幅約1.10mの溝で連結する。底面中央付近には、長軸約1.00m×短軸約0.25m、底面からの高さ約0.15mの南北方向の高まりが存在する。張り出し部の底面南側に接して、平面不整方形で東西約0.88m×南北約0.86mの深い穴が存在する。穴内には炭化物と植物遺体を含む黒褐色粘質土（2.5Y3/1）が堆積する。底面から深さ約0.55mまで確認したが、湧水と降雪の影響で、底は確認できなかった。

肥前磁器、唐津系磁器、唐津、羽口、木製品などが出土した。遺物から、17世紀前半～18世紀中頃の小鍛冶に関連する遺構と考えられる。

SX08（第15図）

D3・D4グリッドに位置する。

平面不整楕円形で、長軸約2.22m×短軸約1.92m、検出面からの深さ約0.63mを測る。底面は平らであるが、南東隅に平面楕円形で長軸約1.32m×短軸約1.18mの窪みが存在する。

瀬戸系磁器が出土した。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

SX09（第14図）

A2・A3グリッドに位置する。調査区西壁に接し、調査区域外（西側）へ広がる。東側でSX04と重複し、北側ではSD03と接する。SD03より古く、SX04より新しい。

平面不整方形で、検出長軸約3.21m、検出短軸約0.42m、検出面からの深さ約0.12mを測る。全体的に炭化物及び焼土を含む黒褐色粘質土（7.5YR3/2）が堆積する。

肥前磁器、羽口、鉄滓が出土した。遺物と重複遺構との切り合い関係から、17世紀後半以降の小鍛冶に関連した遺構と考えられる。

SX10（第16図）

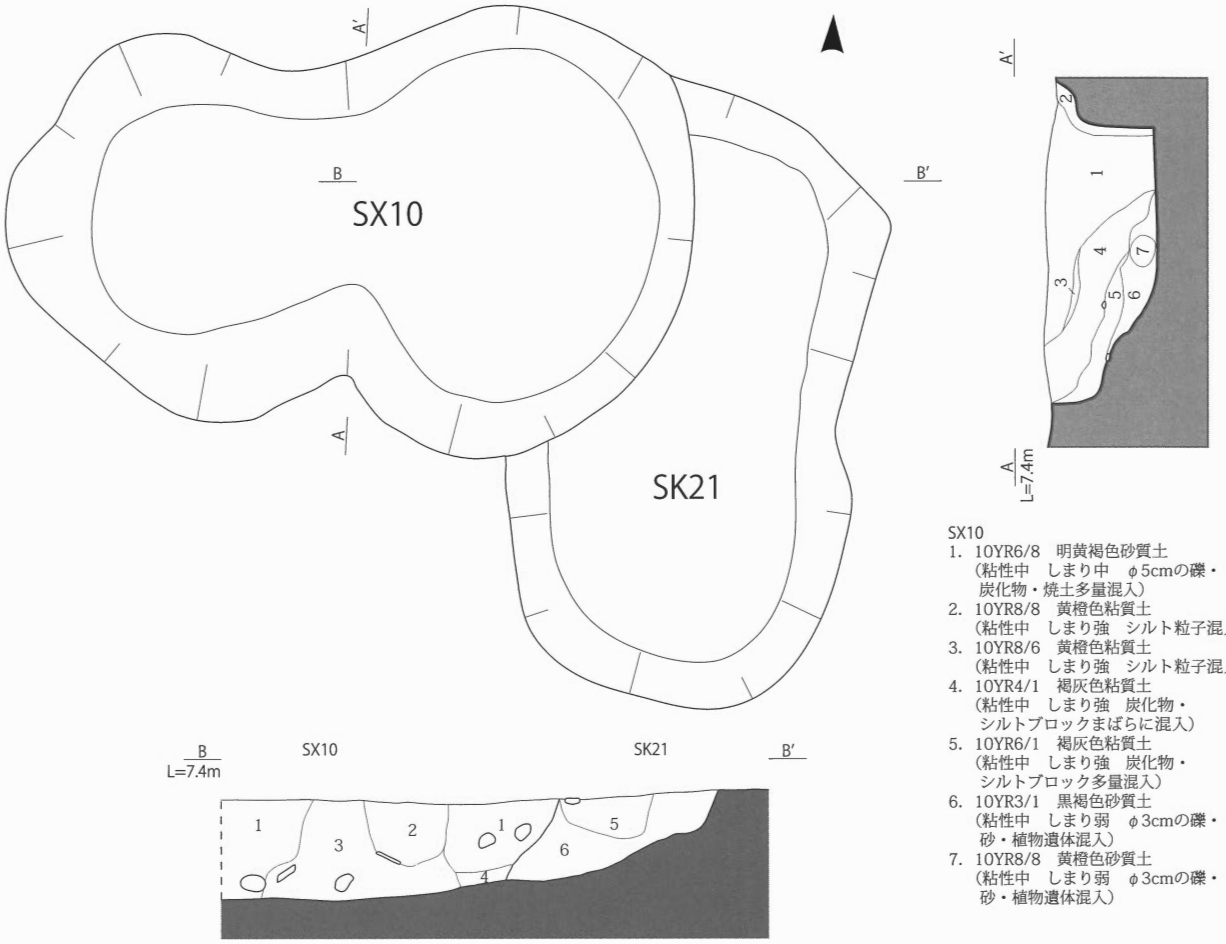
B4・C4グリッドに位置する。東側でSK21と重複し、SK21より新しい。

平面は不整双円形で、長軸約3.62m×短軸約1.64m、検出面からの深さ約0.60mを測る。底面はなだらかで、検出面から底面にかけて、礫及び炭化物・焼土を多量に含む明黄褐色砂質土（10YR6/8）などが堆積する。

肥前磁器、瀬戸・美濃、輸入陶器、石製品、木製品が出土した。礫及び炭化物・焼土を多量に含む堆積土の状況から、火を用いた遺構の可能性が考えられるが、羽口や鉄滓などの鍛冶に関連した遺物の出土はない。遺物から、18世紀後半～19世紀中頃と考えられる。

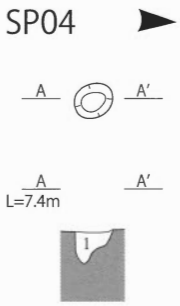
SP03（第13図）

C3グリッドに位置する。SK26と重複し、SK26より古い。

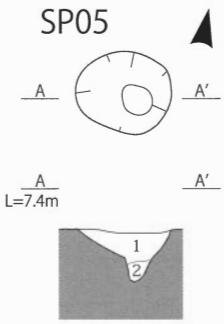


SX10
1. 10YR6/8　明黄褐色砂質土
（粘性中　しまり中　φ5cmの礫・炭化物・焼土多量混入）
2. 10YR8/8　黄橙色粘質土
（粘性中　しまり強　シルト粒子混入）
3. 10YR8/6　黄橙色粘質土
（粘性中　しまり強　シルト粒子混入）
4. 10YR4/1　褐灰色粘質土
（粘性中　しまり強　炭化物・シルトブロックまばらに混入）
5. 10YR6/1　褐灰色粘質土
（粘性中　しまり強　炭化物・シルトブロック多量混入）
6. 10YR3/1　黒褐色砂質土
（粘性中　しまり弱　φ3cmの礫・砂・植物遺体混入）
7. 10YR8/8　黄橙色砂質土
（粘性中　しまり弱　φ3cmの礫・砂・植物遺体混入）

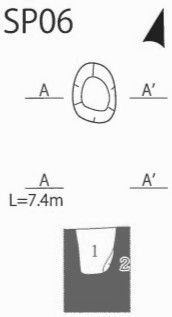
SX10・SK21
1. 10YR6/8　明黄褐色砂質土（粘性中　しまり中　φ5cmの礫・炭化物・焼土多量混入）
2. 10Y3/1　オリーブ黒色粘質土（粘性中　しまり強　焼土粒子・φ10cmの礫まばらに混入）
3. 10YR3/1　黒褐色粘質土（粘性中　しまり強　シルトブロック状・焼土ブロック状・φ5～10cmの礫・炭化物多量混入）
4. 7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土（粘性中　しまり弱　砂多量混入）
5. 10Y2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり強　礫まばらに混入）
6. 7.5Y4/1　灰色粘質土（粘性中　しまり強　シルト多量混入　φ5～20cmの礫混入）



SP04
1. 7.5Y2/2　オリーブ黒色粘質土
（粘性中　しまり中
シルト・焼土ブロック混入）



SP05
1. 7.5Y2/1　黒色粘質土
（粘性中　しまり弱　シルト・焼土粒子混入）
2. 7.5Y2/2　オリーブ黒色砂質土
（粘性中　しまり弱　砂多量混入）



SP06
1. 5Y5/2　灰オリーブ色粘質土
（粘性中　しまり強　シルト多量混入）
2. 5Y7/1　灰白色粘質土
（粘性中　しまり中　シルト多量混入）

第16図　SX10　SK21　SP04・05・06　平面・断面図

平面不整円形で、長軸約0.35ｍ×短軸推定約0.29ｍ、検出面からの深さ約0.08ｍを測る。底面は平らである。

遺物の出土はない。SK26との切り合い関係から、19世紀以前と考えられる。

SP04（第16図）

C2グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.20ｍ×短軸約0.18ｍ、検出面からの深さ約0.18ｍを測る。底面は尖り気味となる。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

SP05（第16図）

C3グリッドに位置する。

平面不整楕円形で、長軸約0.50ｍ×短軸約0.42ｍ、検出面からの深さ約0.25ｍを測る。底面は尖り気味となる。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

SP06（第16図）

C3グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.32ｍ×短軸約0.21ｍ、検出面からの深さ約0.24ｍを測る。底面は平らである。

遺物の出土はなく、時期は不明である。

曲物底板（第5図、図版5）

B4・C4グリッドに位置する。

大型の曲物底板で、水平な状態で出土した。

遺物の出土は他になく、時期は不明である。

(2) 上層面（江戸時代末～近代）の遺構

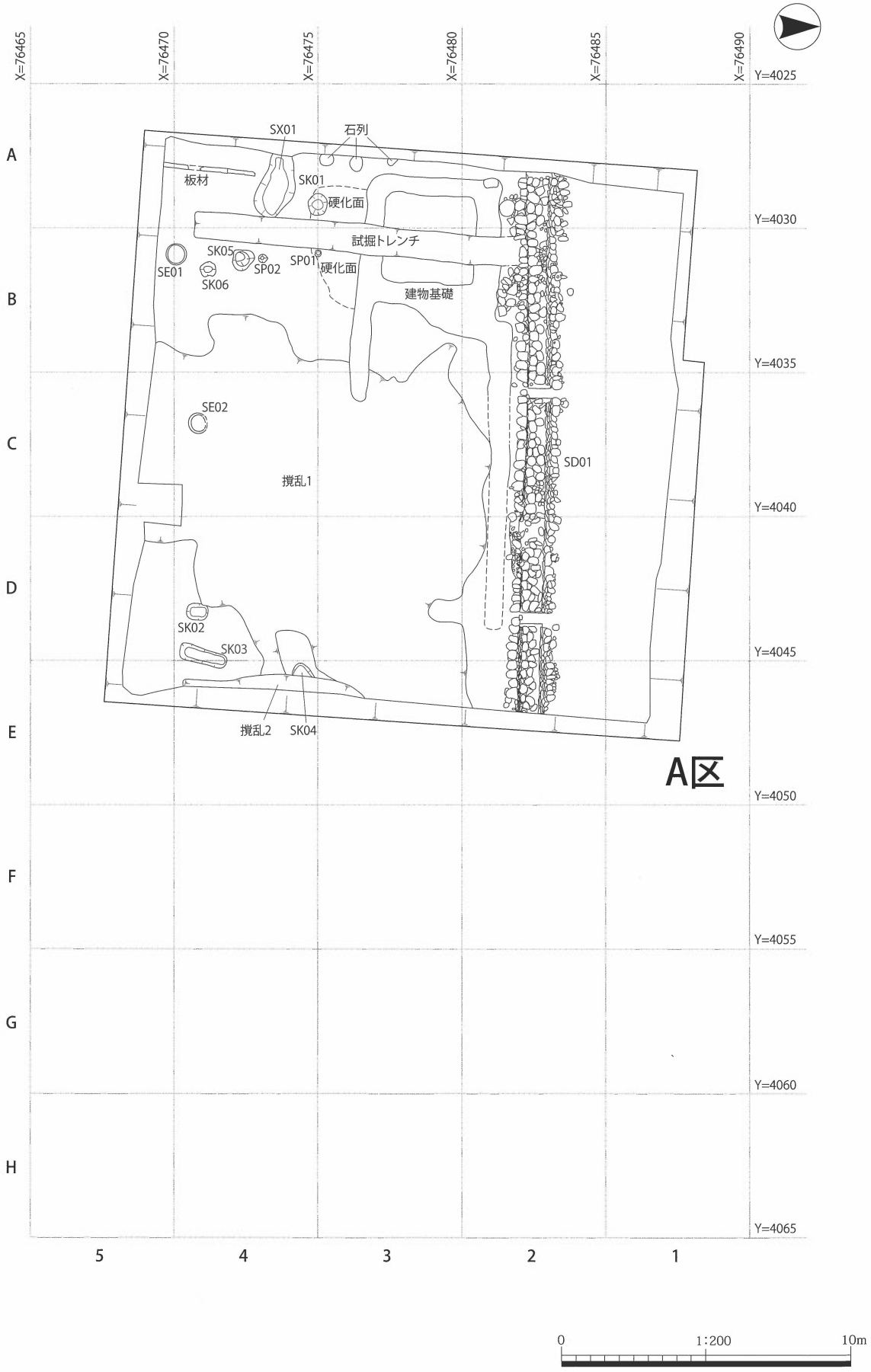
上層遺構では、背割水路、井戸、土坑などを確認した。

SD01（背割水路、第8・18・19図、図版3・7）

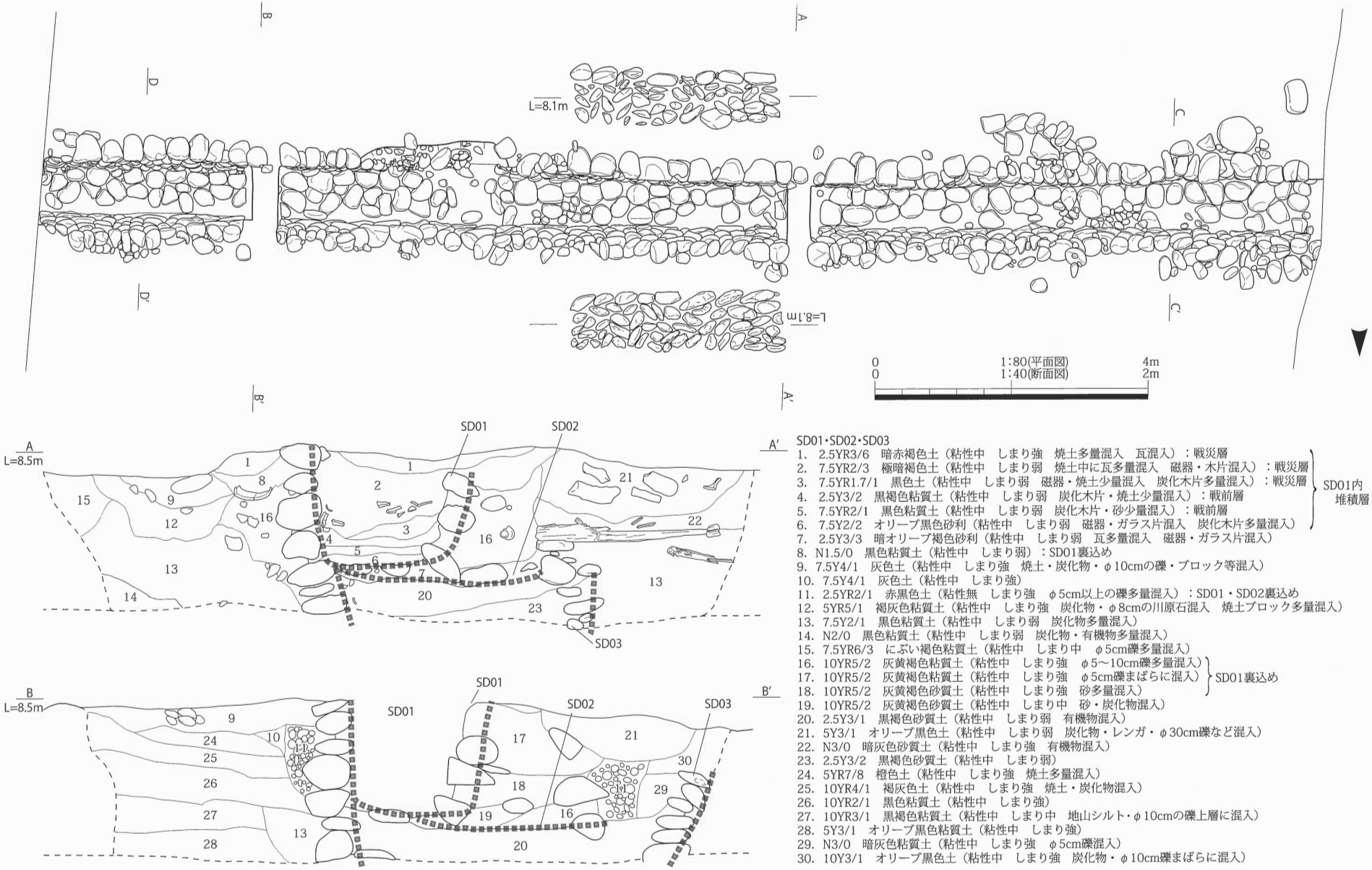
A2～E2グリッドにかけて位置する。

東西方向に伸びる石組の背割水路で、SD03・SD02の造り替えである。検出長約18.70ｍ、内幅約0.80～0.85ｍ（尺換算で、内幅二尺六寸～二尺八寸）、底面までの深さ約0.80ｍ（尺換算で二尺六寸）を測る。

石積みは、北側・南側ともに20～40㎝の大さきの河原石（自然石）を、斜めに互い違いに積み上げる落積みである。石材の積み上げは、底面から天端石に向かって、緩やかに広がるような積み方で、裏込めは礫を多量に含む灰黄褐色粘質土（10YR5/2）や礫を多量に含む赤黒色土（2.5YR2/1）である。底面は、扁平な河原石（自然石）を使用した敷石構造である。底面の標高は西側7.70ｍ・中央7.66ｍ・東側7.66ｍで、東側が僅かに低くなる。東側に向かって、水が流れていたと考えられる。北側石積みの東側下部（D2・E2グリッド）では、約1.8ｍ分の胴木が認められた。中央付近（C2グリッド）の石積みの残存状態はとくに良好で、上端の石と石の隙間に砂目地が詰まった状態で、天端石まで残る。検出面から深さ約0.70ｍ（底面から約10～15㎝）付近まで、焼土・炭化木片などを含む戦災層が堆積することから、昭和初期（戦中）まで水路として使用され、日常管理としての清掃が行き届いていたと考えられる。蓋に相当する板（石）などの痕跡は認められず、開渠と考



第17図　上層遺構全体平面図



SD01・SD02・SD03

1. 2.5YR3/6　暗赤褐色土（粘性中　しまり強　焼土多量混入　瓦混入）：戦災層
2. 7.5YR2/3　極暗褐色土（粘性中　しまり弱　焼土中に瓦多量混入　磁器・木片混入）：戦災層
3. 7.5YR1.7/1　黒色土（粘性中　しまり弱　磁器・焼土少量混入　炭化木片多量混入）：戦災層
4. 2.5Y3/2　黒褐色粘質土（粘性中　しまり弱　炭化木片・焼土少量混入）：戦前層
5. 7.5YR2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり弱　炭化木片・砂少量混入）：戦前層
6. 7.5Y2/2　オリーブ黒色砂利（粘性中　しまり弱　磁器・ガラス片混入　炭化木片多量混入）

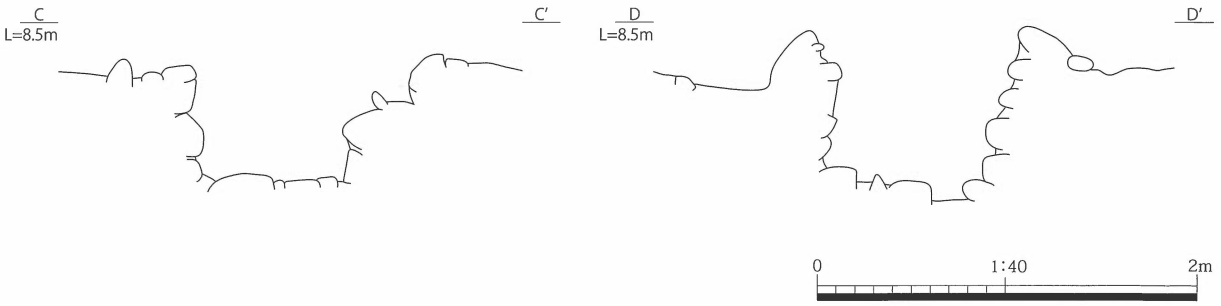
（1～6：SD01内堆積層）

7. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂利（粘性中　しまり弱　瓦多量混入　磁器・ガラス片混入）
8. N1.5/0　黒色粘質土（粘性中　しまり弱）：SD01裏込め
9. 7.5Y4/1　灰色土（粘性中　しまり強　焼土・炭化物・φ10cmの礫・ブロック等混入）
10. 7.5Y4/1　灰色土（粘性中　しまり強）
11. 2.5YR2/1　赤黒色土（粘性無　しまり強　φ5cm以上の礫多量混入）：SD01・SD02裏込め
12. 5YR5/1　褐灰色粘質土（粘性中　しまり強　炭化物・φ8cmの川原石混入　焼土ブロック多量混入）
13. 7.5Y2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり弱　炭化物多量混入）
14. N2/0　黒色粘質土（粘性中　しまり弱　炭化物・有機物多量混入）
15. 7.5YR6/3　にぶい褐色粘質土（粘性中　しまり中　φ5cm礫多量混入）
16. 10YR5/2　灰黄褐色粘質土（粘性中　しまり強　φ5～10cm礫多量混入）
17. 10YR5/2　灰黄褐色粘質土（粘性中　しまり強　φ5cm礫まばらに混入）
18. 10YR5/2　灰黄褐色砂質土（粘性中　しまり強　砂多量混入）

（16～18：SD01裏込め）

19. 10YR5/2　灰黄褐色砂質土（粘性中　しまり中　砂・炭化物混入）
20. 2.5Y3/1　黒褐色砂質土（粘性中　しまり弱　有機物混入）
21. 5Y3/1　オリーブ黒色土（粘性中　しまり弱　炭化物・レンガ・φ30cm礫など混入）
22. N3/0　暗灰色砂質土（粘性中　しまり強　有機物混入）
23. 2.5Y3/2　黒褐色砂質土（粘性中　しまり弱）
24. 5YR7/8　橙色土（粘性中　しまり強　焼土多量混入）
25. 10YR4/1　褐灰色土（粘性中　しまり強　焼土・炭化物混入）
26. 10YR2/1　黒色粘質土（粘性中　しまり強）
27. 10YR3/1　黒褐色粘質土（粘性中　しまり中　地山シルト・φ10cmの礫上層に混入）
28. 5Y3/1　オリーブ黒色粘質土（粘性中　しまり強）
29. N3/0　暗灰色粘質土（粘性中　しまり強　φ5cm礫混入）
30. 10Y3/1　オリーブ黒色土（粘性中　しまり強　炭化物・φ10cm礫まばらに混入）

第18図　SD01（背割水路）平面・立面・断面図



第19図　SD01（背割水路）エレベーション図

えられる。

磁器、土製品、銭貨、瓦が出土した。遺物は、20世紀前半のものが多く、背割水路廃絶の時期を示すと考えられる。層位から、近代に構築され、戦後に埋没したものと考えられる。

SE01

B4・B5グリッドに位置する。

平面正円形で、長軸約0.74m×短軸約0.70mを測る。石製の井戸枠である。

遺物の出土はない。層位・構造から、19世紀末以降と考えられる。

SE02

C4グリッドに位置する。

平面正円形で、長軸約0.70m×短軸約0.65mを測る。石製の井戸枠である。

遺物の出土はない。層位・構造から、SE01同様に19世紀末以降と考えられる。

SK01

A3・A4グリッドに位置し、硬化面と重複する。硬化面より新しい。

平面不整楕円形で、長軸約0.78m×短軸約0.65m、検出面からの深さ約0.38mを測る。底面はなだらかに窪む形状で、炭化物を少量含む黒褐色粘質土（10YR3/1）が堆積する。

遺物の出土はないが、硬化面との切り合い関係から、19世紀末以降と考えられる。

SK02

D4グリッドに位置する。

平面不整方形で、長軸約0.74m×短軸約0.58m、検出面からの深さ約0.18mを測る。底面はなだらかに窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

SK03

D4・E4グリッドに位置する。

平面不整長円形で、長軸約1.67m×短軸約0.59m、検出面からの深さ約0.18mを測る。底面には凸凹が見られ、南側が低くなってなだらかに窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

SK04

E4グリッドに位置する。調査区の東壁に接し、調査区域外（東側）へ広がる。

平面不整楕円形で、残存長軸約0.80m×残存短軸約0.42m、検出面からの深さ約0.05mを測る。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

SK05

B4グリッドに位置する。

平面不整長円形で、長軸約0.80m×短軸約0.75m、検出面からの深さ約0.55mを測る。底面は、なだらかに窪み、西側が深く窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

SK06

SK05と同じくB4グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.55m×短軸約0.55m、検出面からの深さ約0.25mを測る。底面は、なだらかに窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

SX01

A4グリッドに位置する。調査区の西壁に接し、僅かではあるが調査区域外（西側）へ広がる。

平面不整長円形で、残存長軸約2.20m×短軸約1.30m、検出面からの深さ約0.28mを測る。底面はなだらかに窪む形状で、凹凸がみられる。全体的に、焼土と炭化物を少量含む黒褐色粘質土が堆積する。

鉄製品のコテ（第39図394・図版20）が出土した。層位から、19世紀末頃と考えられる。

SP01

B3・B4グリッドに位置する。硬化面と重複し、硬化面より新しい。

平面不整円形で、長軸約0.25m×短軸約0.21m、検出面からの深さ約0.23mを測る。底面まで柱穴状に窪む。

遺物の出土はないが、硬化面との切り合い関係から、19世紀末以降と考えられる。

SP02

B4グリッドに位置する。

平面不整円形で、長軸約0.32m×短軸約0.29m、検出面からの深さ約0.25mを測る。底面まで柱穴状に窪む。

遺物の出土はない。層位から、19世紀末頃と考えられる。

硬化面

A3・A4・B3・B4グリッドにかけて位置する。SK01・SP01と重複し、両遺構より古い。

東西約4.15m×南北約1.94mの平面不整半方形の範囲で、土間状に硬く硬化する。北側には建物基礎が存在する。

遺物の出土はない。19世紀末以降と考えられる。北側の建物基礎に付設する土間的機能を有する空間であった可能性がある。

建物基礎

A2～D2・A3～C3グリッドにかけて位置する。

北側に位置するSD01に沿って、東西推定約15.58m、南北約4.88mの範囲で、礫を充填する溝で囲われた空間が認められた。南東側は撹乱によって、形状を確認することができなかった。

19世紀末以降と考えられる。

板材

A4・A5グリッドに位置する。南側への広がりと北側への延長が考えられる。

南北残存約3.20m、幅約0.15mの2枚以上の板材の組み合せである。配置形状から、上水施設の木樋であった可能性があるが、簡易な施設などの基礎であった可能性もある。

硬化面や建物基礎と同様に、19世紀末以降と考えられる。

石列

A3グリッドに位置する。

調査区西壁際の南北約2.70mの範囲で、約0.5m程度の3石の石が南北方向に列状に並ぶような状態で確認した。2石は扁平な河原石（自然石）であるが、1石は加工が施される。建物の礎石、石塔等の台石、庭石などの可能性がある。

19世紀末以降と考えられる。（基峰）

第4節　遺　物

(1) 下層面（江戸時代）の出土遺物

下層遺構からは、肥前磁器や瀬戸・美濃、越中瀬戸などの陶磁器、土師器、土人形などの土製品、羽口と鉄滓、硯や石臼などの石製品、煙管や簪などの金属製品、寛永通宝と文久永宝、漆器椀や和傘部材、下駄や木札、曲物、櫛、箸、羽子板などの木製品、瓦などが出土した。

SD02（背割水路、第20・22・23・26～32・34・36図、図版8・10・12・14～19）

前節で述べたとおり、下層のSD03に伴う遺物が混入している可能性が高く、帰属が明確でない遺物についてはSD02・03と表記し、ここではこれらを含めてSD02出土遺物として報告する。

1～16は、肥前磁器である。1～3は碗で、1は見込みに「永楽年製」の文字、体部に草花と山水画、2は見込みに雷文、体部に繋ぎ松竹梅、3は見込みに「富貴長春」の文字と渦状文、体部に山水画がある。4は小碗である。5は筒形碗で、見込みに圏線と五弁花、四方襷、体部に山水画、底部に松葉と圏線がある。6～9は蓋で、6はつまみ内に鳥、体部に草、見込みに草と圏線、7はつまみ内と体部に花弁文、見込みに鳥、8はつまみ内に文字、見込みと体部に草花、9はつまみ内と体部に花弁文、見込みに圏線がある。10～13は皿で、10は輪花皿で、見込みに六弁花と花唐草文、11は見込みに半菊花・渦・五弁花と圏線、体部に草と圏線、高台内に文字と圏線、13は見込みと体部に丸形の印判手による花がある。12は輪花皿で、見込みに蓮鷺文、しのぎと染付丸、陽刻の牡丹と蝶、縁に口紅、高台内に目跡が4カ所残る。14・15は鉢で、14は向付で、見込みに四方襷、体部に帆と波文、高台内に文字、15は体部に草花がある。16は仏飯器で、体部に格子文がある。2・3・7・14には焼き継ぎがある。68は肥前系磁器で、体部に菊弁文がある仏飯器である。77～79は唐津である。77・78は鉢で、見込みに白泥による白化粧が施される。77は波状文である。78は渦巻又は波状文で、重ね焼き痕がある。79は壺である。86～89は瀬戸系磁器である。86は碗で、見込みに四方襷、体部に縦線と如意頭がある。87・88は皿で、87は見込みに辰砂か鉄絵での山水画と雷文、体部に家屋と唐草状の文様と雷文、88は見込みに草花、体部に松葉がある。87には焼き継ぎがある。89は仏飯器である。90・91は瀬戸・美濃である。90は拳骨碗で、体部に押圧痕、黒褐色の釉に白泥が付着する。91は秉燭で、底部に軸孔がある。145～153は越中瀬戸である。145～147は皿で、145は見込みと底部に重ね焼き痕、146は見込みに重ね焼き痕が残る。147は見込みに十六弁菊の印花、高台内に墨書がある。148は受付皿（灯明皿）、149～151は小鉢、152は建水か匣鉢、153は秉燭である。153の底部には軸孔がある。147を除き、底部は糸切りである。176はロクロ成形の土師器で、油煙が付着する灯明皿である。底部は糸切りである。196は信楽系磁器の皿で、見込に3条線の×状櫛目と目跡が2カ所あり、油煙が付着する灯明皿である。199は瓦質土器で、表面に獅子状の陽刻がある。202は中国系輸入陶器の皿で、見込みに文字文と蝶文、圏線、型押し、体部に

型押し、高台内に変形文字がある。206は小碗で、被熱によって全体的に油煙で汚れる。207は鉢で、口縁部に文字刻印が巡る。208は脚付きの底部で、表面に「霞暗□」と陽刻する。209･210は五徳で、文字の印刻がある。211は把手で、「仙山」と印刻する。

214～216は土人形である。214は童子像、215は狆抱き童子像で、いずれも頭部を欠損する。型押し前後併せ成形で、緑釉が施される。216は素焼きの蛙である。220は環状の土製品で、表面がよく磨かれている。

234・235は石製品の硯である。234の裏面には「享保九年 正月四日 十二童 文賞齊眉山」と陰刻される。

242は文久永宝、249は煙管雁首で、肩部に線状の刻みが施される。250は鉄製の鎌で、腐食して刃こぼれする。

256～259は漆器である。256～258は椀で、256･257は見込み･体部ともに黒漆、258は見込みに黒漆、体部に赤漆である。259は杓子で、表裏面ともに赤漆で、柄を欠損する。289～299・322～332は木製品である。289・290・292～294は木札で、290・294の表裏面及び292・293の表面に墨書がある。290の表面は「□覺帳」、292は「七日□(写カ)□□(了カ)」、293は「□□□□□／吉澤□」である。294の表面は、左列と右列で同じ文字が書かれていると思われ、「□(一カ)番八枚之内／□(一カ)番八枚之内」、裏面は「濱野屋」と判読できる。295は板状木製品で、建物状の図柄のような墨書がある。291・298・299は曲物の蓋か底板である。296・297は曲物の蓋で、296の表面に墨書、297の表面に焼印がある。322～324は横櫛で、322・323は削り出し、324は差し歯タイプである。325は羽子板で、表裏面には、墨や朱の文様がある。326～328は箸で、削り出しである。326は六角形で両端に朱、327は丸木で隅丸方形、328は四角形である。329は加工板、330は栓である。331・332は不明木製品で、331は鍵手状、332は側面に吊り下げるための孔が施された円柱状を呈する。

SD03（背割水路、第20～24・26～32・34～36図、図版8～17・19）

17～37は肥前磁器である。17～28は碗で、17は見込みに寿字文と雷文、体部に繋ぎ蓮弁状の文様、18は小碗か向付で見込みに雷文、体部に人面及び松と草、19は体部に松と圏線、20は見込みに巻貝（宝貝）と四方襷、体部に唐花、21は器形が半球形で見込みに十字花、体部に鶴と松、22は広東碗で見込みに圏線、体部に松と草花、23は見込みに寿字文、四方襷と圏線、体部に唐花、24は見込みに格子文と圏線、体部に草と圏線がある。25は、見込みに宝と圏線、体部に草花と圏線、高台内に朱書きで「松村や□□□」、焼き継ぎがある。26は見込みに寿字文と圏線、体部に山水と柳、27は見込みに魚、体部に文字文、28は広東碗で体部に船と波がある。29・30は蓋で、29は見込みに格子と圏線、体部に格子文、30は広東碗の蓋で見込みに鷺、つまみ内に桜と紫陽花、体部に鳥、桜と紫陽花がある。31は皿で、見込みの口縁付近に貼付菊花がある。十四弁菊である。32～35は鉢で、32･33は向付、32は見込みに四方襷、体部に蛸唐草、33は見込みに四方襷、体部に菊花がある。34は見込みと体部に蛸唐草を施す源氏香文様がある。35は見込みに素地染付と圏線、砂目高台の初期伊万里である。36は猪口で、体部に斜格子と薄、圏線がある。37は線香立で、体部に笹文がある。69～75は肥前系磁器である。69～71は体部に草花のある碗である。70は高台内に文字がある。72～76は皿である。72は見込みに花と蛸唐草、圏線、体部に繋ぎ松葉と圏線、蛇の目高台である。73は見込みに花弁と花、唐草、74は見込みに草と蛇の目痕、75は見込みに五弁花と花、唐草、圏線、体部に草と圏線がある。92～105は瀬戸系磁器である。92～98は碗で、92は体部に菊唐草とその周囲に松、高台に○×文、高台内に名款がある。93は見込みに花と圏線、体部に菊花、94は見込みに花、体部に宝文、95は見込みに蝶、体部に草花と圏線、96は見込みに蝶と圏線、体部に

花弁、97・98は体部に植物文がある。99・100は蓋で、合子蓋と考えられる。99はつまみを欠損し、体部に松葉十字花文と梅、条線、100は上部に山水か梅林、体部に丸と櫛歯がある。101～103は皿である。101は輪花皿で、見込みに山水画がある。102は形打陽刻で、見込みに十字花、波に綾杉、体部にはハリ跡が残る。103は輪花皿で、見込みに花詰文、体部に繋ぎ花文と雷文がある。104は瓶で、器形は筒形で、体部に渦状文と縦線、透かしが施される。105は戸車で、「天下太平」の墨書がある。106～118は瀬戸・美濃である。106～108は碗である。106は体部に飴釉の網掛文がある。109・110は拳骨碗で、体部に押圧があって、黒褐色釉に白色釉が点々と散る。111・112は受付皿（灯明皿）、113は皿（灯明皿）で、いずれも油煙が付着する。112の底部には渦巻き状の線刻がある。114は鉢、115は擂鉢である。116は壺で、肩部にしのぎがある。117は仏花瓶で、光沢のある鉄釉が施され、白色釉が点々と散る。底部は糸切りである。118は秉燭又は蓋である。154～167は越中瀬戸である。154・155は小鉢である。156～163は皿で、156は見込みに十六弁菊の印花、高台内に墨書がある。157・159～163は見込みに重ね焼き痕がある。164は受付皿（灯明皿）、165は片口擂鉢、166・167は建水か匣鉢である。156・164を除き、底部糸切りである。177～188はロクロ成形の土師器の灯明皿で、底部は糸切りである。182を除き、油煙が付着する。189は非ロクロ成形の土師器の秉燭である。198は越前の鉢である。貼付脚で、体部に刻印らしき痕跡がある。200は瓦質土器の鉢と考えられる。口縁が平らで、体部に上下の区画内に亀甲文と梅花及び松葉がある。203は輸入陶器の鉢である。中国系で、体部に宝相華がある。

221は角が摩滅し、円形の板状を呈する。表面に「大極上製□大坂南久太濱高田屋庄八」の刻印があり、焼塩壺の蓋の可能性がある。

236は硯である。237は石臼で、穀物臼である。角閃石安山岩製（常願寺川産か）で、南側石積みの石材に転用されていた。

243は寛永通宝で、新寛永である。251は鉄製の握り鋏である。

260は和傘部材で、柄の中ほどを移動する手元轆轤である。表面には赤漆が施される。265～267は下駄である。265は平面丸型の一木連歯下駄、266は無眼下駄、267は田下駄である。300は木札で、表裏面に墨書がある。300の表面は「松□□源□／□□人（相カ）／京□□□□□」、裏面は「□□□（谷カ村カ）／□□　弥六／□□十六日（月カ）」と判読できる。301・302は曲物の蓋で、いずれも墨書がある。301の墨書は「清」である。303～305は曲物の蓋か底板である。306は小型桶である。333・334は削り出しの横櫛である。335は削り出し角棒（四角形）の箸で、上端に朱がある。336は加工板である。

SD03内上水施設（第21・25・27・36図、図版19）

38は肥前磁器の碗である。38は体部に菊花があり、初期伊万里と考えられる。119は瀬戸系磁器の碗である。190はロクロ成形の土師器の灯明皿で、底部は糸切りである。

337・338は竹樋の継ぎ手である。337は南側、338は北側に配置されていた。

SD05（第27・32・35図、図版18）

191・192は、ロクロ成形の土師器の灯明皿で、191の底部は糸切りである。

268は平面角型の一木連歯下駄で、側面に横緒孔がある。307は小型曲物で、内底面が広い範囲で炭化する。308・309は曲物の蓋か底板で、いずれも金属製の留め金が残る。

SE03（第25・28・36・37図、図版11）

120・121は瀬戸系磁器の碗、122は瀬戸・美濃の片口鉢、123は瀬戸・美濃の秉燭か台付碗で、底部は糸切りである。212は種類不明の碗である。

339は底板で、厚さ約2.5cmを測る。340～342は側板で、厚さ約1.5～1.6cmである。工具で下部を削っ

ている。

SE04（第37図）

343・344は上段の側板である。343は幅8.7cm・厚さ2.0cm、344は幅9.1cm・厚さ1.7cmで、工具で下部を削っている。345・346は下段の側板である。345は長さ90.4cm・幅8.3cm・厚さ2.0cm、346は長さ91.0cm・幅12.6cm・厚さ1.9cmで、工具で下部を削っている。

SE06（第21・32・35・37図、図版9）

39・40は肥前磁器で、39は碗、40は皿である。39は見込みに斜線、体部に草花、40は見込みに丸に花弁と2条線の組合せ文様と花、体部に草花がある。いずれも初期伊万里である。

269は平面丸型の構造（差歯）下駄で、露卯下駄である。310・311は木札、347は削り出し丸木（六角形）の箸で湾曲する。

SK09（第32図、図版16）

261は漆器の椀で、見込み・体部ともに黒漆塗りである。体部に赤漆による文様が施されるが、部分的であるため詳しい文様は不明である。

SK10（第31図）

252は鉄製の包丁の刃である。刃先は腐食し、刃こぼれする。

SK13（第31・32図、図版16）

238は砥石である。

262は漆器の椀で、見込み・体部ともに赤漆塗りで、高台内は黒漆塗りである。

SK14（第21・25・32図）

41は肥前磁器の碗で、体部に草花と圏線がある。124は瀬戸系磁器の碗である。

263は漆器の椀で、見込みは赤漆塗り、体部は黒漆塗りである。体部に赤漆で竹か笹を丸で囲んだ文様が3カ所施される。高台内は黒漆塗りで、キャタビラ状の凹みが巡る。

SK16（第21・25・32図、図版9・11・16）

42・43は肥前磁器の碗である。42は体部に扇と宝尽くしがあり、初期伊万里と考えられる。43は体部に花弁がある。125は瀬戸系磁器の碗で、体部に草花がある。126・127は瀬戸・美濃で、126は碗、127は片口擂鉢である。

270は平面丸型の構造（差歯）下駄で、露卯下駄である。

SK17（第21・26・28・32図）

44・45は肥前磁器の碗である。44は体部に草花、45は見込みに文字と圏線、体部に笹がある。168は越中瀬戸の建水又は匣鉢である。201は瓦質土器で、容器の蓋と考えられる。

271・272は平面丸型の構造（差歯）下駄である。271は陰卯下駄で、表面に黒漆が塗られる。272は露卯下駄である。

SK18（第21・25・31・37図、図版9・11・19）

46～49は肥前磁器である。46・47は皿で、46は輪花皿で、見込みに染付及び鳥の陽刻がある。47は蛇の目高台で、見込みに草花、体部に樹木状の文様がある。48・49は瓶で、48は口縁部～体部に蛸唐草、49は口縁部に雷文、体部に花がある。128は瀬戸・美濃の秉燭で、底部糸切りである。

239は硯で、裏面に文字などが線書きされる。

348・349は円形の有孔板である。

SK21（第25図）

129は瀬戸・美濃の皿である。

SK23（第25・37図）

130は瀬戸・美濃の碗である。

350は削り出し丸木の箸である。

SK25（第21・25・35図、図版9・18）

50は肥前磁器の瓶で、体部に蘭がある。131～133は瀬戸・美濃の皿である。131は見込みに重ね焼き痕が残る。

312は木札で、表裏面に墨書がある。表面は「山一」とみられる屋号の記号、他は不明で、裏面は「□□壱斤入」と判読できる。

SK26（第25・26・31・37図、図版12・19）

134は瀬戸系磁器の碗、169は越中瀬戸の碗である。

253は金属製で、両端に留め金具が残る把手である。

351・352は削り出し丸木の箸である。

SK29（第31～33・37・38図、図版15）

273～275は平面丸型の一木連歯下駄で、前歯と後歯が磨り減って草履下駄状を呈する。276は下駄歯である。353は削り出し丸木の箸、354は杭、355は棒状木片である。

244は寛永通宝で、古寛永である。

SK30（第21～23・25・27・33・35・38図、図版9・10・12・13・16・18）

51・52は肥前磁器の皿である。51は見込みに菊花流水があり、初期伊万里と考えられる。52は見込みに菊花、体部に松葉がある。76は肥前系磁器の皿で、見込みに花と圏線がある。135・136は瀬戸系磁器の碗で、135は体部に太湖石と花、高台内に文字がある。137は瀬戸・美濃の小鉢、138・139は瀬戸・美濃の片口鉢である。170・171は越中瀬戸の小鉢、172は越中瀬戸の擂鉢、173は越中瀬戸の三脚付火鉢である。193・194はロクロ成形の土師器の灯明皿で、底部は糸切りである。

277～282は平面丸型の構造（差歯）下駄で、いずれも露卯下駄である。277～280は、表面・側面に赤漆、裏面・歯に黒漆が施される。313は小型曲物、356は削り出し丸木の箸である。

SK33（第29図）

222は土製品で、表面に「□□名産□□組合□□□一」の刻印がある。撹乱によって、上層から混入したものと考えられる。

SX03（第22・25・27・31～33・35・38図、図版9・15・19）

53・54は肥前磁器である。53は碗で、体部に花弁と圏線がある。54は皿で、見込みに花弁と圏線があり、初期伊万里と考えられる。140は瀬戸系磁器の皿である。195はロクロ成形の土師器の灯明皿で、底部は糸切りである。

245は寛永通宝で、新寛永である。

264は漆器の椀で、見込み・体部ともに黒漆塗りで、体部に紅葉と草の文様がある。283～286は下駄である。283・284は平面角型の構造（差歯）下駄で、283は陰卯下駄、284は露卯下駄である。285は平面丸型の構造（差歯）下駄で、露卯下駄である。286は下駄歯である。314は曲物の蓋か底板である。357は正方形の板で、表面は斜めに区画して赤漆と黒漆が塗られ、裏面は赤漆が塗られる。裏面の上下に、木を留めた接合痕跡が残る。358は加工木である。

SX04（第25・27・38図、図版13・14・19）

141は瀬戸・美濃の皿で、見込みに印花の痕跡がわずかに残る。174は越中瀬戸の皿で、見込みに十六弁菊の印花、高台内に墨書がある。197は丹波系陶器の片口擂鉢である。

359は包丁の柄で、茎が残る。

SX07（第22・23・29・30・35・38図、図版10・15・19）

55～61は肥前磁器である。55～59は碗で、55は体部に蝶と草花、圏線、56は見込みに文字と圏線、体部に縦線と草、57は見込みに文字と波・兎、高台内に文字、58は見込みに文字と圏線、体部に唐草、高台内に文字、59は体部に菊と圏線がある。60・61は皿である。60は輪花皿で、見込みに草花流水、底部は糸切細工で、初期伊万里と考えられる。61は見込みに草花、体部に草がある。80・81は唐津系磁器の碗である。80は体部に丸に花弁と圏線、81は体部に樹木と山状の文様がある。82は唐津の灯明皿で、焼成不良である。83は唐津の片口鉢で、体部に輪状の白化粧、見込みに白泥によって渦巻き状に刷毛目文様が施される。80～82は、17世紀代と考えられる。

224はイタヤガイ製の貝杓子で、柄を取り付けるための直径約2.5㎜の孔が2つある（第4章第4節）。

225～229は羽口、231・232は鉄滓である。

315・360・361は木製品で、315は曲物の蓋か底板、360・361は加工木である。

SX08（第25図）

142は瀬戸系磁器の碗である。

SX09（第22・30図、図版15）

62は肥前磁器の碗で、体部に菊花と圏線がある。

230は羽口、233は鉄滓である。

SX10（第22・23・25・27・28・31・33・35図、図版10・12）

63～66は肥前磁器である。63・64は碗で、63の体部には丸に格子状染付がある。64は体部に草か文字がある。65は焼き継ぎのある蓋で、体部に草花と圏線がある。66は瓶で、体部に蛸唐草と縦縞、圏線がある。84は唐津の鉢で、見込みに白泥による波状文がある。143は瀬戸・美濃の植木鉢で、鍔縁桶型である。175は越中瀬戸の建水か厘鉢である。204・205は中国系の輸入陶器である。204は台付の台の部分で、外面に波状文がある。205は鉢で、見込みにしのぎがある。

240は粘板岩製の砥石である。

287は平面角型の構造（差歯）下駄で、陰卯下駄である。316は曲物の蓋である。

曲物底板（第38図、図版19）

367は平面円形の大型の曲物底板で、長軸約0.67ｍ×短軸約0.66ｍを測る。5枚の板を繋ぎ合わせたもので、板の厚さは約3.4㎝である。片面のみが、全面的にギトギトした膜状の付着物で被われる。

包含層出土遺物（第22・23・25・28・29・31・33・35・38図、図版10・14～16・18・19）

67・85・144・213・217～219・223・241・246・254・255・318～321・362～366・368・369は、Ⅵ層（下層面遺物包含層）からの出土遺物である。247・288・317はA区の東側の試掘トレンチからの出土遺物、248はB区撹乱層からの出土遺物であるが、併せて報告する。

67・223は肥前磁器である。67は瓶で、体部に２羽の鳥と草花、圏線、高台に圏線が巡り、砂目高台である。223は化粧道具の紅皿で、体部にしのぎがある。85は唐津で、朝鮮唐津の瓶（大徳利）である。SE04の南側（B4グリッド）からの出土で、口縁部を欠損するが、体部下半にかけて、鉄釉に白釉を上から掛ける装飾技法がみられる。時期は、17世紀前半と考えられる。144は瀬戸・美濃の碗である。213は把手及び注口付の行平鍋で、体部に飛鉋が施される。

217は土人形で、頭部を欠損する女性像、218は大黒天（人形）が陽刻された陶器の一部と考えられる。219は泥面子で、家紋の笹竜胆が押型される。

241は石製丸玉で、表面に赤彩の痕跡が残る。

246～248は寛永通宝で、246は古寛永、247・248は新寛永である。254・255は金属製品で、254は鉄地の表面に鍍金の施された小判形の飾り、255は簪である。

288は平面丸型の一木連歯下駄で、前歯と後歯が磨り減って草履下駄状を呈する。317は加工板である。318・319は木札で、318には焼印で「木町澁屋」、319の表裏面には墨書がある。320・321は曲物の蓋か底板である。321の表裏面は炭化する。362は削り出し丸木の箸である。363は筒か鞘、364～366は上水施設の継ぎ手である。

368・369は瓦で、368は越前系の丸瓦、369は軒桟瓦である。

87を除き、18世紀後半～19世紀中頃が主体と考えられる。

(2) 上層面（江戸時代末～近代）の出土遺物

上層遺構からは、背割水路SD01を中心に、統制磁器などの磁器、犬や鳥などの土製品、鉄製のコテ、寛永通宝と文久永宝、木製品、瓦などが出土した。

SD01（背割水路、第39図、図版20）

370～373は統制磁器である。370・371は碗で、370は高台内に「岐405」、371は体部に「岐1003」とある。371は見込みに花十字、区画内の扇と花が連続する。372は小皿で、高台内に「有46」、見込みに草がある。373は瓶で、高台内に「会19」、体部に花がある。374～377・380・381は磁器である。374は碗で、見込みに五弁花、体部に唐草がある。375・376は蛇の目高台の輪花皿で、375は見込みに笹と鋸歯文、牡丹、草花、体部に唐草、376は見込みに桔梗と竹、花、体部に牡丹、唐草がある。377は徳利で、体部に格子目の上に桜花と短冊「支那事変凱旋記念」がある。380・381は猪口で、380は見込みに桜花と「除隊記念」、381は見込みに「銘酒満泉」、体部に松葉などがある。378・379は九谷磁器の猪口で、高台内に「九谷」とある。378は見込みに菊花、体部に松葉と圏線、379は見込みに人面、体部に桜花と「不して帰る□□ぞ□□しき」とある。384は信楽系磁器の皿で、見込みに3条線の櫛目と2カ所目跡があり、油煙が付着することから灯明皿と考えられる。

385は統制磁器の人形で、背面に「京人56」とある。386～388は土製品で、386は鳥、387は犬、388は林檎である。

389～391は寛永通宝で、新寛永である。392は一銭貨で、明治21（1888）年の発行である。

397・398は瓦で、397は軒瓦、398は軒丸瓦である。

他に図化はしなかったが、石製とガラス製のビー玉状の玉が、大小合わせて数多く出土した。ビー玉もあると考えられるが、玉のほとんどは、小石とガラス片が、流水と敷石及び石積みとの摩擦によって、角が削れて丸くなったと考えられる。本水路で水流があったことを示す遺物と考えられる。

SX01（第39図、図版20）

394は鉄製のコテで、柄が直角に曲がる。

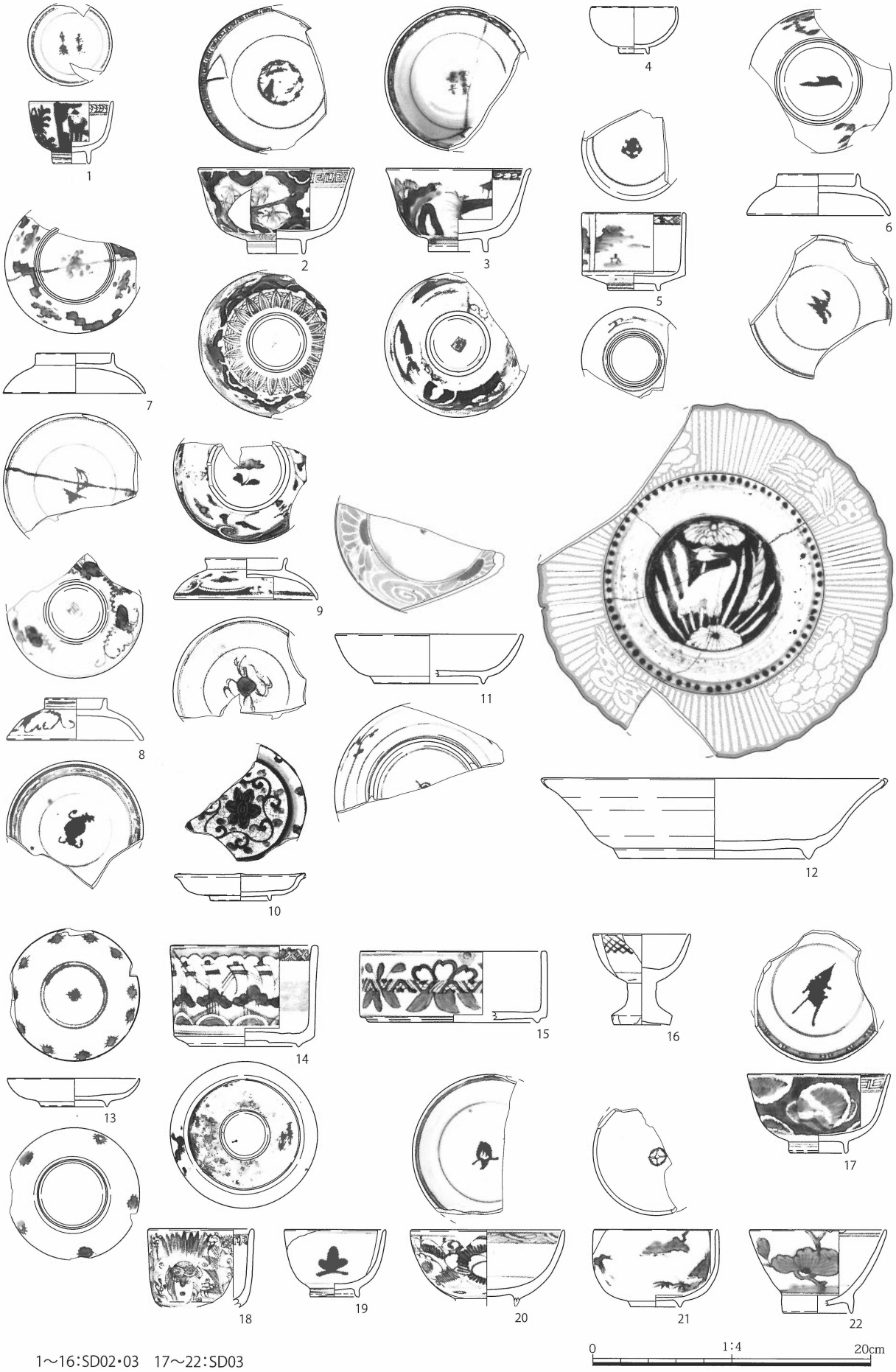
包含層出土遺物（第39図、図版20）

382・383・393・395・396はⅤ層（上層面遺物包含層）からの出土遺物である。

382・383は磁器の猪口である。382は高台に穿孔、体部に「八尾坂道 別れて 来れば 露か時雨か オハラ はらはらと」といった、越中おわら節の歌詞がある。特注品と考えられる。383は見込みに桜花と「除隊記念」とある。

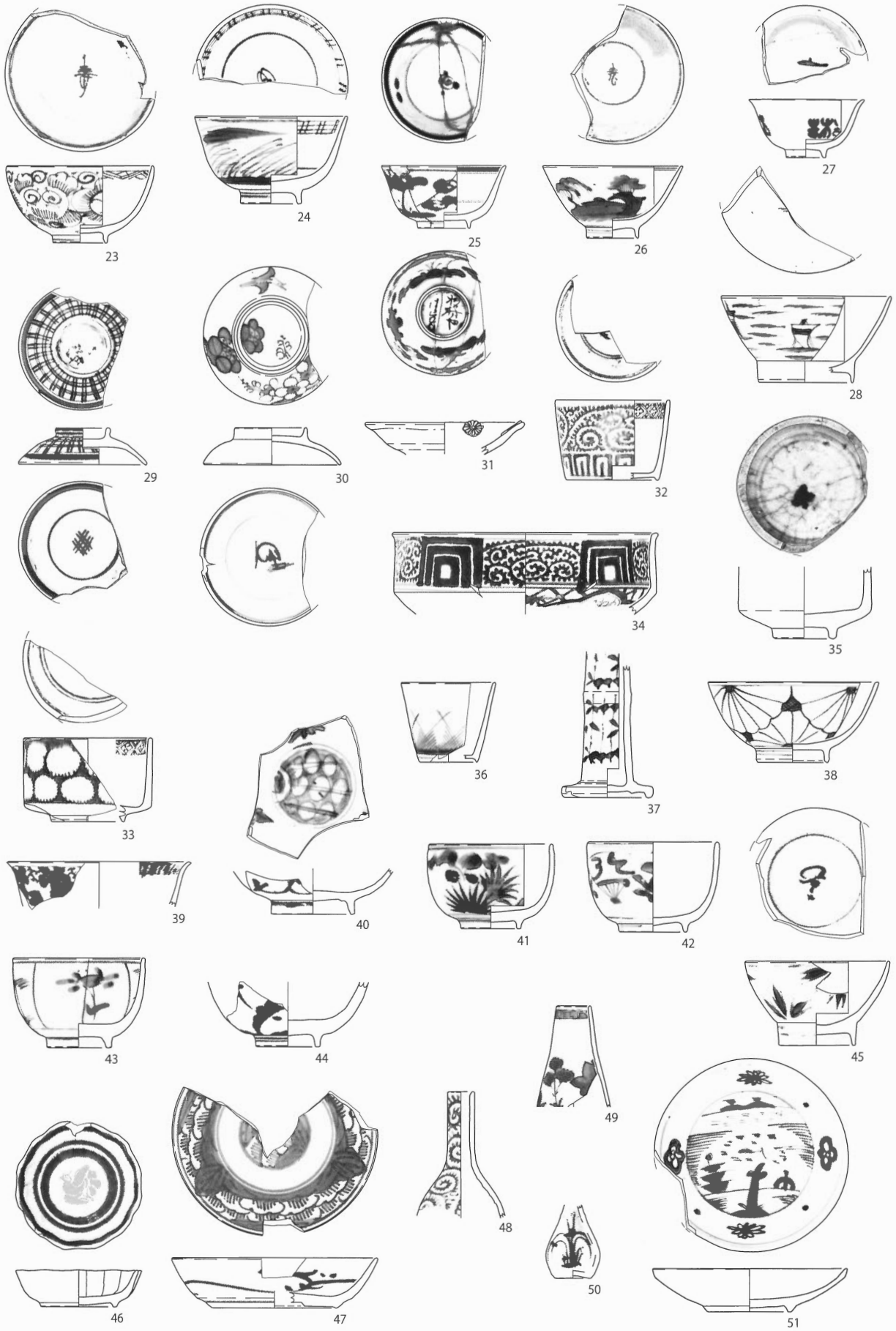
393は文久永宝である。

395・396は木製品で、395は小判状板、396は栓である。（基峰）



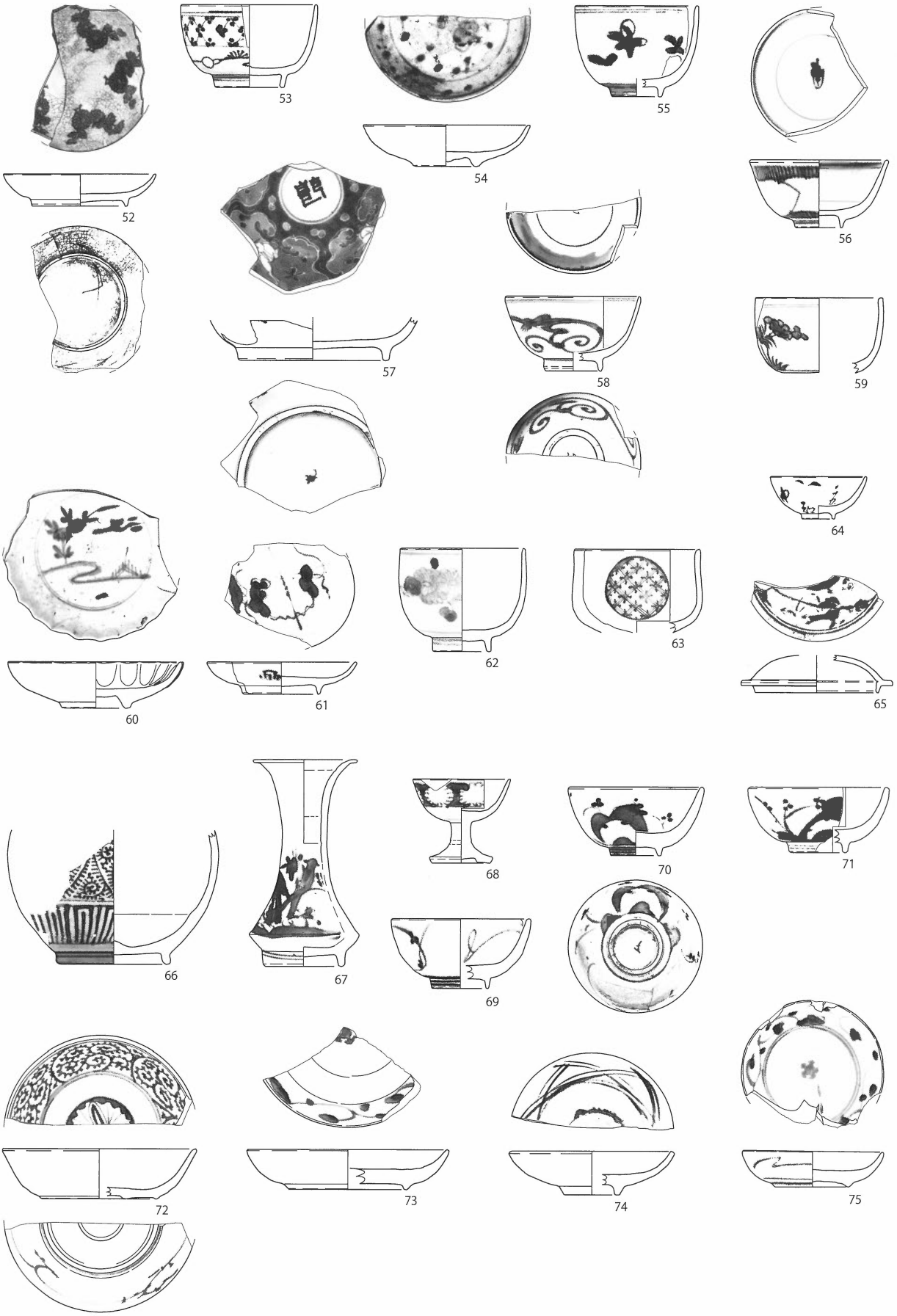
1～16:SD02・03　17～22:SD03

第20図　遺物実測図1［下層面：肥前磁器1～22］



23～37:SD03　38:SD03内上水施設　39・40:SE06　41:SK14
42・43:SK16　44・45:SK17　46～49:SK18　50:SK25　51:SK30

第21図　遺物実測図2［下層面：肥前磁器23～51］



52:SK30　53・54:SX03　55～61:SX07　62:SX09　63～66:SX10　67:包含層
68:SD02・03　69～75:SD03

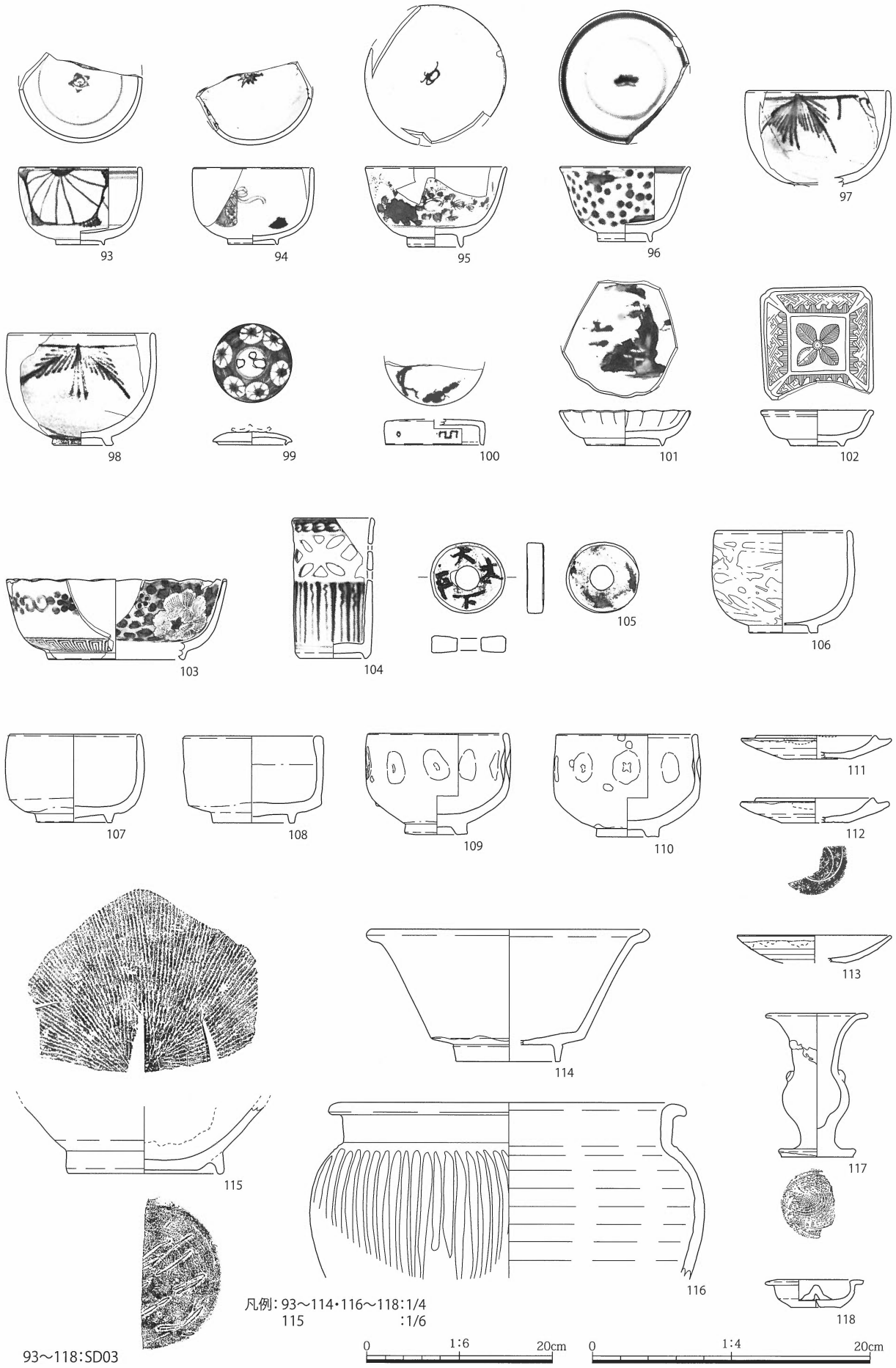
0　1:4　20cm

第22図　遺物実測図3［下層面：肥前磁器52～67、肥前系磁器68～75］

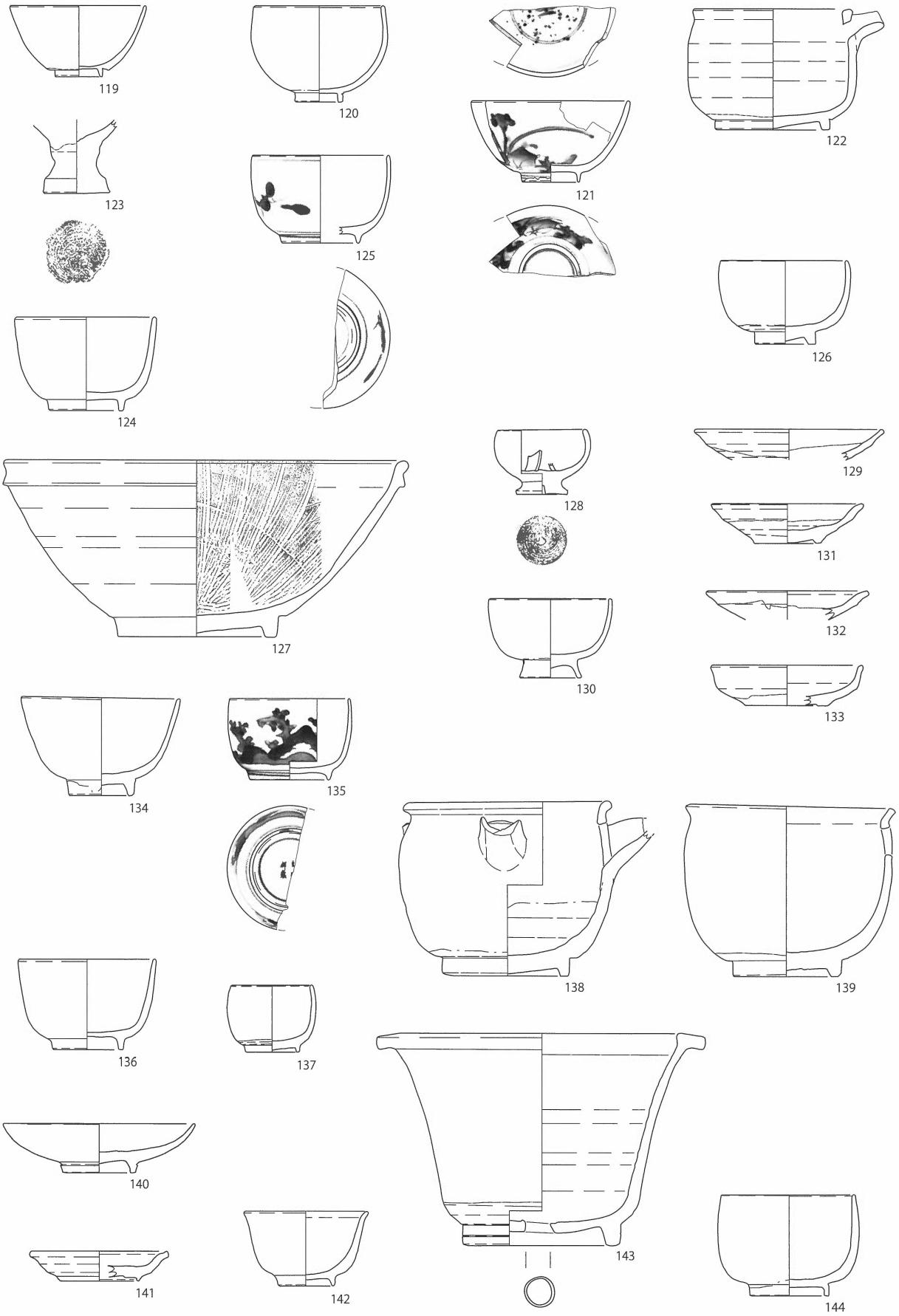
76:SK30　77～79・86～91:SD02・03
80～83:SX07　84:SX10　85:包含層　92:SD03

0　1:4　20cm

第23図　遺物実測図4［下層面：肥前系磁器76、唐津77～79・82～85、唐津系磁器80・81、瀬戸系磁器86～89・92、瀬戸・美濃90・91］



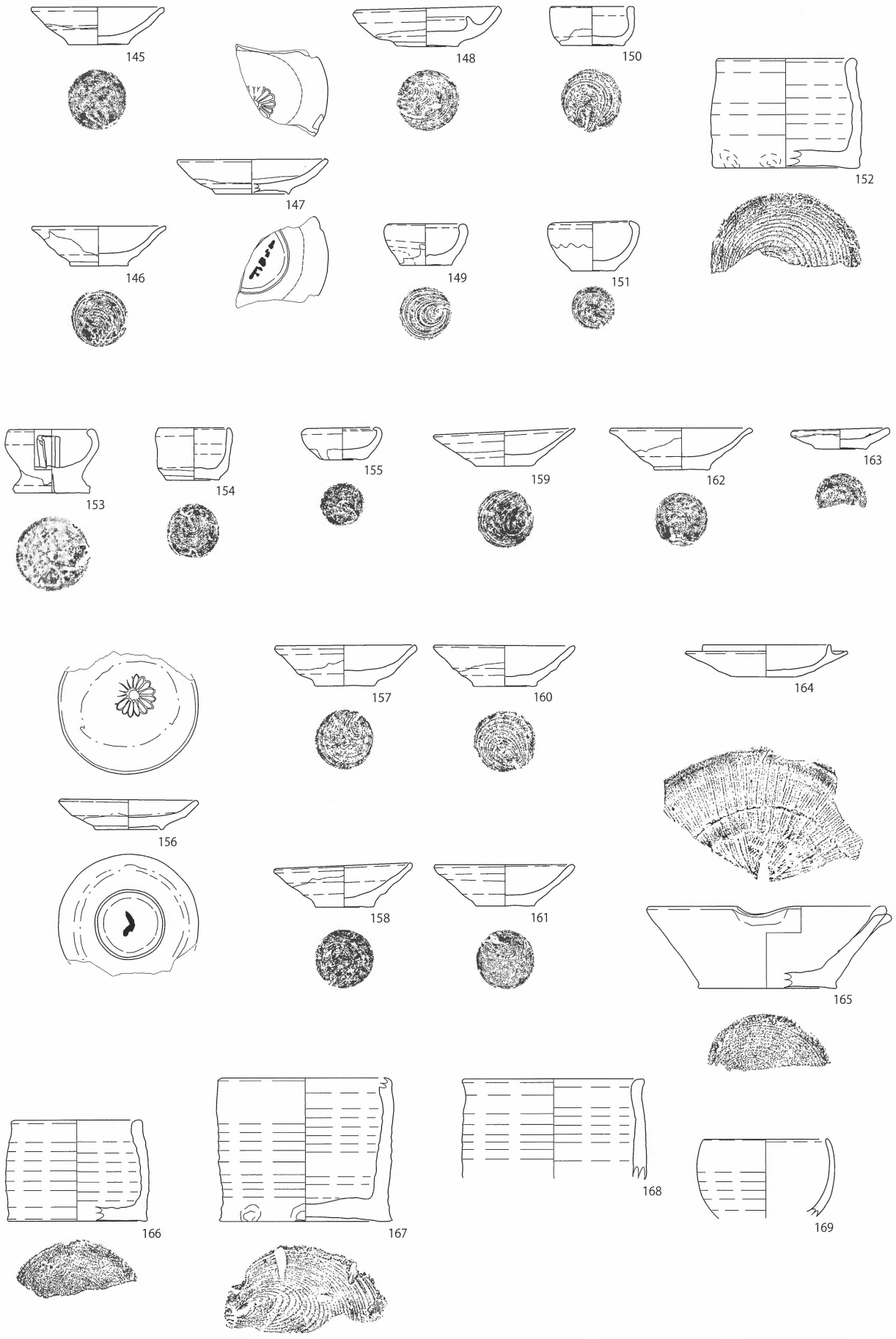
第24図　遺物実測図5［下層面：瀬戸系磁器93～105、瀬戸・美濃106～118］



119:SD03内上水施設　120～123:SE03　124:SK14　125～127:SK16
128:SK18　129:SK21　130:SK23　131～133:SK25　134:SK26
135～139:SK30　140:SX03　141:SX04　142:SX08　143:SX10　144:包含層

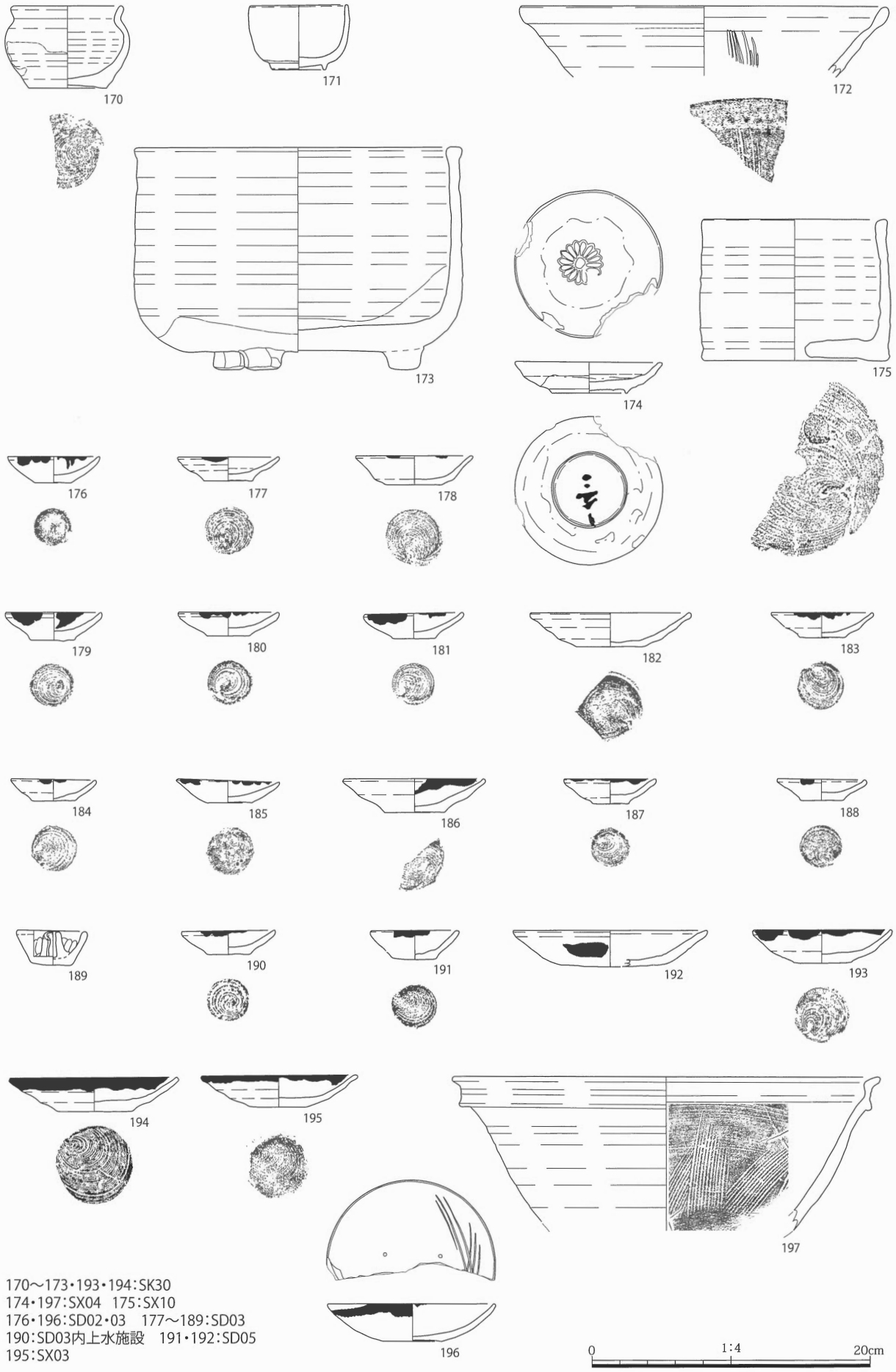
0　1:4　20cm

第25図　遺物実測図6［下層面：瀬戸系磁器119～121・124・125・134～136・140・142、瀬戸・美濃122・123・126～133・137～139・141・143・144］

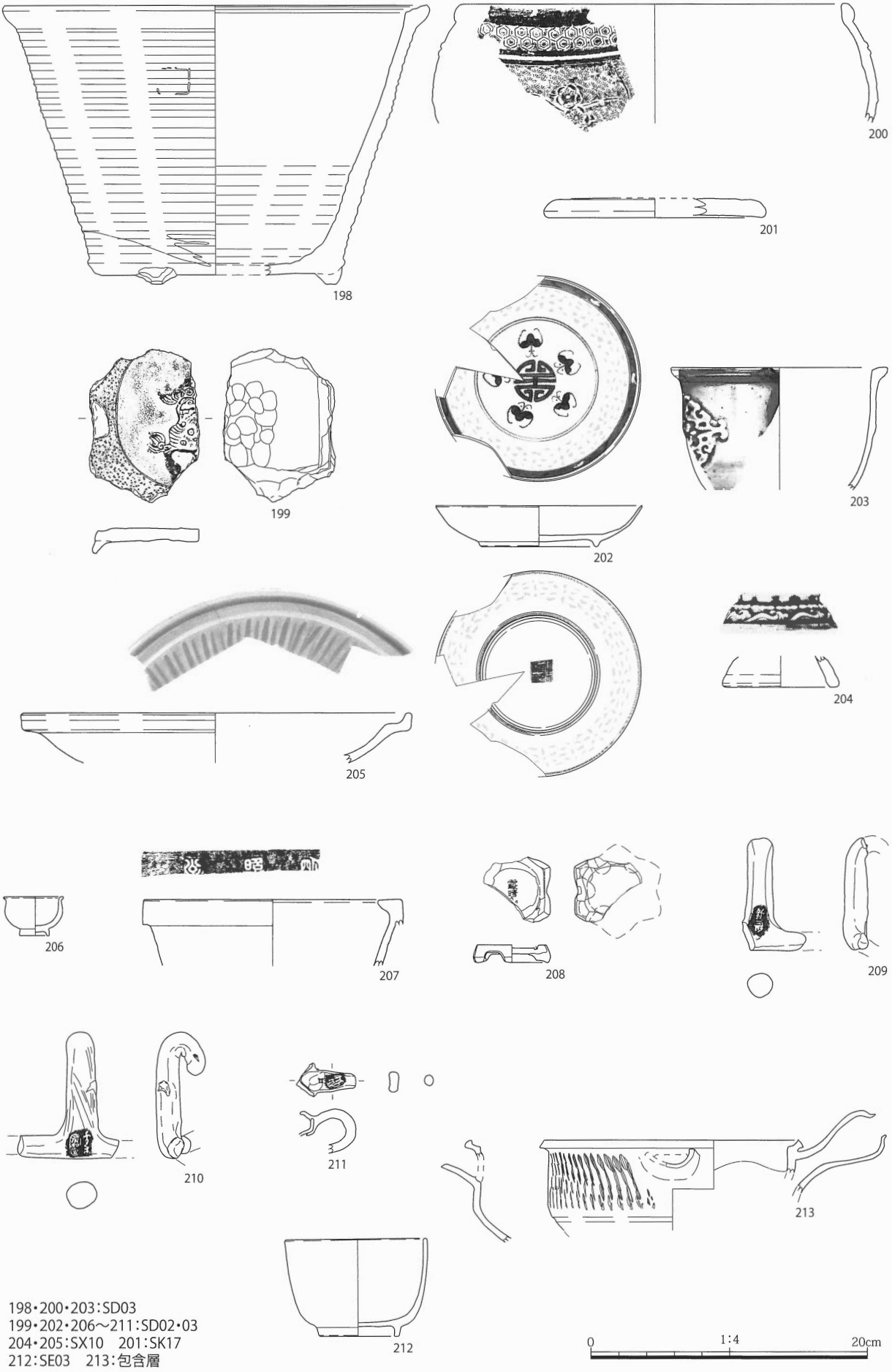


145～153:SD02・03　154～167:SD03　168:SK17　169:SK26

第26図　遺物実測図7［下層面：越中瀬戸145～169］

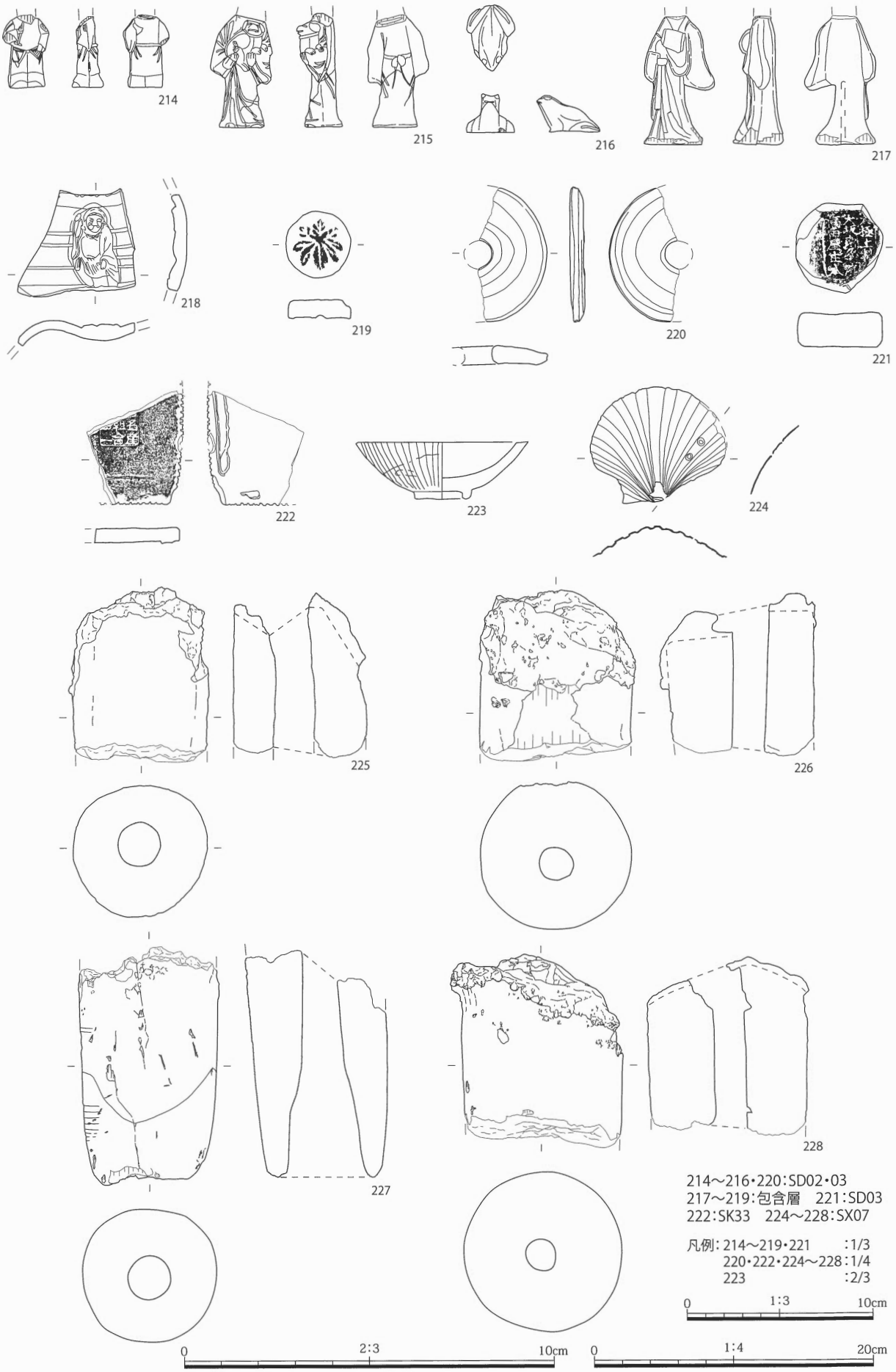


第27図　遺物実測図8［下層面：越中瀬戸170～175、土師器176～195、信楽系磁器196、丹波系陶器197］

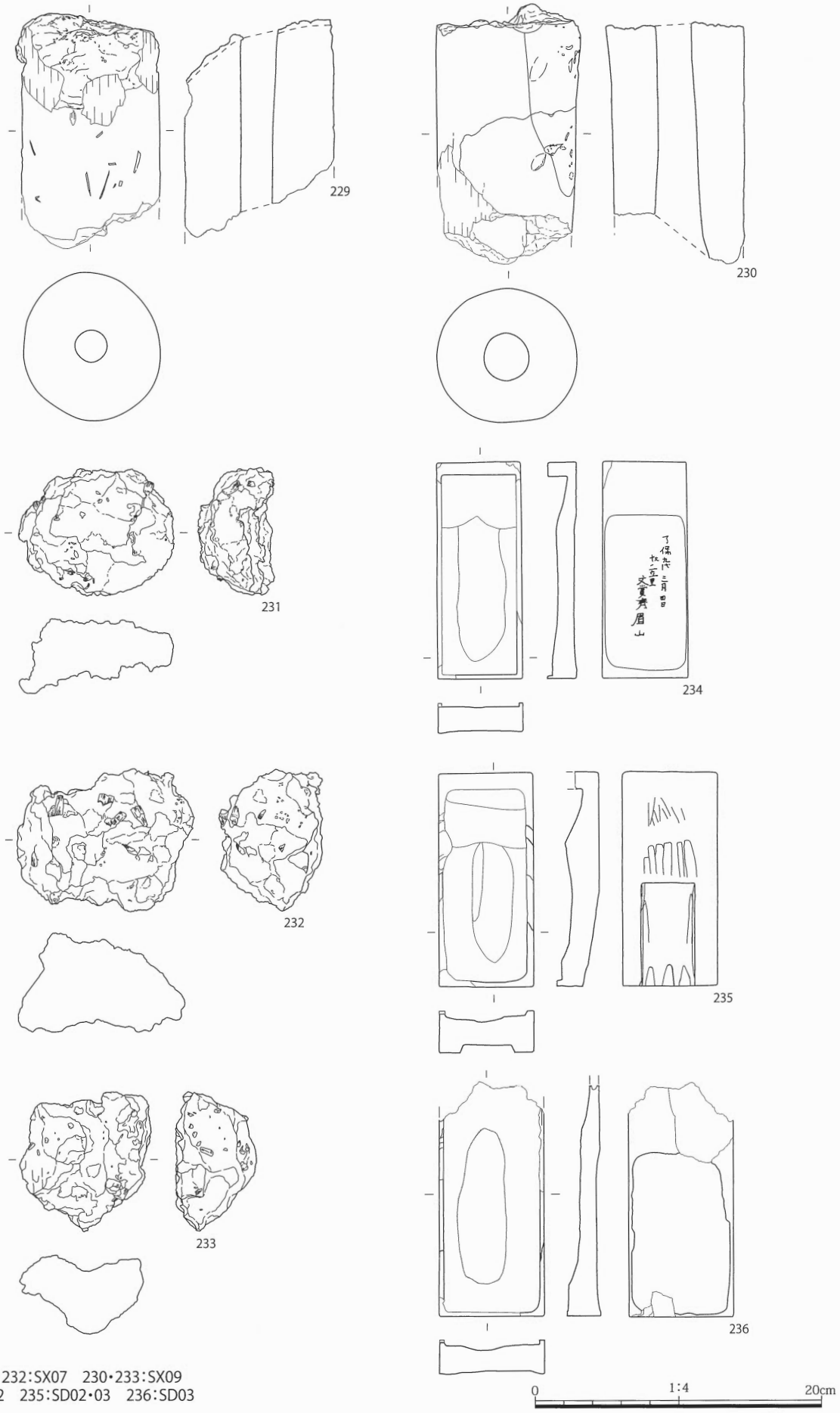


198・200・203:SD03
199・202・206～211:SD02・03
204・205:SX10　201:SK17
212:SE03　213:包含層

第28図　遺物実測図9［下層面：越前198、瓦質土器199～201、輸入陶磁器202～205、不明陶磁器206～213］

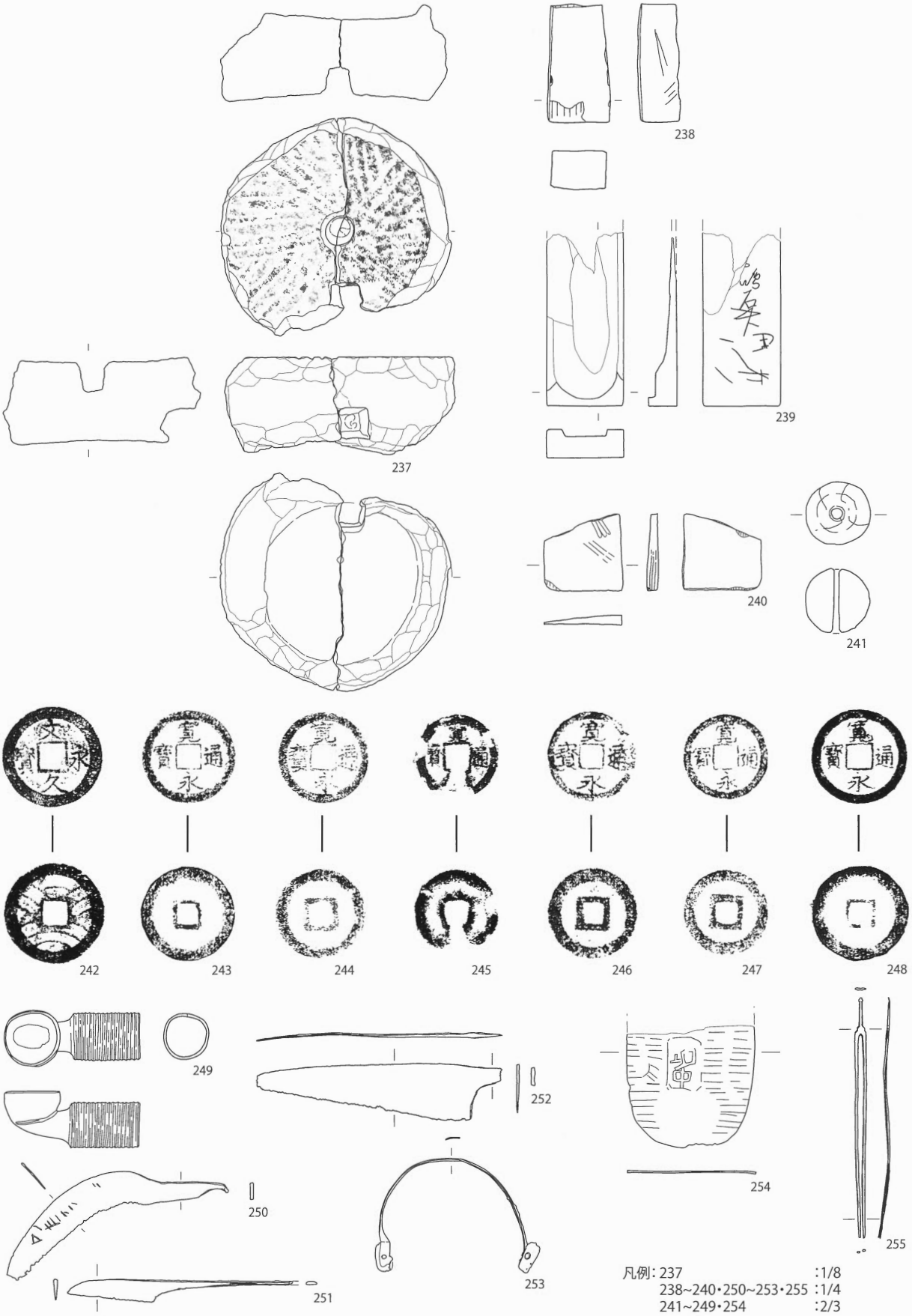


第29図　遺物実測図10［下層面：土人形214～218、泥面子219、土製品他220～224、羽口225～228］



229・231・232:SX07　230・233:SX09
234:SD02　235:SD02・03　236:SD03

第30図　遺物実測図11［下層面：羽口229・230、鉄滓231～233、石製品234～236］



237・243・251:SD03　238:SK13　239:SK18
240:SX10　241・246・254・255:包含層
242・249・250:SD02・03　244:SK29　245:SX03
247:試掘トレンチ　248:B区撹乱　252:SK10　253:SK26

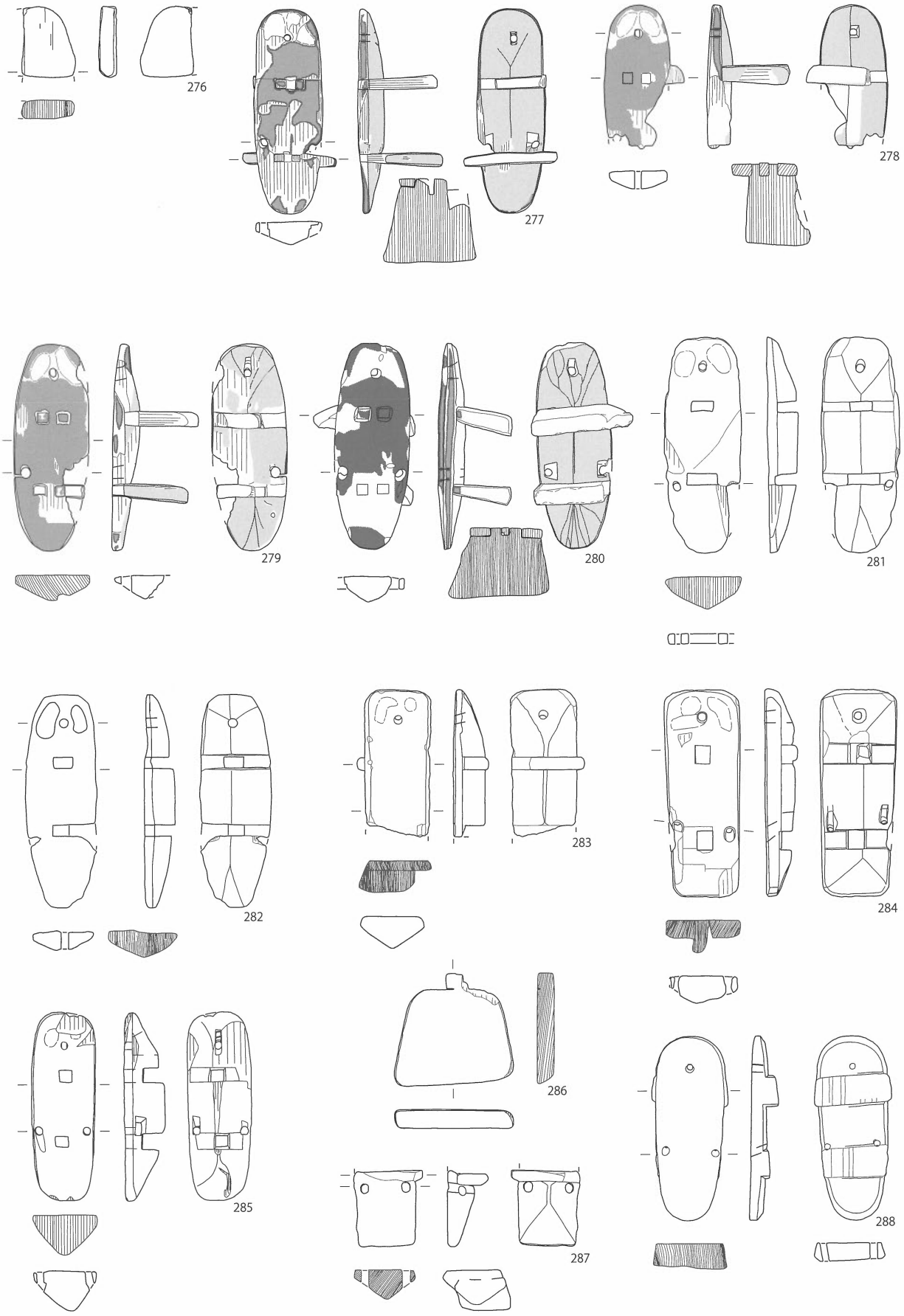
第31図　遺物実測図12［下層面：石製品237～241、銭貨242～248、煙管249、金属製品他250～255］

256～258:SD02　259:SD02・03　260・265～267:SD03
261:SK09　262:SK13　263:SK14　264:SX03
268:SD05　269:SE06　270:SK16　271・272:SK17
273～275:SK29

凡例:256~264:1/4
265~275:1/6

0　1:4　20cm　0　1:6　20cm

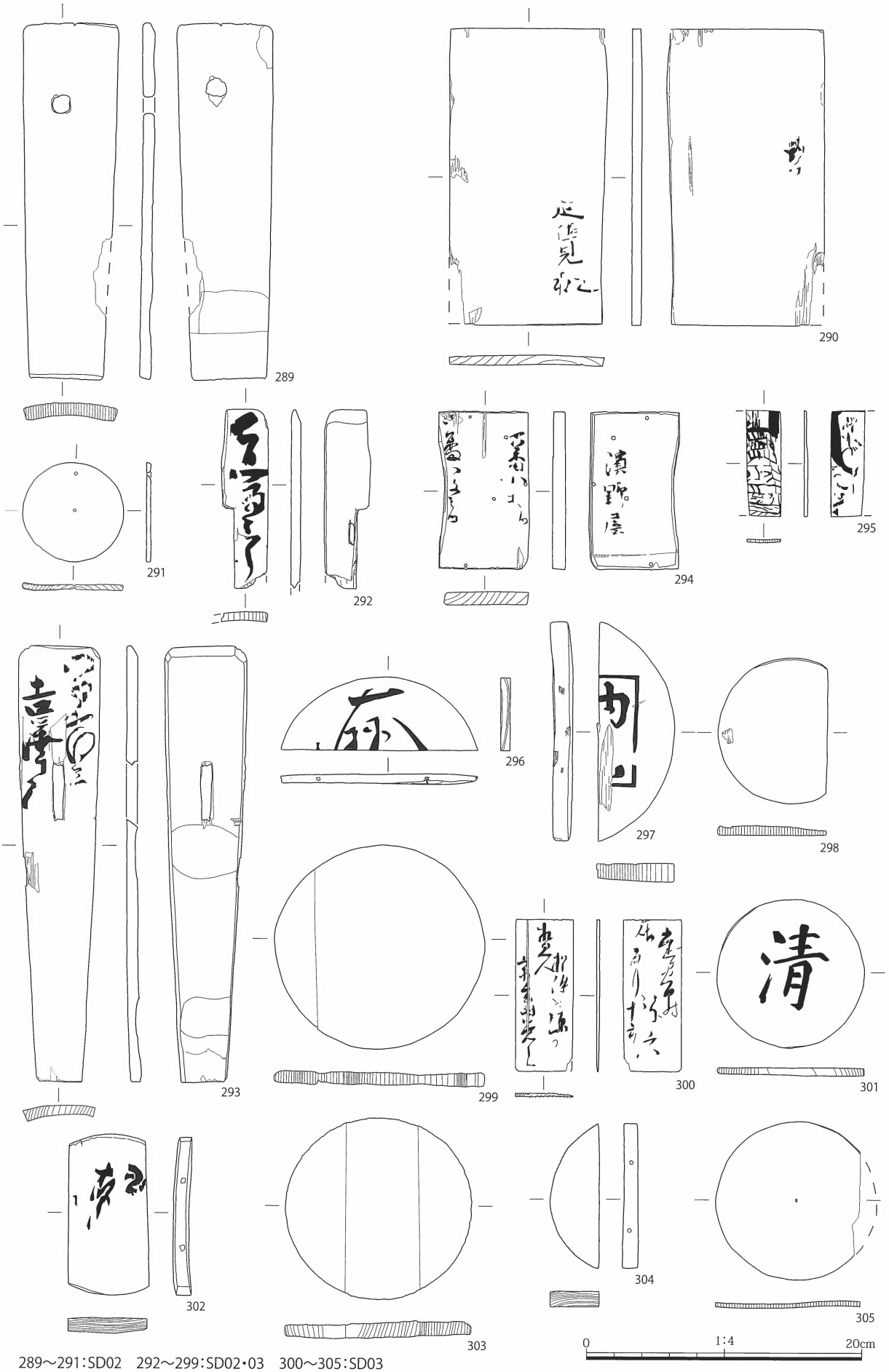
第32図　遺物実測図13［下層面：漆器256～264、下駄265～275］



276:SK29　277～282:SK30
283～286:SX03　287:SX10　288:試掘トレンチ

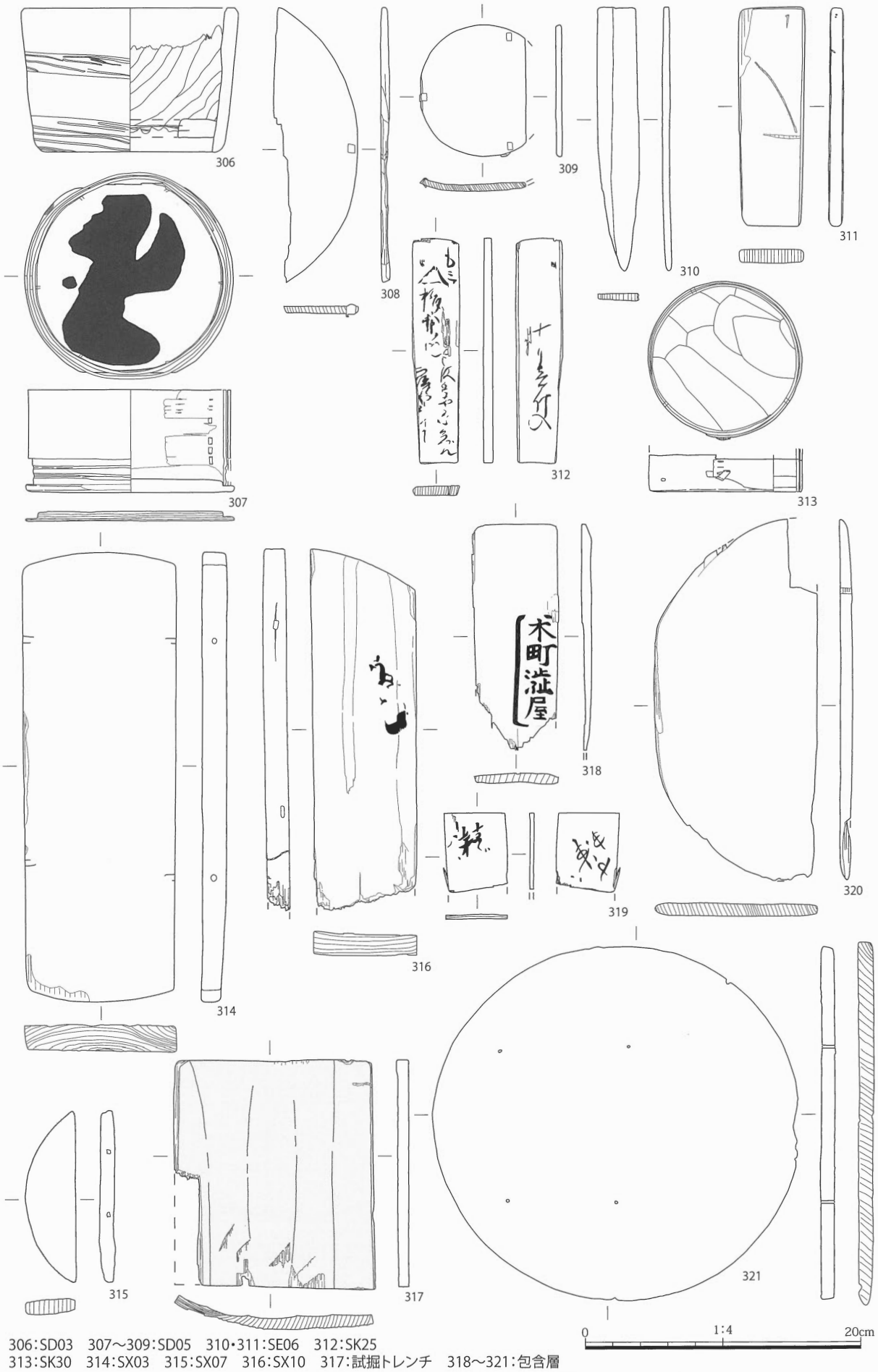
0　1:6　20cm

第33図　遺物実測図14［下層面：下駄276～288］



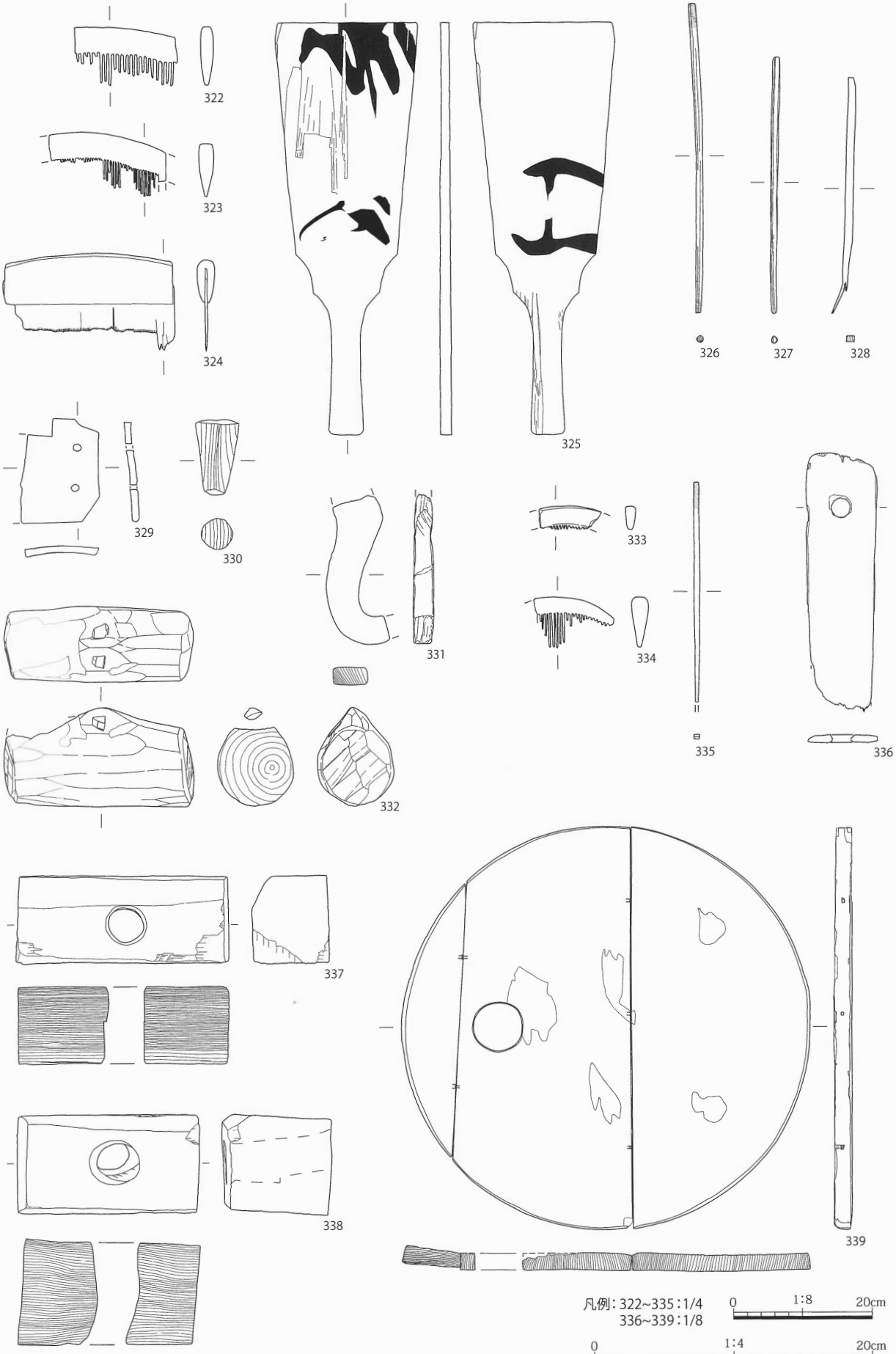
289～291:SD02　292～299:SD02・03　300～305:SD03

第34図　遺物実測図15［下層面：その他木製品289～305］



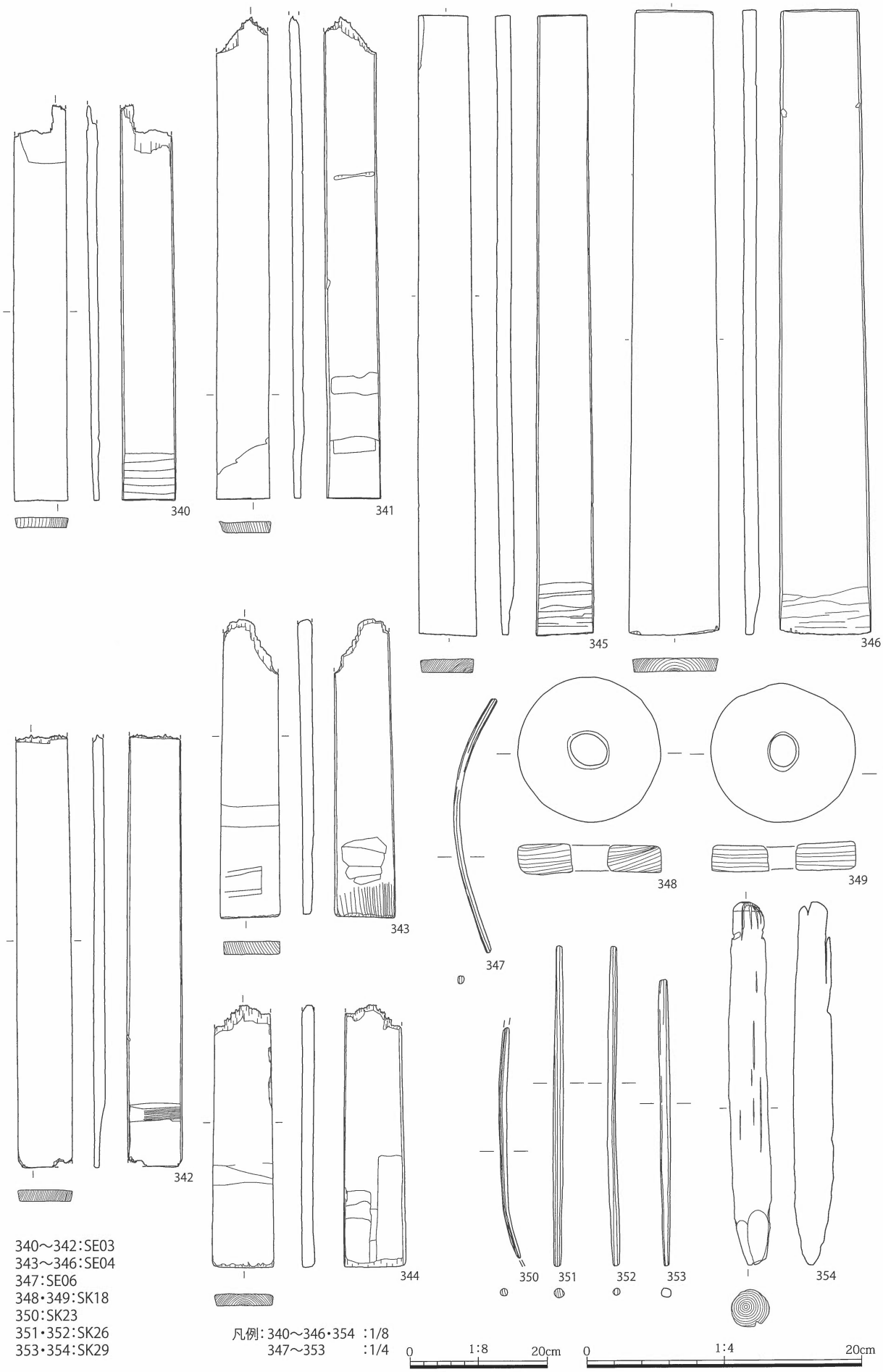
306:SD03　307～309:SD05　310・311:SE06　312:SK25
313:SK30　314:SX03　315:SX07　316:SX10　317:試掘トレンチ　318～321:包含層

第35図　遺物実測図16［下層面：その他木製品306～321］

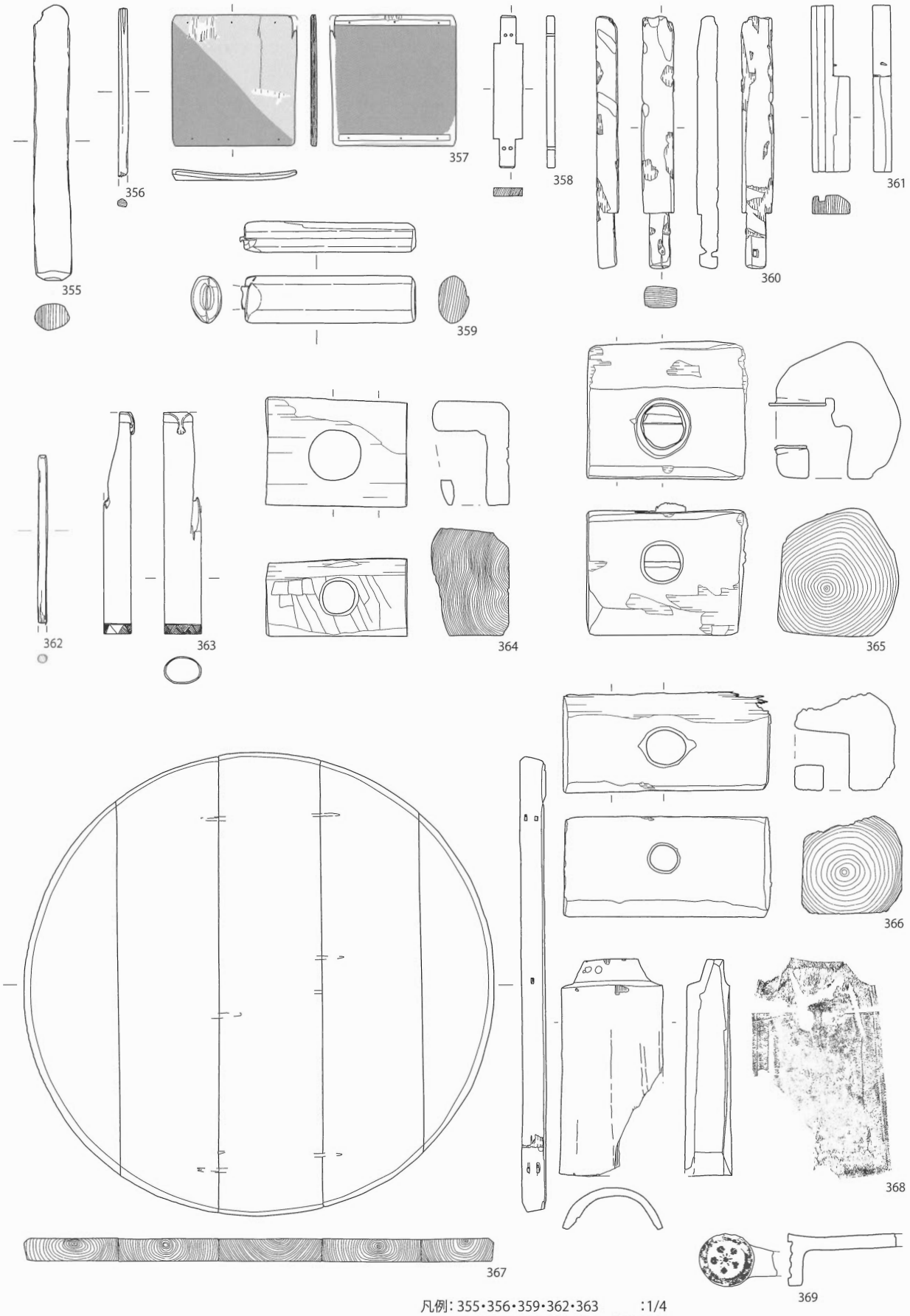


322～332：SD02・03　333～336：SD03　337・338：SD03内上水施設　339：SE03

第36図　遺物実測図17［下層面：その他木製品322～339］



第37図　遺物実測図18［下層面：その他木製品340～354］

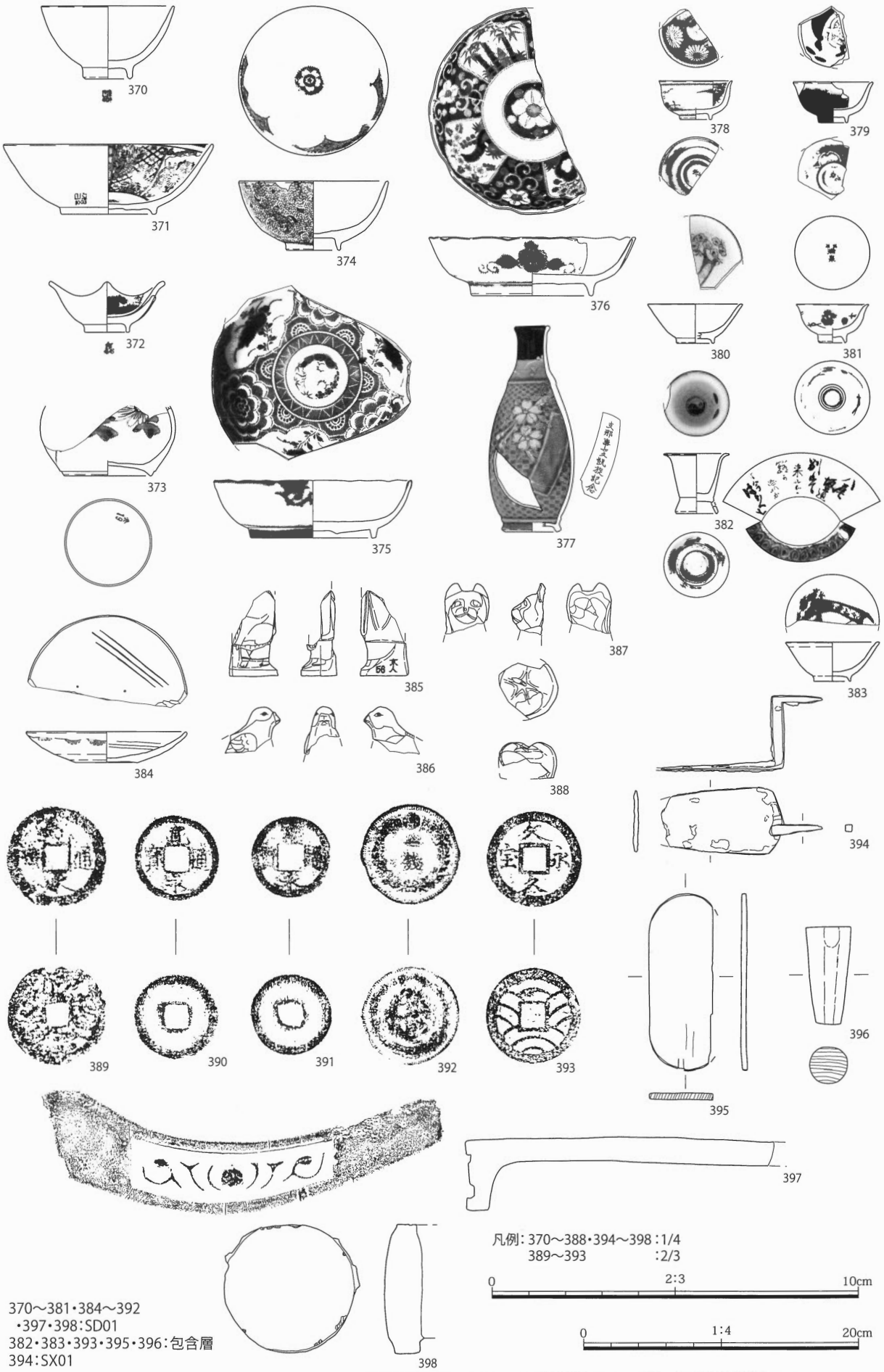


355:SK29　356:SK30　357・358:SX03
359:SX04　360・361:SX07
362～366・368・369:包含層　367:曲物底板

凡例: 355・356・359・362・363　:1/4
357・358・360・361・364～369 :1/8

0　1:8　20cm　0　1:4　20cm

第38図　遺物実測図19［下層面：その他木製品355～367、瓦368・369］



第39図　遺物実測図20［上層面：統制磁器370～373、九谷磁器378・379、信楽系磁器384、不明磁器374～377・380～383、土製品他385～388、銭貨389～393、金属製品394、木製品395・396、瓦397・398］

第1表　遺構一覧表

遺構番号	層位	地区	グリッド	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時代／時期	遺物／性格	図番号
SD02 背割水路	－	A区	A2～D2	東西方向	12.80	1.2～1.3	0.30	江戸／19c後半	肥前・瀬戸美濃・越中瀬戸・羽子板・土人形等 ／背割水路	第6図
SD03 背割水路	下層	A区	A2～E2	東西方向	18.20	1.5～1.9	0.5～0.9	江戸／ 19c前半以前～19c中頃	肥前・瀬戸美濃・越中瀬戸等 ／背割水路	第7・8図
SD03内 上水施設	下層	A区	A2	南北方向	3.95	0.19	－	江戸／ 19c前半～19c中頃	竹樋・木樋囲・継ぎ手角材等／上水施設	第9図
SD05	下層	A区	D2,D3,E2,E3	南北方向	5.58	1.28	0.59	江戸／18c後半～19c中頃	土師・下駄・曲物等／	第10図
SD06	下層	B区	F1,F2,G1,G2	南北方向	4.52	1.3～1.6	0.39	江戸/17c前半以前		第10図
SE03	下層	A区	A4	円形	0.60	0.58	0.52	江戸／18c後半～19c中頃	瀬戸・美濃／井戸	第10図
SE04	下層	A区	B4	円形	0.62	0.62	1.10	江戸／	／井戸	第10図
SE06	下層	A区	B3,C3	不整円形	2.92	2.85	0.95	江戸／17c	肥前・下駄・木札等／井戸	第11図
SK08	下層	A区	A3	(不整円形)	(1.32)	0.55	0.42	江戸／		第12図
SK09	下層	A区	A3	(不整長円形)	(1.14)	1.12	0.58	江戸／	漆椀／	第12図
SK10	下層	A区	A3	(不整円形)	1.04	(0.65)	0.30	江戸／	包丁／	第12図
SK13	下層	A区	B2,B3	楕円形	1.12	0.92	0.58	江戸／	漆椀・砥石／	第12図
SK14	下層	A区	B4,B5	不整円形	1.14	(0.82)	0.21	江戸／18c後半～19c中頃	肥前／	第12図
SK16	下層	A区	A3,A4,B3,B4	不整円形	1.90	1.25	0.40	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・下駄／	第12図
SK17	下層	A区	A3,B3	不整円形	1.70	1.50	0.42	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・越中瀬戸・瓦器・下駄等／ごみ穴か	第12図
SK18	下層	A区	B3	不整円形	1.45	1.25	0.25	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・瀬戸美濃／ごみ穴か	第12図
SK21	下層	A区	C4	不整長円形	3.25	1.82	0.44	江戸／18c後半以前	瀬戸美濃等／	第16図
SK22	下層	A区	C4	不整円形	0.85	0.82	0.17	江戸／		第12図
SK23	下層	A区	C3	不整長円形	1.35	0.75	0.21	江戸／18c後半～19c中頃	瀬戸美濃・箸等／	第13図
SK25	下層	A区	C3	不整長円形	1.19	0.75	0.35	江戸／18c後半～19c中頃	瀬戸美濃・木札／	第13図
SK26	下層	A区	C3	不整長方形	1.45	0.60	0.48	江戸／19c後半	越中瀬戸等／	第13図
SK27	下層	A区	C3,D3	不整楕円形	0.72	0.50	0.09	江戸／	／集石遺構状	第13図
SK29	下層	A区	D3	不整長方形	1.80	0.70	0.13	江戸／18c後半～19c中頃	下駄・箸等／ごみ穴	第13図
SK30	下層	A区	C4	不整長方形	1.50	1.01	0.38	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・下駄・曲物・箸等／ごみ穴	第13図
SK31	下層	A区	C3	不整楕円形	1.62	(1.10)	0.45	江戸／18c～		第11図
SK32	下層	A区	B4	不整方形	1.19	0.90	0.55	江戸／18c～		第11図
SK33	下層	B区	H2	不整長円形	(1.01)	0.85	0.37	江戸／18c後半以前		第13図
SX02	下層	A区	C2	不整楕円形	2.04	(0.48)	－	江戸／18c以前	／背割水路下面	－
SX03	下層	A区	A4,A5	(不整楕円形)	(2.62)	(2.00)	0.52	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・瀬戸系・土師・下駄等／ごみ穴か	第14図
SX04	下層	A区	A2,B2	(不整方形)	(2.00)	(1.71)	0.18	江戸／17c後半	越中瀬戸／	第14図
SX05	下層	A区	B2	(不整楕円形)	(2.22)	(1.50)	0.08	江戸／17c後半以前		第14図
SX07	下層	A区	D3	不整方形	4.00	3.40	0.55	江戸／17c前半～18c中頃	肥前・唐津・羽口・鉄滓等／小鍛冶	第15図
SX08	下層	A区	D3,D4	不整楕円形	2.22	1.92	0.63	江戸／18c後半～19c中頃		第15図
SX09	下層	A区	A2,A3	(不整方形)	(3.21)	(0.42)	0.12	江戸／17c後半以降	羽口／小鍛冶	第14図
SX10	下層	A区	B4,C4	不整双円形	(3.62)	1.64	0.60	江戸／18c後半～19c中頃	肥前・唐津等／火関連か	第16図
SP03	下層	A区	C3	不整円形	0.35	(0.29)	0.08	江戸／19c以前		第13図
SP04	下層	A区	C2	不整円形	0.20	0.18	0.18	江戸／		第16図
SP05	下層	A区	C3	不整楕円形	0.50	0.42	0.25	江戸／		第16図
SP06	下層	A区	C3	不整円形	0.32	0.21	0.24	江戸／		第16図
曲物底板	下層	A区	B4,C4	円形	0.69	0.69	0.03	江戸／		－
SD01 背割水路	上層	A区	A2～E2	東西方向	18.70	0.8～0.85	0.80	近代／	統制磁器等／背割水路	第18・19図
SE01	上層	A区	B4,B5	円形	0.74	0.70	－	近代以降／		－
SE02	上層	A区	C4	円形	0.70	0.65	－	近代以降／		－
SK01	上層	A区	A3,A4	不整楕円形	0.78	0.65	0.38	近代以降／		－
SK02	上層	A区	D4	不整方形	0.74	0.58	0.18	幕末～近代／		－
SK03	上層	A区	D4,E4	不整長円形	1.67	0.59	0.18	幕末～近代／		－
SK04	上層	A区	E4	(不整楕円形)	(0.80)	(0.42)	0.05	幕末～近代／		－
SK05	上層	A区	B4	不整長円形	0.80	0.75	0.55	幕末～近代／		－
SK06	上層	A区	B4	不整円形	0.55	0.55	0.25	幕末～近代／		－
SX01	上層	A区	A4	不整長円形	(2.20)	1.30	0.28	幕末～近代／		－
SP01	上層	A区	B3,B4	不整円形	0.25	0.21	0.23	近代以降／		－
SP02	上層	A区	B4	不整円形	0.32	0.29	0.25	幕末～近代／		－
硬化面	上層	A区	A3,A4,B3,B4	不整半方形	4.15	1.94	－	近代以降／		－
建物基礎	上層	A区	A2～D2, A3～C3	東西方向	(15.58)	4.88	－	近代以降／		－
板材	上層	A区	A4,A5	南北方向	(3.20)	0.15	－	近代以降／		－
石列	上層	A区	A3	南北方向	2.70	0.50	－	近代以降／		－

※遺構番号が欠番のものについては、調査時に番号を付したが遺構ではなかったため除外した。

第2表　下層面：陶磁器・土器遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
1	SD02・03	肥前磁器 碗	6.0	2.4	4.5	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:永楽年製　体部:草花・山水画 透明釉	19c～
2	SD02・03	肥前磁器 碗	(10.9)	3.9	6.2	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:雷文　体部:繋ぎ松竹梅 透明釉　焼き継ぎ	
3	SD02・03	肥前磁器 碗	10.3	4.3	6.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:富貴長春・渦状文　体部:山水画 透明釉　焼き継ぎ	18c～
4	SD02・03	肥前磁器 小碗	(6.1)	2.1	3.4	ロクロ成型 削り出し高台	緻密	灰白色	高台:露胎 透明釉　半球形	
5	SD02・03	肥前磁器 筒形碗	(7.4)	3.6	5.6	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:五弁花・四方襷・圏線　体部:山水画　底部:松葉・圏線 古伊万里	18c～
6	SD02・03	肥前磁器 蓋	(10.1)	5.6	2.9	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:草・圏線　体部:草　つまみ内:鳥 透明釉　古伊万里	18c～
7	SD02・03	肥前磁器 蓋	10.4	5.6	2.9	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:鳥　体部:花弁　つまみ内:花弁 透明釉　焼き継ぎ　古伊万里	18c～
8	SD02・03	肥前磁器 蓋	9.6	4.3	3.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:草花　体部:草花　つまみ内:文字 透明釉	
9	SD02・03	肥前磁器 蓋	(10.2)	5.8	3.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:圏線　体部:花弁　つまみ内:花弁 透明釉	19c～
10	SD02・03	肥前磁器 皿	(9.1)	4.1	2.0	付け高台	緻密	灰白色	見込み:六弁花・花唐草 透明釉　輪花皿	19c～
11	SD02・03	肥前磁器 皿	(13.4)	(7.8)	3.6	ロクロナデ 付け高台	緻密	灰白色	見込み:五弁花・半菊花・渦・圏線　体部:草・圏線　高台内:文字・圏線 透明釉	
12	SD02・03	肥前磁器 皿	24.3	13.6	5.8	型打成型 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:蓮鷺・染付丸、陽刻牡丹・蝶、しのぎ　縁:口紅　高台内:目跡 透明釉　輪花皿　古伊万里	18c中
13	SD02・03	肥前磁器 皿	9.5	4.7	2.05	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:花・圏線　体部:花 透明釉	
14	SD02・03	肥前磁器 鉢	10.0	7.7	7.3	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:四方襷　体部:帆・波　高台内:文字 向付　透明釉　焼き継ぎ　古伊万里	18c～
15	SD02・03	肥前磁器 鉢	(13.2)	(11.9)	5.15	ロクロナデ 削り出し高台	緻密 黒色粒含む	灰白色	体部:草花 透明釉	19c～
16	SD02・03	肥前磁器 仏飯器	(6.9)	4.0	6.5	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:格子　底部:露胎 透明釉　古伊万里	18c～
17	SD03	肥前磁器 碗	(10.0)	4.0	5.7	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:寿字・雷文　体部:繋ぎ蓮弁 透明釉　古伊万里	18c～
18	SD03	肥前磁器 碗	(7.3)	－	(5.6)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:雷文　体部:人面・松・草 小碗か向付　透明釉　古伊万里	18c～
19	SD03	肥前磁器 碗	(7.2)	(3.4)	4.9	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:松・圏線 透明釉	19c～
20	SD03	肥前磁器 碗	(10.8)	－	(5.1)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:巻貝(宝貝)・四方襷　体部:唐花 透明釉	
21	SD03	肥前磁器 碗	(8.6)	(3.4)	5.6	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:十字花　体部:鶴・松 半球形　透明釉　古伊万里	18c～
22	SD03	肥前磁器 碗	(9.8)	5.0	6.0	ロクロナデ 付け高台	緻密	灰白色	見込み:圏線　体部:松・草花 広東碗　透明釉　古伊万里	18c～
23	SD03	肥前磁器 碗	10.6	4.0	5.5	ロクロ成型 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:寿字・四方襷・圏線　体部:唐花　高台:圏線 透明釉　古伊万里	18c～
24	SD03	肥前磁器 碗	(11.0)	(4.4)	6.4	ロクロ成型 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:格子・圏線　体部:草・圏線　高台:圏線 透明釉	
25	SD03	肥前磁器 碗	9.0	3.7	4.55	ロクロ成型 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:宝・圏線　体部:草花・圏線　高台内:朱書きで「松村や□□□」 口縁外反　透明釉　焼き継ぎ	
26	SD03	肥前磁器 碗	10.1	3.6	5.25	ロクロ成型 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:寿字・圏線　体部:山水・柳　高台:圏線 透明釉　古伊万里	18c～
27	SD03	肥前磁器 碗	(8.3)	2.8	4.2	ロクロナデ	緻密	灰白色	見込み:魚　体部:文字 口縁外反　透明釉	
28	SD03	肥前磁器 碗	12.0	6.4	6.25	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:船・波 広東碗　透明釉　古伊万里	18c～
29	SD03	肥前磁器 蓋	(9.2)	3.8	2.65	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:圏線・格子　体部:格子 透明釉　古伊万里	18c～
30	SD03	肥前磁器 蓋	9.8	5.1	2.7	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:鷺　体部:鳥・桜・紫陽花　つまみ内:桜・紫陽花 広東碗の蓋　透明釉　古伊万里	18c～
31	SD03	肥前磁器 皿	(11.2)	－	(2.3)	ロクロナデ・ケズリ	緻密	灰白色	見込み:口縁に貼付菊花(十四弁) 透明釉	
32	SD03	肥前磁器 鉢	(8.2)	(6.6)	5.8	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:四方襷　体部:蛸唐草 向付　透明釉　古伊万里	18c～
33	SD03	肥前磁器 鉢	(9.0)	(5.1)	6.05	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:四方襷　体部:菊花 向付　透明釉　古伊万里	18c～
34	SD03	肥前磁器 鉢	(18.8)	－	(5.9)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:蛸唐草　体部:蛸唐草 源氏香文様　透明釉　古伊万里	18c～
35	SD03	肥前磁器 鉢	－	3.4	(4.2)	ロクロナデ 砂目高台	緻密	灰白色	見込み:素地染付花・圏線 透明釉　初期伊万里	17c
36	SD03	肥前磁器 猪口	(6.7)	(4.1)	5.75	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:斜格子・薄・圏線 透明釉	
37	SD03	肥前磁器 線香立	－	6.2	(9.5)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:笹 透明釉　古伊万里	18c～
38	SD03内 上水施設	肥前磁器 碗	(12.0)	(5.0)	5.8	ロクロナデ 付け高台	緻密	灰白色	体部:菊花　高台:圏線 透明釉　初期伊万里	17c

挿図番号	遺構番号	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
39	SE06	肥前磁器 碗	(13.0)	−	(3.3)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:斜線　体部:草花 透明釉　初期伊万里	17c
40	SE06	肥前磁器 皿	−	5.5	(3.3)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:花・丸に花弁状の文様　体部:草花　高台:圏線 透明釉　初期伊万里	17c前
41	SK14	肥前磁器 碗	(8.7)	3.8	6.1	ロクロナデ 削りだし高台	緻密	灰白色	体部:草花・圏線 向付　透明釉　古伊万里	18c～
42	SK16	肥前磁器 碗	(9.3)	4.6	6.5	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:扇・宝尽くし 透明釉　初期伊万里	17c
43	SK16	肥前磁器 碗	9.4	4.6	6.45	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:花弁 透明釉　古伊万里	18c～
44	SK17	肥前磁器 碗	−	4.0	(4.0)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:草花　高台:圏線 透明釉　古伊万里	18c～
45	SK17	肥前磁器 碗	10.2	5.4	6.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:文字・圏線　体部:笹　高台:圏線 向付　透明釉	
46	SK18	肥前磁器 皿	8.8	5.2	2.65	型打ち成形 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:染付・鳥陽刻 輪花皿　透明釉	
47	SK18	肥前磁器 皿	14.7	8.8	3.6	ロクロナデ 蛇の目高台	緻密	灰白色	見込み:草花　体部:樹木か くらわんか手　透明釉	
48	SK18	肥前磁器 瓶	1.7	−	(9.1)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	口縁部～体部:蛸唐草 透明釉　古伊万里	18c～
49	SK18	肥前磁器 瓶	2.4	−	(7.3)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	口縁部:雷文　体部:花 透明釉	
50	SK25	肥前磁器 瓶	−	2.6	(5.3)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:蘭 透明釉	
51	SK30	肥前磁器 皿	13.9	6.0	3.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:菊花流水 透明釉　初期伊万里	17c
52	SK30	肥前磁器 皿	(11.0)	6.8	2.3	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:菊花　体部:松葉 透明釉　古伊万里	18c～
53	SX03	肥前磁器 碗	(9.7)	(5.0)	6.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:花弁・圏線　高台:圏線 透明釉	
54	SX03	肥前磁器 皿	(11.8)	(4.4)	3.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:花弁・圏線 透明釉　初期伊万里	17c後
55	SX07	肥前磁器 碗	(8.7)	(3.5)	6.6	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:蝶・草花・圏線 透明釉　古伊万里	18c～
56	SX07	肥前磁器 碗	(9.8)	3.2	4.9	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:文字・圏線　体部:縦線・草　高台:圏線 透明釉　古伊万里	18c～
57	SX07	肥前磁器 碗	−	(10.5)	(2.6)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:文字・波・兎　高台内:文字 透明釉　古伊万里	18c～
58	SX07	肥前磁器 碗	(9.7)	(3.8)	5.4	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:文字・圏線　体部:唐草　高台内:文字 透明釉　古伊万里	18c～
59	SX07	肥前磁器 碗	(9.0)	−	(5.5)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:菊・圏線 透明釉　古伊万里	18c～
60	SX07	肥前磁器 皿	(12.7)	4.8	3.35	型打ち成形 糸切細工	緻密	灰白色	見込み:草花流水 輪花皿　透明釉　初期伊万里	17c前
61	SX07	肥前磁器 皿	(10.6)	5.3	2.3	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:草花　体部:草 透明釉　古伊万里	18c～
62	SX09	肥前磁器 碗	(8.7)	(3.8)	7.45	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:菊花・圏線 透明釉	
63	SX10	肥前磁器 碗	(9.0)	−	(6.0)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:丸に格子状 透明釉	
64	SX10	肥前磁器 碗	(6.8)	(2.2)	3.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:草・文字か 透明釉	
65	SX10	肥前磁器 蓋	(10.8)	−	(2.7)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:草花・圏線 透明釉　焼き継ぎ	
66	SX10	肥前磁器 瓶	−	8.2	(9.7)	ロクロナデ 付け高台	密	灰白色 N8/0	体部:蛸唐草・縦縞・圏線　高台:圏線 透明釉	
67	包含層	肥前磁器 瓶	(7.2)	5.4	14.9	ロクロナデ 砂目高台	緻密	灰白色	体部:鳥・草花・圏線　高台:圏線 透明釉　古伊万里	
68	SD02・03	肥前系磁器 仏飯器	(6.8)	4.1	6.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:菊弁 透明釉	
69	SD03	肥前系磁器 碗	(9.8)	(3.8)	5.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:砂目跡　体部:草花　高台:圏線 くらわんか手　透明釉	
70	SD03	肥前系磁器 碗	9.6	3.6	4.95	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:重ね焼き痕　体部:草花　高台:圏線　高台内:文字 くらわんか手　透明釉	19c
71	SD03	肥前系磁器 碗	(9.8)	(3.8)	4.7	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:草花　高台:圏線 くらわんか手　透明釉	
72	SD03	肥前系磁器 皿	(14.0)	(8.4)	3.65	ロクロナデ 蛇の目高台	緻密	灰白色	見込み:蛸唐草・圏線・花　体部:繋ぎ松葉・圏線 くらわんか手　透明釉	
73	SD03	肥前系磁器 皿	(14.4)	(8.4)	2.9	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:花弁・花・唐草 くらわんか手　透明釉	19c
74	SD03	肥前系磁器 皿	11.6	4.0	3.2	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:草・蛇の目痕 くらわんか手　透明釉	
75	SD03	肥前系磁器 皿	10.0	5.3	2.6	ロクロ成型 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:五弁花・花・唐草・圏線　体部:草・圏線　高台:圏線 くらわんか手	19c
76	SK30	肥前系磁器 皿	(14.0)	(8.4)	2.8	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:花・圏線 透明釉	
77	SD02・03	唐津 鉢	(28.3)	−	(7.6)	ロクロナデ	密	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	見込み:白泥波状 透明釉　古武雄	18c～19c

挿図番号	遺構番号	種類 器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
78	SD02・03	唐津 鉢	−	(10.4)	(4.65)	ロクロケズリ 削り出し高台	密	赤褐色 10R4/3	見込み:白泥渦巻状・波状・重ね焼き痕 古武雄	18c〜19c
79	SD02・03	唐津 壺	(13.1)	−	(10.5)	ロクロナデ	密	にぶい赤褐色 2.5YR5/4		
80	SX07	唐津系磁器 碗	10.7	5.2	7.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:丸に花弁・圏線 透明釉	17c後
81	SX07	唐津系磁器 碗	(10.2)	3.9	5.2	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰オリーブ色 5Y6/2	体部:樹木と山か 透明釉	17c
82	SX07	唐津 灯明皿	(10.8)	(4.3)	2.6	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密	灰黄色 2.5Y6/1	鉄釉　焼成不良	17c
83	SX07	唐津 片口鉢	24.0	9.6	11.3	ロクロケズリ 付け高台	密 白色粒含む	明赤褐色 2.5YR5/6	見込み:白泥渦巻き状　体部:輪状の白化粧 鉄釉　古武雄	17c後
84	SX10	唐津 鉢	(33.2)	−	(5.15)	ロクロナデ	密	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	見込み:白泥波状 古武雄	18c〜19c
85	包含層	唐津 瓶(大徳利)	−	9.5	(21.3)	タタキ・コテ 底部未調整	密	赤灰色 2.5YR5/1	頸部〜体部:叩き成形　底部:未調整 朝鮮唐津　鉄釉の上に白釉	17c前
86	SD02・03	瀬戸系磁器 碗	10.3	3.6	5.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:四方襷　体部:縦線・如意頭　高台:圏線 透明釉	
87	SD02・03	瀬戸系磁器 皿	13.4	5.8	4.5	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み: 山水・雷文　体部: 家屋に唐草と雷文　高台:圏線 辰砂か鉄絵　透明釉　焼き継ぎ	19c〜
88	SD02・03	瀬戸系磁器 皿	(13.3)	(8.5)	4.05	ロクロナデ 付け高台	緻密	灰白色	見込み:草花　体部:松葉 くらわんか手　透明釉	
89	SD02・03	瀬戸系磁器 仏飯器	(7.3)	3.9	6.2	ロクロナデ	緻密	灰白色	体部:半菊花　底部:露胎 透明釉	
90	SD02・03	瀬戸・美濃 拳骨碗	(10.1)	5.0	7.2	ロクロナデ 削り出し高台	密 白・黒色粒子を含む	黒色 灰白色5Y8/2	体部:押圧痕・白泥付着 黒褐色釉	
91	SD02・03	瀬戸・美濃 乗燭	5.8	4.3	4.9	ロクロナデ・ケズリ 糸切り	密	灰色 10Y6/1	底部:軸孔 鉄釉	
92	SD03	瀬戸系磁器 碗	(10.9)	(4.4)	6.3	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:区画内に菊唐草・周囲に松　高台:○×　高台内:名款 透明釉	
93	SD03	瀬戸系磁器 碗	8.6	3.5	5.6	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:花・圏線　体部:菊花 透明釉	19c〜
94	SD03	瀬戸系磁器 碗	(8.4)	(3.6)	5.65	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:花　体部:宝 半珠形　透明釉	19c〜
95	SD03	瀬戸系磁器 碗	10.0	3.7	5.8	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:蝶　体部:草花・圏線 透明釉	19c〜
96	SD03	瀬戸系磁器 碗	9.2	3.7	5.4	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:蝶・圏線　体部:花弁 透明釉　古伊万里	18C〜
97	SD03	瀬戸系磁器 碗	(10.0)	−	(6.95)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白	体部:植物 透明釉	19c〜
98	SD03	瀬戸系磁器 碗	(10.3)	4.2	8.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:植物 透明釉	19c〜
99	SD03	瀬戸系磁器 蓋	4.8	−	(0.9)	ロクロナデ	緻密	灰白色	体部:松葉十字花と梅・条線　つまみ部:欠損 合子蓋　透明釉	
100	SD03	瀬戸系磁器 蓋	(7.0)	−	(1.9)	ロクロナデ 付け高台	緻密	灰白色	体部:丸・櫛歯　上部:山水か梅林 合子蓋　透明釉	
101	SD03	瀬戸系磁器 皿	(10.0)	5.9	2.8	ロクロ又は型打ち 削り出し高台	緻密	灰白色	見込:山水画 輪花皿　透明釉	
102	SD03	瀬戸系磁器 皿	8.2	3.8	2.6	形打ち成形	緻密	灰白色	見込み:十字花・波に綾杉状(形打陽刻)　体部:ハリ跡 透明釉	
103	SD03	瀬戸系磁器 皿	(15.8)	(9.6)	5.8	型打ち成形 糸切細工	緻密	灰白色	見込み:花詰　体部:繋ぎ花・雷文 輪花皿　透明釉	19c〜
104	SD03	瀬戸系磁器 瓶	5.5	4.8	10.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:透かし・渦状文・縦線 筒形　透明釉	19c〜
105	SD03	瀬戸系磁器 戸車	外径 5.2	内径 1.8	厚 1.2	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	側面:墨書「天下太平」 透明釉	
106	SD03	瀬戸・美濃 碗	(9.5)	(4.8)	7.4	ロクロナデ 削り出し高台	密	灰白色	体部:鉛釉網掛 鉛釉・鉄釉	
107	SD03	瀬戸・美濃 碗	9.4	5.4	6.4	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密 白・黒色粒子を含む	黒色 灰白色5Y7/2	黒褐色釉	
108	SD03	瀬戸・美濃 碗	9.6	5.8	6.25	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密	にぶい橙色 7.5YR6/4	体部直立　緑がかった灰釉	
109	SD03	瀬戸・美濃 拳骨碗	(9.8)	4.4	7.3	ロクロナデ 削り出し高台	密 白・黒色粒子を含む	黒色 灰白色5Y8/2	体部:押圧痕・白色釉付着 黒褐色釉	
110	SD03	瀬戸・美濃 拳骨碗	(9.8)	4.3	7.4	ロクロナデ 削り出し高台	密 白・黒色粒子を含む	黒色 灰白色5Y8/2	体部:押圧痕・白色釉付着 黒褐色釉	
111	SD03	瀬戸・美濃 受付皿(灯明皿)	(10.9)	(4.9)	1.6	ロクロナデ・ケズリ	密	橙色 7.5YR7/8	口縁に油煙付着　透明釉	
112	SD03	瀬戸・美濃 受付皿(灯明皿)	(10.4)	(4.8)	1.8	ロクロナデ・ケズリ	密	黄灰色 2.5Y6/1	底部:渦巻状線刻 口縁に油煙付着　透明釉	
113	SD03	瀬戸・美濃 皿(灯明皿)	(11.0)	(4.4)	2.0	ロクロナデ・ケズリ	密	灰白色 10Y8/1	油煙付着　透明釉	
114	SD03	瀬戸・美濃 鉢	(19.7)	(7.5)	9.55	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密	にぶい黄橙色 10YR7/3	高台内:露胎 口縁折縁　光沢のある鉄釉	
115	SD03	瀬戸・美濃 擂鉢	−	(16.2)	(6.9)	ロクロナデ・ケズリ 付け高台	密	明赤褐色 2.5YR5/8	見込み:放射状擂目(11条1単位)、油煙付着 鉄釉	
116	SD03	瀬戸・美濃 壺	(25.8)	−	(12.7)	ロクロナデ	密	灰白色 5Y7/1	肩部:しのぎ 口縁外反　透明釉	

挿図番号	遺構番号	種類 器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
117	SD03	瀬戸・美濃 仏花瓶	7.3	(5.1)	10.35	ロクロナデ 底部糸切り	密	灰黄色 2.5Y7/2	肩部:ボタン状貼付 光沢のある鉄釉の上に白色釉	18c後
118	SD03	瀬戸・美濃 秉燭か薑	7.0	3.5	2.0	ロクロナデ・ケズリ	密	淡黄色 2.5Y8/3	底部:亀裂あり 鉄釉	
119	SD03内 上水施設	瀬戸系磁器 碗	(9.4)	(3.4)	5.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	透明釉	
120	SE03	瀬戸系磁器 碗	(9.1)	3.4	6.9	ロクロナデ 付け高台	緻密	灰白色 5Y8/1	透明釉	19c～
121	SE03	瀬戸系磁器 碗	(11.1)	(4.0)	5.85	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:草花 透明釉	
122	SE03	瀬戸・美濃 片口鉢	(11.1)	(8.0)	8.65	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密	黄灰色 2.5Y6/1	高台内:露胎 緑がかった灰釉	18c～19c
123	SE03	瀬戸・美濃 秉燭か台付碗	－	4.6	(5.3)	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい黄橙色 10YR7/3	灰釉	
124	SK14	瀬戸系磁器 碗	(9.9)	(5.2)	6.7	ロクロナデ 付け高台	緻密	灰黄色	透明釉	
125	SK16	瀬戸系磁器 碗	(9.7)	(5.4)	6.3	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:草花 透明釉	
126	SK16	瀬戸・美濃 碗	8.9	4.3	6.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	茶褐色	褐色釉	
127	SK16	瀬戸・美濃 片口擂鉢	28.5	11.2	13.0	ロクロケズリ 削り出し高台	密 白色粒含む	浅黄色 2.5Y7/4	見込み:放射状擂目(7条1単位) 鉄釉	
128	SK18	瀬戸・美濃 秉燭	(6.1)	3.6	4.65	ロクロナデ 底部糸切り	密 白色粒含む	灰色 10Y5/1	施釉	
129	SK21	瀬戸・美濃 皿	(13.0)	－	(2.2)	ロクロナデ	密 白色粒含む	灰黄褐色 10YR6/2	鉄釉・黒釉	
130	SK23	瀬戸・美濃 碗	(9.0)	4.3	5.7	ロクロナデ 削り出し高台	密 白色粒含む	灰色 10Y6/1	鉄釉	
131	SK25	瀬戸・美濃 皿	(10.3)	(4.8)	2.85	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	粗	淡黄色 2.5Y8/3	見込み:重ね焼き痕 鉄釉	
132	SK25	瀬戸・美濃 皿	(11.3)	－	(2.05)	ロクロナデ・ケズリ	密 白色粒含む	灰黄色 2.5Y7/2	鉄釉	
133	SK25	瀬戸・美濃 皿	(10.6)	(6.0)	2.9	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密	灰白色 2.5Y7/1	口縁直立状　灰釉	
134	SK26	瀬戸系磁器 碗	11.3	4.3	7.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色 N8/0	高台内:砂付着 透明釉	19c後
135	SK30	瀬戸系磁器 碗	(8.6)	(5.6)	5.8	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:太湖石・花　高台内:文字 透明釉	
136	SK30	瀬戸系磁器 碗	(9.8)	5.0	6.5	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色 5Y8/1	透明釉	
137	SK30	瀬戸・美濃 小鉢	5.7	3.8	4.8	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密	灰白色 5Y7/1	鉄釉	
138	SK30	瀬戸・美濃 片口鉢	14.1	8.9	12.45	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密	暗灰黄色 2.5Y5/2	見込み:露胎はトチン痕か 鉄釉	
139	SK30	瀬戸・美濃 片口鉢	14.3	7.5	12.15	ロクロナデ・ケズリ 削り出し高台	密	にぶい黄褐色 10YR5/3	鉄釉	
140	SX03	瀬戸系磁器 皿	(13.7)	(4.8)	3.5	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:一部露胎 透明釉	
141	SX04	瀬戸・美濃 皿	(9.7)	(5.6)	2.1	ロクロナデ 削り出し高台	密	灰白色 2.5Y7/1	見込み:印花痕跡 緑がかった灰釉	
142	SX08	瀬戸系磁器 碗	(8.7)	(3.7)	5.35	ロクロ成型 付け高台	緻密	灰白色 5Y8/2	口縁外反　透明釉	
143	SX10	瀬戸・美濃 植木鉢	(19.6)	10.6	15.2	ロクロナデ・ケズリ 付け高台	密	にぶい赤褐色 2.5YR5/3	高台内:穿孔 鍔縁桶型　平縁口縁外反　緑釉	
144	包含層	瀬戸・美濃 碗	(9.3)	5.5	7.25	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色 N8/0	透明釉	
145	SD02・03	越中瀬戸 皿	9.5	4.4	2.7	ロクロナデ 底部糸切り	密	淡黄色 5Y8/3	見込み:重ね焼き痕　底部:重ね焼き痕 鉄釉	18c～19c
146	SD02・03	越中瀬戸 皿	(9.6)	4.2	2.85	ロクロナデ 底部糸切り	密	浅黄橙色 10YR8/3	見込み:重ね焼き痕 口縁外反　鉄釉	
147	SD02・03	越中瀬戸 皿	(10.6)	(5.1)	2.5	ロクロナデ・ケズリ 付け高台	密	橙色 2.5YR6/6	見込み:十六弁菊の印花　高台内:墨書 内禿皿　鉄釉　裏込出土	17c後
148	SD02・03	越中瀬戸 受付皿(灯明皿)	10.0	4.5	2.9	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	密	にぶい橙色 7.5YR7/4	鉄釉	18c～19c
149	SD02・03	越中瀬戸 小鉢	5.25	3.6	2.95	ロクロナデ 底部糸切り	密 白色粒含む	灰黄色 2.5Y7/2	縁内傾　鉄釉	18c～19c
150	SD02・03	越中瀬戸 小鉢	6.0	4.5	2.8	ロクロナデ 底部糸切り	密 白色粒含む	灰黄色 2.5Y7/2	鉄釉	18c～19c
151	SD02・03	越中瀬戸 小鉢	5.3	3.1	3.55	ロクロナデ 底部糸切り	密	灰白色 10YR8/2	縁内傾　鉄釉(黒釉)	18c～19c
152	SD02・03	越中瀬戸 建水か匣鉢	(9.8)	(10.6)	7.9	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	粗	にぶい黄橙色 10YR7/4	鉄釉	18c～19c
153	SD02・03	越中瀬戸 秉燭	(6.0)	4.9	4.6	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	密 白色粒含む	灰黄色 2.5Y7/2	底部:軸孔 鉄釉	18c～19c
154	SD03	越中瀬戸 小鉢	5.1	3.8	3.8	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	密	灰白色 2.5Y8/2	鉄釉	18c～19c
155	SD03	越中瀬戸 小鉢	5.0	3.5	2.3	ロクロナデ 底部糸切り	密 密	浅黄色 2.5Y7/4	底部:糸切り不明瞭 口縁内傾　鉄釉	18c～19c

挿図番号	遺構番号	種類 器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
156	SD03	越中瀬戸 皿	9.8	4.9	2.15	ロクロナデ・ケズリ 付け高台	密	橙色 2.5YR6/6	見込み:十六弁菊の印花　高台内:墨書 内禿皿　鉄釉　裏込出土	17c後
157	SD03	越中瀬戸 皿	10.0	4.4	2.95	ロクロナデ 底部糸切り	密 白色粒含む	にぶい橙色 7.5YR6/4	見込み:重ね焼き痕　底部:重ね焼き痕 鉄釉	18c～19c
158	SD03	越中瀬戸 皿	9.7	4.2	3.2	ロクロナデ 底部糸切り	密	橙色 2.5YR7/8	底部:重ね焼き痕 鉄釉	18c～19c
159	SD03	越中瀬戸 皿	10.1	4.3	2.75	ロクロナデ 底部糸切り	密	橙色 5YR7/6	見込み:重ね焼き痕 鉄釉	18c～19c
160	SD03	越中瀬戸 皿	9.9	4.7	3.0	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	密	浅黄色 2.5Y7/3	見込み:重ね焼き痕　底部:重ね焼き痕 鉄釉	18c～19c
161	SD03	越中瀬戸 皿	9.9	4.25	3.0	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	密	橙色 7.5YR7/6	見込み:重ね焼き痕　底部:重ね焼き痕 鉄釉	18c～19c
162	SD03	越中瀬戸 皿	(9.9)	4.0	3.05	ロクロナデ 底部糸切り	密	橙色 7.5YR7/6	見込み:重ね焼き痕 鉄釉	18c～19c
163	SD03	越中瀬戸 皿	(6.7)	(3.8)	1.5	ロクロナデ 底部糸切り	密	灰白色 2.5Y7/1	見込み:重ね焼き痕 鉄釉	18c～19c
164	SD03	越中瀬戸 受付皿(灯明皿)	(11.7)	(4.4)	2.3	ロクロナデ	密	にぶい橙色 7.5YR6/4	緑がかった透明釉	18c～19c
165	SD03	越中瀬戸 片口擂鉢	(17.0)	(9.8)	5.9	ロクロナデ 底部糸切り		灰白色 2.5Y8/2	見込み:擂目(10条1単位)・重ね焼き痕　底部:重ね焼き痕 鉄釉	
166	SD03	越中瀬戸 建水か匣鉢	(8.9)	(10.2)	7.3	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	粗	淡黄色 2.5Y8/3	鉄釉	18c～19c
167	SD03	越中瀬戸 建水か匣鉢	(11.8)	(12.0)	10.35	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	粗	にぶい黄橙色 10YR6/3	底部:工具圧痕 鉄釉	18c～19c
168	SK17	越中瀬戸 建水か匣鉢	(12.8)	－	(7.2)	ロクロナデ・ケズリ	粗	灰白色 2.5Y8/2	口縁外反　鉄釉	18c～19c
169	SK26	越中瀬戸 碗	(8.8)	－	(5.7)	ロクロナデ	密	にぶい黄橙色 10YR7/3	鉄釉	19c
170	SK30	越中瀬戸 小鉢	(7.8)	(5.6)	5.9	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	粗雑	灰黄色 2.5Y6/2	鉄釉	18c～19c
171	SK30	越中瀬戸 小鉢	6.9	3.8	4.7	ロクロナデ・ケズリ ケズリ出し高台	密	淡黄色 2.5Y8/4	鉄釉	18c～19c
172	SK30	越中瀬戸 擂鉢	(26.0)	－	(5.1)	ロクロナデ	密	にぶい橙色 5YR7/4	見込み:擂目(10条1単位) 鉄釉	18c～19c
173	SK30	越中瀬戸 火鉢	(23.2)	16.5	16.0	ロクロナデ・ケズリ 底部ナデ	密	にぶい黄橙色 10YR7/4	見込み:露胎 三脚付　鉄釉	18c～19c
174	SX04	越中瀬戸 皿	10.4	5.4	2.2	ロクロナデ・ケズリ 付け高台	密	浅黄色 2.5Y7/4	見込み:十六弁菊の印花　高台内:墨書 内禿皿　緑がかった灰釉	17c後
175	SX10	越中瀬戸 建水か匣鉢	(13.0)	(13.2)	10.2	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	粗	にぶい橙色 5YR7/4	底部:中心に穿孔 鉄釉	18c～19c
176	SD02・03	土師器 灯明皿	6.6	(2.6)	1.9	ロクロナデ 底部糸切り	密	灰白色 5Y7/1	油煙付着	
177	SD03	土師器 灯明皿	7.2	3.5	1.7	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい黄橙色 10YR7/3	油煙付着	
178	SD03	土師器 灯明皿	(8.2)	(3.9)	2.1	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい橙色 7.5YR7/4	油煙付着	
179	SD03	土師器 灯明皿	6.8	3.1	2.1	ロクロナデ 底部糸切り	密	淡橙色 5YR8/4	油煙付着	
180	SD03	土師器 灯明皿	7.1	3.1	1.7	ロクロナデ 底部糸切り	密	浅黄橙色 7.5YR8/4	油煙付着	
181	SD03	土師器 灯明皿	7.0	3.1	1.8	ロクロナデ 底部糸切り	密	淡橙色 5YR8/4	油煙付着	
182	SD03	土師器 灯明皿	(11.3)	(5.2)	2.45	ロクロナデ 底部糸切り	密	浅黄橙色 7.5YR8/4		
183	SD03	土師器 灯明皿	(7.2)	3.2	1.8	ロクロナデ 底部糸切り	密	灰赤色 2.5YR6/2	油煙付着	
184	SD03	土師器 灯明皿	6.0	3.2	1.5	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい黄橙色 10YR6/4	油煙付着	
185	SD03	土師器 灯明皿	7.3	3.2	1.6	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい橙色 5YR7/4	油煙付着	
186	SD03	土師器 灯明皿	(10.0)	(4.3)	2.4	ロクロナデ 底部糸切り	密	灰白色 2.5Y7/1	油煙付着	
187	SD03	土師器 灯明皿	6.5	2.7	1.8	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい黄橙色 10YR7/4	油煙付着	
188	SD03	土師器 灯明皿	6.25	2.85	1.5	ロクロナデ 底部糸切り	密	橙色 5YR7/6	油煙付着	
189	SD03	土師器 乗燭	4.9	2.9	2.5	手びねり	密	灰黄色 2.5Y7/2	油煙付着	
190	SD03内 上水施設	土師器 灯明皿	6.6	3.2	1.7	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい橙色 7.5YR7/4	油煙付着	
191	SD05	土師器 灯明皿	(6.2)	3.2	2.1	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい橙色 7.5YR6/4	油煙付着	
192	SD05	土師器 灯明皿	(13.7)	(6.9)	2.6	ロクロナデ	密	にぶい黄橙色 10YR7/4	油煙付着	
193	SK30	土師器 灯明皿	(10.0)	(3.9)	2.4	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい橙色 7.5YR7/4	油煙付着	
194	SK30	土師器 灯明皿	12.0	5.6	2.5	ロクロナデ・ケズリ 底部糸切り	密	にぶい橙色 5YR6/3	見込み:重ね焼き痕　底部:重ね焼き痕 油煙付着	

挿図番号	遺構番号	種類 器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
195	SX03	土師器 灯明皿	(11.1)	4.4	2.35	ロクロナデ 底部糸切り	密	にぶい黄橙色 10YR7/4	油煙付着	
196	SD02・03	信楽系磁器 皿(灯明皿)	(12.0)	(4.15)	2.7	ロクロナデ・ケズリ	精緻	灰黄色 2.5Y7/2	見込み:3条線の×状櫛目・目跡2カ所 透明釉　油煙付着	
197	SX04	丹波系陶器 片口擂鉢	(30.5)	−	(11.0)	ロクロケズリ 付け高台	密	にぶい橙色 5Y6/4	見込み:擂目(12条1単位) 口縁逆コ字状　鉄釉	18c〜
198	SD03	越前 鉢	(30.5)	(17.6)	20.2	ロクロナデ 貼付脚	密	褐灰色 10YR6/1	体部:刻印か　底部:貼付脚 鉄釉	19c中
199	SD02・03	瓦質土器 不明	長 (11.1)	幅 (7.8)	厚 1.0	ロクロナデ	密	灰白色 2.5Y7/1	表面:円形内に獅子状陽刻　裏面:指頭圧痕・刺突痕・沈線	
200	SD03	瓦質土器 鉢	(28.2)	−	(8.65)	ロクロナデ	密	灰白色 N7/0	肩部〜胴部:区画の中に亀甲、梅花と松葉 縁平坦	
201	SK17	瓦質土器 蓋か	−	(15.4)	(1.4)	ロクロナデ	密 白色粒含む	灰色 10Y6/1		
202	SD02・03	輸入陶器 皿	14.8	8.3	2.95	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:文字・蝶・圏線・型押し　体部:型押し　高台内:変形文字 中国系　透明釉	19c〜
203	SD03	輸入陶器 鉢	(15.4)	−	(8.9)	ロクロナデ	緻密	灰白色	体部:宝相華 中国系　透明釉	
204	SX10	輸入陶器 台付(不明)	−	8.0	(2.3)	ロクロナデ	緻密	灰白色	外面:波状 中国系　透明釉	
205	SX10	輸入陶器 鉢	(27.8)	−	(3.6)	ロクロナデ 削りだし高台	緻密	灰白色	見込み:しのぎ 中国系　透明釉	
206	SD02・03	不明 小碗	(4.2)	2.1	2.8	ロクロナデ 削り出し高台	密	灰白色 5Y8/1	縁外反　鉄釉(黒褐色)　油煙付着	
207	SD02・03	不明 鉢	(18.4)	−	(4.85)	ロクロナデ	密	灰白色 2.5Y8/1	口縁部:刻印文字 炻器	
208	SD02・03	不明 底部	−	(5.0)	(1.25)	手びねり成型	密	灰黄色 2.5Y7/2	表面:陽刻「霞暗□」　裏面:脚部に指頭圧痕 透明釉	
209	SD02・03	不明 五徳	長 (8.6)	幅 (3.9)	厚 (1.8)	手びねり成型 ミガキ	密	灰白色 2.5Y8/1	表面:刻印文字	
210	SD02・03	不明 五徳	長 9.15	幅 (6.8)	厚 (1.9)	手びねり成型 ミガキ	密	灰白色 2.5Y8/2	表面:刻印文字	
211	SD02・03	不明 把手	−	−	(3.2)	手びねり成型 ミガキ	密	灰オリーブ色 5Y6/2	表面:刻印文字「仙山」 容器の把手	
212	SE03	不明 碗	10.0	5.7	7.1	ロクロナデ 付け高台	緻密	にぶい黄橙色 10YR7/2	透明釉	19c〜
213	包含層	不明 行平鍋	18.3	−	6.5	ロクロナデ・ケズリ	密	灰白色 10YR7/1	体部:飛鉋 丸型形状　把手・注口付　鉄釉	

第3表　下層面：土製品他遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 器種	高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
214	SD02・03	土製品 土人形	(3.9)	2.5	1.7	型合わせ	緻密	褐灰色 10YR6/1	右手に持ち物を持つ童子像　頭部欠損 緑釉	19c〜
215	SD02・03	土製品 土人形	(6.1)	3.2	1.9	型合わせ 中空	緻密	にぶい黄橙色 10YR7/4	狆抱童子像　頭部欠損 緑釉	19c〜
216	SD02・03	土製品 蛙	2.1	2.6	長3.5	手びねり	緻密	にぶい黄橙色 10YR7/4	底が平坦	
217	包含層	土製品 土人形	(7.0)	3.7	2.7	型合わせ	緻密	橙色 7.5YR7/6	女性像　頭部欠損	
218	包含層	磁器か 人形(大黒天)付	(5.6) 高4.3	(6.3) 幅2.3	0.75 厚0.2		緻密	灰褐色 5YR4/2	「大黒天像」陽刻	19c〜
219	包含層	土製品 泥面子	3.8	3.6	0.9	型打ち成形	緻密	淡黄色 2.5Y8/3	家紋「笹竜胆」	19c〜
220	SD02・03	土製品 環状	(9.6)	(5.0)	1.1		緻密	黒色	表面:研磨	
221	SD03	土製品 円形状	(4.8)	(4.7)	1.9		緻密	黄橙色 10YR7/8	表面:刻印「大極上製□大坂南久太濱高田屋庄八」 角が摩耗　裏面は平坦	
222	SK33	土製品 不明	(8.2)	(7.0)	1.1		密 金雲母含む		表面:刻印「□□名産　□□組合　□□□一」 裏面:粘土紐の貼付	19c末〜
223	包含層	肥前磁器 紅皿	口径 4.7	底径 1.5	高 1.5	型打ち成形	緻密	灰白色 2.5Y8/1	体部:しのぎ・赤紅付着 化粧皿　透明釉	
224	SX07	貝製品 貝杓子	8.4	9.7	0.05				イタヤガイ製 柄の接合孔二つ(径2.5mm)	

第4表　下層面：鍛冶関連遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	胎土	色調	施文・特徴等	年代
225	SX07	製鉄製品 羽口	(12.6)	9.75	9.4	－	にぶい褐色 7.5YR5/3	焼成良好 穴の直径3.2cm　重さ1.08kg	
226	SX07	製鉄製品 羽口	(11.9)	10.9	10.5	－	にぶい褐色 7.5YR5/4	焼成良好 穴の直径2.4cm　重さ 1.36kg	
227	SX07	製鉄製品 羽口	(16.7)	9.7	9.6	－	灰白色 5Y7/1	焼成良好 穴の直径3.1cm　重さ 1.42kg	
228	SX07	製鉄製品 羽口	(13.2)	11.5	11.4	－	橙色 7.5YR7/6	焼成良好 穴の直径2.2cm　重さ 1.59kg	
229	SX07	製鉄製品 羽口	(16.3)	9.7	10.3	－	にぶい褐色 7.5YR5/4	焼成良好 穴の直径2.2cm　重さ 1.51kg	
230	SX09	製鉄製品 羽口	(17.5)	9.7	9.6	－	浅黄色 2.5Y7/3	焼成良好 穴の直径3.3cm　重さ 1.68kg	
231	SX07	製鉄製品 鉄滓	8.8	10.9	5.2	砂・炭化物含む	－	重さ0.43kg	
232	SX07	製鉄製品 鉄滓	9.9	12.4	6.9	砂・炭化物含む	－	重さ0.57kg	
233	SX09	製鉄製品 鉄滓	9.8	9.2	4.5	砂・炭化物含む	－	重さ0.37kg	

第5表　下層面：石製品遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	石材	色調	施文・特徴等	年代
234	SD02	石製品 硯	15.2	5.9	2.1	－	－	表面：墨の擦り痕で中央が窪む 裏面：「享保九年　正月四日　十二童　文賞齊眉山」	享保年間 (1716～1735年)
235	SD02・03	石製品 硯	15.0	6.6	2.9	－	－	表面：墨の擦り痕で中央が窪む 裏面：彫り込み・擦り跡	
236	SD03	石製品 硯	(16.4)	7.3	2.3	－	－	表面：墨の擦り痕で中央が窪む 裏面：浅く窪む	
237	SD03	石製品 石臼	径 32.0	高 13.5	－	角閃石安山岩 (常願寺川産)	－	穀物臼 背割水路の石積み転用	
238	SK13	石製品 砥石	(8.3)	4.4	(2.8)	硬質粘板岩	黒褐色 5YR2/1	表面：剥落・比熱　側面：比熱　裏面：欠損	
239	SK18	石製品 硯	(12.3)	5.5	2.0	－	－	表面：墨の擦り痕で中央が窪む 裏面：文字等の線書き	
240	SX10	石製品 砥石	(5.5)	5.6	0.8	粘板岩製	灰色 7.5Y6/1	表面：研磨　側面：研磨　裏面：研磨	
241	包含層	装身具 丸玉	1.6	1.6	1.6	－	素地暗赤褐色10R3/2 赤色10R5/8	表面：赤彩	

第6表　下層面：金属製品遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 種別	長(外径)(cm)	幅(内径)(cm)	厚(cm)	重量(g)	施文・特徴等	年代
242	SD02・03	銭貨 文久永宝	2.7	0.7	0.09	2.7		
243	SD03	銭貨 寛永通寶	2.5	0.6	0.13	4.0		新寛永
244	SK29	銭貨 寛永通寶	2.4	0.7	0.1	2.9		古寛永
245	SX03	銭貨 寛永通寶	(2.2)	(0.65)	0.1	1.1		新寛永
246	包含層	銭貨 寛永通寶	2.4	0.6	0.13	3.3		古寛永
247	試掘トレンチ	銭貨 寛永通寶	2.3	0.6	0.12	2.5		新寛永
248	B区撹乱	銭貨 寛永通寶	2.5	0.6	0.13	2.7		新寛永
249	SD02・03	金属製品 煙管雁首	3.6	1.2	0.08	7.6	肩部：線状の刻み	
250	SD02・03	鉄製品 鎌刃	(15.7)	2.4	0.2	32.8	刃先：腐食・刃こぼれ	
251	SD03	鉄製品 握り鋏	(15.9)	1.55	0.3	20.5	腐食	
252	SK10	鉄製品 包丁刃	(17.3)	3.9	0.25	46.4	刃先：腐食・刃こぼれ	
253	SK26	金属製品 把手	－	1.0	0.07	10.0	両端に留め金具	
254	包含層	金属製品 小判形飾り	(3.2)	3.3	0.04	2.8	鍍金・条線	
255	包含層	金属製品 簪	16.9	0.7	0.1	5.0	表面：凹凸	

第7表　下層面：木製品遺物観察表

[漆器]

挿図番号	遺構番号	器種	口径(cm)	高台径(cm)	器高(cm)	漆 外面	漆 内面	施文・特徴等	年代
256	SD02	椀	(11.4)	7.4	(5.3)	黒	黒		
257	SD02	椀	－	7.6	(1.5)	黒	黒		
258	SD02	椀	－	－	(3.1)	赤	黒	体部：筋状(13本)文様	
259	SD02・03	杓子	長(9.5)	幅(7.6)	厚1.1	表面：赤	裏面：赤	柄が欠損	
260	SD03	和傘	高(3.9)	幅(3.9)	厚0.9	表面：赤	－	手元轆轤	
261	SK09	椀	(14.0)	7.1	(7.0)	黒	黒	体部：赤漆で文様	
262	SK13	椀	(11.4)	(7.4)	(4.0)	赤	赤	高台内：黒漆	
263	SK14	椀	－	6.1	(3.5)	黒	赤	体部：赤漆で丸で囲んだ竹か笹の文様　高台内：黒漆・キャタピラ状の凹みが巡る	
264	SX03	椀	(8.6)	(4.4)	(3.2)	黒	黒	体部：赤漆で紅葉状文様・草	

[下駄]

挿図番号	遺構番号	種類	全長(cm)	全幅(cm)	全高(cm)	木取 台部	木取 歯部	左右の別	特徴等	年代
265	SD03	下駄	21.2	8.3	7.9	柾目	－	右足	一木連歯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　前歯欠損	
266	SD03	下駄	(11.0)	(7.8)	2.4	板目	なし	不明	無眼下駄　つま先に小さい四角形の切り込み・鉄釘2カ所　下方に小穿孔	
267	SD03	下駄	24.3	12.0	0.8	板目	なし	不明	田下駄　前壺孔1つ　断面は板状　表面は摩耗	
268	SD05	下駄	20.3	9.0	4.1	板目	－	左足	一木連歯下駄(角型)　左右側面に横緒孔後歯前方　指圧痕　裏面後歯前方に削り込み	
269	SE06	下駄	(12.2)	6.4	(2.6)	柾目	なし	左足か	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　指圧痕	
270	SK16	下駄	22.3	8.9	7.6	柾目	柾目	左足	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯後方　指圧痕	
271	SK17	下駄	22.5	7.1	(4.8)	板目	なし	不明	構造(差歯)除卯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　指圧痕　表面黒漆	
272	SK17	下駄	23.1	7.5	(3.8)	柾目	板目	不明	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯後方	
273	SK29	下駄	(22.5)	8.2	(1.5)	柾目	－	左足	一木連歯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　前歯・後歯が磨り減り草履下駄状	
274	SK29	下駄	22.5	8.0	(1.5)	柾目	なし	不明	一木連歯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　表裏面に鉄　前歯・後歯が磨り減り草履下駄状	
275	SK29	下駄	22.1	8.8	(2.5)	板目	－	左足	一木連歯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　指圧痕　前歯・後歯が磨り減り草履下駄状	
276	SK29	下駄	(7.6)	(5.8)	厚2.0	なし	柾目	不明	下駄歯	
277	SK30	下駄	21.9	7.9	9.0	柾目	柾目	右足	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　表面・側面赤漆 裏面・下駄歯黒漆　指圧痕	
278	SK30	下駄	(15.4)	(6.9)	9.0	板目	柾目	左足	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　表面・側面赤漆 裏面・下駄歯黒漆　指圧痕	
279	SK30	下駄	22.2	8.1	9.5	板目	柾目	右足	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　表面・側面赤漆 裏面・下駄歯黒漆　指圧痕	
280	SK30	下駄	22.2	8.0	8.0	－	柾目	左足	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　表面・側面赤漆 裏面・下駄歯黒漆	
281	SK30	下駄	23.0	8.2	(3.4)	－	－	右足か	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯後方　指圧痕	
282	SK30	下駄	22.9	7.7	(3.4)	柾目	なし	左足か	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯後方　指圧痕	
283	SX03	下駄	(15.8)	7.8	(3.8)	－	柾目	左足	構造(差歯)除卯下駄(角型)　推定横緒孔後歯後方　指圧痕	
284	SX03	下駄	22.2	8.0	(3.5)	板目	なし	右足	構造(差歯)露卯下駄(角型)　横緒孔後歯前方　指圧痕	
285	SX03	下駄	20.2	6.8	(4.3)	柾目	なし	不明	構造(差歯)露卯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　指圧痕	
286	SX03	下駄	12.0	12.8	厚1.8	なし	板目	－	下駄歯	
287	SX10	下駄	(8.2)	7.4	(4.4)	板目	－	不明	構造(差歯)除卯下駄(角型)　横緒孔後歯後方	
288	試掘トレンチ	下駄	19.5	8.4	(3.1)	柾目	－	左足	一木連歯下駄(丸型)　横緒孔後歯前方　前歯・後歯が磨り減り草履下駄状	

[その他]

挿図番号	遺構番号	種類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	木取	施文・特徴等	年代
289	SD02	木札	25.8	7.0	0.9	柾目	穿孔(直径約1.7cm)	
290	SD02	木札	21.6	11.5	0.7	板目	表裏面に墨書・表面「□覺帳」	
291	SD02	曲物蓋か底板	7.1	7.3	0.4	板目	穿孔(直径約2mm)　中央に凹み	
292	SD02・03	木札	(13.0)	(3.3)	0.7	柾目	表面に墨書・「七日□(写カ)□□(了カ)」　上端の裏面が斜めに削られる	
293	SD02・03	木札	31.7	6.0	0.8	板目	表面に墨書「□□□□□／吉澤□」　長方形の加工穴	
294	SD02・03	木札	11.5	6.5	1.0	板目	表面に墨書「□(一カ)番八枚之内／□(一カ)番八枚之内」・裏面に墨書「濱野屋」 左側面に加工　斜めの穿孔があり釘が刺さる	
295	SD02・03	板状	7.8	(2.5)	0.2	板目	表面に墨書・建物状の図柄カ　裏面に墨書	
296	SD02・03	曲物蓋	(5.4)	(14.2)	0.7	板目	表面に墨書　木釘穴2カ所	
297	SD02・03	曲物蓋	15.9	(5.6)	1.3	柾目	表面に焼印「油口」などの作り部分と思われるが不明　木釘穴2カ所	
298	SD02・03	曲物蓋か底板	10.6	(7.9)	0.7	柾目	二分割の一つ	
299	SD02・03	曲物蓋か底板	14.8	15.2	1.0	柾目	二分割　木釘穴2カ所	
300	SD03	木札	11.0	4.2	0.2	板目	表面に墨書「松□□源□／□(相カ)□入／京□□□□□」 裏面に墨書「□□□(谷カ)□(村カ)／□□　弥六／□□(月カ)十六日」	
301	SD03	曲物蓋	10.8	10.7	0.6	柾目	表面に墨書「清」	
302	SD03	曲物蓋	11.6	(5.9)	1.1	板目	表面に墨書　三分割の中央　木釘穴2カ所	
303	SD03	曲物蓋か底板	13.3	13.4	1.1	柾目	三分割　一部欠損	
304	SD03	曲物蓋か底板	(10.5)	(3.6)	1.1	板目	三分割の一つ	
305	SD03	曲物蓋か底板	11.5	(10.5)	0.3	柾目	中央に穿孔(直径約2mm)	
306	SD03	小型桶	口径(15.5)	底径(12.8)	高10.5	－	表裏面に縄か紐の痕跡　中央に釘穴2カ所　裏面に加工痕	
307	SD05	小型曲物	径15.2	高7.5	1.0	柾目	内底が被熱で炭化　円縁に段差があり側板が二重になる　側板は内外側ともに、 2列(2～3段と7～8段)で綴じられる　内側のみ桜皮か綴皮が残る 底板の内段に6カ所木釘(穴)残る	
308	SD05	曲物蓋か底板	(20.0)	(6.0)	(0.7)	板目	金属製の留め金	
309	SD05	曲物蓋か底板	9.6	(7.7)	0.5	板目	金属製の留め金3カ所	
310	SE06	木札	19.1	2.9	0.5	柾目	表裏面に削り　先端を細く削る	
311	SE06	木札	15.9	4.7	0.8	柾目	表裏面に削り　裏面の下部に墨の痕跡か	
312	SK25	木札	16.5	3.4	0.7	板目	表裏面に墨書・表面「山一(屋号の記号)」他は不明・裏面「□□壱斤入」 表面の△印は「山一」(屋号の記号)とみられる	

挿図番号	遺構番号	種類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	木取	施文・特徴等	年代
313	SK30	小型曲物	径11.3	高(2.7)	0.8	柾目	木釘3カ所で底板を留める　側板は1列2～3段で綴じる　桜皮か綴皮が残る	
314	SX03	曲物蓋か底板	32.7	(11.6)	1.9	板目	側面に接合用穿孔4カ所(直径約4mm)	
315	SX07	曲物蓋か底板	(12.5)	(3.7)	1.1	柾目	三分割の曲物の一つ　木釘穴2カ所	
316	SX10	曲物蓋	(26.4)	(7.7)	1.7	柾目	表面に墨書	
317	試掘トレンチ	加工板	16.8	14.6	1.0	板目	上面に黒塗(墨か黒漆か)	
318	包含層	木札	(16.4)	6.3	0.8	板目	表面に焼印「木町澁屋」か　裏面の上端に加工	
319	包含層	木札	(5.8)	4.6	0.35	柾目	表裏面に墨書	
320	包含層	曲物蓋か底板	(26.4)	(11.9)	0.8	板目		
321	包含層	曲物蓋か底板	25.8	26.4	1.0	板目	三分割　表裏面炭化　4カ所の穿孔	
322	SD02・03	横櫛	(4.2)	(7.3)	0.9	－	削り出し　櫛歯21本　表面に赤漆か	
323	SD02・03	横櫛	(5.1)	(8.5)	1.1	－	削り出し　櫛歯42本	
324	SD02・03	横櫛	(7.0)	12.4	1.2	－	差し歯タイプ　歯が非常に細かい	
325	SD02・03	羽子板	29.7	10.1	0.8	板目	表面に墨、裏面に朱墨	
326	SD02・03	箸	22.3	0.5	0.5	－	削り出し角棒(六角形)　両端部に朱	
327	SD02・03	箸	18.5	0.6	0.5	－	削り出し丸木(隅丸方形)	
328	SD02・03	箸	(17.0)	0.6	0.4	－	削り出し角棒(四角形)　先が折れる	
329	SD02・03	加工板	7.6	(5.7)	0.6	－	穿孔(直径約5mm)　表面は滑らかで、裏面はザラザラする	
330	SD02・03	栓	5.5	3.4	3.4	柾目		
331	SD02・03	鍵手状	(10.7)	(3.4)	1.3	柾目	鍵手状に湾曲	
332	SD02・03	円柱状	13.7	7.2	5.5	心持	中央上部に穿孔　円錐状の両端に平坦面	
333	SD03	横櫛	(1.7)	(4.5)	0.75	－	削り出し　櫛歯11本　歯がほとんど残っていない	
334	SD03	横櫛	(3.7)	(5.8)	1.2	－	削り出し　櫛歯21本	
335	SD03	箸	(15.9)	0.4	0.3	－	削り出し角棒(四角形)　上端に朱	
336	SD03	加工板	(37.3)	10.1	1.2	板目	上部に穿孔(直径約2.7cm)	
337	SD03内上水	上水継ぎ手	30.8	12.5	11.1	柾目	竹樋の継ぎ手(南側配置)　中央に穿孔(約5.8cm×約6.0cm)	
338	SD03内上水	上水継ぎ手	26.4	14.3	15.3	板目	竹樋の継ぎ手(北側配置)　中央に穿孔(約5.8cm×約6.1cm)	
339	SE03	底板	58.0	58.7	2.5	柾目	三枚組　木釘穴4カ所　取水孔(直径約7.2cm×約7.1cm)	
340	SE03	側板	(57.6)	8.8	1.5	板目	下部(背面)削り加工	
341	SE03	側板	(70.2)	7.7	1.6	柾目	下部(背面)削り加工	
342	SE03	側板	(63.1)	8.0	1.6	柾目	下部(背面)削り加工	
343	SE04	側板(上部)	(43.3)	8.7	2.0	板目	下部(正面・背面)削り加工　竹皮付着痕	
344	SE04	側板(上部)	(38.1)	9.1	1.7	板目	下部(背面)削り加工　竹皮付着痕	
345	SE04	側板(下部)	90.4	8.3	2.0	不明	下部(背面)削り加工	
346	SE04	側板(下部)	91.0	12.6	1.9	板目	下部(背面)削り加工	
347	SE06	箸	(18.5)	0.7	0.6	－	削り出し丸木(六角形)	
348	SK18	有孔板(円形)	10.5	10.4	2.2	板目	中央に穿孔(直径約2.0cm)	
349	SK18	有孔板(円形)	10.1	10.5	2.0	板目	中央に穿孔(直径約2.0cm)　表面一部炭化	
350	SK23	箸	(16.8)	0.6	0.5	－	削り出し丸木	
351	SK26	箸	23.4	0.75	0.7	－	削り出し丸木	
352	SK26	箸	23.35	0.7	0.5	－	削り出し丸木	
353	SK29	箸	20.85	0.75	0.65	－	削り出し丸木	
354	SK29	杭	52.9	5.7	5.5	四方 板目	上部・下部に削り加工 頂部から約5.0cm下の左右に棒状圧痕・横方向の木材の接着痕跡か	
355	SK29	棒状木片	(19.8)	2.6	1.9	柾目	丸くなるように加工	
356	SK30	箸	(12.1)	0.7	0.6	－	削り出し丸木	
357	SX03	板	18.9	18.0	0.8	板目	表面が赤漆・黒漆　裏面が赤漆　裏面上下に木を留めた痕跡	
358	SX03	加工木	21.8	4.0	1.2	板目	穿孔(直径約4mm)4カ所　両端を加工　先端部削り	
359	SX04	柄	(12.4)	3.4	2.2	板目	包丁の柄か　なかご(茎)が残る	
360	SX07	加工木材	36.2	4.5	3.0	柾目	左側面と上端部にU字状加工圧痕　下部表面に楕円形(約1.0cm×約0.8cm) 裏面に長方形(約1.0×約0.8cm)の穿孔	
361	SX07	加工木材	23.9	5.4	2.6	柾目	釘　削り	
362	包含層	箸	(12.1)	0.7	0.6	－	削り出し丸木	
363	包含層	筒か鞘か	15.9	2.6	0.1	柾目	筒状　底に柾目の板がはめ込まれている　下端部は山形か 三角形の文様刻まれる　上端部に飾り把手のようなものを削り出す	
364	包含層	上水継ぎ手	20.0	15.2	10.9	板目	上面・正面に穿孔　正面に削り加工	
365	包含層	上水継ぎ手	(22.6)	19.8	17.0	四方 板目	正面から側面にかけて穿孔(L字型) 竹樋と継ぎ手の隙間に麻状の繊維が詰め込まれる	
366	包含層	上水継ぎ手	29.6	14.1	14.4	四方 板目	上面・正面に穿孔	
367	曲物底板	大型曲物底板	67.0	66.0	3.4	心持 板目	五枚組　木釘穴4カ箇所(四角形の釘)	

第8表　下層面：瓦遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 種別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	胎土	色調	施文・特徴等	年代
368	包含層	瓦 丸瓦	30.0	14.4	6.0	密	内面：橙色 5YR6/8	越前系瓦　褐色釉	18c～19c
369	包含層	瓦 軒桟瓦	(15.3)	(11.1)	1.9	密	灰色 N4/0	瓦当：文様	18c～19c

第9表　上層面：磁器遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
370	SD01	統制磁器 碗	9.6	3.2	5.3	ロクロナデ 削りだし高台	緻密 茶色粒含む	灰白色	高台内:「岐405」 透明釉	1940～1946年
371	SD01	統制磁器 碗	15.2	6.8	5.1	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:花十字・区画内に扇と花　体部:「岐1003」 透明釉	1940～1946年
372	SD01	統制磁器 小皿	8.3	3.1	3.7	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:草　高台内:「有46」 透明釉	1940～1946年
373	SD01	統制磁器 瓶	－	6.2	(5.2)	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:花　高台内:「会19」 透明釉	1940～1946年
374	SD01	磁器 碗	10.8	3.8	5.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:五弁花　体部:唐草 透明釉	
375	SD01	磁器 皿	(14.4)	8.8	4.2	ロクロナデ 蛇の目高台	緻密	灰白色	見込み:笹・鋸歯文・牡丹・草花　体部:唐草　高台:圏線 輪花皿　透明釉	
376	SD01	磁器 皿	14.9	8.6	4.3	ロクロナデ 蛇の目高台	緻密	灰白色	見込み:桔梗・竹・花　体部:牡丹・唐草 輪花皿　透明釉	
377	SD01	磁器 徳利	(2.4)	(4.4)	15.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:格子目・桜花・短冊「支那事変凱旋記念」 透明釉	
378	SD01	九谷磁器 猪口	(5.3)	2.2	2.8	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:菊花　体部:松葉・圏線　高台内:「九谷」 透明釉	
379	SD01	九谷磁器 猪口	(5.6)	1.9	3.0	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:人面　体部:桜花・「不して帰る□□ぞ□□しき」　高台内:「九谷」 透明釉	
380	SD01	磁器 猪口	(6.7)	(2.6)	2.9	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:桜花・「除隊記念」 透明釉	
381	SD01	磁器 猪口	5.1	1.8	2.8	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:「銘酒満泉」　体部:松葉など 透明釉	
382	包含層	磁器 猪口	4.2	2.9	4.4	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	体部:「八尾坂道　別れて　来れば　露か時雨か　オハラ　はらはらと」 高台:穿孔　越中おわら節歌詞　透明釉	
383	包含層	磁器 猪口	(6.6)	(2.6)	2.9	ロクロナデ 削り出し高台	緻密	灰白色	見込み:桜花・「除隊記念」 透明釉	
384	SD01	信楽系磁器 皿(灯明皿)	(11.6)	(4.5)	2.25	ロクロナデ・ケズリ	精緻	灰白色 5Y8/1	見込み:3条線の櫛目・目跡2カ所 透明釉　油煙付着	

第10表　上層面：土製品他遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 器種	高(cm)	幅(cm)	厚(cm)	成形	胎土	色調	施文・特徴等	年代
385	SD01	統制磁器 磁器人形	(6.3)	3.6	2.6	型合わせ 中空		灰白色 7.5Y8/1	僧侶像か　背面:刻印「京人56」	1940～1946年
386	SD01	土製品 鳥形	(3.4)	(4.0)	(2.5)	型合わせ 中空		素地：黄白色	表面:緑・茶・青の彩色　目玉:黒	
387	SD01	土製品 犬形	(3.7)	(3.2)	(2.4)	型合わせ 中空	銀粉含む	灰黄色 2.5Y7/2		
388	SD01	土製品 林檎形	2.6	4.2	0.3	型合わせ 中空		素地：黄色 2.5Y8/6	表面:赤の彩色	

第11表　上層面：金属製品遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 種別	長(外径)(cm)	幅(内径)(cm)	厚(cm)	重量(g)	施文・特徴等	年代
389	SD01	銭貨 寛永通宝	2.8	0.75	0.1	3.3	背文	新寛永
390	SD01	銭貨 寛永通宝	2.35	0.7	0.09	1.8		新寛永
391	SD01	銭貨 寛永通宝	2.2	0.7	0.11	2.4		新寛永
392	SD01	銭貨 一銭貨	2.8	－	0.16	6.9	表面:十七弁菊 裏面:大日本・1sen・明治二十一年・中央に龍	
393	包含層	銭貨 文久永宝	2.6	0.6	0.12	3.9		
394	SX01	鉄製品 コテ	5.6	4.9	1.0	91.5	コテ面:先端が薄い 柄:垂直取り付け・直角に曲がる	

第12表　上層面：木製品遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	木取	特徴等	年代
395	包含層	小判状板	12.7	(4.6)	0.3	板目		
396	包含層	栓	7.1	3.2	2.6	板目	コルク状	

第13表　上層面：瓦遺物観察表

挿図番号	遺構番号	種類 種別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	胎土	色調	施文・特徴等	年代
397	SD01	瓦 軒瓦	(22.4)	(30.0)	2.2	密	黒色 5YR1.7/1	瓦当:文様 越前系か　鉄釉	19c末～
398	SD01	瓦 軒丸瓦	－	9.4	(2.7)	密	黒色 N2/0	瓦当:文様無し 鉄釉	19c末～

第4章　自然科学分析

第1節　概　要

基峰　修（株式会社アーキジオ）、田中義文（パリノ・サーヴェイ株式会社）

富山城下町遺跡主要部は、常願寺川扇状地の扇端、旧神通川が大きく蛇行する地点の右岸域の沖積地（氾濫平野・海岸平野）に立地し、富山城跡の南側に位置する（第1図）。今回の発掘調査は、富山城下町における武家屋敷と町屋敷の境となる地点であった。調査の結果、古絵図や既往の発掘調査で確認されている背割水路を検出し、江戸時代から戦後までの変遷を確認した。また、町屋敷側から井戸や土坑などの遺構を検出した。

調査地及び周辺の古植生や遺構内と包含層の堆積（水域）環境、さらに出土した木製品の樹種、漆器の塗膜や顔料（赤色）の性状などの検討を目的として、古環境及び植物利用と木製品について自然科学分析調査を実施した。また、出土した動物遺存体の同定と考察を行った。

第2節　古環境及び植物利用について

田中義文・堀内誠示・斉藤崇人・馬場健司・松元美由紀（パリノ・サーヴェイ株式会社）

(1) 試　料

試料は、背割水路（SD03）、井戸（SE03・SE04）及びⅥ層（包含層）より採取された土壌5点と、背割水路（SD02・03）、溝跡（SD05）、土坑（SK26・SK30）及び性格不明遺構（SX04）より出土した水洗・抽出済の種実遺体7試料である。後者の種実遺体試料は、1試料あたり1点からなるものと複数点～極めて多量のものとが含まれる。これらの各試料の詳細を第14表に示す。

本項目では、土壌試料については珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析の各種微化石分析及び微細物分析を行った。また、水洗・抽出済の種実遺体試料については、種実同定を行った。

第14表　分析試料一覧（土壌・種実遺体）

地区	層位	遺物番号	遺構番号	試料採取位置など	試料(種別)	備考
A	下層	No.571	SE03	2層	土壌	井戸内堆積土
A	下層	No.572	SD03	B-B'断面 9層	土壌	背割水路内堆積土 底面層
A	下層	No.614	SE04	-	土壌	井戸内堆積土
A	下層	No.720	包含層	Ⅵ層上層	土壌	西壁基本堆積層位
A	下層	No.721	包含層	Ⅵ層下層	土壌	西壁基本堆積層位
A	下層	No.350-6	SD02・03-2区	-	種実遺体	背割水路内、15～30cm下
A	下層	No.389-2	SD02	-	種実遺体	背割水路内、北側石積撤去時
A	下層	No.443-2	SD03-1区	-	種実遺体	背割水路内、東側30～40cm下(底面)、北側石積付近
A	下層	No.530	SK26	-	種実遺体	
A	下層	No.695-3	SK30	-	種実遺体	No.12遺物の下から
A	下層	No.784	SD05	-	種実遺体	底面
A	下層	No.796	SX04	-	種実遺体	北側、木樋断割り時

(2) 分析方法

珪藻分析

土壌（湿重約5g）をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行う。その後検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い同定・計数した。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot（2000）、Hustedt（1930-1966）、Krammer & Lange-Bertalot（1985-1991）、Desikachiary（1987）などを参考にした。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類する。堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。出現率は化石総数を基数とした百分率で表す。

花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25㎜の篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、同定・計数する。

同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952,1957）、Faegri and Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集変遷図として表示する。図表中で複数の種類を－（ハイフォン）で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表と層位的変化を図示する。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「＜100」で表示する。

微細物（微細植物片）分析・種実同定

1）微細物（微細植物片）分析（水洗）

土壌試料は、種実や葉などの大型植物遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、

ピンセットを用いて、同定が可能な大型植物遺体を抽出する。

2）大型植物遺体・種実同定

土壌から抽出された葉や種実などの大型植物遺体や水洗・抽出済の種実は、現生標本および藤下（1984）、石川（1994）、中山ほか（2000）、鈴木ほか（2012）などを参考に同定し、部位・状態別に個数を数えて、結果を一覧表と図、図版で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、－（ハイフォン）で結んで表示する。ヒノキの枝条は、十字対生する4枚の葉を1個と数える。なお、マツ属複維管束亜属の葉は、一部を対象に葉横断面の切片を剃刀で採取し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入したプレパラートを実体顕微鏡とマイクロスコープ（KEYENCE,VHX-1000）で観察し、樹種を同定する。また、保存状態が良好な一部の種実遺体を対象として、大きさ（長さ、幅、厚さ）をデジタルノギスで計測する。分析後は、大型植物遺体を分類群別に容器に入れ、約70％のエタノール溶液で液浸保存する。

(3) 結　果

珪藻分析

結果を第15表、第40図に示す。以下に、試料別に産状を述べる。

1）SE03・2層（No.571）

SE03・2層（No.571）は、量としては少ないものの、100個体以上の珪藻化石が検出される。化石の保存状態は、半壊した殻が多いだけでなく、殻表面には溶解の痕跡が認められることから、状態としては、極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主体に極低率に淡水～汽水生種を伴っている。群集の構成としては、湿地性および陸生珪藻で構成される。本試料から特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種のGomphonema parvulum、Pinnularia microstauron、流水不明種のFragilaria spp.、Pinnularia spp.、陸生珪藻のHantzschia amphioxys、Pinnularia subcapitataなどである。

2）SD03・9層（No.572）

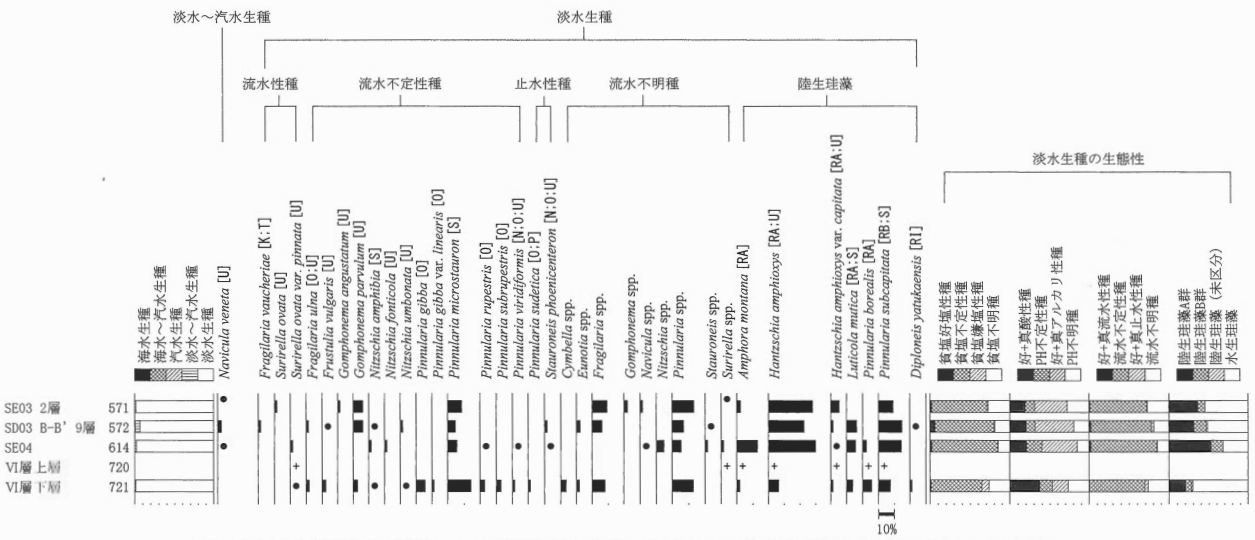
SD03・9層（No.572）は、100個体以上の珪藻化石が検出されるが、保存状態は、極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主体に極低率に淡水～汽水生種を伴う。群集は、湿地性および陸生珪藻で構成される。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種のGomphonema parvulum、Pinnularia microstauron、流水不明種のFragilaria spp.、Pinnularia spp.、陸生珪藻のHantzschia amphioxys、Luticora mutica、Pinnularia subcapitataなどである。

3）SE04（No.614）

SE04（No.614）は、100個体以上の珪藻化石が検出されるが、保存状態は、極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主体に極低率に淡水～汽水生種を伴っている。群集は、湿地性および陸生珪藻で構成される。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種のPinnularia microstauron、流水不明種のPinnularia spp.、陸生珪藻のHantzschia amphioxys、Luticora mutica、Pinnularia subcapitataなどである。

4）Ⅵ層上層（No.720）

Ⅵ層上層（No.720）は、本試料は、珪藻化石の量が少なく、1プレパラートから62個体が検出されたのみで、保存状態は極々不良である。検出された分類群は、淡水生種のみであり、汽水生種等は認められない。群集は、湿地性および陸生珪藻で構成される。特徴的に認められた種は、淡水生種で陸生珪藻のAmphora montana、Hantzschia amphioxys、Pinnularia borealis、Pinnularia subcapitataなどである。



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は1%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

［環境指標種］
K:中～下流性河川指標種，N:湖沼沼沢湿地指標種，O:沼沢湿地付着生種，P:高層湿原指標種群(以上、安藤,1990)、
S:好汚濁性種，U:広適応性種，T:好清水性種(以上、Asai and Watanabe,1995)、RT:陸生珪藻RA:A群,RB:B群、伊藤・堀内,1991)

第40図　主要珪藻化石群集

5）VI層下層（No.721）

VI層下層（No.721）は、今回の分析に供された5試料中で最も多くの珪藻化石が含まれており、200個体以上が検出された。化石の保存状態は、ほとんどが完形殻であることから、状態としては普通（良好）である。検出された分類群は、淡水生種のみである。群集の構成は、湿地性種群を主として陸生種群を伴っている。特徴的に認められた種は、淡水生種で流水不定性種のPinnularia gibba、Pinnularia microstauron、Pinnularia rupestris、流水不明種のCymbella spp.、Fragilaria spp.、Pinnularia spp.、陸生珪藻のLuticora mutica、Pinnularia borealis、Pinnularia subcapitataなどである。

花粉分析

結果を第16表、第41図に示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出する。群集組成は、VI層下層（No.721）を除く4試料は類似し、木本花粉の割合がやや高い。VI層下層は、シダ類胞子が多産し、花粉化石では草本花粉が多く産出する。花粉化石の保存状態は、全体的に普通～やや悪い程度であるが、5試料の中ではVI層下層の保存状態がやや良好である。

花粉化石群集についてみると、検出される種類は5試料とも概ね類似する。木本花粉ではマツ属が多産し、亜属まで同定できたものの多くはマツ属複維管束亜属である。この他、モミ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。また、VI層上層（No.720）では、アカメガシワ属やノブドウ属なども多く産出する。

草本花粉は、いずれの試料もイネ科が多産し、アカザ科、アブラナ科などを伴う。その他、サナエタデ、ヨモギ属などの他に、ガマ属などの水湿地生植物も産出する。なお、多産したイネ科には、栽培種のイネ属も含まれる。イネ科全体に占めるイネ属花粉の割合は、SE03・2層（No.571）が約52.7%、SD03・9層（No.572）が約48.5%、SE04（No.614）が約38.6%、VI層上層（No.720）が約26.1%、VI層下層（No.721）が約41.2%である。この他の栽培種や栽培の可能性がある種類では、ソバ属やベニバナ属がみられる。なお、花粉・胞子以外では、回虫卵や鞭虫卵が微量認められる。

植物珪酸体分析

結果を第17表、第42図に示す。各試料からは、植物珪酸体が認められ、保存状態は比較的良好である。

第15表　珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	SE03	SD03	SE04	Ⅵ層	
					2層	B-B' 9層		上層	下層
	塩分	pH	流水		571	572	614	720	721
Thalassionema nitzschioides (Grun.) Grunow	Euh			A,B	–	1	–	–	–
Anomoeoneis sphaerophora (Kuetz.) Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind	D,E	–	1	–	–	–
Navicula halophila (Grun.) Cleve	Ogh-Meh	al-bi	ind	O,U	–	1	1	–	–
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	3	1	–	–
Nitzschia levidensis var. victoriae (Grun.) Cholnoky	Ogh-Meh	al-il	ind	U	–	1	–	–	–
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	–	1	–	–	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.) Mueller	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	1	1	–	2
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	–	16	6	4
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	–	1	–	1	–
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O,T	–	–	–	–	1
Cymbella cistula (Ehr.) Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,T	–	–	–	–	1
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	–	1	–	–	–
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	–	1	–	–	–
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	–	7
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind	O	–	1	–	–	–
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	–	1	–	–	3
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	1	–	–	–
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	–	–	–	–	1
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	1	–	–	–
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	–	–	–	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	3	–	–	4
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	–	2	–	–	4
Fragilaria ulna var. arcus (Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	–	1	–	–	–
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	–	2	–	–	–
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		12	8	–	–	17
Frustulia vulgaris (Thwaites) De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	–	–	5
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	–	–	–	–
Gomphonema angustum C.Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–
Gomphonema parvulum (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	8	8	–	–	6
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	–	–	–	–
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	1	–	–	–
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	36	29	37	29	14
Hantzschia amphioxys var. capitata Muller	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	7	2	1	8	3
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	–	8	7	–	8
Meridion circulare var. constrictum (Ralfs) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	–	–	–	1	–
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	–	1	–	–	–
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T	1	–	–	–	–
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	–	–	–	–
Navicula rhynchocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	–	–	–
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	–	1	–	–
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	O	1	–	–	–	1
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	1	–
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	–	1	2	–	2
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	–	–	1	–	–
Nitzschia fonticola Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	–	2	–	–
Nitzschia sinuata (W.Smith) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	1	–	–	–
Nitzschia umbonata (Ehr.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	–	2	–	–	2
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	6	–	–
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	3	3	12
Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	–	–	2
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	–	–	–	–	12
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	O	–	–	–	–	3
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	–	–	–	–
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	11	6	7	–	30
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	–	–	1	–	–
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	–	–	1	–	6
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,P	–	–	–	–	1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	12	19	18	11	16
Pinnularia subrupestris Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind	O	–	–	–	–	6
Pinnularia sudetica (Hilse) M.Peragallo	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O,P	–	–	–	–	3
Pinnularia viridiformis Krammer	Ogh-ind	ind	ind	N,O,U	–	–	1	–	3
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		17	9	7	–	27
Placoneis elginensis (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	–	1	–	–	–
Reimeria sinuata (Greg.) Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	–	–	1	–	–
Rhopalodia gibba (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	–	1	1	–	–
Rhopalodia quisumbirgiana Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind	O,U	1	–	–	–	–
Sellaphora laevissima (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	1	–	–	–	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	–	2	1	–	–
Stauroneis thermicola (Petersen) Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	–	1	–	–	–
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	1	2	–	–
Surirella ovata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	–	–	–	–
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	–	–	2	1	1
Surirella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	–	2	1	–
海水生種					0	1	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0
汽水生種					0	0	0	0	0
淡水～汽水生種					2	8	3	0	3
淡水生種					126	118	120	62	206
珪藻化石総数					128	127	123	62	209

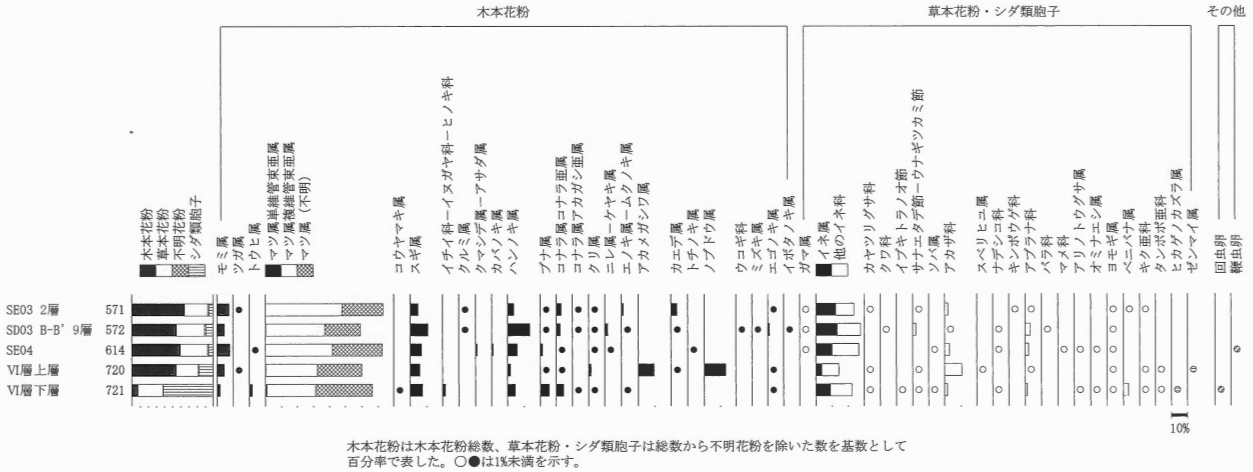
凡例

［適応性］

塩分:塩分濃度に対する適応性	pH:水素イオン濃度に対する適応性	流水:流水に対する適応性
Euh ： 海水生種	al-bi ： 真アルカリ性種	l-bi ： 真止水性種
Euh-Meh ： 海水生種-汽水生種	al-il ： 好アルカリ性種	l-ph ： 好止水性種
Meh ： 汽水生種	ind ： pH不定性種	ind ： 流水不定性種
Ogh-Meh ： 淡水生種-汽水生種	ac-il ： 好酸性種	r-ph ： 好流水性種
Ogh-hil ： 貧塩好塩性種	ac-bi ： 真酸性種	r-bi ： 真流水性種
Ogh-ind ： 貧塩不定性種	unk ： pH不明種	unk ： 流水不明種
Ogh-hob ： 貧塩嫌塩性		
Ogh-unk ： 貧塩不明種		

［環境指標種］

A:外洋指標種．B:内湾指標種．C1:海水藻場指標種．C2:汽水藻場指標種．D1:海水砂質干潟指標種．D2:汽水砂質干潟指標種．E1:海水泥質干潟指標種．E2:汽水泥質干潟指標種．F:淡水底生種群(以上、小杉,1988)、G:淡水浮遊生種群．H:河口浮遊性種群．J:上流性河川指標種．K:中～下流性河川指標種．L:最下流性河川指標種群．M:湖沼浮遊性種．N:湖沼沼沢湿地指標種．O:沼沢湿地付着生種．P:高層湿原指標種群．Q:陸域指標種群(以上、安藤,1990)、S:好汚濁性種．U:広適応性種．T:好清水性種(以上、Asai and Watanabe,1995)、R:陸生珪藻(RA:A群、RB:B群、RI:未区分、伊藤・堀内,1991)



第41図　花粉化石群集

また、SD03・9層（№572）を除く4試料からは珪化組織片も検出される。

植物珪酸体含量は、5試料を通じて200～2,900個/gであり、SE04（№614）とVI層上層・下層（№720・№721）とで比較的高いという特徴を示す。検出された分類群は、5試料より栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体が検出されるほか、SE03・2層（№571）を除く試料からはイネの籾殻に由来する穎珪酸体、短細胞列などの珪化組織片も検出される。この他、SE04、VI層上層・下層からは、ヨシ属やススキ属などが僅かに検出される。

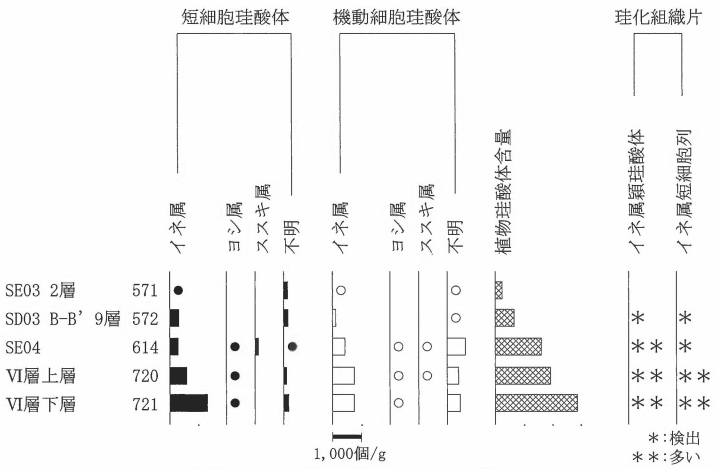
微細物（微細植物片）分析・種実同定

1）微細植物片分析

土壌試料の水洗選別によって得られた大型植物遺体の同定結果を第18表、堆積物200ccに換算した大型植物遺体群集組成を第43図に示す。分析に供された5試料からは、裸子植物5分類群（クロマツ、マツ属複維管束亜属、モミ属、スギ、ヒノキ）の葉（短枝・枝条含む）22個、種実3個と、被子植物42分類群（ハンノキ属、クワ属、ウメ、スモモ、モモ、アカメガシワ、サンショウ、タラノキ、クサギ、ニワトコ、タニウツギ属、イネ、アワ、オヒシバ、イネ科、イヌホタルイ近似種、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、ソバ、ザクロソウ、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科（A・B）、

第16表　花粉分析結果

種類	SE03 2層	SD03 B-B' 9層	SE04	VI層 上層	VI層 下層
	571	572	614	720	721
木本花粉					
モミ属	23	12	16	12	2
ツガ属	1	−	−	1	−
トウヒ属	−	−	1	−	2
マツ属単維管束亜属	−	1	−	1	1
マツ属複維管束亜属	148	97	84	86	32
マツ属（不明）	78	59	62	74	37
コウヤマキ属	−	−	−	−	1
スギ属	15	29	14	16	8
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	−	−	−	−	2
クルミ属	1	2	−	−	−
クマシデ属−アサダ属	−	−	2	−	−
カバノキ属	−	−	2	−	−
ハンノキ属	12	36	12	5	5
ブナ属	1	2	3	1	6
コナラ属コナラ亜属	10	7	1	2	5
コナラ属アカガシ亜属	1	1	−	−	1
クリ属	1	2	1	4	1
ニレ属−ケヤキ属	−	5	1	−	−
エノキ属−ムクノキ属	4	2	−	−	1
アカメガシワ属	−	−	−	26	−
カエデ属	11	1	−	1	−
トチノキ属	−	−	1	−	−
ノブドウ属	−	−	−	36	−
ウコギ科	−	2	−	−	−
ミズキ属	−	1	−	−	−
エゴノキ属	2	3	−	2	1
イボタノキ属	−	2	−	−	−
草本花粉					
ガマ属	3	1	1	−	−
イネ属	58	63	34	18	128
他のイネ科	52	67	54	51	183
カヤツリグサ科	2	−	−	1	7
クワ科	−	1	−	−	−
イブキトラノオ節	−	−	−	−	1
サナエタデ節−ウナギツカミ節	1	9	−	1	4
ソバ属	−	−	1	−	1
アカザ科	10	4	10	51	26
スベリヒユ属	−	−	−	1	−
ナデシコ科	−	1	1	−	7
キンポウゲ科	2	−	−	−	−
アブラナ科	4	15	7	2	18
バラ科	−	2	−	−	−
マメ科	−	−	1	−	−
アリノトウグサ属	−	−	1	−	3
オミナエシ属	−	−	1	−	2
ヨモギ属	1	1	1	1	5
ベニバナ属	1	−	−	−	42
キク亜科	1	−	−	2	1
タンポポ亜科	−	−	−	1	2
不明花粉					
不明花粉	9	9	4	7	9
シダ類胞子					
ヒカゲノカズラ属	−	−	−	−	1
ゼンマイ属	−	−	−	1	−
他のシダ類胞子	22	41	18	82	851
合　計					
木本花粉	308	264	200	267	105
草本花粉	135	164	112	129	430
不明花粉	9	9	4	7	9
シダ類胞子	22	41	18	83	852
合計（不明を除く）	465	469	330	479	1387
その他					
回虫卵	−	−	−	−	2
鞭虫卵	−	−	1	−	−



乾土1gあたりの個数で示す。●○は100個/g未満を定性的に示す。

第42図　植物珪酸体群集

第17表　植物珪酸体含量

(個/g)

分類群	SE03 2層	SD03 B-B' 9層	SE04	VI層 上層	VI層 下層
	571	572	614	720	721
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ属	<100	300	300	600	1,300
ヨシ属	−	−	<100	<100	<100
ススキ属	−	−	100	−	−
不明	100	200	<100	100	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ属	<100	100	400	800	800
ヨシ属	−	−	<100	<100	<100
ススキ属	−	−	<100	<100	−
不明	<100	<100	600	400	400
合　計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	200	500	500	700	1,600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	<100	200	1,100	1,200	1,300
植物珪酸体含量	200	700	1,600	1,900	2,900
珪化組織片					
イネ属穎珪酸体	−	＊	＊＊	＊＊	＊＊
イネ属短細胞列	−	＊	＊	＊＊	＊＊

＜100：100個/g未満
−:未検出．＊:検出．＊＊:多い

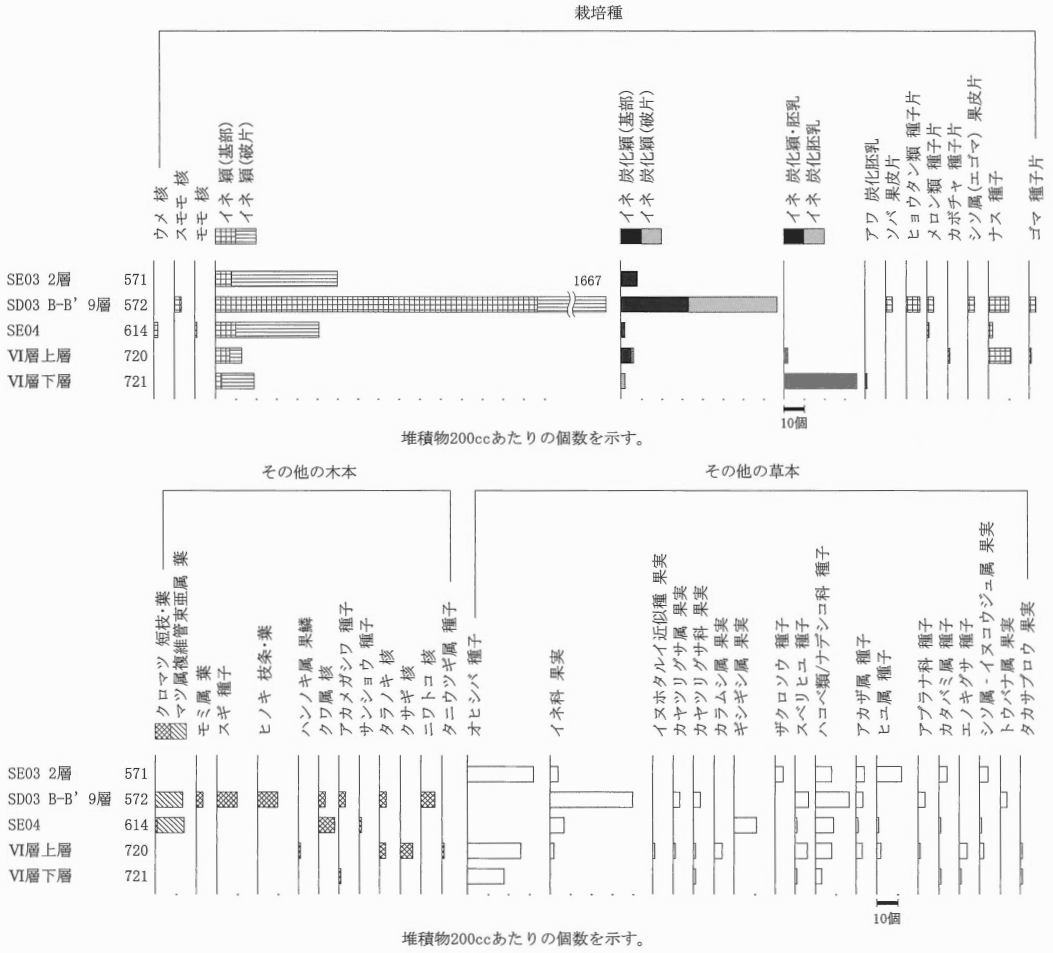
アカザ属、ヒユ属、アブラナ科（A、B）、カタバミ属、エノキグサ、ヒョウタン類、メロン類、カボチャ、シソ属（エゴマ）、シソ属－イヌコウジュ属、イヌコウジュ属、トウバナ属、ナス、ゴマ、タカサブロウ）の種実936個の、計961個が検出された。

大型植物遺体の出土状況は、SE03・2層（No.571：50cc）が35個、SD03・9層（No.572：60cc）が620個、SE04（No.614：200cc）が114個、VI層上層（No.720：200cc）が107個、VI層下層（No.721：200cc）が85個であった。大型植物遺体は、SD03・9層（No.572）より最も多く出土し、栽培種のイネの穎（破片；570個）がその多数（92%）占める。

栽培種は、ウメの核が2個（No.614）、スモモの核が1個（No.572）、モモの核が1個（No.614）、イネの穎が645個（No.571・No.572・No.614・No.720・No.721）、炭化穎が35個（No.571・No.572・No.614・No.720・No.721）、炭化穎・胚乳が2個（No.721）、炭化胚乳が36個（No.720・No.721）、アワの炭化胚乳が1個（No.721）、ソバの果実が1個（No.572）、ヒョウタン類の種子が2個（No.572）、メロン類の種子が2個（No.572・No.614）、カボチャの種子が1個（No.720）、シソ属（エゴマ）の果実が1個（No.572）、ナスの種

第18表　微細植物片分析結果

分類群	部位	状態		SE03 2層 571	SD03 B-B' 9層 572	SE04 614	VI層 上層 720	VI層 下層 721	備考
木本									
クロマツ	短枝・葉	破片		-	-	1	-	-	葉横断面確認
マツ属複維管束亜属	葉	破片		-	4	13	-	-	
モミ属	葉	破片		-	1	-	-	-	
スギ	種子	完形		-	3	-	-	-	
ヒノキ	枝条・葉	完形		-	3	-	-	-	
ハンノキ属	果鱗	完形		-	-	-	1	-	
クワ属	核	完形		-	1	6	-	-	
		破片		-	-	2	-	-	
ウメ	核	完形		-	-	1	-	-	
		完形未満		-	-	1	-	-	表面大半欠損
スモモ	核	破片		-	1	-	-	-	
モモ	核	破片		-	-	1	-	-	半分
アカメガシワ	種子	破片		-	1	-	-	1	
サンショウ	種子	破片		-	-	1	-	-	
タラノキ	核	完形		-	-	-	1	-	
		破片		-	1	-	2	-	
クサギ	核	破片(背面)		-	-	-	5	-	
		破片(腹面)		-	-	-	1	-	
ニワトコ	核	破片		-	2	-	-	-	
タニウツギ属	種子	完形		-	-	-	1	-	
草本									
イネ	穎	破片(基部)		2	47	10	7	3	
		破片		13	500	41	6	16	
	穎	破片(基部)	炭化	2	10	2	5	-	
		破片	炭化	-	13	-	1	2	
	穎・胚乳	完形	炭化	-	-	-	-	2	
	胚乳	完形	炭化	-	-	-	-	8	
		完形未満	炭化	-	-	-	1	5	
		破片	炭化	-	-	-	1	21	721:2個接着
アワ	胚乳	完形	炭化	-	-	-	-	1	
オヒシバ	種子	完形		8	-	-	25	18	
		破片		-	-	-	1	-	
イネ科	果実	完形		1	3	7	2	-	複数種
		破片		-	9	-	-	-	
イヌホタルイ近似種	果実	完形		-	-	-	1	-	
カヤツリグサ属	果実	完形		-	1	-	1	-	
カヤツリグサ科(2面体)	果実	完形		-	1	-	1	1	
カラムシ属	果実	完形		-	-	-	4	-	
ギシギシ属	果実	完形		-	-	3	-	-	
	花被	破片		-	-	8	-	-	
ソバ	果実	破片		-	1	-	-	-	
ザクロソウ	種子	完形		1	-	-	-	-	
スベリヒユ	種子	完形		-	-	1	6	1	
		破片		-	2	-	-	-	
ハコベ類	種子	完形		1	2	3	2	2	
		破片		-	2	5	-	-	
ナデシコ科A	種子	完形		1	-	-	3	-	
		破片		-	-	1	-	1	
ナデシコ科B	種子	完形		-	1	-	3	-	
アカザ属	種子	完形		1	1	1	2	-	
		破片		-	-	-	1	-	
ヒユ属	種子	完形		3	-	1	1	-	
		破片		-	-	-	1	-	
アブラナ科A	種子	完形		-	1	-	-	-	
アブラナ科B	種子	完形		-	-	-	1	-	
カタバミ属	種子	完形		1	-	1	-	1	
エノキグサ	種子	破片		-	-	-	4	1	
ヒョウタン類	種子	破片(基部)		-	2	-	-	-	
メロン類	種子	破片(基部)		-	-	1	-	-	
		破片		-	1	-	-	-	
カボチャ	種子	破片		-	-	-	1	-	
シソ属(エゴマ)	果実	破片		-	1	-	-	-	
シソ属 - イヌコウジュ属	果実	完形		-	-	1	-	-	
		破片		1	-	-	1	-	
イヌコウジュ属	果実	完形		-	-	-	1	-	
トウバナ属	果実	完形		-	1	-	-	-	
ナス	種子	完形		-	-	1	1	-	
		破片		-	3	1	10	-	
ゴマ	種子	破片		-	1	-	1	-	
タカサブロウ	果実	完形		-	-	-	1	1	
合計									
木本種実・葉				-	17	26	11	1	計55個
草本種実				35	603	88	96	84	計906個
合計				35	620	114	107	85	計961個
その他(主なものを抽出・同定対象外)									
木材				-	-	+	+	-	
炭化材				+	+	+	+	+	
シダ類の葉				+	-	-	-	-	
蘚苔類の茎・葉				-	+	+	-	-	
昆虫類				-	+	+	+	-	
骨片				-	+	+	-	+	SD03:椎骨1個(径8.1mm)含む
魚類の鱗				-	+	-	-	-	
砂礫類				+	+	+	+	+	
分析量				50	60	200	200	200	容積(cc)
				75	80	309	364	359	湿重(g)



第43図　大型植物遺体群集

子が16個（No.572・No.614・No.720）、ゴマの種子が2個（No.572・No.720）の、計748個が確認され、大型植物遺体群全体の78％を占める。

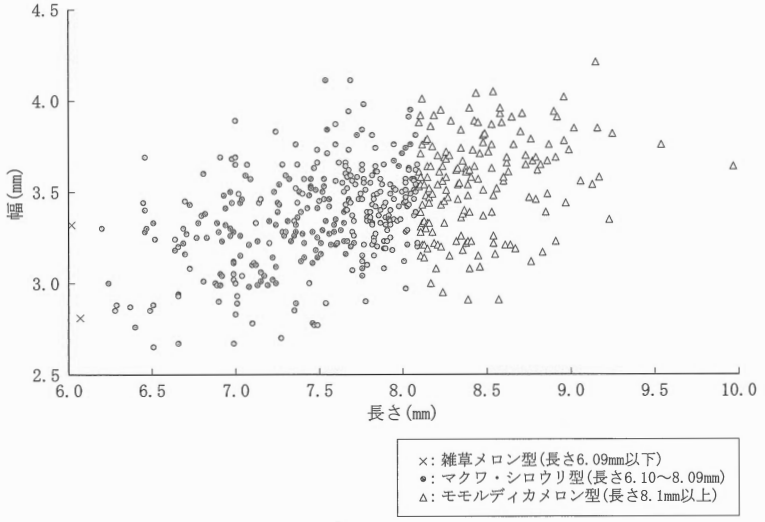
栽培種を除いた分類群では、木本はSD03・9層（No.572）を除く4試料から検出される、常緑針葉樹で高木になるクロマツ（No.614）、マツ属複維管束亜属（No.572・No.614）、モミ属（No.572）、スギ（No.572）、ヒノキ（No.572）と、落葉広葉樹で高木になるハンノキ属（No.720）、クワ属（No.572・No.614）、アカメガシワ（No.721）、低木のサンショウ（No.614）、タラノキ（No.572・No.720）、クサギ（No.720）、ニワトコ（No.572）、タニウツギ属（No.720）が確認された。

草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群から成り、やや乾いた場所や湿った場所にも生育可能なオヒシバ（No.571・No.720・No.721）、イネ科（No.571・No.572・No.614・No.720）、カヤツリグサ属（No.572・No.720）、カヤツリグサ科（No.572・No.720・No.721）、カラムシ属（No.720）、ギシギシ属（No.614）、ザクロソウ（No.571）、スベリヒユ（No.614・No.720・No.721）、ハコベ類（No.571・No.572・No.614・No.720・No.721）、ナデシコ科（No.571・No.572・No.614・No.720・No.721）、アカザ属（No.571・No.572・No.614・No.720）、ヒユ属（No.571・No.614・No.720）、アブラナ科（No.572・No.720）、カタバミ属（No.571・No.614・No.721）、エノキグサ（No.720・No.721）、シソ属－イヌコウジュ属（No.571・No.614・No.720）、イヌコウジュ属（No.720）などの、中生植物を主体とし、抽水植物のイヌホタルイ近似種（No.720）や、湿生植物のトウバナ属（No.572）、タカサブロウ（No.720・No.721）などもわずかに確認された。

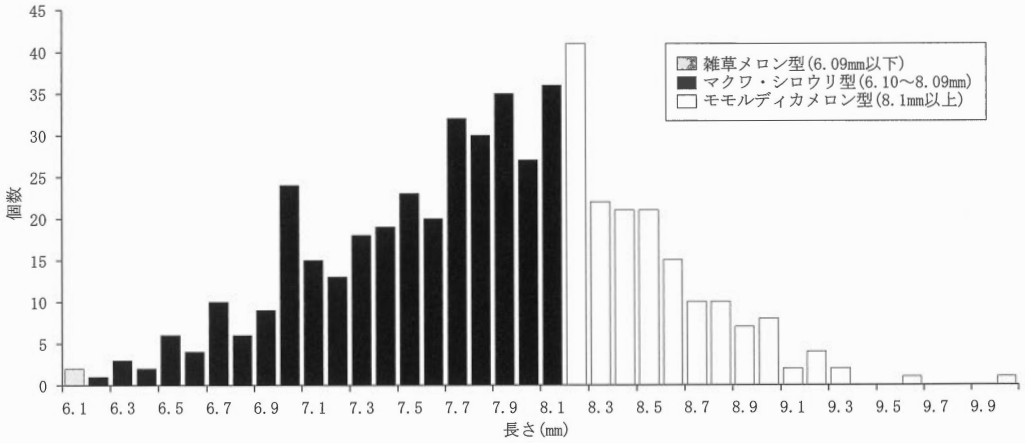
第19表　種実同定結果

遺物番号	遺構番号	分類群	部位	状態	個数	大きさ(mm)*			備考
						長さ	幅	厚さ	
No.350-6	SD02・03-2区	イチョウ	種子	破片	1	11.9 +	18.0 +	12.2 +	
No.389-2	SD02	ウメ	核	完形	1	13.9	12.8	10.9	
No.443-2	SD03-1区	モモ	核	完形	1	25.5	18.5	13.2	
No.530	SK26	アブラチャン	果実・種子	完形	1	11.3	12.1	9.8	
		雑草メロン型	種子	完形	2				
		マクワ・シロウリ型	種子	完形	333	7.8 ±0.6	3.4 ±0.3	1.3 ±0.3	500個の平均±標準偏差
		モモルディカメロン型	種子	完形	165				
		メロン類	種子	完形	2,765	−	−	−	計測対象外
				完形未満	99	−	−	−	計測対象外
				破片	201	−	−	−	計測対象外
No.695-3	SK30	カキノキ属	種子	破片	4	16.1 +	8.9 +	−	
No.784	SD05	ヒョウタン類	種子	完形	12	16.1 ±0.6	7.2 ±0.2	2.6 ±0.2	12個の平均±標準偏差
				完形未満	22	−	−	−	計測対象外
				破片	27	−	−	−	計測対象外
No.796	SX11	オニグルミ	核	半分	2	32.9	23.0	23.0	接合し完形1個
合計 3,636									

*計測はデジタルノギスを使用。破損部は残存値に「+」で示す。



第44図　SK26（No.530）出土メロン類種子の大きさ（n=500）



第45図　SK26（No.530）出土メロン類種子の長さ（n=500）

2）種実同定

水洗・抽出済の種実試料の同定結果を第19表に示す。分析に供された7試料からは、裸子植物1分類群（イチョウ）1個、被子植物10分類群（オニグルミ、アブラチャン、ウメ、モモ、カキノキ属、ヒョウタン類、メロン類（雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、モモルディカメロン型））3,635個の、計3,636個の種実が同定された。栽培種は、イチョウの種子が1個（№350-6）、ウメの核が1個（№389-2）、モモの核が1個（№443-2）、カキノキ属の種子が4個（№695-3）、ヒョウタン類の種子が61個（№784）、メロン類の種子が3,565個（№530）の、計3,633個が確認された。

最も多く確認されたメロン類（№530）は、保存状態が良好な完形種子500個の大きさを計測した結果、長さが最小6.02 - 最大9.97（平均7.79 ± 標準偏差0.63）、幅が2.65 - 4.21（平均3.42 ± 0.28）、厚さが0.4 - 1.98（平均1.26 ± 0.3）であった。また、種子の長さは、藤下（1984）の基準による雑草メロン型が2個（0.4%）、マクワ・シロウリ型が333個（66.6%）、モモルディカメロン型が165個（33.0%）に分類された（第44・45図）。

以下に、今回の分析で確認された大型植物遺体のうち、主な種類の形態的特徴を記す。

・イチョウ（Ginkgo biloba L.）　イチョウ科イチョウ属

種子が検出された。淡灰褐色、長さ約2cm、径1.5cm程度の広楕円体。頂部から基部にかけて2本の稜があり、両端は短く尖る。種皮は堅く、表面は粗面。半分が欠損する。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　マツ科

短枝、針葉が検出された。灰褐色、短枝から2針葉が伸びる。針葉は、長さは最大で4cm程度、径1mm程度の針形で、横断面は半円形。中心部に2個の維管束がある。一部の葉横断面を観察した結果、4～10個程度の樹脂道が葉肉内に点在するため、クロマツ（P. thunbergii Parlatore）であることがわかる。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. subsp. Sieboldiana（Maxim.）Kitamura）　クルミ科クルミ属

核が検出された。灰褐色、完形ならば広卵体で先端部分がやや尖る。径3cm。1本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れているが、これらは接合することから、実際の個体数は1つである。核皮は硬く、表面は縦方向に溝状の浅い彫紋が走りごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。

・クワ属（Morus）　クワ科

種子が検出された。灰褐色、完形ならば長さ2mm、径1.8mm程度の三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄く、一辺が鋭利。基部は爪状突起がある。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・ウメ（Prunus Mume（Sieb.）Sieb. et Zucc.）　バラ科サクラ属

核（内果皮）の破片が検出された。茶褐色で、レンズ状の広楕円形。長さ1.5cm、幅1cm程度。基部は丸く臍点があり、一方の側面には縫合線が発達する。内果皮は厚く硬く、表面には小凹点が分布する。

・スモモ（Prunus salicina Lindley）　バラ科サクラ属

核（内果皮）破片が検出された。側面には縫合線が発達する。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

・モモ（Prunus parsica Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）の完形が半分の状態で検出された。褐色～黒褐色。広楕円形でやや偏平。基部は丸く

大きな臍点があり、先端部はやや尖る。長さ3cm、幅2cm、厚さ1.5cm程度。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られ、縫合線に沿って半分に割れやすく、半分に割れた個体もある。表面は縦に流れる不規則な線状のくぼみがあり、全体として粗いしわ状に見える。

・カキノキ属（Diospyros）　カキノキ科

種子が検出された。破片のため全体の大きさが不明であるが、半月形で、最低でも2cm以上はあると思われる。全体の形状が不明であり小型のカキとの区別が付かないことから、カキノキ属としている。

・イネ（Oryza sativa L.）　イネ科イネ属

炭化した穎、非炭化の穎、炭化した胚乳が検出された。穎は炭化して黒色のものと、淡褐色で炭化していないものがある。基部に特徴的な果実序柄がある。穎は薄く、表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。胚乳は黒色、長楕円形でやや偏平。長さ6mm程度。一端に胚が脱落した凹部があり、両面はやや平滑で2～3本の縦溝がある。

・アワ（Setaria italica（L.）P.Beauv.）　イネ科エノコログサ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、径1.5mm、厚さ1mm程度の半偏球体で背面は丸みがあり腹面は平ら。基部正中線上に胚の凹みがある。窪みは切れ込みが浅く、孔の深さも浅い。

・ソバ（Fagopyrum esculentum Moench）　タデ科ソバ属

果実の破片が検出された。灰褐色、完形なら約5mmの三稜状広卵体。一部の稜と頂部を欠き、基部のみ残る。果皮表面はやや平滑。

・ヒョウタン類（Lagenaria siceraria Standl.）　ウリ科ヒョウタン属

種子が検出された。扁平な倒広皮針体。大きさは、約1.5cm程度。頂部は切形で角張り、基部は切形で臍と発芽口がある。種皮表面は粗面で、両面外縁部の幅広く低い稜に2本の縫線がある。

・メロン類（Cucumis melo L.）　ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡灰褐色、狭倒皮針形で偏平。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。完形種子の多くは、藤下（1984）の基準によるマクワ・シロウリ型の中粒種子（長さ6.1-8.0mm）に該当するものが最も多いが、小型の雑草メロン型（長さ6.0mm以下）は微量認められるほか、大粒のモモルディカメロン型（長さ8.1mm以上）も比較的多いことから、複数の品種が混じっている可能性が高い（第44・45図）。

・カボチャ（Cucurbita）　ウリ科カボチャ属

種子の破片が検出された。灰褐色、完形ならば大きさ1.5cm程度の偏平な倒卵体。基部にあたる切形の大きな臍がわずかに残る。完形なら全周に走る明瞭な縁があるが、検出された個体にも一部が残存し、段差がある。種皮表面は粗面である。

カボチャは栽培種の総称で、日本では16世紀に渡来したニホンカボチャ、19世紀に渡来したセイヨウカボチャ、セイヨウカボチャよりさらに後れて渡来したペポカボチャの3種が現在栽培されている（藤枝1995）。

・エゴマ（Perilla frutescens（L.）Britt. var. japonica Hara）　シソ科シソ属

果実が検出された。暗灰褐色、倒広卵体、果実基部に大きな着点部があり、舌状に突出する。果皮は厚く柔らかく、厚さは0.1mm程度。表面には浅く大きく不規則な網目模様がある。破片の個体は大きく、推定される大きさが2mm程度であったため、中山ほか（2000）の計測値を参考にエゴマとした。

・シソ属－イヌコウジュ属（Perilla - Mosla）シソ科

上述したエゴマに似るが、大きさが1.5mm前後のものをシソ属－イヌコウジュ属とした。ただし、

栽培種のエゴマと、シソを含むシソ属、野生種のイヌコウジュ属の果実は、大きさの変異が連続的であるため、これらの中にエゴマを含んでいる可能性もある。

・ナス（Solanum melongena L.）　ナス科ナス属

種子が検出された。灰褐色、大きさ3.5㎜厚さ1㎜の偏平で歪な腎臓形。基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮はやや厚く、表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。

・ゴマ（Sesamum indicum L.）　ゴマ科ゴマ属

種子が検出された。淡褐色、広皮針形で大きさは4㎜程度。扁平で、表面はざらつく。片面の表面に縦方向の浅い筋が走る。基部側の約1/3が残存し、あとは欠損する。

(4) 考　察

堆積環境

珪藻化石の群集組成が類似するSD03（背割水路）(№572）及び井戸（№571・№614）より検出された特徴種の生育環境を概説すると、まず、流水不定性種のGomphonema parvulumは、流水、塩分濃度、pHに対しても極めて高い適応能力を持つ種であり、さまざまな水域に認められる。そのため、Asai and Watanabe（1995）は、広域適応種としている。同じく、流水不定性種のPinnularia microstauronは、富栄養化した湿地に認められる場合が多く、Asai and Watanabe（1995）によれば、好汚濁性種とされている。流水不明種のFragilaria spp.、Pinnularia spp.は、種は不明であるものの、これらの属は、湿地から沼沢湿地に認められることが多い傾向にある。陸生珪藻のHantzschia amphioxys、Pinnularia subcapitataなどは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群である（小杉1986)。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内1989・1991)。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70～80％以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。

以上のことから、井戸埋積時の環境は、地下水位は低く、やや湿った状況であったとみられ、陸生珪藻は当時の地表面などの好気的な場所からの混入が推定される。また、SD03（背割水路）の試料は底面層より採取された土壌であることから、当時の表層土の混入が想定されるほか、普段はやや湿っている程度で水の流れはほとんどなかったと思われる。

次に、上記した3試料と異なる群集組成を示したⅥ層下層(№721)で検出された特徴的な種類のうち、前述していない種について述べると、流水不定性種のPinnularia gibba は、好酸性（最適pH6付近)、富栄養から貧栄養種、湧泉・小川等にみられる着生種とされる（中島他1978)。同じく、流水不定性種のPinnularia rupestrisは、貧塩－嫌塩性種、好酸性、流水不定性であり、比較的広範に生育するが、湿原、湿地あるいは沼沢地などに生育していることの多い種である。このことから、基本的には湿地であったが、好気的な場所も存在したと考えられる。一方、Ⅵ層上層（№720）では、陸生珪藻が多く、保存状態も悪いことから、好気的環境にあったと考えられる。

周辺植生

栽培種を除く分類群のうち、確認された木本種実についてみると、常緑針葉樹で高木になるクロマツ、マツ属複維管束亜属、モミ属、スギ、ヒノキと、落葉広葉樹で高木になるオニグルミ、ハンノキ属、クワ属、アカメガシワ、低木のアブラチャン、サンショウ、タラノキ、クサギ、ニワトコ、タニウツギ属などが検出された。また、木本花粉ではマツ属が多産し、モミ属、スギ属、ハンノキ属、コ

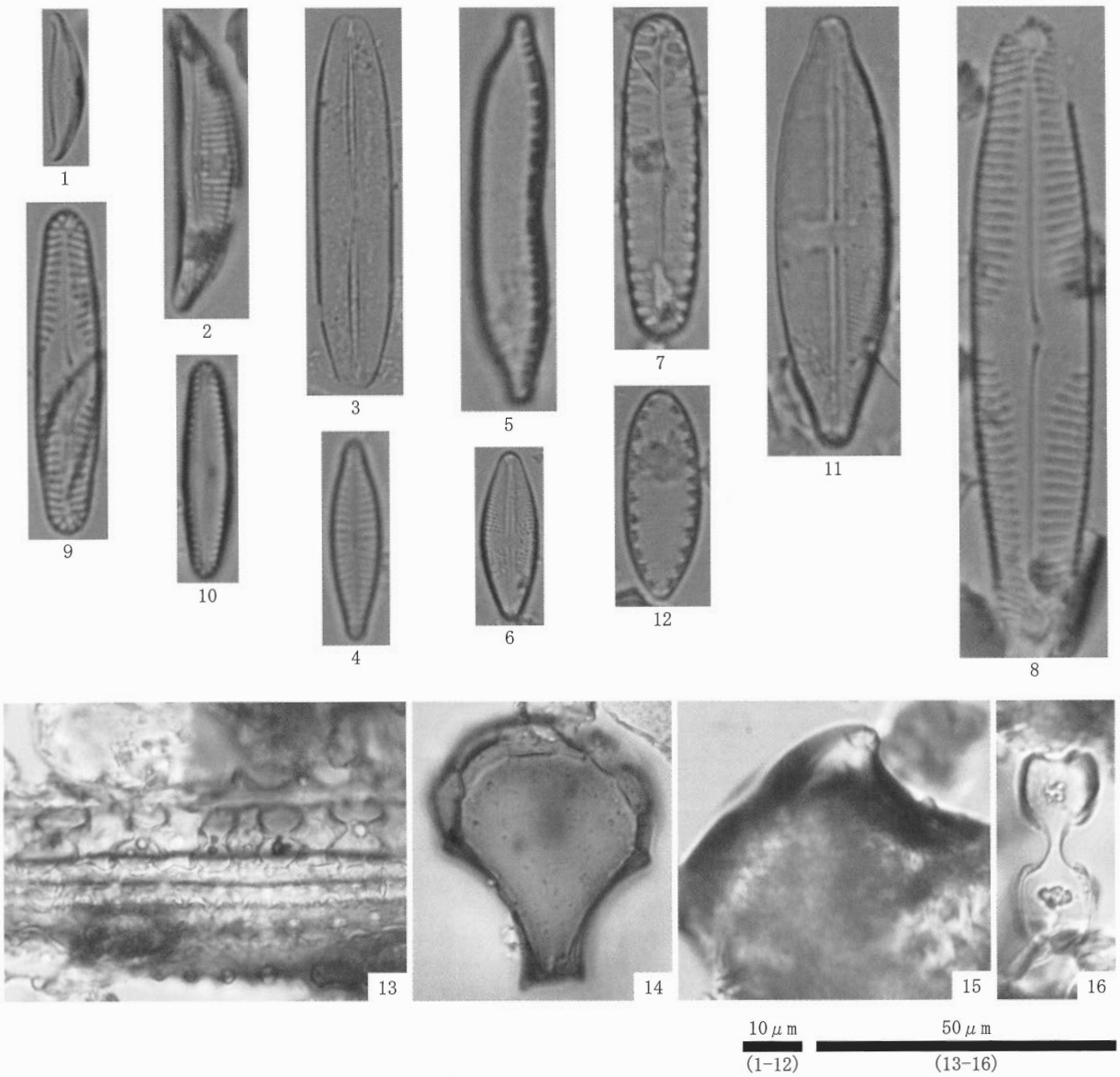
ナラ属コナラ亜属、アカメガシワ属、ノブドウ属などが産出した。これらの生態性をみると、マツ属やタラノキ、アカメガシワなどの成長が早く二次林を構成する種類や、スギやオニグルミ、クマシデ属－アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、エノキ属－ムクノキ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属、アブラチャンなど傷害に強く河畔林を構成する種類からなる。調査地は富山城下町の武家屋敷および町屋敷の範囲にあたることから、屋敷地周辺に生育した種類や、富山城下町周辺を流下した旧神通川などの河畔や湿地などに生育していた森林植生を反映していると考えられる。なお、スギやマツは花粉や葉などが確認されており、これらは成長が早く、景観が美しいことから、護岸、防風目的で今日でも植栽されることが多い。おそらく、富山城内や城下町などに植栽されていた樹木に由来する可能性がある。

また、草本類では、栽培種を除いた草本種実は、やや乾いた場所や湿った場所にも生育可能なオヒシバ、イネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、ギシギシ属、ザクロソウ、スベリヒユ、ハコベ類、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、アブラナ科、カタバミ属、エノキグサ、シソ属－イヌコウジュ属、イヌコウジュ属や、抽水植物のイヌホタルイ近似種、湿生植物のトウバナ属、タカサブロウなどの種実が検出された。草本花粉では、イネ科の割合が高く、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科、アブラナ科、ヨモギ属など開けた場所を好む種類が認められ、植物珪酸体では湿潤な場所を好むヨシ属や開けた場所を好むススキ属も検出された。上述したように、調査地周辺は、城下町として開発が進んでいることから、確認された種類は、調査地周辺にいわゆる雑草として生育していたとみられる。また、背割水路内は、珪藻分析の結果から、流れが小さい帯水域で埋積が進んでいったことが指摘されたことから、水路内には上記した湿性植物が生育していた可能性がある。

植物利用

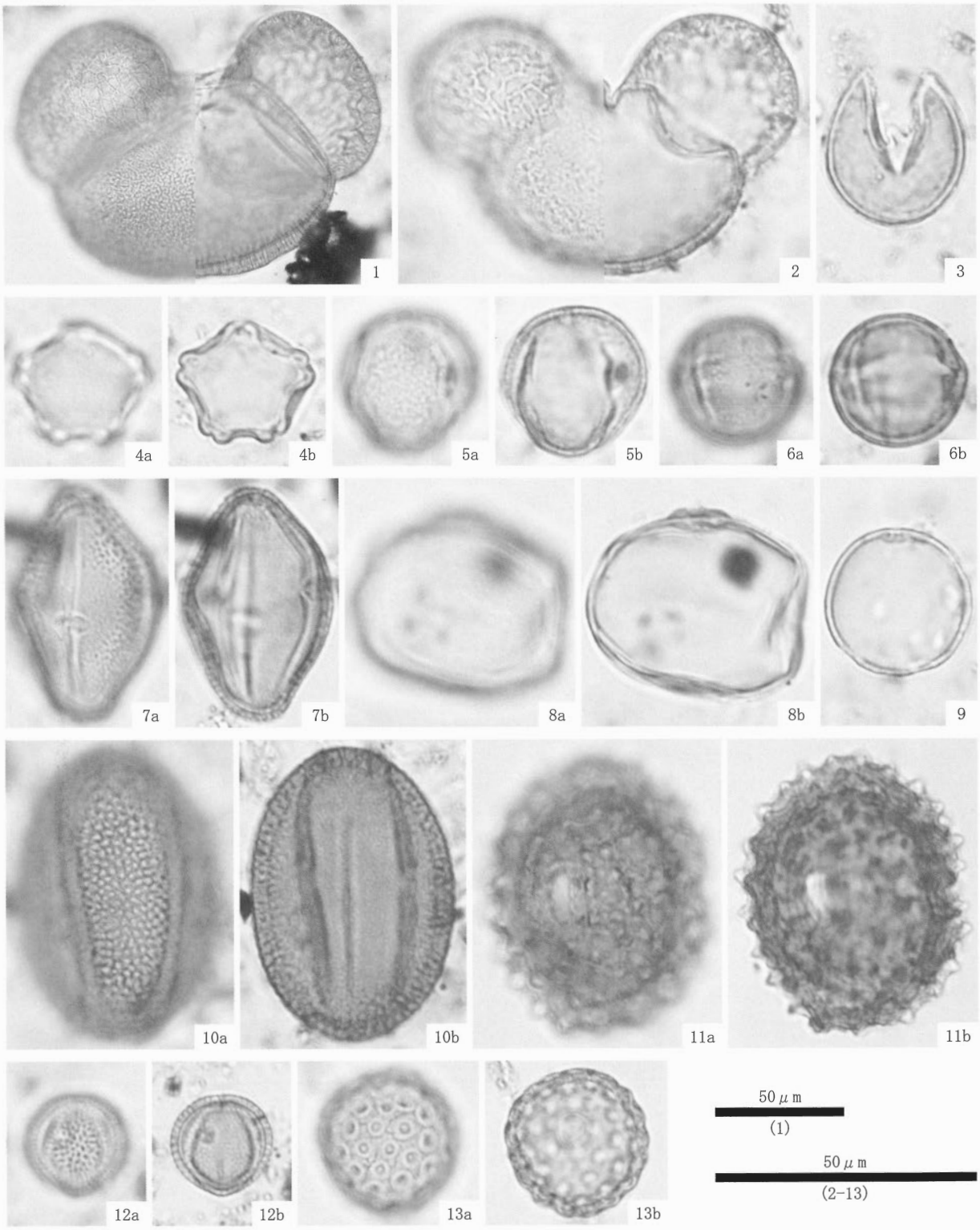
SD03（背割水路）や井戸跡、土坑及び包含層（Ⅵ層）からは、イチョウ、ウメ、スモモ、モモ、カキノキ属、イネ、アワ、ソバ、ヒョウタン類、メロン類、カボチャ、シソ属（エゴマ）、ナス、ゴマの種実が出土した。これらの出土した栽培種は、当時利用された植物質食料と考えられる。なお、SK26（№530）より多量出土したメロン類は、出土種実の計測結果によれば、中粒種子のマクワ・シロウリ型が66.6％と最も多く、大粒種子のモモルディカメロン型が33.0％と次ぎ、小粒種子の雑草メロン型は0.4％と少量であった。この結果を参考すると、マクワ・シロウリ型を主体とする複数の系統のメロン類の利用が窺える。

また、花粉分析では、イネ属型、ソバ属、ベニバナ属の花粉が、植物珪酸体分析においてもイネが検出された。この結果から、当該期の城下町周辺でのこれらの栽培の可能性が考えられる。なお、イネについては、上述したように種実（穎、胚乳）としても検出されており、イネは開花後も稲籾（穎）の中に花粉が残留することが知られている。以上の点を踏まえると、検出されたイネ属花粉は稲籾に由来するものも含まれている可能性を考慮する必要がある。



1. *Amphora montana* Krasske (SE03 2層;No.571)
2. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (SD03 B-B' 9層;No.572)
3. *Frustulia vulgaris* (Thwaites) De Toni (SD03 B-B' 9層;No.572)
4. *Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing (SE03 2層;No.571)
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (SE03 2層;No.571)
6. *Luticola mutica* (Kuetz.) D.G.Mann (SE04;No.614)
7. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (SE04;No.614)
8. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (VI層下層;No.721)
9. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve (SE04;No.614)
10. *Pinnularia subcapitata* Gregory (SE03 2層;No.571)
11. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (SD03 B-B' 9層;No.572)
12. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W.Smith) Hustedt (SE04;No.614)
13. イネ属短細胞列(VI層下層;No.721)　14. イネ属機動細胞珪酸体(VI層上層;No.720)
15. イネ属穎珪酸体(SE04;No.614)　16. ススキ属短細胞珪酸体(SE04;No.614)

第46図　珪藻化石・植物珪酸体

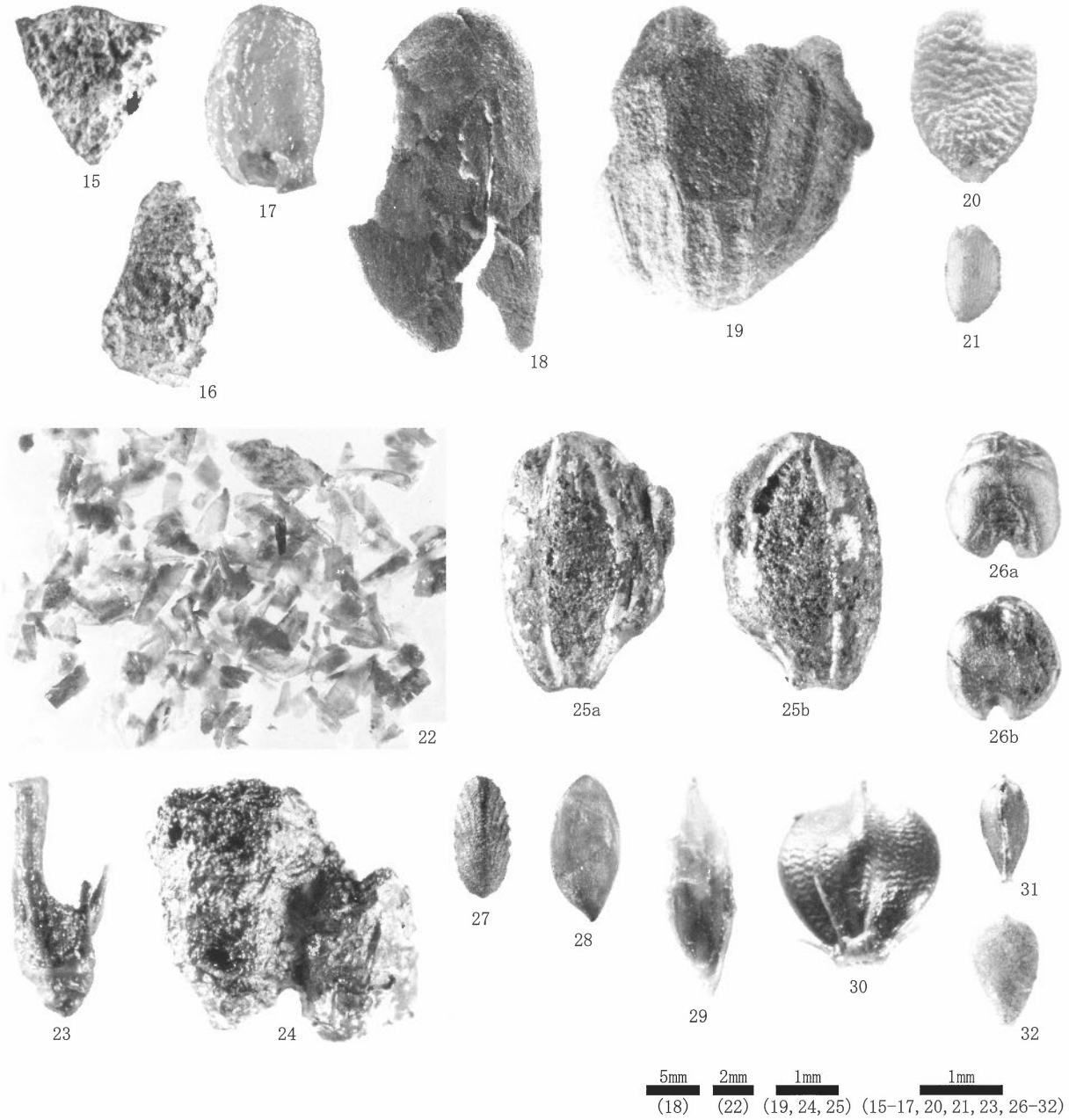


1. モミ属(SD03 B-B' 9層;No.572)
2. マツ属(SD03 B-B' 9層;No.572)
3. スギ属(SD03 B-B' 9層;No.572)
4. ハンノキ属(SD03 B-B' 9層;No.572)
5. コナラ属コナラ亜属(SD03 B-B' 9層;No.572)
6. アカメガシワ属(VI層上層;No.720)
7. ノブドウ属(VI層上層;No.720)
8. イネ属(SD03 B-B' 9層;No.572)
9. イネ科(SD03 B-B' 9層;No.572)
10. ソバ属(SE04;No.614)
11. ベニバナ属(VI層下層;No.721)
12. アブラナ科(SD03 B-B' 9層;No.572)
13. アカザ科(VI層上層;No.720)

第47図　花粉化石

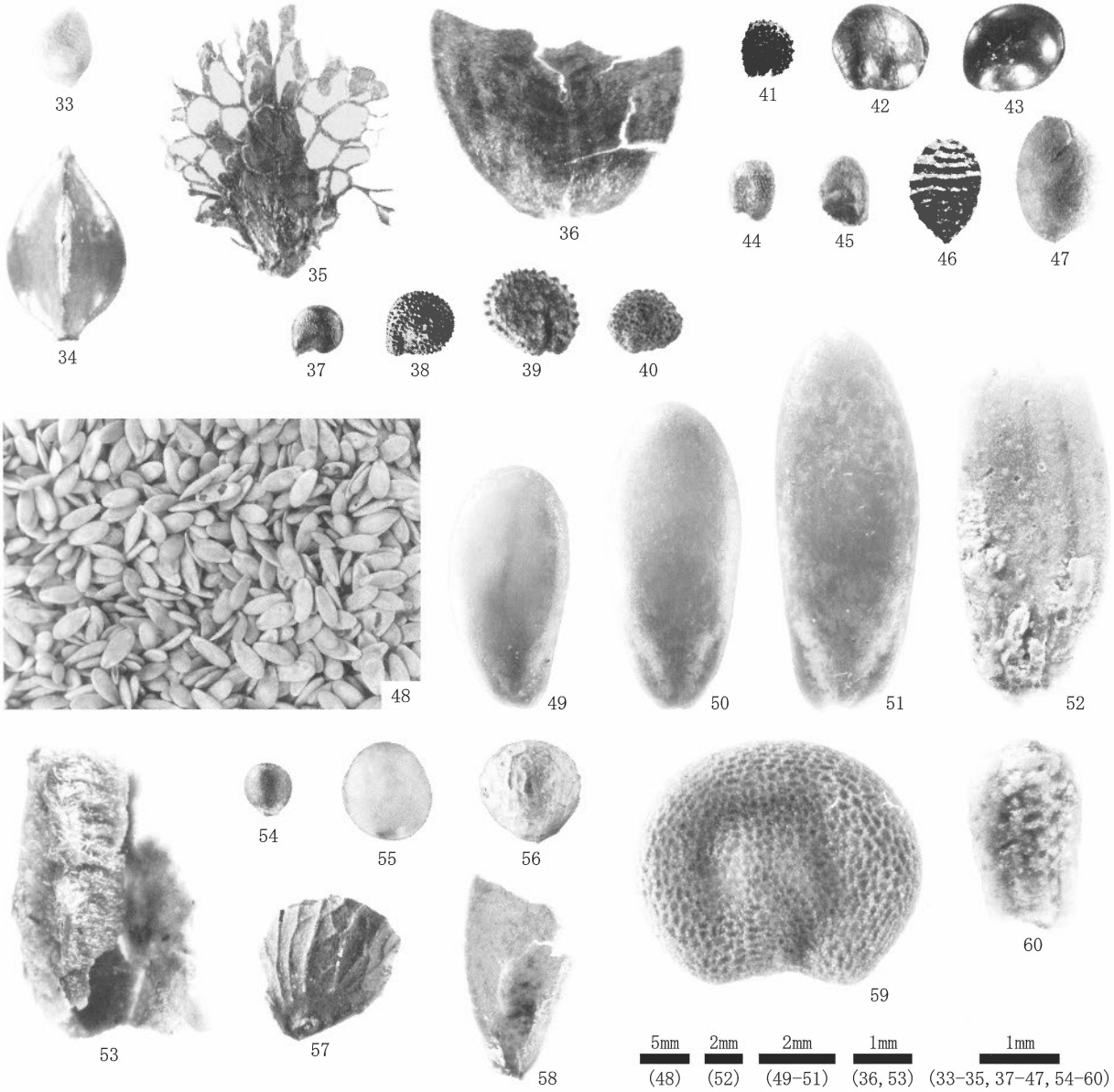
1. クロマツ 短枝・葉(SE04;No.614)
2. モミ属 葉(SD03 B-B' 9層;No.572)
3. スギ 種子(SD03 B-B' 9層;No.572)
4. ヒノキ 枝条・葉(SD03 B-B' 9層;No.572)
5. イチョウ 種子(SD02・03;No.350-6)
6. オニグルミ 核(SX04;No.796)
7. ハンノキ属 果鱗(VI層上層;No.720)
8. クワ属 核(SE04;No.614)
9. アブラチャン 果実・種子(SK26;No.530)
10. ウメ 核(SD02;No.389-2)
11. ウメ 核(SE04;No.614)
12. スモモ 核(SD03 B-B' 9層;No.572)
13. モモ 核(SE04;No.614)
14. モモ 核(SD03;No.443-2)

第48図　大型植物遺体（1）



15. アカメガシワ 種子(Ⅵ層下層;No.721)
16. サンショウ 種子(SE04;No.614)
17. タラノキ 核(Ⅵ層上層;No.720)
18. カキノキ属 種子(SK30;No.695-3)
19. クサギ 核(背面)(Ⅵ層上層;No.720)
20. ニワトコ 核(SD03 B-B' 9層;No.572)
21. タニウツギ属 種子(Ⅵ層上層;No.720)
22. イネ 穎(SD03 B-B' 9層;No.572)
23. イネ 穎(基部)(SD03 B-B' 9層;No.572)
24. イネ 胚乳(2個接着)(Ⅵ層下層;No.721)
25. イネ 穎・胚乳(Ⅵ層下層;No.721)
26. アワ 胚乳(Ⅵ層下層;No.721)
27. オヒシバ 種子(Ⅵ層上層;No.720)
28. イネ科 果実(SE04;No.614)
29. イネ科 果実(SD03 B-B' 9層;No.572)
30. イヌホタルイ近似種 果実(Ⅵ層上層;No.720)
31. カヤツリグサ属 果実(Ⅵ層上層;No.720)
32. カヤツリグサ科 果実(Ⅵ層上層;No.720)

第49図 大型植物遺体 (2)



33. カラムシ属　果実(VI層上層;No.720)
34. ギシギシ属　果実(SE04;No.614)
35. ギシギシ属　花被(SE04;No.614)
36. ソバ　果実(SD03 B-B' 9層;No.572)
37. ザクロソウ　種子(SE03 2層;No.571)
38. スベリヒユ　種子(VI層上層;No.720)
39. ハコベ類　種子(SE04;No.614)
40. ナデシコ科A　種子(VI層上層;No.720)
41. ナデシコ科B　種子(VI層上層;No.720)
42. アカザ属　種子(VI層上層;No.720)
43. ヒユ属　種子(SE03 2層;No.571)
44. アブラナ科A　種子(SD03 B-B' 9層;No.572)
45. アブラナ科B　種子(VI層上層;No.720)
46. カタバミ属　種子(VI層下層;No.721)
47. エノキグサ　種子(VI層上層;No.720)
48. メロン類　種子(SK26;No.530)
49. 雑草メロン型　種子(SK26;No.530)
50. マクワ・シロウリ型　種子(SK26;No.530)
51. モモルディカメロン型　種子(SK26;No.530)
52. ヒョウタン類　種子(SD05;No.784)
53. カボチャ　種子(VI層上層;No.720)
54. トウバナ属　果実(SD03 B-B' 9層;No.572)
55. イヌコウジュ属　果実(VI層上層;No.720)
56. シソ属 - イヌコウジュ属　果実(SE04;No.614)
57. シソ属(エゴマ)　果実(SD03 B-B' 9層;No.572)
58. ゴマ　種子(SD03 B-B' 9層;No.572)
59. ナス　種子(SE04;No.614)
60. タカサブロウ　果実(VI層下層;No.721)

第50図　大型植物遺体（3）

第3節　木製品について

斉藤紀行・高橋　敦（パリノ・サーヴェイ株式会社）

(1) 試　料

樹種同定

試料は、背割水路や土坑などから出土した木製品15点である。なお、後述する漆塗膜分析に供された試料には樹種同定対象外とされた木製品が2点含まれていたが、漆塗りと木地との関係を検討する上で重要と判断し、分析対象としている。また、漆器椀（SK09：第32図261［№698-2］・図版16）は、漆塗膜分析の際に木片の確認を行った際、樹種同定用の木片と樹種が異なることが明らかとなったため、その結果を併記している。以上の各試料の詳細は、結果とともに第20表に記す。

漆塗膜薄片作製観察・X線回折分析

試料は、漆塗膜の残る漆器及び下駄5点である。なお、下駄（SK30：第33図277［№679］）と漆器（SK09：第32図261［№698-2］・図版16）は、樹種同定用の木片にも漆塗膜が確認された。そのため、これらも含めて試料の観察を行い、薄片作製観察およびX線回折分析試料を選択している。各試料の詳細および各種分析対象とした漆塗膜の別を第21表に示す。

(2) 分析方法

樹種同定

試料はいずれも木片であったため、木取りが判断できるもののみを第20表に記した。木片の観察後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。採取した切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheelerほか（1998）、Richterほか（2006）

第20表　樹種同定結果

地区	層位	報告書番号	遺物番号	遺構	器種	木取り	備考	樹種（分類群）	備考
A	下層	318	№254	包含層	木札		南東側　焼印	スギ	
A	下層	301	№314-2	SD03	曲物蓋		背割水路内出土　墨書	ヒノキ	
A	下層	322	№335-5	SD02・03-3区	櫛	削出	背割水路内　15～30cm下	イスノキ	
A	下層	323	№347	SD02・03-3区	櫛	削出	背割水路内　15～30cm下	バラ科ナシ亜科	
A	下層	293	№360-1	SD02・03-3区	木札		背割水路内　30～40cm下　墨書　加工穴	スギ	
A	下層	256	№405-2	SD02	漆器（椀）	横木地	背割水路内　北側石積下	ナツツバキ属	
A	下層	334	№446	SD03-1区	櫛	削出	背割水路内　40cm～底面　北側石積み	モッコク	
A	下層	263	№515	SK14	漆器（椀）	横木地	底面	ブナ属	
A	下層	260	№633	SD03	漆器（傘）		背割水路内　C-C' 検出面～15cm下	エゴノキ属	
A	下層	300	№647	SD03	木札		背割水路内　C-C' 15～30cm下　墨書	クリ	
A	下層	277	№679	SK30	下駄		№15	ブナ属	
A	下層	278	№680	SK30	下駄		№16	ブナ属	
A	下層	261	№698-2	SK09	漆器（高台付椀）	横木地	北側一括	ブナ属	
		—						トチノキ	漆塗膜分析用
A	下層	357	№727	SX03	板			ヒノキ	
A	下層	359	№794-1	SX04	柄			スギ	
A	下層	279	№681-1	SK30	下駄		№17	サクラ属	漆塗膜分析用
A	下層	262	№741-2	SK13	漆器（椀）	横木地		カエデ属	漆塗膜分析用

を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995－1999）を参考にする。

漆塗膜薄片作製観察

漆塗膜を木地が残るように切り離し、軽く水分を拭き取る。合成樹脂で塗膜を包埋し、樹脂を固化させる。漆塗膜の断面が出るように、ダイヤモンドカッターで樹脂と塗膜を切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡、偏光顕微鏡、落射蛍光顕微鏡などを用いて、塗膜の状態や混和物などを観察する。

X線回折分析

試料を無反射試料板に固定し、以下に示す条件で測定を実施した。なお、検出された物質の同定解析は、Materials Data,Inc.のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装置：UltimaⅣ Protectus（リガク）	Divergency Slit：1°
Target：Cu（Kα）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Recieving Slit：0.3mm
Voltage：40kV	Scanning Speed：2°/min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：3～45°

(3) 結　果

樹種同定

同定結果を第20表に示す。分析対象とした木製品18点は、針葉樹2分類群（スギ、ヒノキ）と広葉樹10分類群（ブナ属、クリ、ナツツバキ属、モッコク、イスノキ、サクラ属、バラ科ナシ亜科、カエデ属、トチノキ、エゴノキ属）に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa (Sieb. et Zucc.) Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ブナ属（Fagus）　ブナ科

散孔材で、道管は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ナツツバキ属（Stewartia）　ツバキ科

散孔材で、道管は横断面では楕円形、ほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管

第21表　分析試料一覧（漆塗膜・顔料分析）

地区	層位	報告書番号	遺物番号	遺構番号	器種	試料種別	備考	仮名称（漆の色等）		分析項目*	
										薄片	X回
A	下層	263	No.515	SK14	漆器(椀)	塗膜・顔料	底面、黒・赤漆あり	黒漆	a	●	−
								赤漆	b	●	●
A	下層	277	No.679	SK30	下駄	塗膜・顔料	No.15、赤漆あり	黒漆	a	●	−
								黒漆	b	−	−
						樹種		赤漆	c	●	●
A	下層	279	No.681-1	SK30	下駄	塗膜・顔料	No.17、黒・赤漆あり	黒漆	a	−	−
								赤漆	b	●	●
								赤漆	c	●	●
A	下層	261	No.698-2	SK09	漆器（高台付椀）	塗膜・顔料	北側、黒漆あり	黒漆	a	●	−
								黒漆	b	−	−
						樹種		赤漆	c	●	●
								黒漆	d	−	−
A	下層	262	No.741-2	SK13	漆器(椀)	塗膜・顔料	西側、黒・赤漆あり	黒漆＋赤漆	a	●	−
								黒漆＋赤漆	b	●	−

＊「薄片」:漆塗膜薄片観察.「X回」:X線回折分析、●:分析対象.

は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高で、時に上下に連結する。

・モッコク（Ternstroemia gymnanthera (Wright et Arn.) Bedd.）　ツバキ科モッコク属

散孔材で、道管は横断面では多角形、単独または2-3個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-100細胞高。

・イスノキ（Distylium racemosum Sieb. et Zucc.）　マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は、独立帯状または短接線状で、放射方向にほぼ等間隔に配列する。

・サクラ属（Prunus）　バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・バラ科ナシ亜科（Rosaceae subfam. Maloideae）

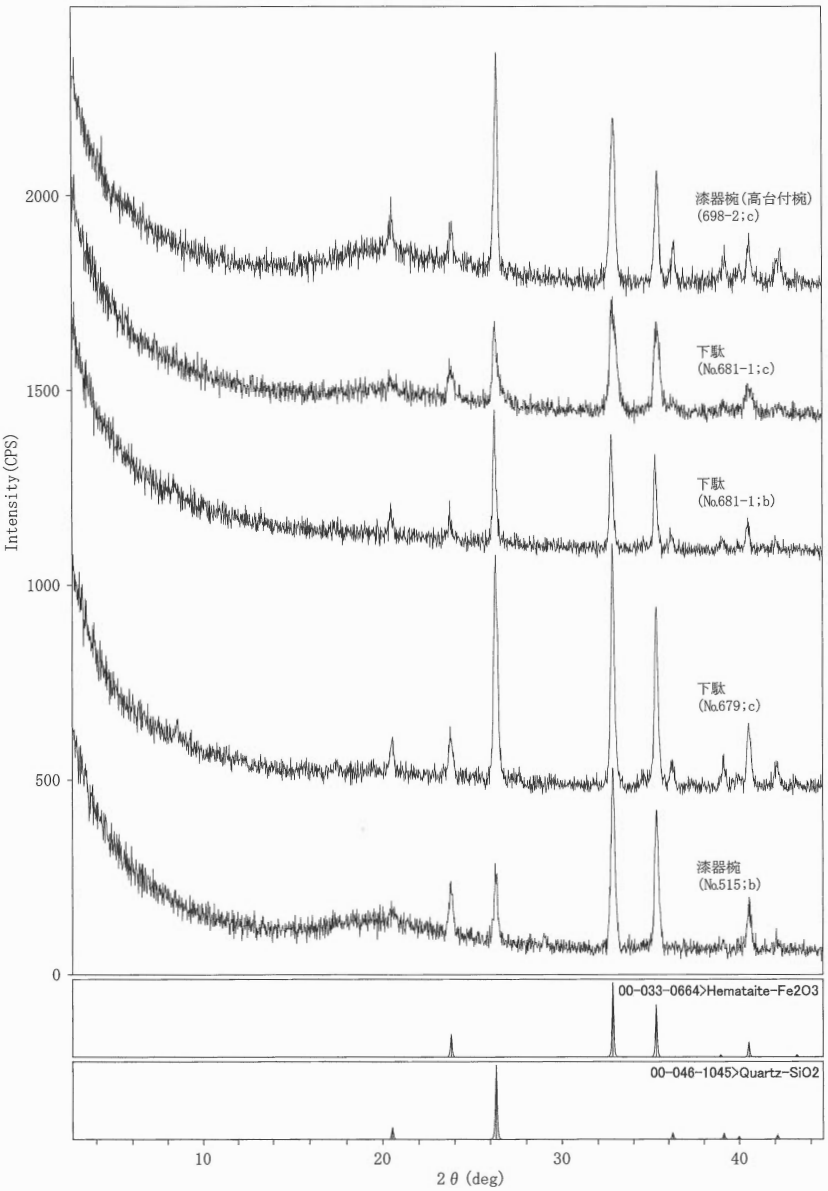
散孔材で、道管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2-5個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・カエデ属（Acer）　カエデ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・トチノキ（Aesculus turbinata Blume）　トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認



第51図　赤漆片のX線回折図

められる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高で層階状に配列する。

・エゴノキ属（Styrax）　エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。

漆塗膜薄片作製観察

1）SK14 漆器椀（第32図263［No.515］）

漆器椀は、黒漆の面（a）と赤漆の面（b）の2面が認められる。黒漆の面（a）は、下地に炭粉が認められる。下地は、木地の凹凸を埋めるように認められ、厚さは80～170 μmを測る。下地の上には、混和物の無い漆層が1層（60～70 μm）塗布される。赤漆の面（b）は、同じく炭粉を用いた下地が認められるが、黒漆の面より薄く厚さは10～90 μm程度である。下地層の上には、赤色顔料を混和した漆層が1層（厚さ約50 μm）塗布される。

2）SK30 下駄（第33 図277［№679］）

下駄は、塗膜分析用と樹種同定用とがあり、塗膜分析用の木片には黒漆（a・b）が認められ、樹種同定用の木片には赤漆とみられる赤色部（c）が認められる。黒漆の面（a）は、下地が認められず、木地の上に黒色の塗布層が10 μm以下の厚さで直接塗布される。肉眼では表面に光沢が確認できることから、何らかの黒色物質を混ぜた黒漆と考えられるが、混和物の特定には至らない。一方、赤漆の面（c）は、木地の凹凸を埋めるように下地層（130～200 μm）が認められるが、下地の種類は不明である。その上に、10 μm以下で黒色の薄い塗布層が認められ、最上部に赤色顔料を混和した漆層（20～30 μm）が認められる。

3）SK30 下駄（第33 図279［№681-1］・図版16）

下駄は、木片の形状から側面の端部と推定される。漆塗りは、3面認められ、黒漆が1面（a）、赤漆が2面（b・c）からなる。なお、黒漆の面（a）は、保存状態が悪く、光沢も認められないことから漆層が剥落している可能性があるため、比較的状態の良い赤漆を観察対象としている。赤漆の面(b)は、木地の上に下地と考えられる黒色の層（30～40 μm）が認められる。微細な黒色粒子が認められるが、粒子の由来は不明である。その上に、赤色顔料を含む漆層（10 μm以下）が1層認められる。もう一方の赤漆の面（c）では、赤漆（b）と同様に木地の上に黒色の層（30～40 μm）が認められ、その上に赤色顔料を混和した漆層（約100 μm）が認められる。

4）SK09 漆器椀（高台付椀）(第32図261［№698-2］・図版16)

試料は、塗膜分析用と樹種同定用とがあり、塗膜分析用の木片で黒漆が2面（a・b）認められる。一方の樹種同定用の木片（混入物と考えられる）は黒漆の面（d）と赤漆の面（c）が認められる。黒漆の面（a）は、下地とみられる微細な粒子を含む黒色の塗布層（180～240 μm）が認められ、その上に混和物の無い漆層（10 μm以下）が1層認められる。赤漆の面（c）は、下地と考えられる黒色の塗布層（90～120 μm）が認められ、漆の一部は木地の奥まで浸透する。この下地の上には、赤色顔料を混和した漆層（約40 μm）が認められる。

5）SK13 漆器椀（第32 図262［741-2］・図版16）

漆器椀は、黒漆と赤漆からなる面が2面（a,b）認められる。なお、黒漆部分の保存状態が悪く、赤漆が模様であるかあるいは黒漆の上に塗布された赤漆であるかの判別には至らない。黒漆＋赤漆（a）では、下地と考えられる黒色の層（60～70 μm）が認められ、その上に赤色顔料を含む漆層（約10 μm）が認められる。黒漆＋赤漆（b）も状況は類似しており、木地の上に黒色の層（100～120 μm）が認められ、その上に赤色顔料を含む漆層（10～20 μm）が認められる。黒色の層には、微細な黒色の粒子が認められるが、粒子の由来は不明である。

X線回折分析

X線回折図を第51図に示す。なお、図中上段に試料のX線回折図、下段に検出された鉱物の参照パターンを掲げている。

いずれの試料についても顔料鉱物である赤鉄鉱（hematite）が検出されたほか、石英（quartz）に基づく反射が認められた。

(4) 考　察

今回の分析に供された木製品は、伊東・山田（2012）の木器分類を参考とすると、容器（曲物蓋、漆器椀）、服飾具（下駄、櫛、傘）、遊戯具･日用品（木札）、施設材･器具材（板）などに分類される。これらの木製品には、針葉樹のスギ、ヒノキと、広葉樹のブナ属、クリ、ナツツバキ属、モッコク、

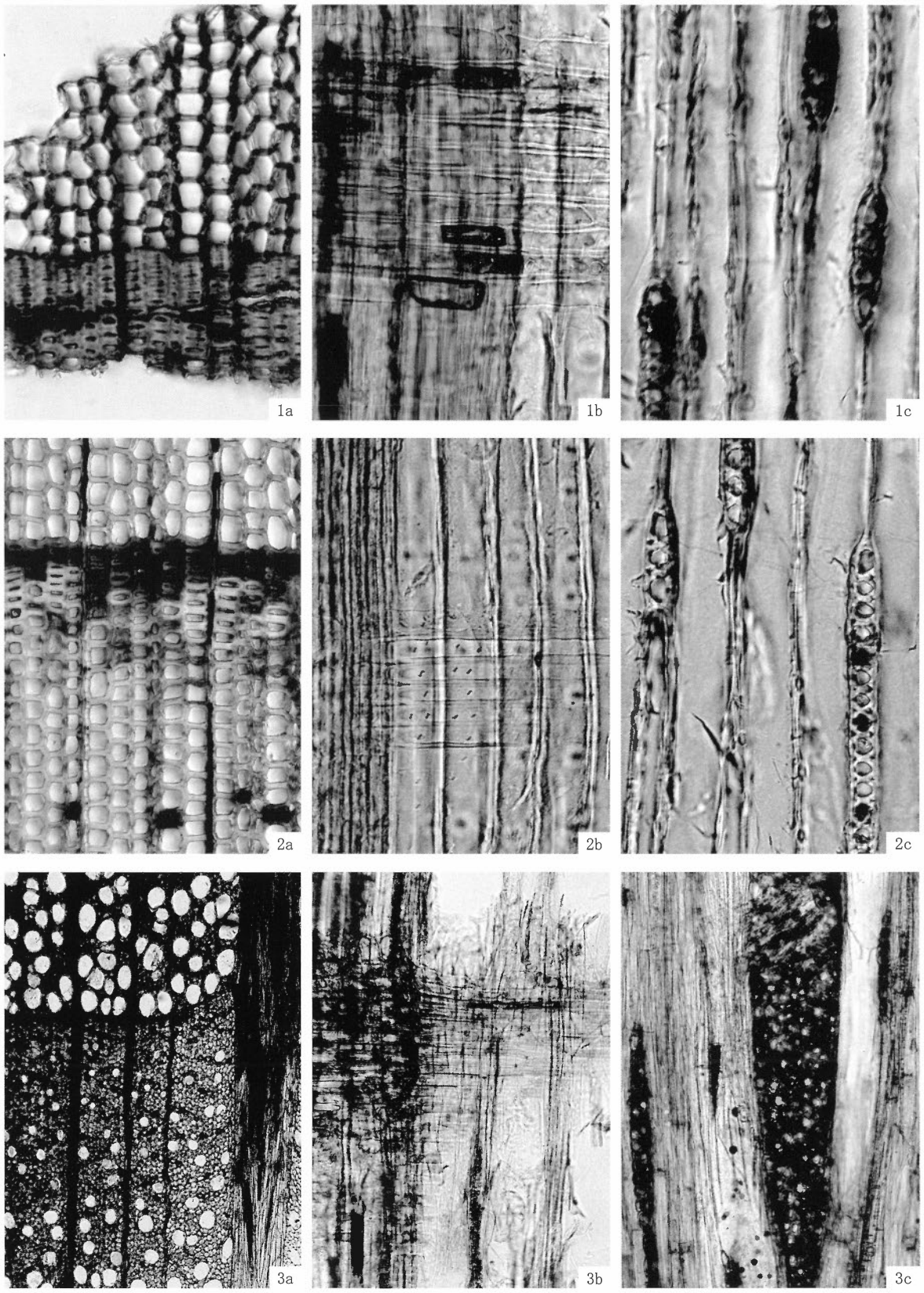
イスノキ、サクラ属、バラ科ナシ亜科、カエデ属、トチノキ、エゴノキ属が確認された。

包丁の柄（第38図359［№794-1］・図版19）には、スギが確認された。この結果から、強度よりも加工性を考慮した木材利用が推定される。容器は、板物となる曲物蓋と挽物の漆器椀とがある。曲物蓋（第34図301［№314-2］・図版17）にはヒノキが認められたことから、加工性や耐水性を考慮した木材利用が考えられる。一方、漆器椀はいずれも横木地であり、ナツツバキ属（第32図256［№405-2］・図版16）、ブナ属（第32図261［№698-2］・図版16、第32図263［№515］：樹種同定用）、カエデ属（第32図262［№741-2］・図版16）、トチノキ［№698-2（混入物）］：漆塗膜分析用）などが認められた。この結果から、樹種が多様であり、材質も重硬な種類から軽軟な種類からなるという特徴が指摘できる。なお、漆塗膜の観察を行った試料についてみると、いずれも下地の上に漆を1層塗っただけの簡単な作りであり、赤漆については赤鉄鉱が検出されたことからベンガラを顔料として利用したことが明らかとなった。

服飾具の下駄は、いずれも漆塗りの資料である。樹種は、ブナ属（第33図277［№679］・第33図278［№680］）とサクラ属（第33図279［№681-1］・図版16）が認められたことから、比較的強度の高い広葉樹の利用が指摘できる。また、漆塗膜の観察では、黒色部分が木地の上に直接1層塗られるのみであるのに対し、赤色部分では下地と考えられる層が認められる（SK30：第33図277［№679］）、黒漆の上に赤漆を塗る（SK30：第33図279［№681-1］・図版16）などの黒色部分とは異なる特徴が確認された。これらの状況から、下駄の側面や足を乗せる台（表）などの部位の耐久性、摩耗度等に応じて漆塗りが異なっていた可能性がある。

櫛は、イスノキ（第36図322［№335-5］・図版18）、ナシ亜科（第36図323［№347］・図版18）、モッコク（第36図334［№446］・図版19）が認められ、比較的硬く緻密な木材の利用が窺える。イスノキやモッコクは本地域には分布せず、主に西日本に分布することから、西日本で作られた製品の搬入などが推定される。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、イスノキやナシ亜科は、これまでにも富山県内の中世～近世の資料に確認された事例がある一方、モッコクは富山県内での出土事例は確認されていない。傘（第32図260［№633］・図版16）はエゴノキ属であり、緻密な木材が利用される。橋本（1979）によれば、轆轤で作る傘の柄にエゴノキ属が利用されるという民俗事例が紹介されており、この事例と調和する結果と言える。なお、富山県内における傘の出土事例では、梅原胡摩堂遺跡（南砺市）で近世の資料にモクレン属が確認された例があるが、エゴノキ属の確認例は知られていない。エゴノキ属の確認例についてみると、千駄ヶ谷五丁目遺跡（東京都渋谷区）、紀尾井町遺跡（東京都千代田区）などの江戸遺跡、宮沢中村遺跡（山梨県南アルプス市）、宮下遺跡（静岡県静岡市）などから出土した近世の資料を中心に17例が確認できる（伊東・山田2012）。

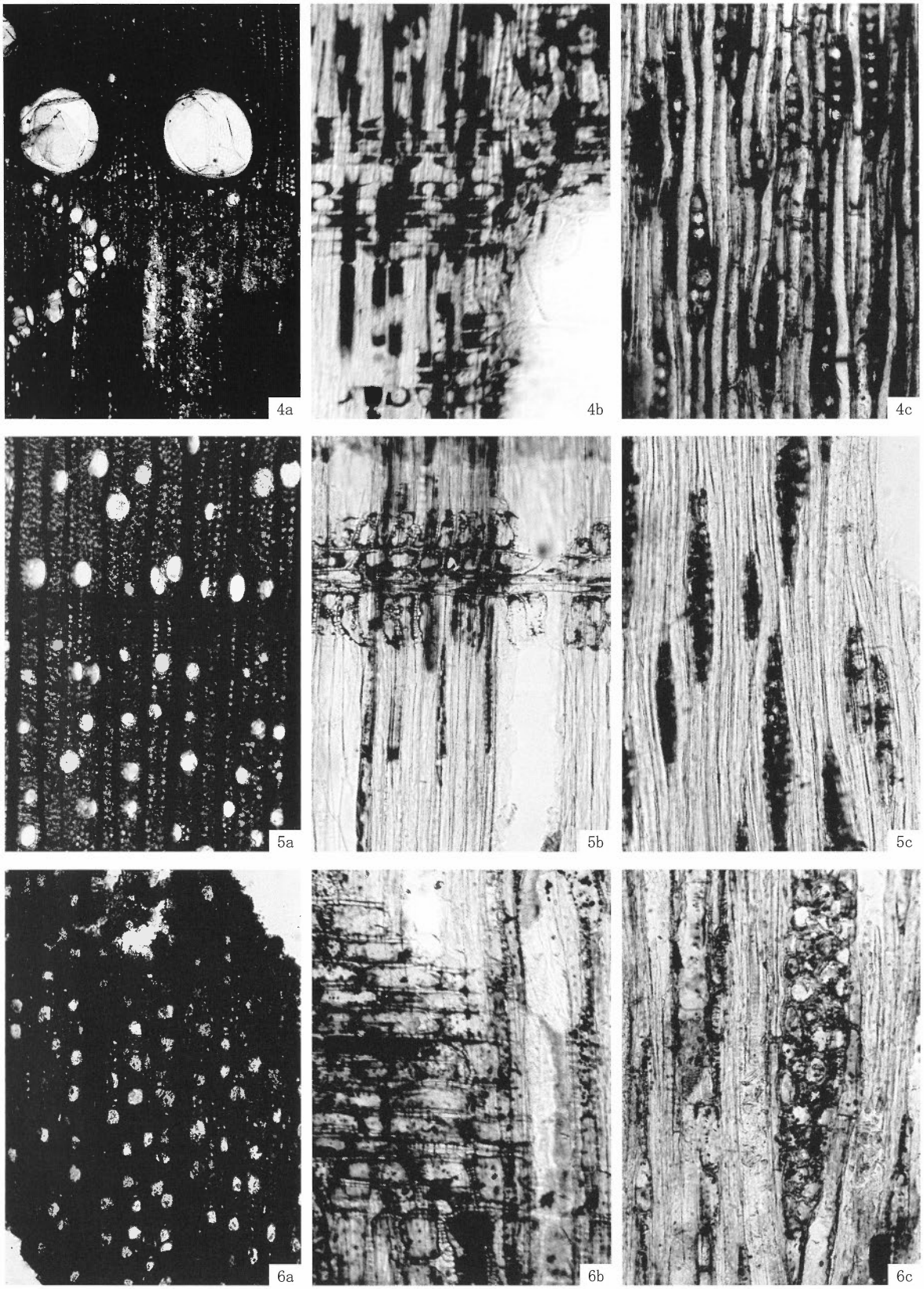
木札は、3点のうち2点がスギ（第34図293［№360-1］・図版17、第35図318［№254］・図版18）、残る1点（第34図300［№647］・図版17）がクリであった。木材の材質などから、加工性が高い木材や強度が高く腐りにくい木材の利用が考えられる。板（第38図357［№727］・図版19）にはヒノキが認められた。用途などの詳細は不明であるが、確認された樹種より曲物蓋と同様に加工性の高い木材の利用が推定される。



1. スギ(SX04;359［No.794-1］)
2. ヒノキ科(SD03;301［No.314-2］)
3. ブナ属(SK30;277［No.679］)
　a:木口, b:柾目, c:板目

100μm:3a
100μm:1-2a, 3b, c
100μm:1-2b, c

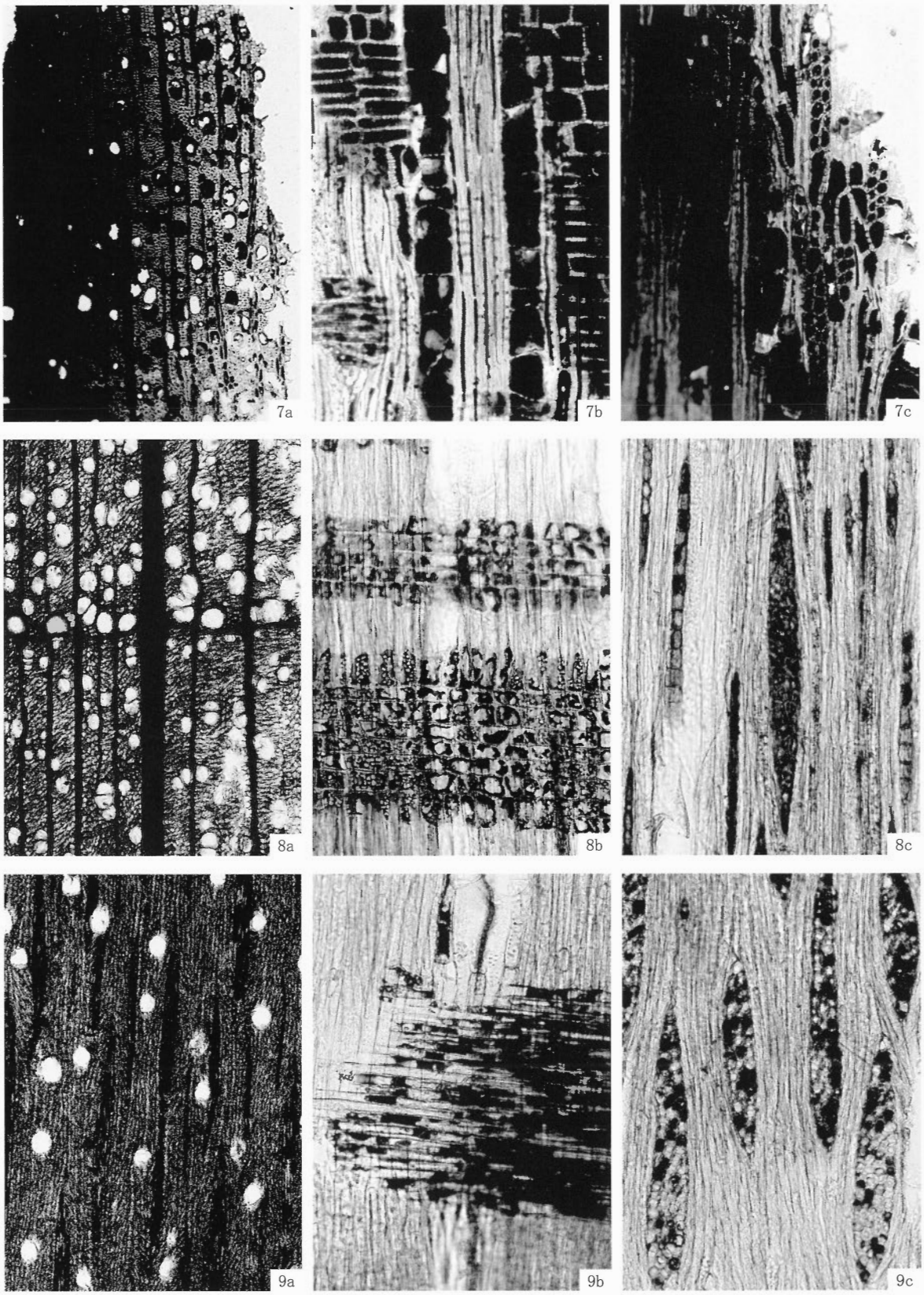
第52図　木材（1）



4. クリ(SD03;300［No.647］)
5. ナツツバキ属(SD02;256［No.405-2］)
6. モッコク(SD03;334［No.446］)
　a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

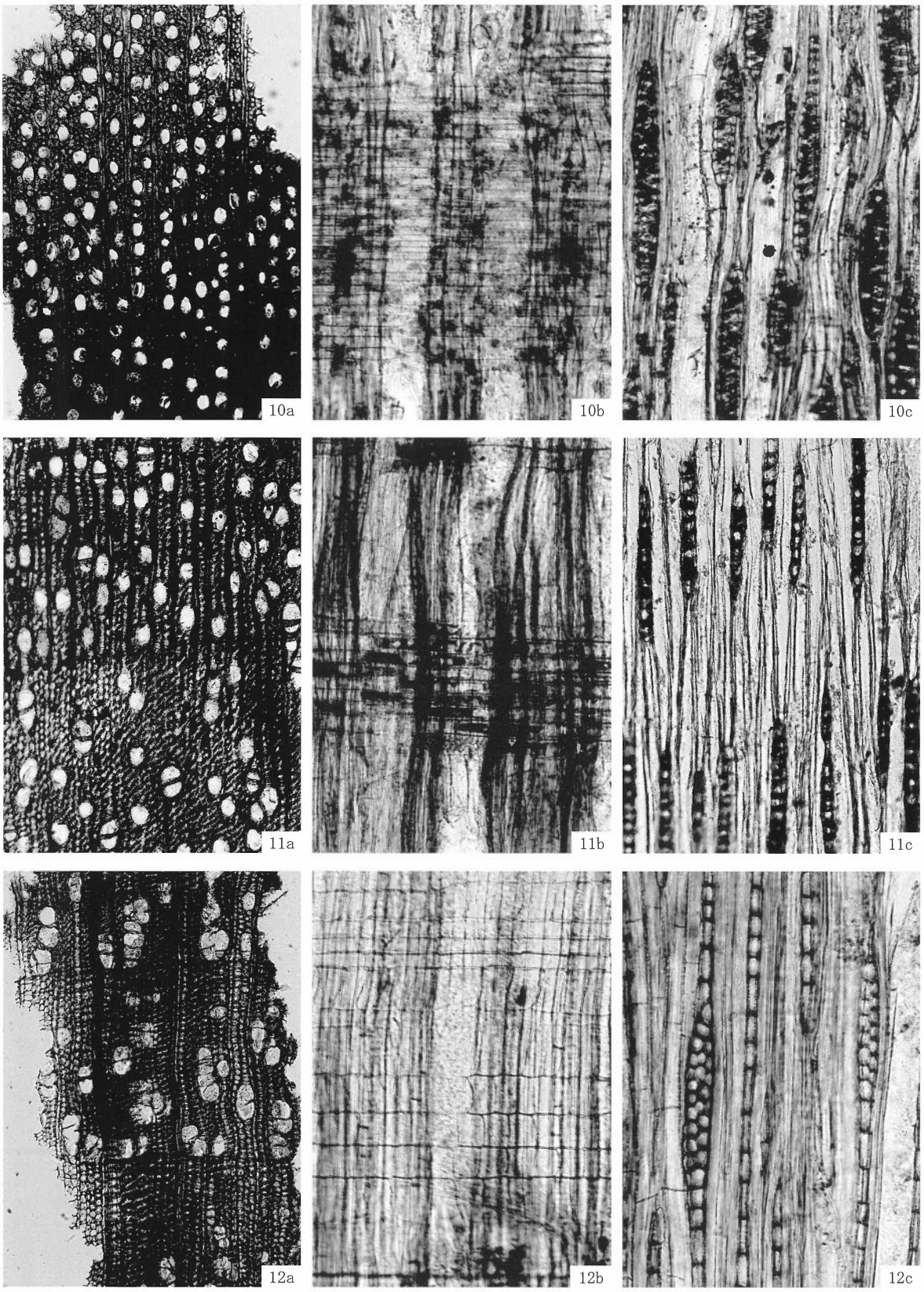
第53図 木材（2）



7.イスノキ(SD02・03;322［№335-5］)
8.サクラ属(SK30;279［№681-1］)
9.カエデ属(SK13;262［№741-2］)
　a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

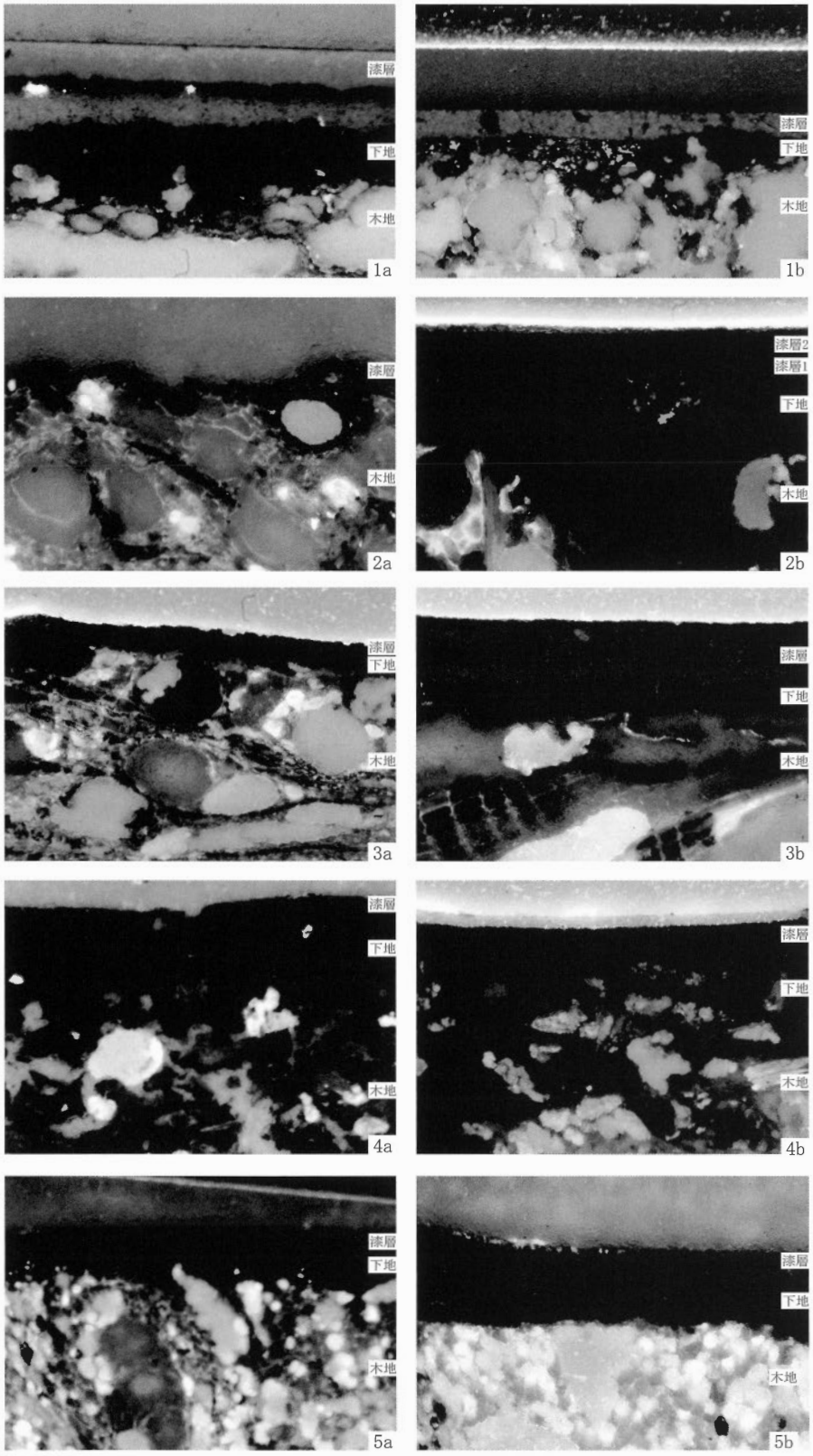
第54図　木材（3）



10. バラ科ナシ亜科(SD02・03;323［No.347］)
11. トチノキ(SK09;261［No.698-2］)
12. エゴノキ属(SD03;260［No.633］)
　a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:a
100μm:b,c

第55図　木材（4）



100 μm

1. 漆器椀(SK14;263［No.515］)　a:a黒漆, b:b赤漆
2. 下駄(SK30;277［No.679］)　a:a黒漆, b:c赤漆
3. 下駄(SK30;279［No.681-1］)　a:b赤漆, b:c赤漆
4. 漆器椀(高台付椀)(SK09;261［No.698-2］)　a:a黒漆, b:c赤漆
5. 漆器椀(SK13;262［No.741-2］)　a:a黒漆+赤漆, b:b黒漆+赤漆

第56図　漆塗膜

第4節　動物遺存体分析について

納屋内高史（富山市埋蔵文化財センター）

(1) 試　料

資料は主に上層・下層の背割水路（SD01～03）や井戸を中心とする遺構から水づかり状態で出土した。ほとんどが下層面からの出土である。資料の帰属時期は、共伴した陶磁器等から上層遺構出土のものは19世紀後半以降、下層遺構出土のものは18世紀後半から19世紀中頃が中心である。

すべて調査時に目視により取り上げたもので、フルイを用いた遺物の取上げは行っていない。資料の保存状態は、概ね良好である。分析は、筆者所有の標本との比較を基本とし、奥谷編（2000）、上野・山崎（2008）、松井（2008）、安部編（2009）なども参考にした。

資料数は、総点数で101点を数え（第22～24表）、このうち綱よりも下位の分類群を同定できたものは84点である。同定できた資料は、イワガキを含むカキ類が37点と最も多く、イヌが11点、キジ科が8点、コタマガイまたはオキアサリ、及びシジミ類が各7点と続く。

以下、出土した資料の詳細を述べる。

(2) 分類群ごとの記載

①貝類

腹足綱

アワビ類（Nordotis sp.）：SK33から殻が2点出土した。どちらも比較的大型の個体に由来すると考えられるが、殻の残存状態が悪く、形状からの詳細な種の同定や個体数の算出はできない。

エゾバイ科（Buccinidae gen. et sp. indet）：いわゆるバイ類である。殻が、SD01から2点、SD03から1点、包含層から1点の計4点出土した。

斧足綱

イタヤガイ（Pecten albicans）：SX07から右殻が1点出土した。殻の後部を2カ所穿孔しており、貝杓子（第29図224）として用いたと考えられる。

イタボガキ科（Ostreidae）：いわゆるカキ類である。イワガキ（Crassostrea nipona）が、SD02・03及びSX07 を中心に左殻8点、右殻5点の計13点が出土したほか、右殻と思われるものが攪乱内から1点出土しており、総計14点ある。

また、遺存状態が悪く、種を同定できなかったものが、SD02・03を中心に、左殻2点、右殻10点、左右不明の殻11点の計23点出土している。

シジミ属（Corbiculidae sp.）：SD02・03から右殻が1点、SX07から左殻が1点出土したほか、包含層から右殻3点、左右不明の殻2点の計5点が出土している。周辺環境から、マシジミまたはヤマトシジミと考えられるが、出土資料からいずれかを判断することは難しい。

オキアサリまたはコタマガイ（Gomphina aequilatera or Gomphina melanaegis）：SD02から左殻1点、右殻2点、左右不明の殻2点の計5点、SD03から左殻1点が出土したほか、包含層から左殻1点が出土しており、総計7点ある。すべてオキアサリまたはコタマガイと考えられるが、殻の全形が分かるものがないため、詳細な同定は避けた。

ハマグリ属（Meratrix）：攪乱内からチョウセンハマグリ（Meretrix lamarchii）が1点出土したほか、属以下の分類群を同定できない左右不明の殻が1点出土している。チョウセンハマグリは殻高70㎜を

超える大型のものである。

②軟骨魚類

板鰓亜綱（Elasmobranchii ord.,fam.,gen. et sp. indet.）：SD02から椎骨が1点出土した。椎体径34.3㎜を計る大型のもので、サメ類と考えられる。

③硬骨魚類

タラ科（Gadidae gen. sp. indet.）：SD03から椎骨が1点出土した。

ブリ属?（Seriola sp.?）：SD03から椎骨が1点出土した。ブリ属の可能性があるが、椎体表面の状態がやや異なり、全体の形状が不明確であることから、断定することは避けた。椎体径26.6㎜を計り、ブリ属であるとするならば、体長1.6mを超える大型の個体に由来すると考えられる。

タイ科（Sparidae）：タイ科魚類のうち、種まで同定できたものにはマダイ（Pagrus major）がある。マダイは、SK25から頭蓋骨が1点出土した。中央部を右側面から冠状方向に切断されており、兜割りをされたものと考えられる。

この他に、マダイ亜科（Pagrinae gen. et sp. indet.）まで同定できるが、属よりも下位の分類群を同定することができない前鰓蓋骨、主鰓蓋骨が計3点、タイ科以下を同定することができない椎骨が1点出土した。これらのうちマダイ亜科主鰓蓋骨、タイ科椎骨には刃物により切断された痕跡が見られる。

マグロ属（Thunnus sp.）：SD02・03から椎骨が1点出土した。椎体径38.25㎜を計り、相川他の体長推定式（相川他1938）を基に、クロマグロ、キハダ、ビンナガの場合を想定して体長を検討したところ、体長2.5m～3m前後と推定された。

ヒラメ科（Paralichthyidae gen. et sp. indet）：SD03から、外翼状骨が1点出土した。

④鳥類

キジ科（Phasianidae）：SD01から尺骨、大腿骨が各1点、SD02・03から上腕骨、足根中足骨が各1点出土した。このうち、SD02・03から出土した上腕骨、足根中足骨については、江田・井上（2011）に基づき種レベルでの同定を試みたところ、ニワトリの可能性が高いと判断された。また、足根中足骨は蹴爪が見られないことからメスの可能性が高い。

⑤哺乳類

イヌ（Canis familiaris）：SD02から、下顎骨、椎骨、肋骨、脛骨、大腿骨が計11点出土している。同一地点からまとまって出土し、関節部が良くフィットすることから同一個体に由来すると考えられる。出土した大腿骨、脛骨の最大長から、西中川他の体長推定式（西中川2008）を基に体高を検討したところ、いずれも体高50㎝前後の個体に由来すると推定できる。現在の犬種と比較すると四国犬や紀州犬程度の大きさに相当する。

また、種類を同定することができなかったものの、イヌの可能性が考えられるものが、包含層から1点、SD02・03から下顎骨、四肢骨など計5点出土した。特にSD02・03から出土した下顎骨、脛骨、尺骨は、小型で骨端部も癒合していないことから幼獣のものと考えられる。

(3) 考　察

今回、同定した資料は89点にのぼる。同定した資料の多くは、カキ類を中心とする貝類であり、それ以外のものも、イヌを除き主に食用として利用されるものが大半を占める。また、それらの多くは背割水路や井戸から出土している。そのため出土した資料の多くは、食料資源として利用された後、背割水路や廃絶した井戸の中に廃棄されたものと考えられる。

魚貝類は、貝類ではイワガキを含むカキ類が37点と最も多く、コタマガイまたはオキアサリと考えられるものやシジミ類、バイ類なども少量出土した。魚類では、マダイを含むマダイ亜科が4点あるほか、サメ類やタラ科、マグロ属なども出土している。これら出土した魚貝類は、遺跡周辺の河川や近傍の海域である富山湾で獲得可能なものばかりである。

また、マダイの頭蓋骨にはいわゆる兜割りに伴うと考えられる切断痕が見られた。このことは、近世期の本地点周辺において、兜煮や鍋などマダイの頭を用いた料理に用いられたことを示す。

鳥類・哺乳類は、キジ科とイヌが出土した。特にキジ科は、そのうち2点がニワトリの可能性が高いと判断した。そのため、ニワトリやイヌといった家畜の利用が行われていたと考えられる。また、ニワトリはメスの可能性が高く、肉用としてだけでなく、採卵用として利用されていた可能性も考慮する必要があるだろう。

これらのことから、近世期の本地点周辺の動物利用は、魚貝類については遺跡近傍で獲得可能なものを利用していたことがわかる。また、ニワトリやイヌなどの家畜の利用も行われていた。これら出土した種のうち、特にマダイは兜煮や鍋などの形で賞味されたものがあったほか、ニワトリについては肉用以外に採卵用として利用された可能性も考える必要がある。

今回の分析結果を、これまでの近世富山城下町遺跡の分析結果（納屋内2010・2012、西町南地区市街地再開発組合・富山市教委2014）と比較すると、貝類では遺跡近傍から獲得可能な種を主とし、カキ類が目立って出土するという点でこれまでの分析結果と共通する。また、魚類は、出土量は少ないものの、タラ科、タイ科、マグロ属などこれまでの城下町遺跡の調査で出土しているものばかりである。このことから、特に本地点周辺における魚貝類利用は、大局的にはこれまでの城下町調査と同様の傾向があるといえるだろう。

(4) 小　結

今回の分析により、カキ類を中心とする貝類やタラ科やタイ科などの魚類、ニワトリ、イヌといった鳥獣類を同定することができたほか、資料に見られた痕跡などから、その利用法の一端を垣間見ることができた。

今回分析した資料数は少ないが、これまでの富山城下町から出土した動物遺存体の報告例は少なく、富山城下町遺跡における動物利用を考えていく上で重要な資料となる。今後、資料数の増加を待って比較検討を進めると共に、文献資料等との対比を行うことによって、本資料の位置づけをより明確にできると考えられる。

第22表　上層面出土動物遺存体集計表

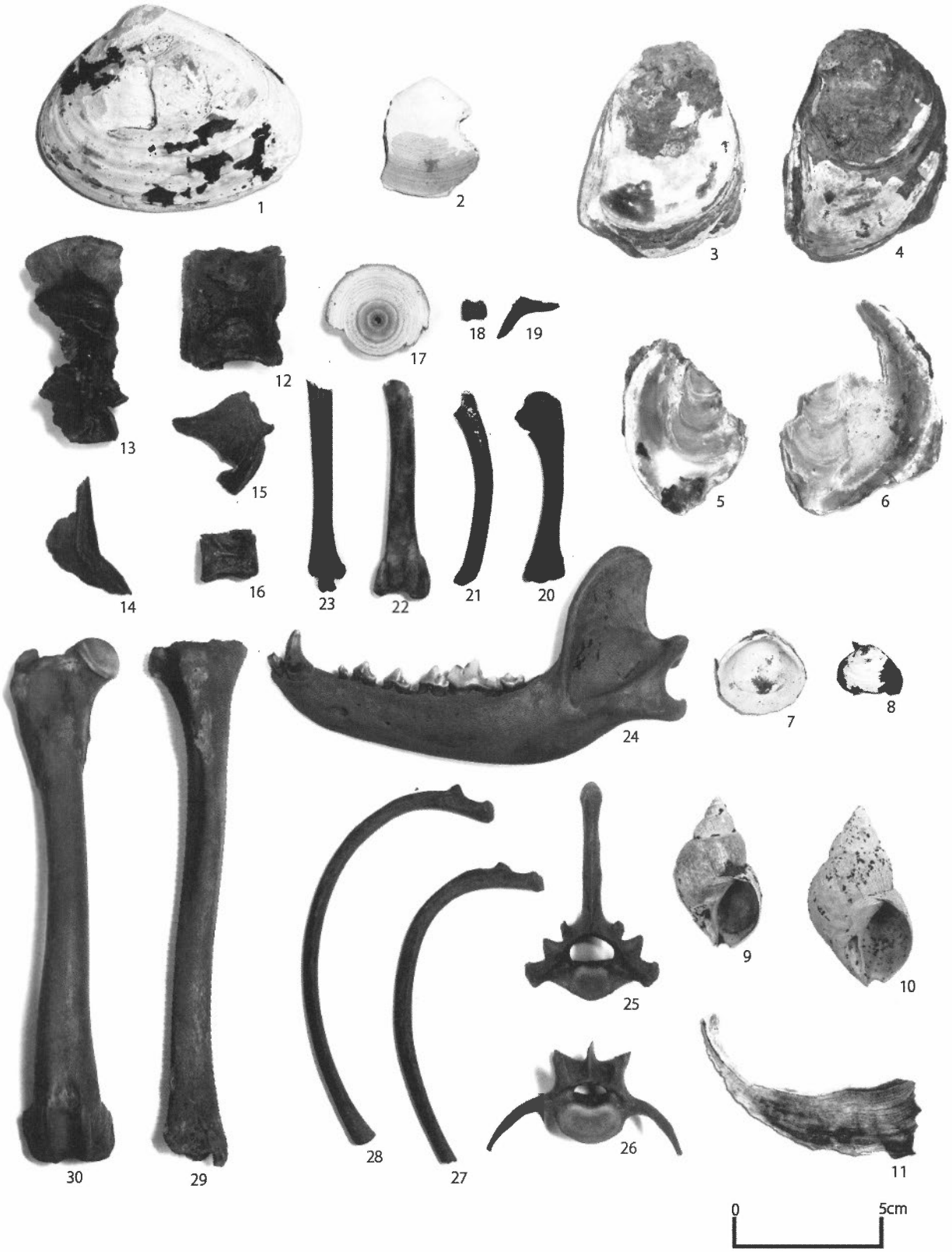
種別	種名	部位	左右	SD01	包含層	総計
貝類	エゾバイ科	殻	－	2	1	3
	イワガキ	殻	R	1		1
	コタマガイ／オキアサリ	殻	L		1	1
鳥類	キジ科	尺骨	L	1		1
		大腿骨	L	1		1
総計				5	2	7

第24表　撹乱出土動物遺存体集計表

種別	種名	部位	左右	総計
貝類	イワガキ	殻	R？	1
	チョウセンハマグリ	殻	L	1
	ハマグリ類	殻	不明	1
総計				3

第23表　下層面出土動物遺存体集計表

種別	種名	部位		左右	SD01	SD02･03	SD03	SK25	SK29	SK29	SK33	SX06	SX07	包含層	総計
貝類	アワビ類	殻		－							2				2
	エゾバイ科	殻		－			1								1
	不明腹足類	蓋		－	1										1
		殻		－			1							2	3
	イタヤガイ	殻		R									1		1
	カキ類	殻		L		2									2
				R		8						1		1	10
				不明		9	1							1	11
	イワガキ	殻		L		5							3		8
				R			1						2	1	4
	シジミ属	殻		L									1		1
				R		1								3	4
				不明										2	2
	コタマガイ／オキアサリ	殻		L	1		1								2
				R	2										2
				不明	2										2
	不明斧足類	殻		不明		1									1
軟骨魚類	板鰓類	椎骨		－	1										1
硬骨魚類	タラ科	椎骨	腹椎	－			1								1
	ブリ属？	椎骨	尾椎	－			1								1
	マダイ	頭蓋骨		－				1							1
	マダイ亜科	前鰓蓋骨		R										1	1
		主鰓蓋骨		L						1					1
				R		1									1
	タイ科	椎骨	尾椎	－					1						1
	マグロ属	椎骨	尾椎	－		1									1
	ヒラメ科	外翼状骨		R			1								1
	不明	椎骨		－		1									1
鳥類	ニワトリ	上腕骨		R		1									1
		足根中足骨		R		1									1
	不明	複合仙骨		－		1									1
哺乳類	イヌ	下顎骨		L	1										1
		椎骨	胸椎	－	1										1
			腰椎	－	3										3
		肋骨		L	1										1
				R	2										2
		大腿骨		R	1										1
		脛骨		L	1										1
				R	1										1
	イヌ？	下顎骨		R		1									1
		歯	上顎C	R？										1	1
			C	不明		1									1
		尺骨		R		1									1
		脛骨		L		1									1
		中足骨		不明		1									1
	同定不可	不明				3									3
総計					18	40	8	1	1	1	2	1	7	12	91



1：チョウセンハマグリ左殻, 2：コタマガイorオキアサリ左殻, 3～4：イワガキ右殻, 5～6：イワガキ左殻7：シジミ類左殻, 8：シジミ類右殻, 9～10：バイ類殻, 11：アワビ類殻, 12：マグロ類椎骨（尾椎）, 13：マダイ頭蓋骨, 14：マダイ亜科前鰓蓋骨R, 15：マダイ亜科主鰓蓋骨R , 16：タイ科椎骨（尾椎）, 17：板鰓類椎骨, 18：タラ科椎骨（腹椎）, 19：ヒラメ科外翼状骨R, 20：ニワトリ上腕骨R, 21：キジ科尺骨L, 22：キジ科大腿骨L, 23ニワトリ足根中足骨R, 24：イヌ下顎骨L, 25：イヌ椎骨（胸椎）, 26：イヌ椎骨（腰椎）, 27～28：イヌ肋骨R, 29：イヌ脛骨R, 30：イヌ大腿骨R

第57図　出土動物遺存体

第5章　総　括

第1節　町屋構成遺構の構造と性格

(1) 町屋を構成する遺構

本調査区は、富山市一番町に位置する。富山城下「一番町」又は「壱番町」(以下、「一番町」とする)は、万治年間（1658～1661年頃)「富山旧市街図」、寛文六（1666）年「御調理富山絵図」、天保年間（1830～1844年)「御城内外御焼失御絵図」、安政元（1854）年「越中富山御城下絵図」(巻頭図版4・富山県立図書館蔵）によれば、富山城三の丸南側の外堀に沿い、東西方向に延びる北陸街道の北側に面した、東西方向に細長い区画である。

本調査区で確認した富山城下町の町屋を構成する遺構は、背割水路、井戸、上水施設、ごみ穴、小鍛冶遺構などがある。武家地と町人地を分ける背割水路の遺存状態が良く、江戸時代後期の下水施設の構造を知るうえで、貴重な資料となった。武家屋敷地側は調査面積が少なく、主だった遺構は見られなかった。

(2) 背割水路

背割水路は、背合わせに建てられた屋敷と屋敷の境界に造られ、「境堀」としての機能を有する。検出した背割水路は、基本的には生活排水を流すための下水溝と考えられる。本調査区では、背割水路が同一場所において、改修及び再構築された状況が明瞭に確認でき、大別して次のとおり、三段階の時期変遷があったことが判断できた。ほぼ同じ位置で、層を違えて構築している。

①～19世紀中頃

［SD03］内幅五尺～六尺三寸（約1.50～1.90ｍ）ほどの石積水路の構築、底面は素掘りで、上水施設（木樋）設置に伴う石積改修と部分的な補修が行われる。

②19世紀後半頃か

［SD02］SD03の上に、内幅四尺～四尺三寸（約1.20～1.30ｍ）ほどに狭めた石積水路を改修構築、根石付近のみが残存する。

③19世紀末頃～20世紀前半

［SD01］内幅二尺六寸～二尺八寸（約0.80～0.85ｍ）ほどの石積水路の再構築、底面敷石で、天端石まで残る。昭和初期（戦中頃）まで使用される。

いずれの段階も蓋板（石）などの出土がなく、天端石が残るSD01においても蓋板（石）などの痕跡が確認できなかったことから、開渠と考えられる。護岸に積まれた石材は、SD03では一部に穀物臼（第31図237・図版15）の転用が見られたが、他は自然石（原石）を使用する。SD03の石積みは横方向に目が通るように積まれた布積状で、所々の隙間には、間詰石が見られた。

胴木の使用は、SD01の北側でのみ確認した。水堀などの水中から構築される石積みは、水に強い松の木の胴木（土台木・土居木）を敷き、胴木の上に根石を並べるか、根石を据える範囲を溝状に深く掘り込んで根石を据える場合が多い。SD03では素掘り溝底面の地山土に根石が沈み込んでいる状況を所々で確認した。SD03の根石下には、胴木や杭の痕跡は認められず、石積みの重さによる沈み込みも考えられるが、構築当初から素掘り溝底面の根石部分を掘り込み、根石を設置した可能性もある。

江戸時代の城下町における下水溝については、江戸では、雨落下水や溝（ドブ)、小下水、大下水、

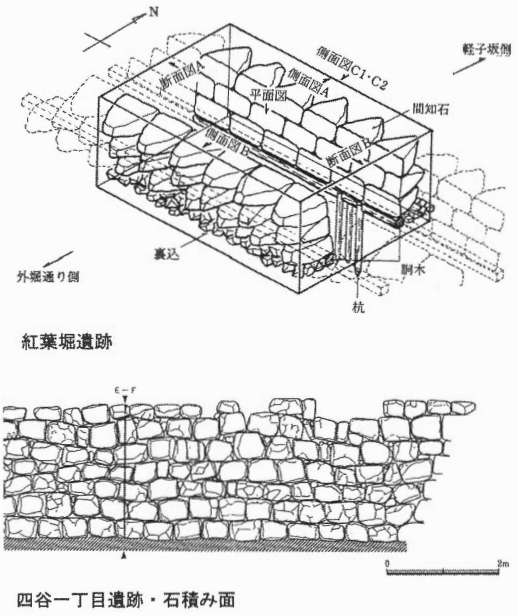
背下水などの名称で呼ばれ、自分下水や手前下水、公儀下水といった管理者の名前が付けられたものもあった（谷口1993）。東京都新宿区紅葉堀遺跡や四谷一丁目遺跡といった大下水の調査では、その規模は幅五尺～六尺で、安山岩による石積護岸を有する構造であった（第58図、新宿区教委1990・四谷一丁目遺跡調査団1998）。これらの大下水は、17世紀後半頃に石積護岸への整備が進められ、昭和初期まで使用されたことがわかっている。一方、大阪の下水溝は、太閤下水とも呼ばれ、当初は素掘りであった下水溝が、江戸時代後期に石積護岸に整備され、明治27（1894）年の改修を経て、現在でも使用されている。その規模は、幅一尺～四尺であるが、幅広の箇所では一間（約1.80m）～二間（約3.60m）の大きさで、開渠であったと理解できる（大阪市建設局2007・久田2012）。

江戸での下水溝の管理は、公儀下水のように幕府直轄のものもあったようであるが、その維持管理は、奉行所が町人に命じて行うのが普通であった。御触書によって、下水溝の疎通をよくすること、下水溝にごみを投げ捨てると罰せられることなどが通達されている（東京下水道史探訪会1995）。大阪の太閤下水の維持管理も、各町々で行われ、春～初夏にかけて清掃の水道浚えが実施され、補修も各町々の負担で行われた。藩が造った下水溝を、町人が管理するのが普通であったようである（大阪市建設局2007）。

江戸時代の下水溝は、水路及び排水路の機能・役割を担うもので、現在の下水道のように、汚水と併せて糞尿を流すものではなかった。糞尿は、便槽に溜めて汲み取られ、近郊農村での有効な肥料として、一定の価格で引き取られていた。背割水路は、現在の用水路的な機能・役割を持った排水路であって、町屋や武家屋敷などの小下水や雨落下水を集めて、河川へと流す機能・役割を担うと同時に、城下町での町境の役割を持ったものと考えられる。今回調査で確認した背割水路は、その規模と機能から考えると、江戸の大下水や大阪の太閤下水に相当するような下水溝であったことが理解できる。富山城下町を描いた各種城下町絵図（巻頭図版4・富山県立図書館蔵）では、富山城を中心に整備された水路網が描かれており、江戸や大阪と同様に、大小の下水溝を含む水路が整備されていた状況を窺い知ることができる。一番町周辺では、背割水路の北側が武家屋敷、南側が町屋敷である。SD03・SD01ともに、底面の西端と東端の計測値を比べるとSD03で9.0cm、SD01で4.0cmほど東端が低くなる。約100m東側で行った平成17年度調査（富山市教委2006b）と同様に、西から東に向かって水が流れていたことがわかる。

また、平成17年度調査では、背割水路に木橋がかけられていた痕跡が見つかっており、武家屋敷と町屋敷間を行き来できるような便宜が図られていた（富山市教委2006b・古川2014）。本調査区では、SD03を埋設横断して、武家屋敷側から町屋敷側への通水が考えられる上水施設（第9図・図版3）を確認した。万治年間以降の絵図によれば、背割水路北側の武家地は、「蜊江家」の屋敷地である。背割水路が町境となって、武家屋敷地と町屋敷地とでは明確な分離がなされていたことが考えられるが、ある時期には武家屋敷と町屋の間で関係があったことが想定できる。

なお、背割水路の変遷と構造については、本章第5節で詳述する。



第58図　江戸大下水の構造
（文献34・35から）

(3) 井　戸

江戸時代の町屋敷地から、SE03、SE04、SE06の3基の井戸を確認した。SE03とSE04は側板構造で、SE06は井戸の掘り方と考えられ、井戸枠は抜き取られたものとみられる。SE03は、井戸底の底板に取水孔が設けられたものであるが、SE04では井戸底に底板の設置が認められず、桶状に組んだ板を積み重ねていく方法で、設置されたものと考えられる。井戸内に投棄された陶磁器、掘り方内から出土した陶磁器から、SE06は17世紀代、SE03は18世紀後半～19世紀中頃の使用が考えられる。SE04もSE03とほぼ同時期の使用が考えられるが、背割水路同様に19世紀中頃での町屋敷の再整備の時期に作られた可能性がある。

(4) 上水施設

SD03を横断する上水施設を確認した。SD03と一体で構築されたのではなく、SD03使用途中の段階で設置されたものである。設置にあたってSD03の石材を積み直した状況が明瞭にみられる（第9図・図版3）。溝底付近に設置された木樋の構造は、竹の節を抜いた竹樋に繊維を巻き付けてから土筒で覆った後、上面と側面を釘で接合した板材を組んで覆っている。背割水路内を横断する竹樋が破損しないように、土筒と板で補強が施されたものであった。石積みの裏込め内は竹樋のままで、円形の挿入孔を設けた継ぎ手として角形木材を使用していた（第36図337・338・図版19）。

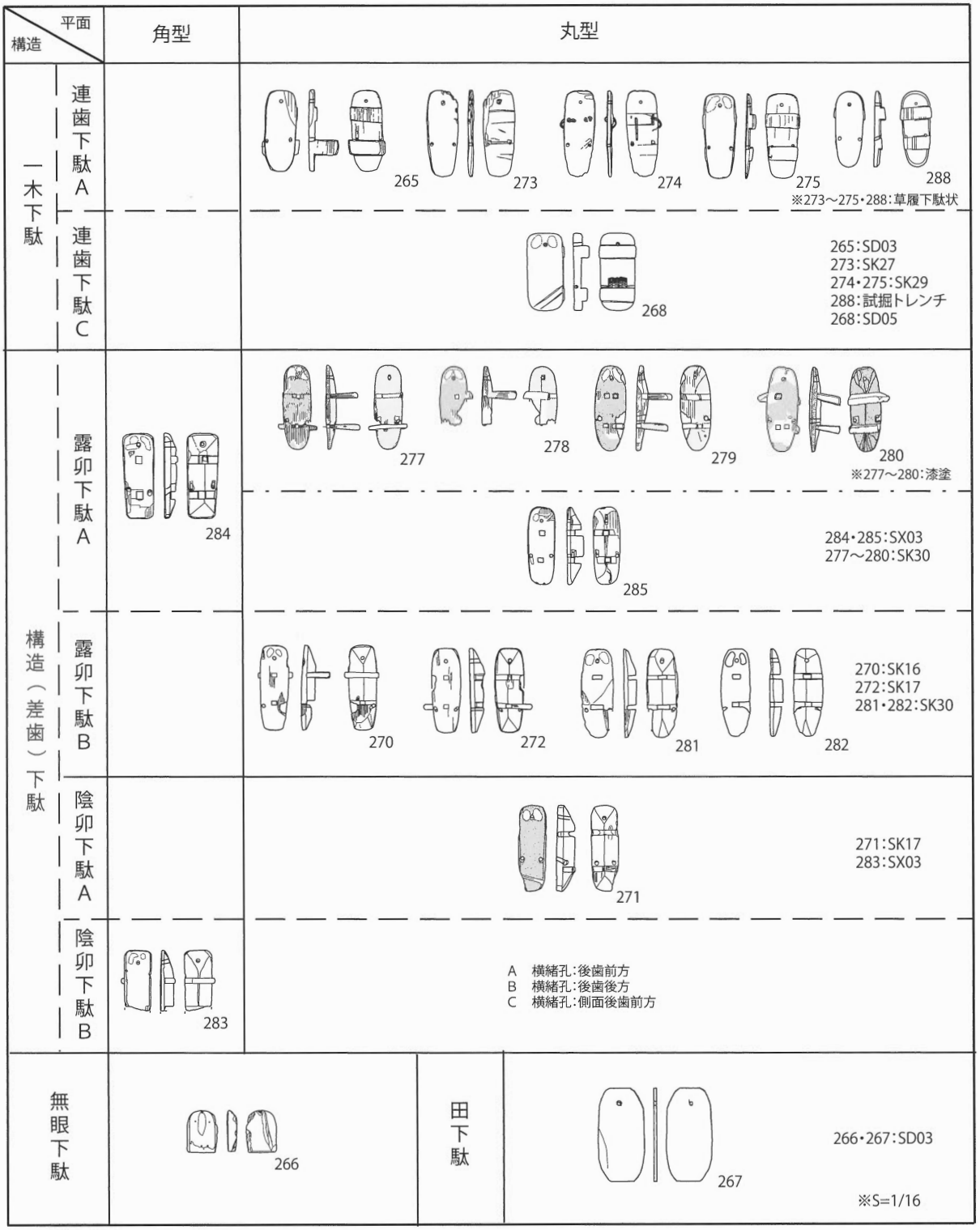
竹樋と継ぎ手に角形木材を使用した上水施設は、北陸では福井県福井市福井城跡（福井市文化財センター2004）、富山県立山町芦峅寺室堂遺跡（立山町教委1994）などで見つかっている。江戸では、東京都港区汐留遺跡（汐留地区遺跡調査会1996）などの上水施設がよく知られる。汐留遺跡は、仙台藩屋敷跡である。汐留遺跡では、井戸が取水口で、継ぎ手部分に木樋の大きさに合わせた孔を刳り抜いた角形木材が使用されており、木樋間には水溜めが設置され、竹樋も使用している。木樋や竹樋には、各種の刻印や焼印がある。上水施設は、17世紀～19世紀にかけて、各地の城下町整備に伴い、飲用水の安定した確保を目的に設置されたものである。

本調査区で注目できるのは、武家屋敷地と町屋敷地の町境として、城下町の区画を分離する役割を持った背割水路を横断していることと、高低差から考えて、取水口は武家の蟹江家の屋敷地側と推定でき、武家屋敷地側から町屋敷地側への通水であった点である。調査によって、町屋敷から井戸が見つかっており、町屋敷地に井戸がなかったわけではない。しかしながら、労力と費用のかかる上水施設の整備が、武家屋敷地側から町屋敷地側にかけて行われていることから、何らかの必要性に応じて普請されたことが考えられる。さらに、設置された竹樋の延長線上の調査区南壁（町屋敷地内）に接して、円形の挿入孔を設けた継ぎ手の角形木材が埋設設置された状態のままで見つかっており、調査区内を南北に横断するように設置されていた可能性がある。

(5) ごみ穴

町屋では、敷地内にごみ捨て穴を掘って、地中に埋めることが広く行われていた。ごみ捨て穴は、比較的小さな穴である場合が多く、堆積土と遺物の出土状況から判断して、SK29及びSK30は、ごみ穴と考えられる。また、SK17及びSK18・SX03もごみ穴であった可能性が高い。平成17年度調査においても、町屋敷の裏手にあたる箇所からごみ穴が見つかっている（富山市教委2006b）。

ごみ穴及びその可能性が高い遺構からは、下駄が多く出土した。SK29出土の平面丸型の一木連歯下駄（第32図273～275）は、前歯及び後歯が磨り減っていずれも草履下駄のようになっている。SK30出土の平面丸型の構造（差歯）下駄のうち、表面に赤漆及び裏面に黒漆が施された露卯下駄4



第59図　出土下駄の分類

点（第33図277～280・図版16）は、セット関係で２組の下駄であった可能性が高い。SK30では、もう1組の平面丸型の構造（差歯）露卯下駄が出土していることから、合計3組の下駄が捨てられていたことになる。SK17・SX03からも構造（差歯）下駄の露卯下駄（第32図272、第33図284・285）と陰卯下駄（第32図271、第33図283）が出土している。出土した下駄を分類整理した結果（第59図）、平面形及び歯・横緒孔を含めたその構造は一様ではなく、平成17年度調査（富山市教委2006b）と同様に各種が存在したことがわかる。

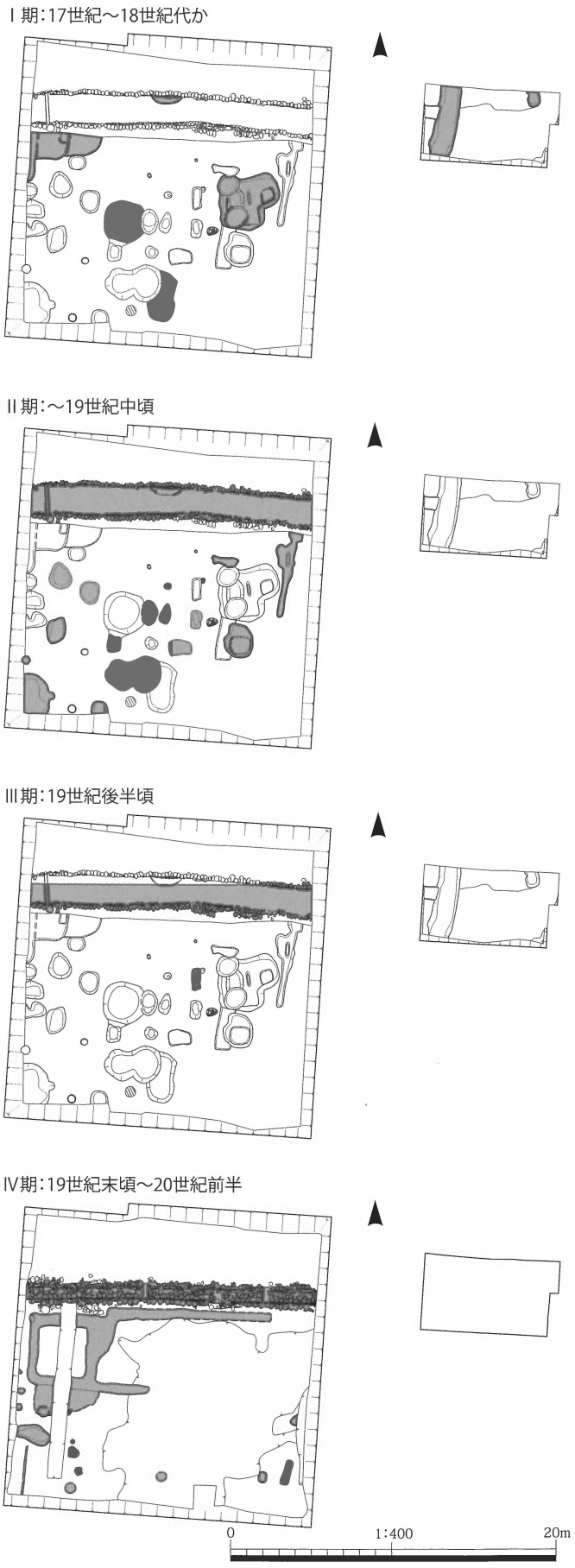
(6) 小鍛冶

平成17年度調査では、町屋敷地から小鍛冶に使用された羽口や鉄滓が出土し、背割水路内に大量の鉄滓が廃棄されていた状況が明らかになった（富山市教委2006b・古川2014）。本調査区からも、SX07・SX09から羽口と鉄滓が見つかり、小鍛冶に関連する遺構と考えられる。また、SX10も堆積土の状況から火に関連した遺構である可能性が高い。出土した陶磁器から、SX07は17世紀後半～18世紀中頃の年代が考えられる。

富山城大手門のすぐ南側に位置する富山城下一番町の町屋敷では、敷地内において、小規模な鍛冶作業を一般的に行っていたことが考えられる。

(7) 町屋構成遺構の年代と変遷

背割水路の変遷は既に述べたとおりであるが、他の遺構も含めると次の変遷が考えられる（第60図）。



第60図　遺構の変遷

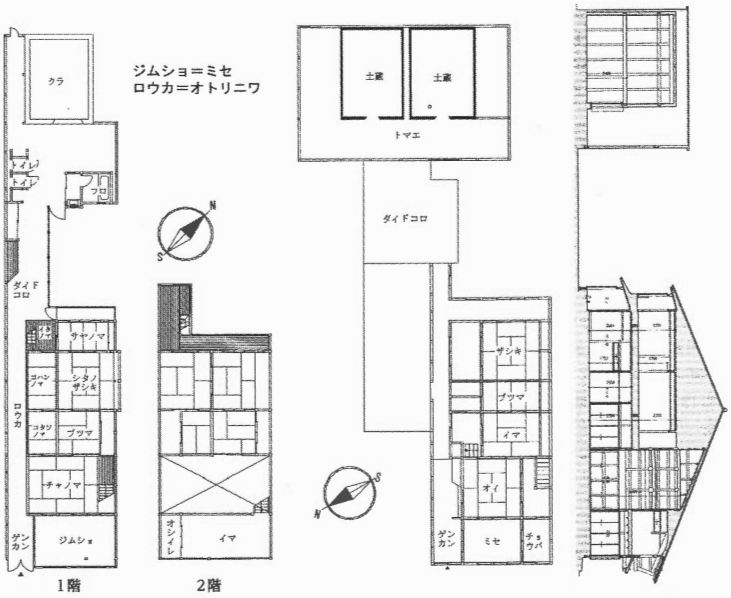
Ⅰ期：17世紀～18世紀代か
　　SD06・SE06・SK21・SK33・SX02・SX04・SX05・SX07・SX09
Ⅱ期：～19世紀中頃［SD03］
　　SD03内上水施設・SD05・SE03・SK14・SK16～SK18・SK23・SK25・SK29～SK32・SX03・SX08・SX10・SP03
Ⅲ期：19世紀後半頃［SD02］
　　SK26
Ⅳ期：19世紀末頃～20世紀前半［SD01］
　　上層面の遺構

(8) 小　結

富山城下一番町での町屋敷の構造は、北陸街道に沿った区画形状から判断して、北陸街道に面して主屋である町屋が建てられ、その裏側の背割水路との間の空間に、土蔵や離れなどの付属屋などがあったことが推測でき、城下町特有の「商家の町並み」が形成されていたことが考えられる。

町屋敷は、城下町での商人や職人の営業及び生活の拠点であって、町人地の空間を構成する基礎単位でもある。加賀藩・富山藩の城下町における町屋内部は、街道に面して商人や職人が商売や仕事をする空間「ミセ」と「ミセノマ」、「オトリニワ」と呼ばれる通路、吹き抜けのある居住空間である「チャノマ」、そして「ブツマ」や「ザシキ」といった部屋が一列に並び、「オトリニワ」を通って「台所」や「厠」に続き、最も奥に「土蔵」を有する構造が基本であった（金沢市教委1992・1994）。富山城下町は戦災によって焼失しているが、加賀藩の高岡城下町の外縁にある「金屋町」では、幕末～明治年間（19世紀後半～末頃）にかけての町並みがよく残っており、町屋敷の構造を窺い知ることができ、間取りに京都の町屋敷との共通性が窺える（第61図、高岡市教委2011・深田2006）。

本調査区は、各種絵図の位置から判断して、商家の一角であった可能性が高い。調査によって見つかった町屋構成遺構は、背割水路と各種絵図に描かれた北陸街道の位置から、町屋敷の正面「ミセ」の奥に位置する居住空間の一部ないしはさらに奥（裏手）に該当する箇所と考えられる。井戸、ごみ穴、小鍛冶などの遺構は、富山城下町での町屋敷地における敷地空間の使用とその生活構造を知るうえで重要である。　（基峰）



1. 高岡・金屋町 大門家　　2. 高岡・金屋町 喜多家

第61図　江戸時代後期（19c前半）の町屋構成（文献36から作成）

第2節　肥前陶器（朝鮮唐津）瓶について

(1) 肥前陶器（朝鮮唐津）について

肥前陶器は、唐津焼と呼ばれている。肥前地方（現在の佐賀県及び長崎県）で生産された陶器の総称で、肥前磁器の伊万里焼と同様に、出荷した港の名前が呼び名となっている。唐津焼は、当初は藁灰釉を用いた陶器で、成形技法は、叩き作りとロクロ作りがある。慶長年間（1596～1615）に生産窯が拡散･急増し、最盛期を迎えた（伊万里市史編さん委員会2006）。その中で、朝鮮の陶工から伝わった伝統的な叩き作り技法で成形され、表（外）面に、鉄釉を上から流した黒色、さらに藁灰釉を掛けた白色の二つの色を交わらせたものが、朝鮮唐津と呼ばれている。

(2) 出土した肥前陶器（朝鮮唐津）瓶

本調査区の下層面SE04南側（B4グリッド）包含層から、朝鮮唐津の瓶、所謂大徳利1点（第23図85）が出土した。口縁部～頸部までを欠損し、残存高21.3cm、体部径13.0cm、底部径9.5cmを測る。表（外）面は、頸部～体部にかけて黒褐色の鉄釉が施され、鉄釉施釉の体部を中心に、白濁色の藁灰釉が掛けられる。特に体部下半が、白みを増している。体部を中心に、黒と白の二つの色が混じり合うように、釉が施される。底部から約4cmまでは褐色の灰釉のみで、厳密には三色構成といえる。表（外）面に、飾りなどの特別な装飾は見られない。釉の下には、叩き成形による平行目の痕跡が見られる。頸部内面にまで、鉄釉が施されている。頸部から光りを当てて内面を見ると、底面の上に粘土紐を巻き上げながら作った輪積み痕跡が一部に残っている。内面の叩き痕は、叩き後になで消しており、一部に平行目が見られる程度で、不明瞭である。体部を叩き成形して肩部を絞り込んだ後、ロクロを使用して頸部が作られている。頸部～肩部にかけて絞り込んだ時の押圧が残り、頸部には段が見られる。体部の器壁は薄く、頸部の方が器壁が若干厚くなる。素地は、鉄分が強い褐色の陶土が使用されている。底面は平底で、未調整・無施釉である。底面に荒目の砂というよりも、籾殻の付着を思わせる痕跡がある（第62図上段）。

(3) 肥前陶器（朝鮮唐津）瓶の特徴と年代

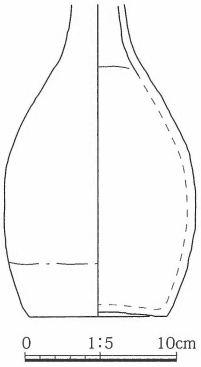
『伊万里市史』（伊万里市史編さん委員会2006）では、叩き成形を中心とする肥前陶器の生産窯が38基以上報告されている。なかでも、朝鮮唐津の瓶を中心に生産した窯では、伊万里市茅ノ谷窯が知られている。その操業期間は、天正18（1590）年～慶長15（1610）年と推定されている。

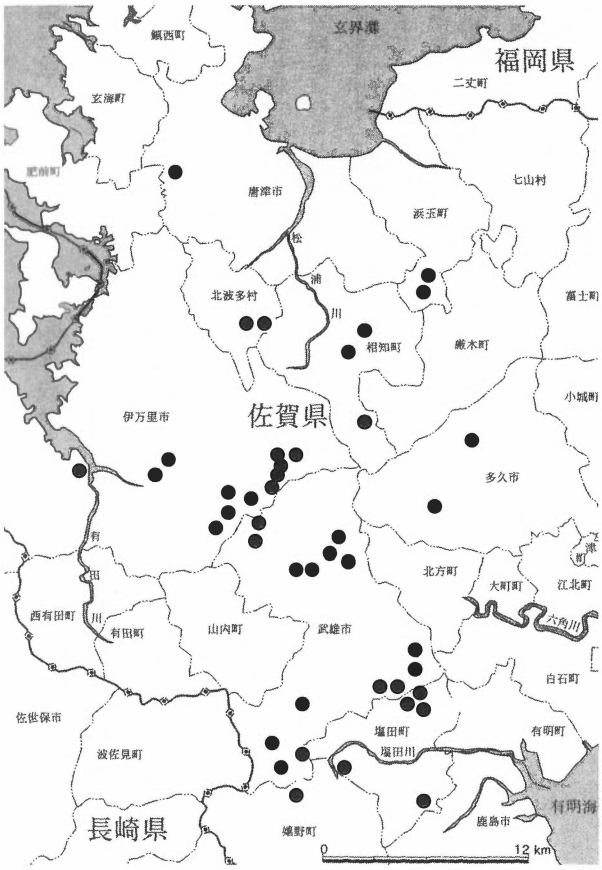
一方、肥前陶器の瓶は、大形瓶（底径が9cm以上）及び中形瓶（底径が9cm未満7cm以上）、それ以下の小形瓶に分類されており（九州近世陶磁学会2000）、本調査区から出土した肥前陶器（朝鮮唐津）の瓶は、大形瓶に該当するが、中形瓶ともいえる大きさでもある。肥前陶器の瓶で、叩き成形で作られた平底の瓶は、比較的古い時期の生産品に該当し、九州陶磁器編年（九州近世陶磁学会2000）では、Ⅰ期（1580～1610年）及びⅡ期（Ⅱ-1期：1600～1630年、Ⅱ-2期：1630～1650年）の特徴を有する。叩き成形による瓶の内面の叩き目は、寛永年間（1624～1643）に同心円状から格子目状へと漸次、変化することが指摘されているが、本調査区出土の瓶は、内面の叩き目が不明瞭でわからない。しかしながら、Ⅰ期～Ⅱ期の特徴を有すると判断できる（第62図下段）。

本資料は、江戸時代前期（17世紀前半）の生産品と考えられる。発掘調査成果が少ない17世紀前半の資料であり、北陸地方での九州陶器の流通及び本遺跡の性格を考える上で重要である。　（基峰）

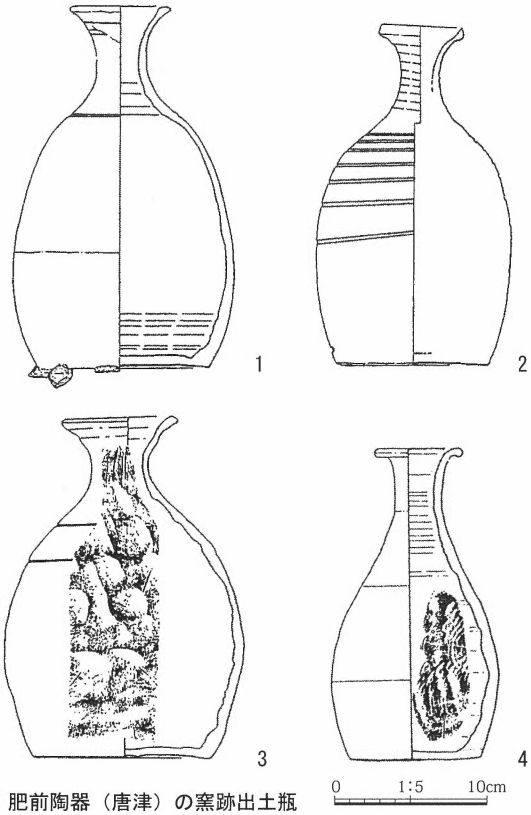
本調査区出土の朝鮮唐津
残存高／24.5 cm
体部径／13.0 cm
底部径／9.5 cm

出土状況





肥前叩き成形陶器（唐津）の主要窯跡の分布



肥前陶器（唐津）の窯跡出土瓶
Ⅰ期　　1・2：茅ノ谷窯（1：朝鮮唐津）
Ⅱ-1期　3・4：大草野窯

第62図　肥前陶器（唐津）瓶
（文献6・11から作成）

第3節　越中瀬戸印花丸皿について

(1) 越中瀬戸について

越中瀬戸は、中世末頃（16世紀末頃）から操業が開始され、現在まで受け継がれている。近世以降の越中を代表する焼物で、現在も富山県窯業の中心的役割を担って、展覧会でもよく取り上げられてきた（富山市郷土博1960・愛知県陶磁資1990・富山市郷土博1995・富山市陶芸館2013）。

北陸地方の施釉陶器では最も古い焼物で、昭和初期から注目され（山本1934）、文書類の記録がよく残っていることでも知られる（定塚1983）。当初は、現在の滑川市及び中新川郡上市町・立山町で操業が開始され、近世（17～19世紀）を通じて立山町を中心に生産が行われた。その系譜は、名前のとおり、中部地方を代表する焼物である瀬戸・美濃である。生産の最盛期には、越中を中心に加賀・能登・飛騨・越後などの北陸地方を中心に流通している（宮田1997・1998）。

(2) 出土した越中瀬戸印花丸皿の検討

本調査区からは、越中瀬戸印花丸皿が少ないながらも3点出土した。ここでは、越中瀬戸印花丸皿について若干の検討を行う。

越中瀬戸丸皿の見込み内底面に、梅や菊といった印花が施されたものが、越中瀬戸皿全体の中では少ないながらも存在する。越中瀬戸は、近世における越中を生産・消費の中心とした日常雑器で、装飾の乏しさもその特徴であるが、操業当初の製品では印花丸皿が多く、雅趣がある。越中瀬戸の中では、印花は文様としての装飾性が高く、その特徴を容易に把握できる資料でもある。印花は、素地が柔らかいうちに、はんこ（判子）や土型などを押し当てて文様を施すもので、17世紀代に多く用いられた陶器の装飾方法のひとつである。はんこで押捺された文様は、印刻部に釉薬が溜まって文様が濃くみえ、焼物の装飾性をより一層増す効果を発揮する。

本調査区から出土した越中瀬戸印花丸皿は、第26図147・156（図版12）及び第27図174（図版13）の3点である。147は体部中央で丸みをもって立ち上がる釉薬内禿皿で、156と174は若干丸みをもって立ち上がり、口縁部が端反り風になる釉薬内禿皿である。いずれも見込み内底面の中心から外れた箇所に十六弁菊が印花され、付高台で、高台内に記号状の墨書が見られるのが特徴である。

147は、SD02・03（背割水路）A－A’間の断割時に、裏込めから出土した。SD02・03（背割水路）構築以前の土に混入していたと判断できる。口縁部から底部にかけての破片で、復元口径10.6cm、復元底径5.1cm、高さ2.5cm、光沢のない鉄釉がかかる。印刻内部にも若干ではあるが釉が見られ、作りは丁寧で焼成は良好、素地色調は橙（2.5YR6/6）で、胎土に白い砂粒を少量含む。156は、SD03（背割水路）内に設営された上水施設の断ち割り時に、北側の裏込めから出土した。SD03（背割水路）構築以前の土に混入していたと判断できる。ほぼ完形で、口径9.8cm、底径4.9cm、高さ2.15cm、銀色の光沢ある鉄釉がかかる。印花内部にも若干ではあるが釉が見られる。作りは丁寧で焼成は良好、素地色調は橙（2.5YR6/6）で、胎土に白い砂粒と少し大きめの白砂粒を含んでいる。174は、SX04からの出土である。層位からSD03（背割水路）構築以前の遺構であることが理解できる。ほぼ完形で、口径10.4cm、底径5.4cm、高さ2.2cm、緑がかった透明感のない厚みのある灰釉がかかる。高台の一部に釉溜まり、印花内部にも若干ではあるが釉が見られる。作りは丁寧で焼成は良好である。素地色調は浅黄（2.5Y7/4）で、胎土に白い砂粒と少し大きめの白砂粒を含んでいる。器形や特徴などの要素から考えて、いずれもほぼ同時期の生産品であることが想定できる。

また、156と174では器形及び印花・胎土の共通要素から、同生産地（窯）であった可能性がある。

(3) 富山県内出土資料との比較（第63図）

越中瀬戸印花丸皿の一般的な特徴は、灰釉か鉄釉の内禿で、灰釉は少しくすんだ緑色で透明感がなく、体部が内湾気味に立ち上がり、高台は付高台か削り出し高台であることが従来より指摘されている（安田1988）。

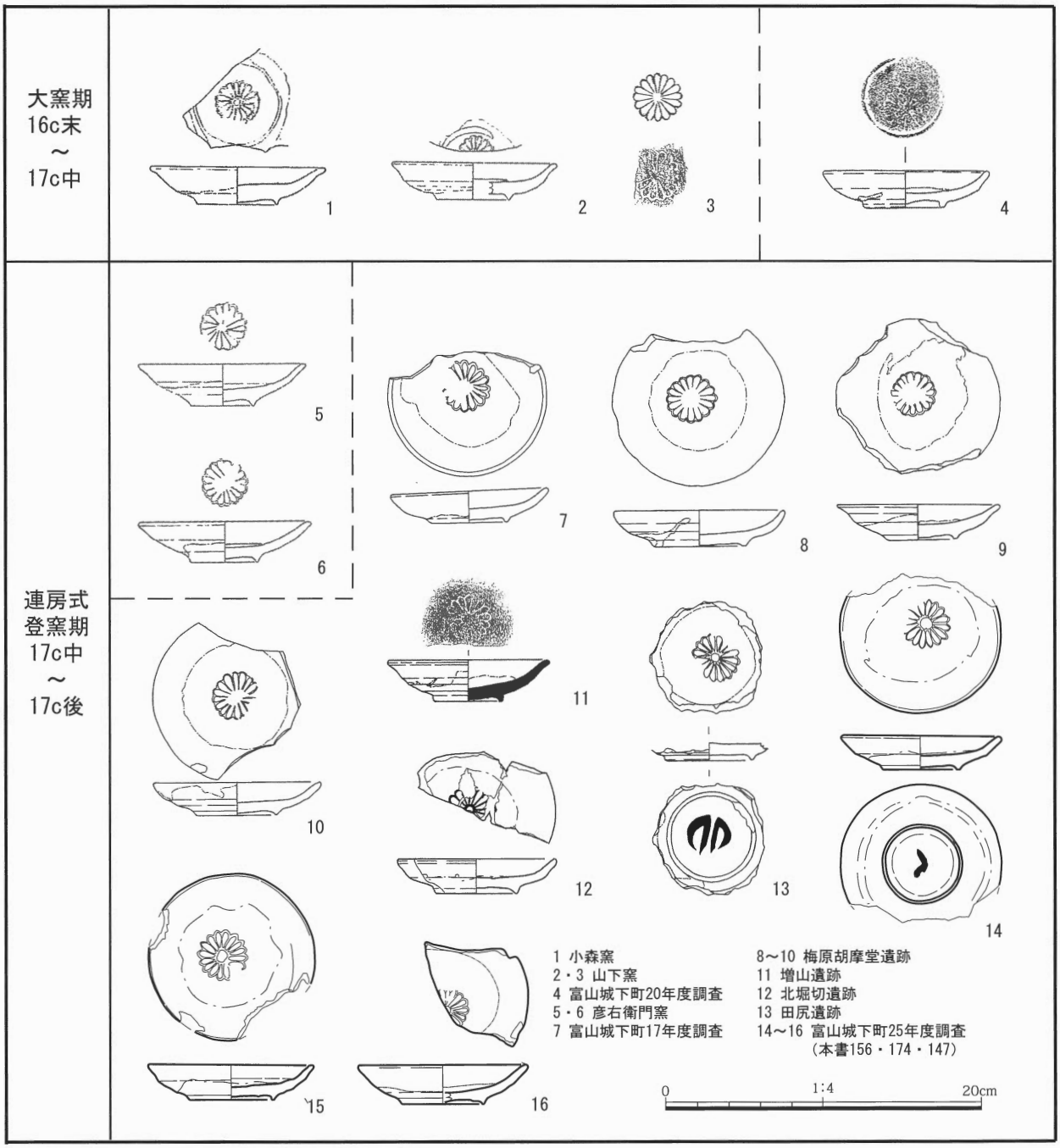
富山県内での発掘調査資料に目をむけると、本調査区で出土した越中瀬戸印花丸皿のうち、147は南砺市梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿A類（体部中央で丸みをもって立ち上がる丸皿）、156・174は梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿B類（若干丸みをもって立ち上がり、口縁部が端反り風になる内禿皿、鉄釉・灰釉、付高台）に該当する。梅原胡摩堂遺跡では、越中瀬戸皿を器形などによってA～F類の6類に分類している。147に相当する越中瀬戸印花丸皿（見込み内底面に十六弁菊）はA類23点中6点、156・174に相当する越中瀬戸印花丸皿（見込み内底面に十六弁菊）はB類13点中1点が出土する。梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿A類では、口径が10cm前後が多く、口径と器高の比がほぼ5：1であることが指摘されている（富山県文振財団埋文事務所1996a）。なお、梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿A類及びB類は、宮田進一氏による越中瀬戸皿A1a類に該当する（宮田1988）。梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿B類に相当し、見込み内底面に十六弁菊が印花される丸皿の事例としては、富山市富山城下町平成20年度調査（富山市教委2010）や砺波市増山遺跡（砺波市教委1978・2008）・黒部市北堀切遺跡（黒部市教委2013）・朝日町柳田遺跡（富山県文振財団埋文事務所2009）などが知られる。また、梅原胡摩堂遺跡の越中瀬戸皿A類に相当し、見込み内底面に十六弁菊が印花される丸皿の事例としては、富山市富山城下町平成17年度調査（富山市教委2006b）や砺波市宮森採集資料（砺波市教委2010）などがある。

本調査区から出土した丸皿同様に、見込み内底面に十六弁菊が押捺され、高台内部に記号状の墨書をもつ事例としては、南砺市田尻遺跡出土の皿（富山県文振財団埋文事務所1996b）がある。

(4) 小　結

越中瀬戸は、操業当初の大窯期においては、上市町黒川窯では見込み内底面に印花が施されたものは確認されていないようであるが、滑川市小森窯では多くの皿類の見込み内底面に桜・菊の印花が認められる。立山町山下窯では生産の主体が皿類で、数多くの皿類の見込み内底面に桜・梅・菊・大吉などの各種の印花が認められ、多様な印花が施されている。大窯の操業は出現期から17世紀中頃までと考えられており、17世紀中頃以降は立山町上瀬戸彦右衛門窯・下瀬戸孫市窯・新瀬戸九左衛門窯といった連房式登窯の操業に変換していったことが指摘されている（宮田1988・1997・1998）。前述の富山城下町平成20年度調査の越中瀬戸印花丸皿は、大窯期の生産品であることが推定されている（富山市教委2010）。立山町を生産の主体とした操業は、加賀藩の「瀬戸役」として、江戸時代末頃まで続き（安田1988・宮田1997・1998）、連房式登窯以降は、胴窯という単房式の窯が普及し、飛躍的に生産量が多くなったことが理解できる。

本調査区から出土した越中瀬戸印花丸皿は、いずれも十六弁菊の印花である。比較資料が少ないながらも、前述した梅原胡摩堂遺跡などの消費地での出土資料及び生産地である大窯の山下窯及び小森窯、登窯の彦右衛門窯の十六弁菊を印花する皿類との比較検討と、17世紀後半に釉止めの段がほとんどない内禿皿になるといった技法上の指摘（宮田1997・1998）から考えると、山下窯の系譜下で展開した立山町彦右衛門窯などの連房式登窯で生産されたものと考えられる。その生産年代は17世紀後半と推定できる。本調査区から出土した陶磁器類の中では、古い様相を示す資料である。（関）



第63図　見込み内底面に十六弁菊を印花する主な越中瀬戸丸皿
（文献23・47・49・50・55・59・76・79から作成）

第4節　背割水路出土の土人形「狆抱き」について

(1) 土人形について

人形は「紙・木・土などで人間の形に作ったもの」で、古くは神の依代や呪詛の対象物として呪術的要素の強いものであったが、江戸時代に入ると、愛玩あるいは観賞用として盛行した。日本の郷土人形は、世界的に見ても種類が多く、全国各地で作られてきた（俵編1978・京都府立総資館友の会1981）。

土人形は、こねた粘土を型枠に入れて抜き、合わせて成形し、乾燥後に窯で焼き、色鮮やかな塗彩が施されたものが多い。江戸時代後期に京都の伏見人形を媒介にして、広く全国に普及したといわれている。愛玩・観賞用といった機能の他に、江戸時代の人々の実生活と関連した民間信仰が加味され、人形の種類ごとに付与するご利益が決まっていたことでも知られている（塩見1967・奥村1976）。考古学による土人形の研究は、伏見人形窯の構造や変遷の過程などを中心に進められ（木立1997・2001）、平成以降、各種開発工事に伴う近世遺跡の発掘調査の進展に伴って、遺跡出土の土人形が研究の対象として注目されるようになった（北原2000・安芸2000・関西近世考古研2008）。

(2) SD02・03（背割水路）出土の「狆抱き」

本調査区では、下層面（江戸時代）から蛙（第29図216・図版14）を除き、土人形が3点出土した（第29図214・215・217・図版14）。

ここでは、出土した土人形の中で、特徴の把握が容易である「立ち人形の狆抱き（以下、「狆抱き」と呼ぶ）」について、若干の検討を行いたい。「狆抱き」は、SD02・03（背割水路）の中央（2区）の中央付近、検出面からの深さ15～30cmから出土した。立ち人形で、胸元正面に狆（犬）を抱き、頭部を欠損する。残存高6.1cm、幅3.2cm、厚さ1.9cmを測る。型抜き前後合わせ成形で、正面を中心に透明釉と緑釉が施釉され、狆の目と体には黒色の彩色が見られる。

(3) 遺跡出土の「狆抱き」

遺跡から出土した「狆抱き」は、管見に触れたもので第25表及び第64図（東京都建設局・内藤町遺跡調査会1992・四谷一丁目遺跡調査団1998・東京都埋文センター2005・東池袋四丁目再開発組合・玉川文研2007・汐留遺跡調査会1996・京都市埋文研2007・石川県埋文センター2002・金沢市2006・福岡市教委1994・福岡市教委2007・北原2000）に示したとおりである。幕府の中心である江戸城が置かれた江戸城下（東京23区）及び京都の伏見城下（京都市）、地方では九州の福岡城下（福岡市）と北陸の金沢城下（金沢市）・富山城下（富山市）からの出土で、特に江戸城下に集中する。いずれも江戸・京都といった都や地方の有力大名によって築かれた城下町で、近世遺跡の発掘調査が実施されている箇所からの出土である。

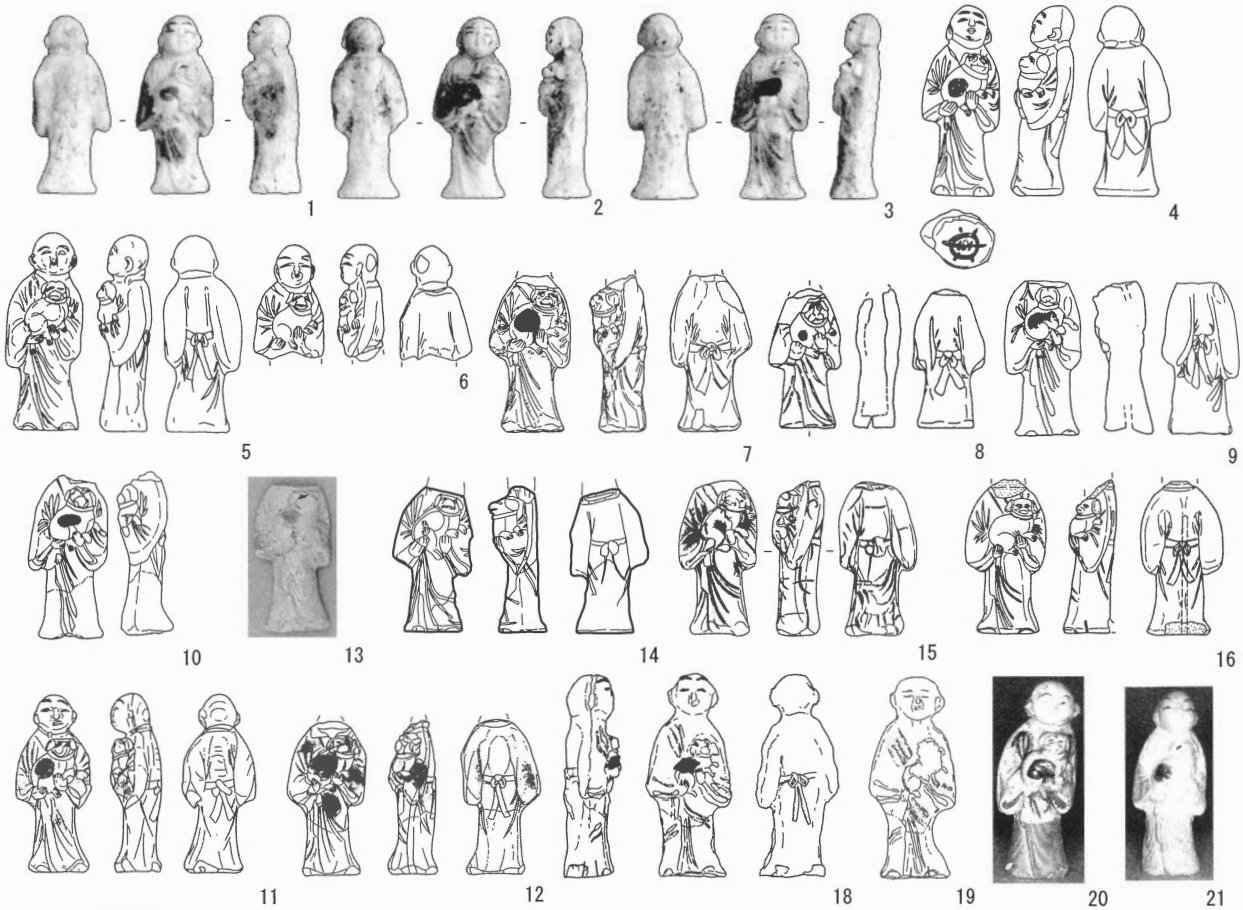
「狆抱き」は、いずれも型抜き前後合わせ技法での成形と考えられる。その規模は、平均で高さ7.79cm、幅3.17cm、厚さ2.18cmである。土人形の種類の中では小型で、ぽってりと愛嬌のある造形が特色である。その形状から、子どもを対象として流通した、安価な愛玩用であったと考えられる。

江戸城下からの出土品については、胎土が白色で透明釉に緑釉を流し掛けるものが京都産（背面に「亀」や「治」などの刻印などが有るものあり）、胎土が橙色・褐色で透明釉のみのものが江戸近郊産のものに多いとの指摘がある（安芸2001）。ここで集成を試みた「狆抱き」は、容姿・成形などの細やかな特徴に差異が認められる。伏見人形のように、土産品などとして全国的に流通したものと、福

第25表　遺跡出土の主な土人形「狆抱き」

番号	都道府県	市区町村	城下名	遺跡・人形名	出土遺構	規模 cm			成　形	施釉／塗彩	胎土色調	時期	備　考	文　献	文　献 図版番号
						高さ	幅	厚さ							
1	京都府	京都市	伏見	伏見城a	埋葬237	7.0	3.0	2.1	型抜き・前後合わせ	褐・緑・透明／	白	19c前	底面櫛孔	京都市2007	図版56-922
2	京都府	京都市	伏見	伏見城b	埋葬314	7.0	3.0	1.9	型抜き・前後合わせ	褐・透明／	白	19c前	底面櫛孔	京都市2007	図版57-942
3	京都府	京都市	伏見	伏見城c	埋葬314	7.6	3.0	1.9	型抜き・前後合わせ	褐・透明／	白	19c前	底面櫛孔	京都市2007	図版57-943
4	東京都	新宿区	江戸	新宿六丁目	2416遺構	7.9	3.3	2.6	型抜き・前後合わせ	／塗彩	白	19c前	京都系、底面墨書「亀」	東京都埋文2005	205図-3
5	東京都	新宿区	江戸	内藤町a	C-4遺構	8.3	3.2	2.3	型抜き・前後合わせ	／緑・茶・黒	白	19c前	京都系	新宿区内藤町1992	229図-10
6	東京都	新宿区	江戸	内藤町b	C-125遺構	(4.4)	3.0	2.1	型抜き・前後合わせ	／黒	白	19c前	京都系	新宿区内藤町1992	229図-11
7	東京都	新宿区	江戸	四谷一丁目	D-15遺構	(6.6)	3.4	2.5	型抜き・前後合わせ	／茶・緑	乳褐	19c前	京都系	新宿区四谷一丁目1998	60図-101
8	東京都	豊島区	江戸	巣鴨町	つつじ苑55遺構	(5.9)	3.1	2.3	型抜き・前後合わせ	釉／緑・茶・黒	白	19c前	京都系	豊島区1996	450図-734
9	東京都	豊島区	江戸	染井a	101遺構	(6.4)	3.3	2.1	型抜き・前後合わせ	灰・緑／	白	19c前	京都系、底面櫛孔・狆ぶち鉄絵	染井2001	124図-828
10	東京都	豊島区	江戸	染井b	94遺構	(6.8)	3.4	2.3	型抜き・前後合わせ	灰／	黄白	19c前	底面櫛孔・狆ぶち鉄絵	染井2001	116図-702
11	東京都	豊島区	江戸	東池袋Ⅱa	1004遺構	7.5	3.1	2.2	型抜き・前後合わせ	／赤・茶・緑	－	19c前	江戸系	東池袋四丁目2007	170図-759
12	東京都	豊島区	江戸	東池袋Ⅱb	1380遺構	(6.5)	3.4	2.1	型抜き・前後合わせ	／黄・緑	－	19c中	江戸系、底面櫛孔	東池袋四丁目2007	194図-1248
13	東京都	港区	江戸	汐留	1溝	(6.9)	3.0	－	型抜き・前後合わせ	／緑・黒	白	19c前		汐留1996	玩具写真2-63
14	富山県	富山市	富山	富山城下町	SD02・03	(6.1)	3.2	1.9	型抜き・前後合わせ	緑・透明／黒	にぶい黄橙	19c前		富山市2014	第29図-215
15	石川県	金沢市	金沢	広坂(1丁目)Ⅲ	SX1034	(6.4)	3.3	2.2	型抜き・前後合わせ	透明／緑・茶	白	19c前		金沢市2006	196図-92
16	石川県	金沢市	金沢	木ノ新保	SK252	(6.4)	3.3	2.0	型抜き・前後合わせ	－	－	19c前		石川県埋文2002	185図-E14
17	福岡県	福岡市	福岡	福岡城	－	－	－	－	型抜き・前後合わせ	－	－	－		福岡市2007	図版8-3
18	福岡県	福岡市	福岡	藤崎a	包含層	8.5	3.1	2.5	型抜き・前後合わせ	－	－	19c前		福岡市1994	31図-100
19	福岡県	福岡市	福岡	藤崎b	包含層	8.5	3.0	2.5	型抜き・前後合わせ	－	－	19c前		福岡市1994	31図-101
20	福岡県	福岡市	福岡	博多a	－	－	－	－	型抜き・前後合わせ	釉薬／	－	－		北原2000	図12
21	福岡県	福岡市	福岡	博多b	－	－	－	－	型抜き・前後合わせ	釉薬／	－	－		北原2000	図12

※立ち人形のみで、座り人形は除外した。



京都系
1 伏見城a　2 伏見城b　3伏見城c
4 新宿六丁目
5 内藤町a　6 内藤町b
7 四谷一丁目　8 巣鴨町
9 染井a 10 染井b　13 汐留

京都・金沢系
14 富山城下町
15 広坂(1丁目)
16 木ノ新保

江戸系
11 東池袋Ⅱa
12 東池袋Ⅱb

福岡系
18 藤崎a　19 藤崎b
20 博多a　21 博多b

0　1:3　5cm

第64図　主な土人形「狆抱き」と生産地
（文献4・12・16・20・31・35・44・45・67・71・72から作成）

岡博多出土資料などのように、各地の城下を中心とした窯元で製作されたものに大別できると考えられる。本調査区で出土した「狆抱き」は、新宿区四谷一丁目遺跡や金沢市広坂（1丁目）遺跡出土のものによく似ており、施釉及び胎土から京都・金沢系のものと考えられる。

第65図　描かれた土人形「狆抱き」
（文献10から）

(4)「狆抱き」の出現と普及・定着

土人形の出現は、17世紀中頃と考えられ、18世紀以降になって各地の城下町から多量に出土する傾向が指摘されている（関西近世考古研2008）。伏見人形に目を向けると、寛文六（1666）年に再板された「ひな人形の古実」にて、「狆抱き」の姿が描かれている（第65図）。伏見人形では、17世紀後半にはその容姿・造形が定着していたことが理解できる。しかしながら、愛玩的な童子人形は、18世紀後半～19世紀前半にかけて、各地の城下町から多く出土する傾向で、この時期に各地の城下町において普及・定着したことを窺い知ることができる。

この背景としては、江戸を中心とした町人文化が最も華やいだ元禄や化政文化の時期に該当することから、節句行事や民間信仰の盛行との結びつきによって、窯元及び商人を媒介とした土人形の生産・販売の増加と、商工人などの町人（民衆）を中心とした購買層の増加が相乗した結果、城下町を中心に土人形の普及・大衆化が進んだことが考えられる。本遺跡出土の土人形も、当該期のものと考えられる。江戸や金沢といった主要な城下町同様に、富山城下町においても、江戸を中心に開花した町人文化の賑わいと繁栄の定着がなされていたことが想像できる。

(5) 小　結

最後に、「狆抱き」の意味について考えてまとめとしたい。「狆抱き」は、福岡博多では、ねぶり（嘗め）人形と呼ばれたようで、子どもが嘗めてしゃぶる人形として扱われてきた（福岡市教委1994・北原2000）。伏見人形での「狆抱き」は、饅頭喰いなどの童子人形の一群に分類される。童子人形は、子どもの成長と健康を祈願するためのものといわれる。一方、狆は、愛嬌ある風貌から、「狆ころ」とも呼ばれたようで、子どものひきつけ防止や守り神としてのご利益があったようである（塩見1967・奥村1976）。

「狆抱き」は、前述のとおり、その形状から子どもを対象として流通した安価な愛玩用であったものと考えられるが、子どもが健康に育つためのお守り的意味を持った存在であったことも考えられる。

（基峰）

第5節　本調査の総括と周辺調査との比較

本調査では、富山城下町遺跡主要部における主に町屋に関する遺構を検出した。周辺では近年民間開発に伴う発掘調査が相次ぎ、城下町主要部の様相が明らかになりつつある。過去2回の調査で、武家屋敷地と町屋敷地を分ける背割水路を検出していたが、今回、変遷や構造をより明確にすることができた。本節ではまず主要遺構である背割水路の変遷と構造を考える。さらに、本調査区の性格について触れ、これまでに行われた城下町の他の調査区との比較を行う。

(1) 背割水路の変遷と構造

変　遷　背割水路は本調査区（平成25年度調査区）のほかに、約100ｍ東で行った平成17年度調査区、約250ｍ西で行った平成20年度調査区で検出している（富山市教委2006ｂ・2010）。本章第１節で述べたように本調査区では3時期の変遷を確認した。江戸時代後期の19世紀中頃に埋没したとみられるSD03→幕末頃に造られ近代に埋没したとみられるSD02 →戦後の戦災層によって埋没したSD01という変遷である。

平成20年度調査では上層・下層2期の背割水路を検出した。構造と時期から、上層のものは本調査区のSD01、下層のものはSD03に対応するとみてよい。また、平成17年度調査区の背割水路は、本調査区のSD03 に対応するとみられる。また、平成17年度調査では、石組みの背割水路の構築前に素掘りの段階があったことが明らかになっている。

以上から背割水路の変遷をまとめると次の4期に分かれる。本章第１節で示した町屋構成遺構の年代とも概ね対応する。

Ⅰ期：17～18世紀代か。素掘り。幅4ｍ以上、深さ1.4ｍ以上。平成17年度調査区で確認。

Ⅱ期：～19世紀中頃。石組み。内幅約1.5～2.0ｍ、深さ0.9ｍ～1.0ｍ以上。平成17・20・25年度調査区で確認。

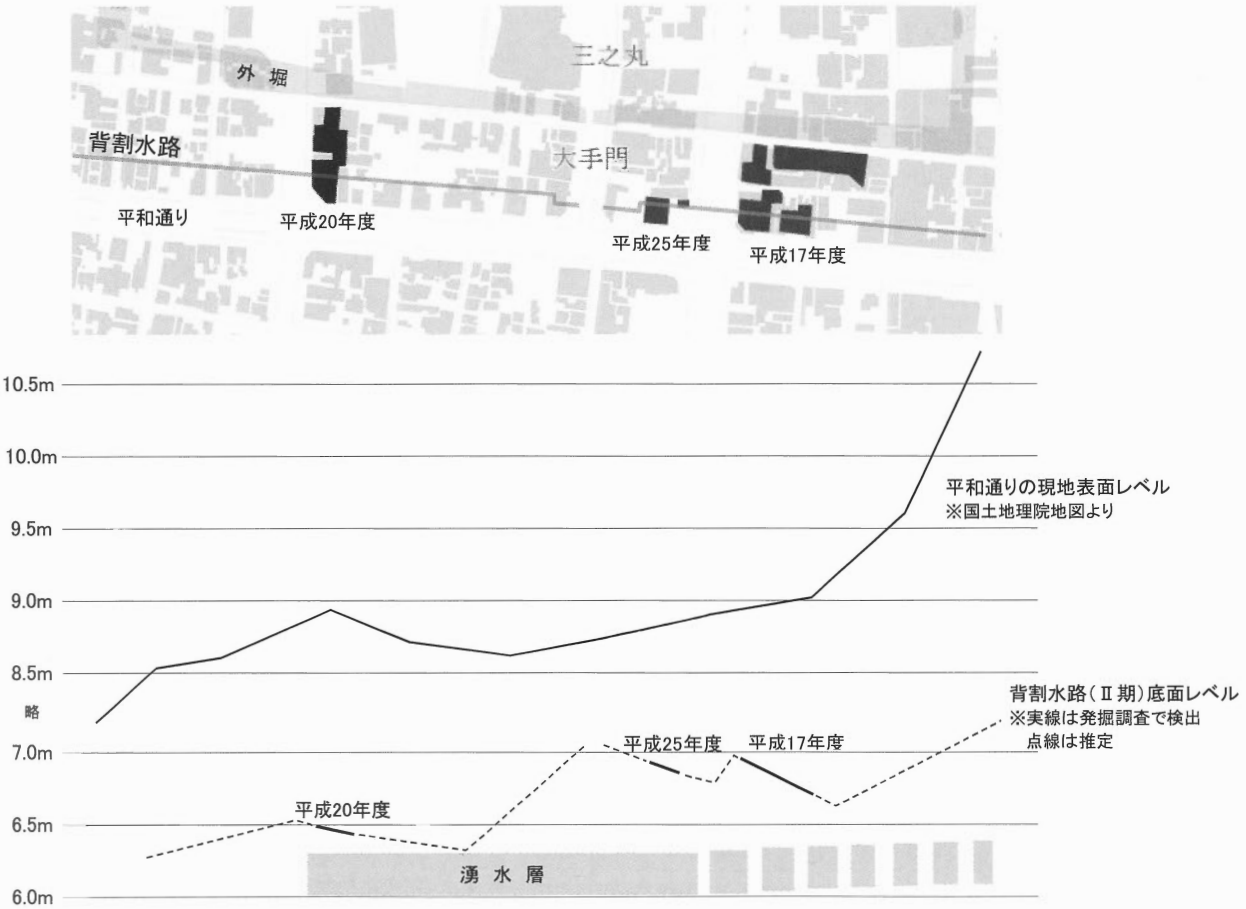
Ⅲ期：19世紀後半頃か。石組み。内幅約1.2～1.3ｍ以上、深さ0.3ｍ以上。平成25年度調査区で根石付近のみ確認。

Ⅳ期：～20世紀前半。石組み（底面も石敷）。内幅0.8～1.7ｍ。深さ0.6～0.8ｍ。平成20・25年度調査区で確認。

Ⅱ期より前をⅠ期として一括りにしたが、Ⅰ期は長期に及ぶことから何度かの造り替えがあったとみるべきであろう。また、素掘りであるⅠ期は平成17年度調査区のみで見つかり、すぐ西側で行った平成25年度の本調査区では検出していない。同じ規模で延びているなら、本調査区でも掘り方を確認できたはずであるが、そうでなかったのはⅠ期の水路が地点ごとに幅や深さが違っていたためと考えられる。実際Ⅰ期の背割水路を検出した平成17年度調査でも地点ごとに規模が異なり、最も西側では深さが浅くなる。本調査区付近では規模が小さく、造り替えの際に削平されたことで痕跡が残らなかった可能性がある。Ⅱ期は出土遺物から、埋没は19世紀中頃とみられるが、構築時期は判然としない。また、平成20年度の大手門南側の工事立会では、近代とみられる背割水路の一部を検出した（富山市路面電車推進室ほか2009）。割石を使うなど、上記Ⅳ期のものとは構造が異なり、近代のなかでも部分的に造り替えを行っていたのかもしれない。

構造と機能　3調査区すべてで見つかっているⅡ期の水路について考える。

各調査区での底面の標高と流水方向は次のとおりである。平成20年度調査区は西側が6.48ｍ、中央6.46ｍ、東側6.42ｍ、平成25年度調査区は西側6.92ｍ、中央部6.85ｍ、東側6.83ｍ、平成17年度調査区

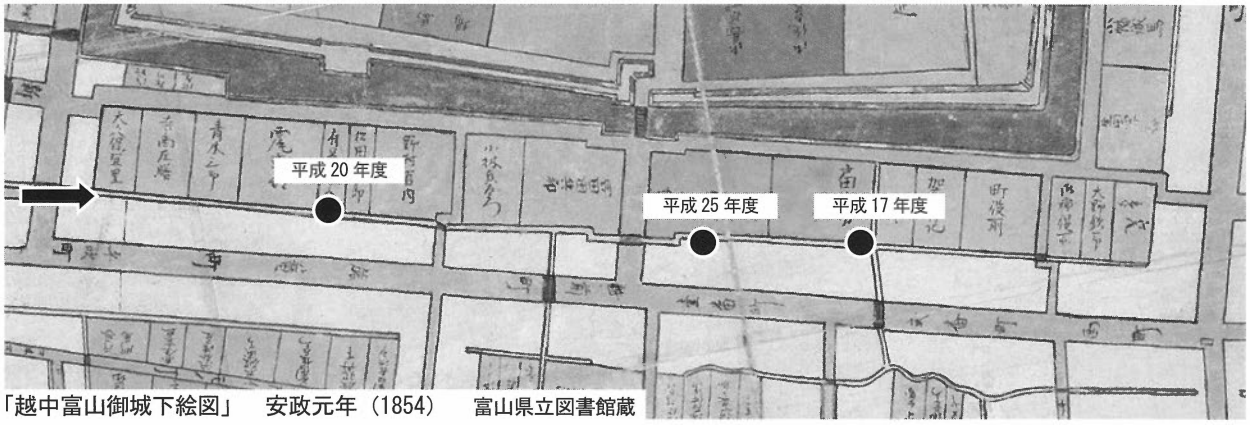


第66図　背割水路（Ⅱ期）の底面構造と現地表面の標高

は西側6.94m、東側6.70mとなる。いずれも西側が高く東流するが、標高をみると背割水路全体で一定（東）方向に流す構造とはなっておらず（第66図）、東流させる地点と西流させる地点を交互に造って上り下りのある底面構造をとっていたことが推測できる。谷部になる地点で北に並ぶ武家屋敷地の境に設けた小規模な水路から外堀へ流し込んだのであろう。

こうした構造は地形の影響を受けたためと考えられる。富山城周辺の現況地形を調査した國香正捻氏によると、背割水路周辺の地形は東が高く、西に向かって低くなる（國香1995）。国土地理院地図でより詳しく地形の変化を読み取ると（第66図）、國香氏の指摘どおり東側の西町付近が最も高く全体として西下がりの傾向があるものの、平成25年度の本調査区付近（一番町）で低くなった後、西側の平成20年度調査区付近（旅籠町）ではやや高くなり、さらに西側で再び低くなることがわかる。このような高低差のある地形において、ひとつながりでかつ一定の深さを保持した水路を構築するために、上記のような構造をとったと考えられる。なお、水路の掘削にあたっては湧水層に達しないよう配慮していた可能性がある。調査で検出した井戸から、湧水レベルは標高6.0～6.3m付近とみられる。いずれの時期の水路もこれを超えない深さで掘られている。土壌分析の結果（第4章第2節）では、水路の底面はやや湿っている程度で水の流れはほとんどなかったとされる。生活排水や雨水を流す程度で、湧水や上流（南）からの水が常時流れる状態ではなかったと考えられる。

背割水路北側にある武家屋敷地は、寛文期の前田利次による改修によって外堀を囲うように配置されたものである。外堀の外縁を軍事・警備を専らとする番方によって囲み、軍事的防御を固めたと考えられる（古川2014）。その武家屋敷を町屋敷と分離する背割水路は、防御的な観点からも重視され



「越中富山御城下絵図」　安政元年（1854）　富山県立図書館蔵

「前田利同城囲の図」　慶応末年頃か（1867年頃）　富山市郷土博物館蔵

第67図　絵図にみる背割水路の変化（矢印が背割水路。●は発掘調査地点）

たであろう。城下町の他の東西方向の水路が一部途切れる地点がみられるのに対し、一連で構築された背割水路は、水路（下水）としての機能以上に武家屋敷地と町屋敷地を隔てる意味を強く内包していたと考えられる。Ⅰ期からⅣ期にかけての規模の縮小化は、近世から近代にかけてそうした防御的意識が薄れていくことの反映とも考えられる。

Ⅱ期からⅢ期への造り替えについて　次にⅡ期の背割水路からⅢ期へ造り替えを行った理由について考えたい。

平成25年度の本調査区では、背割水路の上面から約50cmまでの層に遺物が集中し、それより下層ではほとんど出土していない。平成20年度調査区は出土状況について記載がないが、平成17年度調査区はやはり下層からの遺物の出土が希薄であるという。こうした遺物出土状況を勘案すると、すべてが同じ時期に人為的に埋められたとは考えにくく、河川の氾濫など広域に及ぶ自然災害によって泥土が下層に堆積し、その後、造り替えにあたり上層を人為的に埋めた可能性が高い。

Ⅱ期からⅢ期への造り替えの時期にあたる幕末期は、何度か大規模な水害に見舞われている。このうち埋没の要因となったのは、安政2（1855）年、安政6（1859）年、慶応2（1866）年いずれかの神通川の水害と考える。その理由は次のとおりである。

第67図上段は、安政元（1854）年の「越中富山御城下絵図」である。下段は「前田利同城囲の図」で、富山市郷土博物館の浦畑奈津子氏のご教示によると、富山城最後の状態を描いたものとされる。比較して注目されるのは、前者絵図の中央付近（平成25年度調査区西側）にみられる背割水路のクランクが、後者では直線化していることである。すなわち、前者から後者の間に造り替えが行われている可能性が高く、このことから推定すると、上記3つのいずれかの水害が原因となった可能性が高い。これら

の水害は神通川の出水により、古い時期から3500軒、3200軒、3000軒の家屋が浸水したとされる（富山市郷土博1999）。具体的な浸水場所は不明だが、神通川の蛇行地点に近く堤防の決壊が起きやすい城下町周辺は大きな被害を受けたことが推測できる。なお、後者の「前田利同城囲の図」では水路の東部が描かれておらず、復旧の途中段階を表しているのかもしれない。

クランクについては大手筋から東西をみたときの見通しを遮蔽する意味があった可能性を考えたい。城下町の街路の各所にも鉤曲と呼ぶクランクがあり、遠見遮断により敵の攻撃能力を低下させる街路の防御をなしている（古川2014）。このようにⅢ期の造り替えにあたって水路を直線化したことも、上述した規模の縮小化とともに、城郭としての防御意識が失われつつあり、純粋に水路としての機能へ変化したことを示しているのではないか。

(2) 本調査区の町屋の性格と周辺調査区との比較

本調査区では主に町屋遺構を検出した。まずその性格について検討する。

また、町屋遺構は他に3つの城下町調査で検出している。平成17年度、平成20年度、平成25年度西町（本調査区も平成25年度調査のため区別のためこのように表記する）（第2図）の調査である。これらと比較し各調査区の特徴を検討する。

本調査区の町屋の性格　本調査区における生産関連遺物として、SX07・09で出土した鞴の羽口や鉄滓がある。これらは上述したように小鍛冶に関連する遺物とみられる。SX10も覆土に焼土・炭化物や礫を含むことから同じ性格の遺構であった可能性が高い。同じ一番町の平成17年度調査区でも南西部の一角で、羽口や鉄滓を含む鍛冶関連遺構が集中している（富山市教委2006b）。さらに平成25年度西町調査区でも羽口や椀型滓が出土し、生産加工直後とみられる頭部を巻かない釘があることから小鍛冶を行ったことが指摘されている（西町南地区市街地再開発組合・富山市教委2014）。平成17年度の調査報告書では、各町屋内で自給自足的に小鍛冶を行っていたことを指摘している（富山市教委2006b）が、平成25年度に行った2つの調査区でも同様の小鍛冶関連の遺構・遺物を検出していることから、その蓋然性はより高くなったといえる。各商家で必要とする鉄製道具類のうち少なくとも一部は、外注するのではなく各々が個別に生産していたと考えられる。本調査区に存在した町屋がどのような商品を扱っていたかは不明だが、少なくともある時期には鉄製道具を自給的に生産していたとみられる。

次に遺構の配置からみた土地利用について検討する。本調査区の遺構分布状況をみると、南東側が希薄となる（第5図）。また、井戸は西半部のみに存在する。このように偏在性が認められるのは、同じような土地利用がある程度踏襲され続けたことを示すのではないか。つまり調査区の南東部からその南側にかけて建物が存在し、井戸がある西半部は庭地などとして利用されていたと考えられる。同じような視点で他の調査区をみると、平成17年度調査区では南西部に井戸を含む遺構が密集し、南東部は希薄である。平成25年度西町調査区も南半部に遺構が多く、さらに南半部のなかでも井戸の偏在が認められる。

また、背割水路を横断して武家屋敷と町屋敷をつなぐ上水施設が検出された。高低差から取水口は武家屋敷側とみられる。背割水路SD03 の石積みを改修し設置していることから、設置時期はSD03の構築より新しい。19世紀前半～中頃であろうか。町屋敷側にも井戸は存在するためこのような施設を設置して水を引く理由が判然としない。ただ、背割水路周辺は、木戸の設置など武家屋敷と町屋敷を分離する意識が強くみられる（古川2014）にもかかわらず、実際は関係性が認められることである。平成17年度調査でも背割水路に武家屋敷と町屋敷をつなぐ木橋橋脚と張出しが確認され、行き来が

あったことが明らかになっている。こうした状況は、便宜的・緊急的にとられた措置かもしれないが、前節で指摘した背割水路の規模の縮小化・クランクの消失といった変遷を考慮すると、城下町整備当初（寛文期）にあった武家・町屋の分離意図や防御意識が、江戸時代末期近くに至り徐々に薄れていくという時期的な背景を要因とした可能性もある。

周辺調査区の町屋との比較　本調査区及び同じ一番町の平成17年度調査区は、上述したように鞴の羽口、鉄滓などの小鍛冶遺構にかかわる遺物の出土が特に多く、商売に必要な道具を自給的に生産していたとみられる。平成25年度西町調査区は、羽口・鉄滓の出土は上記調査区ほどではないが、加工途中とみられる釘の出土があり、小鍛冶生産を行っていたと考えられる。また、ここでは膨大な木製品、特に曲物の薄い板材・端材が出土し、木材加工施設が存在したとみられている（西町南地区市街地再開発組合・富山市教委2014）。釘は木製品の製作のために生産されたものかもしれない。

一方、旅籠町の平成20年度調査区は、遺構密度が高いものの生産関連遺物はほとんど出土していない。これは文字通りこのあたりが「旅籠」すなわち宿場だったことの証左であろう。

これまで城下町の発掘調査は一部を行ったに過ぎないが、各地点において特徴的な遺構・遺物の出土状況が認められ、町屋を推測する手がかりが得られている。

(3) まとめ

本調査では背割水路の残存状況が比較的良く、3時期の変遷を確認した。過去の調査成果も含めると、全体としては少なくとも4期の変遷があることが明らかになった。また、水路の構造を推測し、幕末頃になされたⅡ期からⅢ期への造り替えについては河川氾濫による埋没が原因と推測した。

現在でも、ほぼ背割水路が存在した地点を境に、北側は「総曲輪」という城の外郭を示す地名、南側は「旅籠町」「越前町」「一番町」「西町」など町人地を示す地名が残る。外堀ではなく、背割水路が地名境界となっていることからも重要な意味をもっていたことがうかがえる。

本調査区では町屋遺構のなかに鍛冶関連遺物を多く含むものがあり、当該地の商家において自給的な小鍛冶を行っていたことを推測した。また、これまでの城下町主要部の発掘調査成果を瞥見した結果、地点ごとに認められた異なる遺構・遺物の組成は町屋で行われていた商行為の違いを示すと考えられ、城下町の様相が明らかになりつつある。

今回の調査成果は町屋遺構を主とするものであったが、他の調査区では武家屋敷地についても多くの成果が得られている。町屋敷と武家屋敷地を細かく比較検討していくことで生活や土地利用の違いが明らかになると思われる。また、本来隔てられるべき武家屋敷地と町屋敷地の間に、木橋や上水施設など両者を結び付ける遺構が検出されていることに関して、両者がどのような関係にあったのかも今後追求すべき課題であろう。（野垣）

引用・参考文献

第1～3・5章

1 愛知県陶磁資料館　1990 『越中のやきもの』
2 安芸毬子　2000 「掘り出された人形」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
3 安芸毬子　2001 「遊・玩具１やきもの製人形類」『図説江戸考古学研究事典』 柏書房
4 石川県埋蔵文化財センター　2002 『金沢市木ノ新保遺跡』
5 市田京子　2000 「江戸時代の下駄」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
6 伊万里市史編さん委員会　2006 『伊万里市史』陶磁器編（古唐津・鍋島）
7 江戸遺跡研究会　2001 『図説江戸考古学研究事典』 柏書房
8 大阪市建設局　2007 「太閤（背割）下水」『大阪の下水道』№26
9 大橋康二　1994 『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』 理工学舎
10 奥村寛純　1976 『伏見人形の原型』 伏偶舎
11 九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』
12 金沢市　2006 『広坂遺跡（１丁目）Ⅲ』
13 金沢市教育委員会　1992 『金沢の歴史的建築と町並み』
14 金沢市教育委員会　1994 『金沢の歴史的建築と町並み－歴史的文脈の再構築に向けて－』
15 関西近世考古学研究会　2008 「土人形が見た近世社会」『関西近世考古学研究』16
16 北原直喜　2000 「今戸人形論」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
17 木立雅朗　1997 「伏見人形の窯をめぐって－近世京都の窯業についての予察－」『立命館大学考古学論集』Ⅰ
18 木立雅朗　2001 「伏見人形の成立と発展をめぐる二つの背景－近世窯業の発展と精神文化－」『立命館大学考 古学論集』Ⅱ
19 岐阜市歴史博物館　2010 『越中と美濃を結ぶ考古展－城と都市－』 城と都市展実行委員会
20 京都市埋蔵文化財研究所　2007 『伏見城跡』
21 京都府立総合資料館友の会　1981 『日本の郷土人形』
22 久保尚文　1983 『越中中世史の研究　室町・戦国時代』 桂書房
23 黒部市教育委員会　2013 『北堀切遺跡Ⅶ－４区発掘調査報告書』
24 國香正稔　1995 「富山市内の微地形調査」『巡検研究』第３号　富山巡検研究会
25 佐賀県立九州磁器文化館　1995 『柴田コレクションⅣ－古伊万里様式の成立と展開－』
26 佐賀県立九州磁器文化館　1997 『柴田コレクション（Ⅴ）－延宝様式の成立と展開－』
27 佐賀県立九州磁器文化館　1998 『柴田コレクション（Ⅵ）－江戸の技術と装飾技法－』
28 佐賀県立九州磁器文化館　2003 『柴田コレクション総目録』
29 佐賀県立九州磁器文化館　2008 『土の美・古唐津－肥前陶器のすべて－』
30 定塚武敏　1983 「富山の近世陶磁」『世界陶磁全集』9　小学館
31 汐留地区遺跡調査会　1996 『汐留遺跡』
32 塩見青嵐　1967 『伏見人形』河原書店
33 新越中風土記刊行会編　1978 『新越中風土記』 創土社
34 新宿区教育委員会　1990 『紅葉堀遺跡』
35 新宿区四谷一丁目遺跡調査団　1998 『四谷一丁目遺跡』
36 高岡市教育委員会　2011 『鋳物師の町並み　金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書』
37 高瀬保編　1987 『富山藩侍帳』越中資料集成１　桂書房
38 立山町教育委員会　1994 『芦峅寺室堂遺跡』
39 多田敏捷編　1992 「めんこ・ビー玉」『おもちゃ博物館』④　京都書院
40 谷口尚弘　1993 「下水排除施設に関する史的考察」『衛生工学シンポジウム論文集』1　北海道大学
41 谷田有史　2000 「江戸時代のたばこ」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
42 俵有作編　1978 『日本の土人形』 文化出版局
43 東京下水道史探訪会　1995 『江戸・東京の下水道のはなし』
44 東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会　1992 『内藤町遺跡』

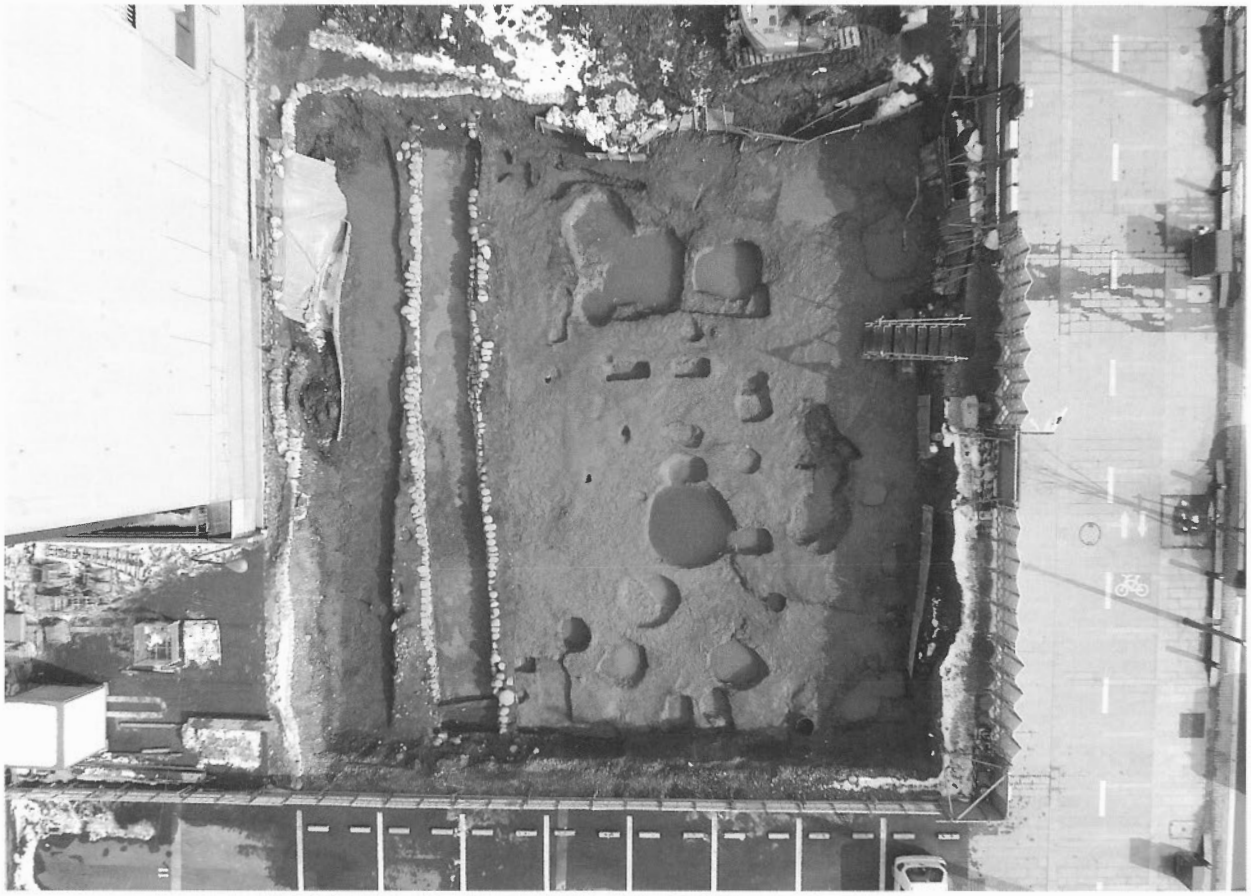
45　東京都埋蔵文化財センター　2005 『新宿六丁目遺跡』
46　砺波市教育委員会　1978 『栴檀野遺跡群予備調査概要』
47　砺波市教育委員会　2008 『増山城跡総合調査報告書』
48　砺波市教育委員会　2010 『砺波市遺跡詳細分布調査報告６－般若・東般若－』
49　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1996a 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
50　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1996b 『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告』
51　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　2009 『竹ノ内Ⅱ遺跡・柳田遺跡・下山新東遺跡・下山新遺跡発掘調査報告』
52　富山市教育委員会　2004 『富山城跡試掘確認調査報告書』
53　富山市教育委員会　2005 『富山城跡発掘調査概要』
54　富山市教育委員会　2006a 『富山城跡試掘確認調査報告書』
55　富山市教育委員会　2006b 『富山城跡発掘調査報告書』
56　富山市教育委員会　2007 『富山城跡試掘確認調査報告書』
57　富山市教育委員会　2008 『富山城跡試掘確認調査報告書』
58　富山市教育委員会　2009 『富山城跡試掘確認調査報告書』
59　富山市教育委員会　2010 『富山城跡発掘調査報告書』
60　富山市郷土博物館　1995 『加越能のやきもの展』
61　富山市郷土博物館　1999 『地震・大水・火事－富山』
62　富山市陶芸館　2013 『越中瀬戸焼－新たな息吹』
63　富山市立郷土博物館　1960 『越中瀬戸焼』
64　富山市路面電車推進室・富山市教育委員会　2009 『富山城跡発掘調査報告書』
65　中野高久　1999 「江戸遺跡における貝殻の利用形態－牡蠣殻葺屋根と貝杓子を中心に－」『東京考古』17　東京考古談話会
66　西町南地区市街地再開発組合・富山市教育委員会　2014 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
67　東池袋四丁目地区市街地再開発組合・玉川文化財研究所　2007 『東池袋Ⅱ』
68　久田勉　2012 「背割（太閤）下水のはなし」『ちんちょうち』第４号
69　深田智恵子　2006 「18 世紀における京都・健仁寺門前町家の座敷について」『生活科学研究誌』Vol.5　大阪市立大学大学院生活科学研究科・生活科学部
70　福井市文化財保護センター　2004 『福井城跡Ⅳ』
71　福岡市教育委員会　1994 『藤崎遺跡 9』
72　福岡市教育委員会　2007 『福岡城跡』
73　古川知明　2006 「近世富山城の縄張りについて」『富山史壇』第 149 号　越中史壇会
74　古川知明　2014 『富山城の縄張と城下町の構造』　桂書房
75　増尾富房　2000 「江戸時代の銭貨・寛永通宝」『江戸文化の考古学』　吉川弘文館
76　宮田進一　1988 「越中瀬戸の窯試料（1）」『大境』第 12 号　富山考古学会
77　宮田進一　1997 「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』　桂書房
78　宮田慎一　1998 「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史』　雄山閣（株）
79　安田良榮　1988 「越中瀬戸四百年の変遷」『越中瀬戸－発祥四百年記念誌－』　越中瀬戸焼四百年記念顕彰会実行委員会
80　山村博美　2000 「江戸時代の化粧」『江戸文化の考古学』　吉川弘文館
81　山本久作　1934 『越中製陶史稿』　輝久華荘

第４章

82　相川廣秋・加藤益夫　1938 「魚類の年齢査定（豫報Ⅰ）」『日本水産学会誌』7-2
83　安部みき子編　2009 『鳥の骨探』NTS
84　安藤一男　1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42a　NN.Tohoku Geogr.Assoc.
85　石川茂雄　1994 『原色日本植物種子写真図鑑』　石川茂雄図鑑刊行委員会
86　伊東隆夫　1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31　京都大学木質科学研究所
87　伊東隆夫　1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32　京都大学木質科学研究所
88　伊東隆夫　1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33　京都大学木質科学研究所

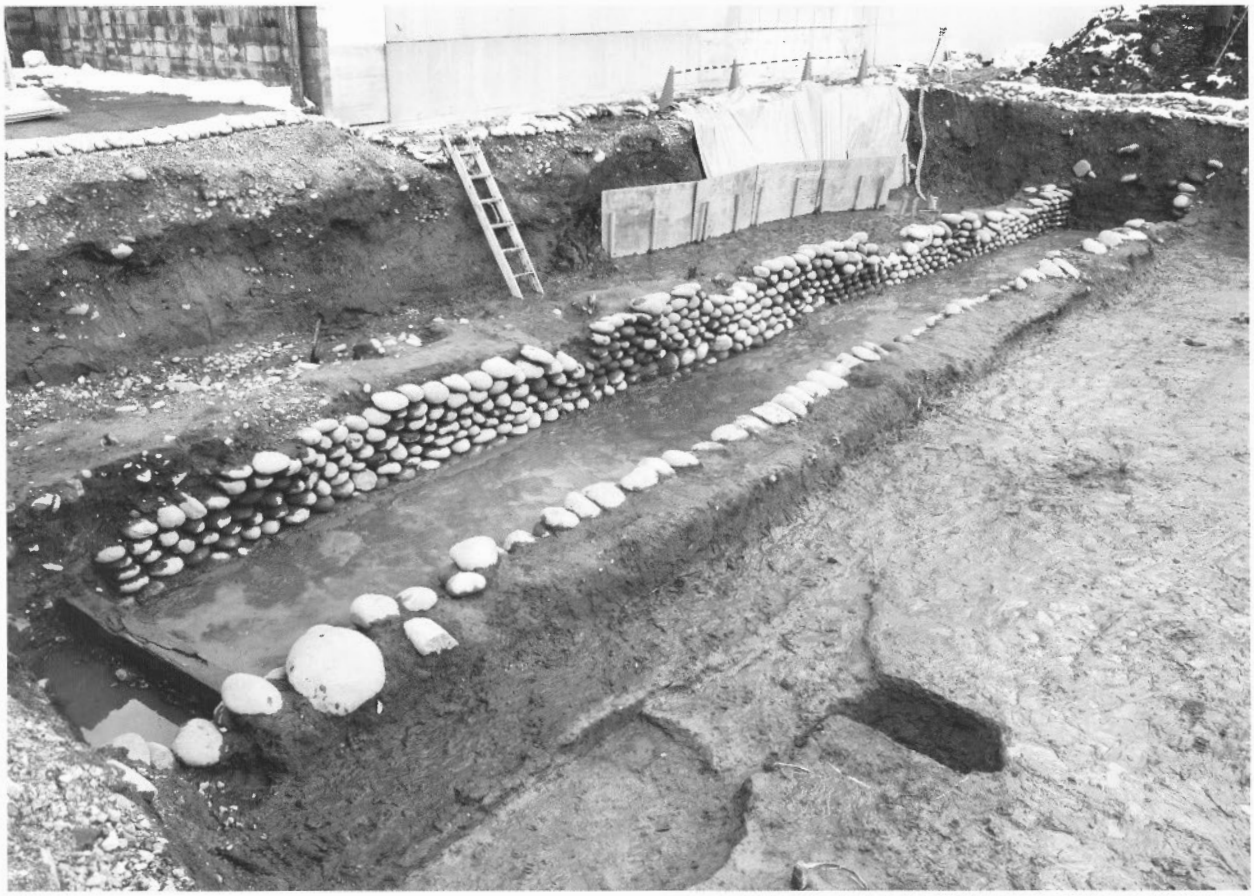
89 伊東隆夫　1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34　京都大学木質科学研究所
90 伊東隆夫　1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35　京都大学木質科学研究所
91 伊東隆夫・山田昌久編　2012 『木の考古学』出土木製品用材データベース　海青社
92 伊藤良永・堀内誠示　1989 「古環境解析からみた陸生珪藻の検討－陸生珪藻の細分－」『日本珪藻学会第10回大会講演要旨集』17
93 伊藤良永・堀内誠示　1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌』6
94 岩田利治・草下正夫　1959 増訂邦産松柏図説，産業図書
95 上野輝弥・山崎京美　2008 『硬骨魚類の顎と歯』 アート＆サイエンス工房 Talai
96 江田真毅・井上貴央　2011 「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』28　動物考古学研究会
97 奥谷喬司編　2000 『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会
98 小杉正人　1986 「陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究』1
99 小杉正人　1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27（1）
100 西中川駿他　2008 「イヌの骨計測値からの骨長並びに体高の推定法」『動物考古学』25　動物考古学研究会
101 納屋内高史　2010 「富山城城下町（町人地）出土の動物遺存体」『富山市考古資料館報』№47　富山市考古資料館
102 納屋内高史　2012 「近世富山城下町出土の動物遺存体－2006・2008年度調査出土資料の紹介－」『富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報　富山市の遺跡物語』№13　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
103 橋本鉄男　1979 「ろくろ」『ものと人間の文化史』31　法政大学出版会
104 林昭三　1991 『日本産木材　顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
105 パリノ・サーヴェイ（株）　2010 「第Ⅳ章　理化学分析」『富山城跡発掘調査報告書一総曲輪四丁目・旅篭町地区優良建築物等整備事業に伴う富山城下町の発掘調査報告』富山市埋蔵文化財センター
106 藤木利之・小澤智生　2007 『琉球列島産植物花粉図鑑』 アクアコーラル企画
107 藤下典之　1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編・同朋舎
108 松井章　2008 『動物考古学』 京都大学出版会
109 Asai,K.& Watanabe,T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10.
110 Desikachiary,T.V.,1987,Atlas of Diatoms.Marine Diatoms of the Indian Ocean.Madras science foundation, Madras,Printed at TT.Maps & Publications Private Limited,328,G.S.T.Road,Chromepet,Madras-600044.1-13,Plates:401-621.
111 Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy:Angiosperms（An introduction to palynology.I）. Almqvist & Wiksells,539p.
112 Erdtman G.,1957,Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy:Gymnospermae,Pteriodophyta,Bryophyta（Illustrations）（An Introduction to Palynology.II）,147p.Feagri K.and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
113 Horst Lange-Bertalot.,2000,ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA:Annotated diatom micrographs.Witkowski,A.,Horst Lange-Bertalot,Dittmer Metzeltin:Diatom Flora of Marine Coasts Volume1.219 plts.4504figs,925pgs.
114 Hustedt, F.,1930,Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz.under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs unt der Schweiz,7,Leipzig,Part1,920p.
115 Hustedt,F.,1937-1938,Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java,Bali und Sumatra.I-III. Arch.Hydrobiol.Suppl.,15,131-809p,1-155p,274-349p.
116 Hustedt,F.,1959,Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland,Oesterreichs unt der Schweiz,7,Leipzig, Part2,845p.
117 Hustedt,F.,1961-1966,Die Kieselalgen Deutschlands,Oesterreichs und der Schweiz.under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete.in Dr.Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland Oesterreichs unt der Schweiz,7,Leipzig, Part3,816p.

図版1　下層面遺構（1）



調査区全景（上から）

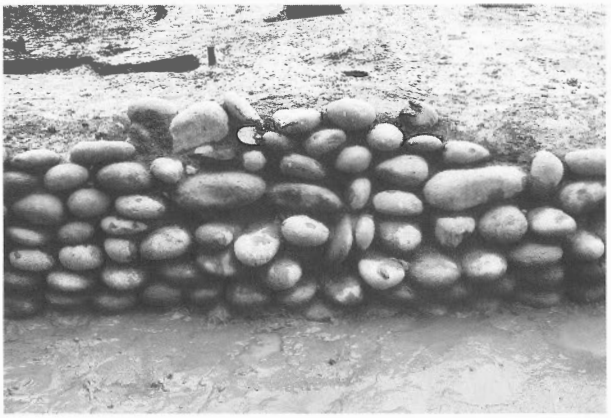
調査区全景（西から）



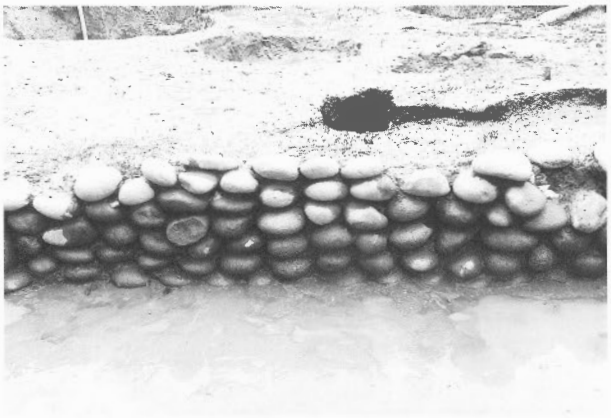
SD03［背割水路］全景（南西から）

SD03北側石積み西部（南から）

SD03北側石積み中央部（南から）

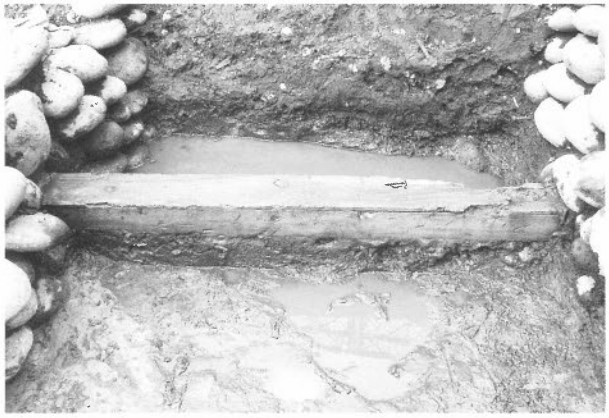


SD03南側石積み中央部（北から）

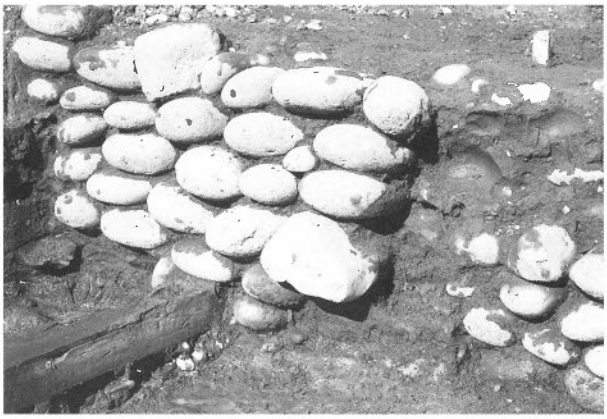


SD03南側石積み西部（北から）

SD01・SD02・SD03［背割水路］断面（東から）



SD03内上水施設（東から）



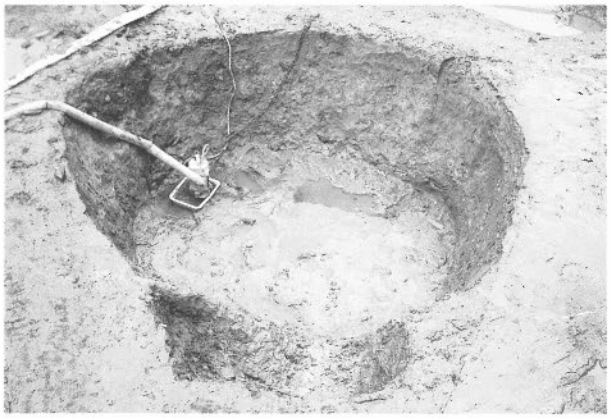
上水施設設置によるSD03石積みの改修（南東から）

SD03内上水施設（北から）

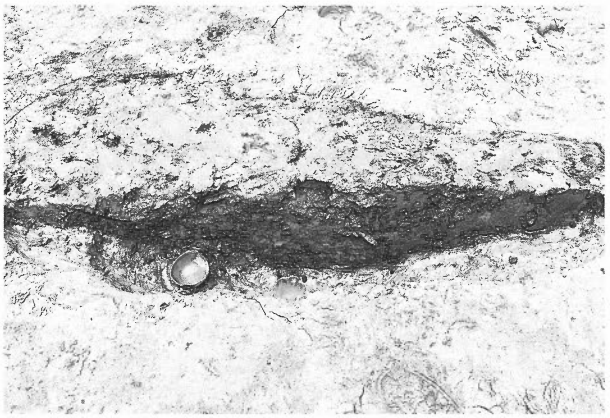
SD02［背割水路・中央の石列］の検出（西から）

SE03完掘（東から）

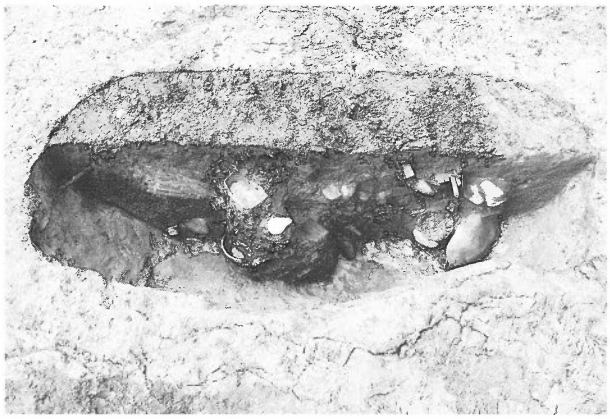
SE04下部側板完掘（南東から）



SE06完掘（東から）

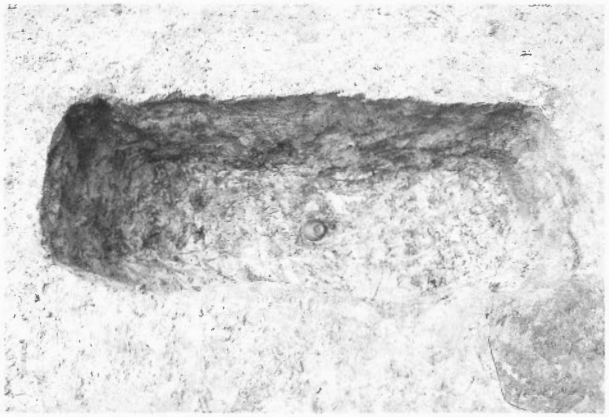


SK23断面（東から）



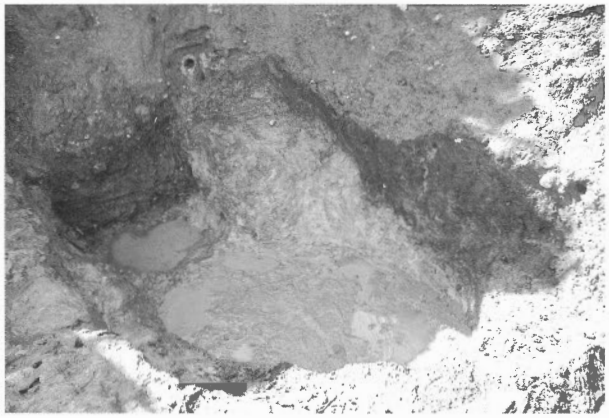
SK25断面（東から）

SK29断面（南から）



SK26完掘（東から）

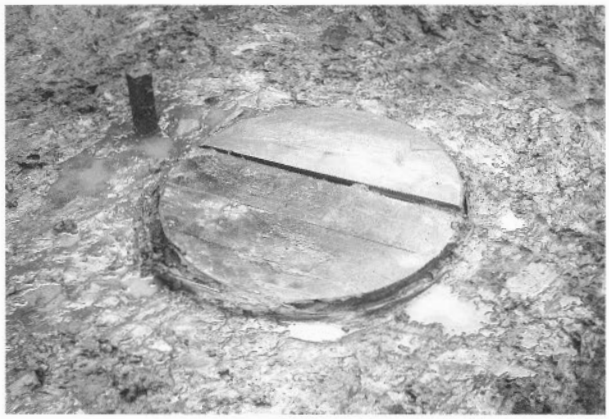
SK30遺物出土状況（南から）



SX03完掘（北から）

SX07完掘（西から）

SX10・SK21完掘（南東から）



曲物底板出土状況（北東から）

調査区北壁層位（南から）

調査区［B区］全景（西から）

調査区［B区］近景（西から）

SD03［背割水路］南側石積み根石（西から）

SD06完掘（南から）

調査区全景（東から）

SD01［背割水路］完掘（東から）

SD01北側石積み東部・胴木（南から）

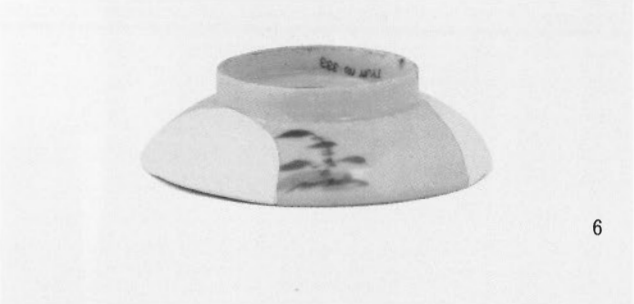
SD01C-C′断面（東から）

図版8　下層面遺物（1）

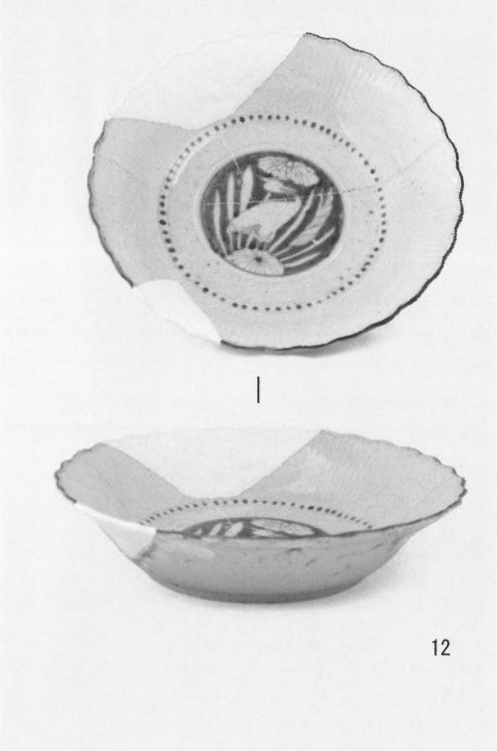
1

3

5


6

9


12

14

15

18

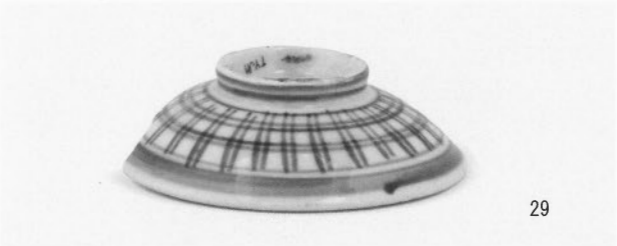
20

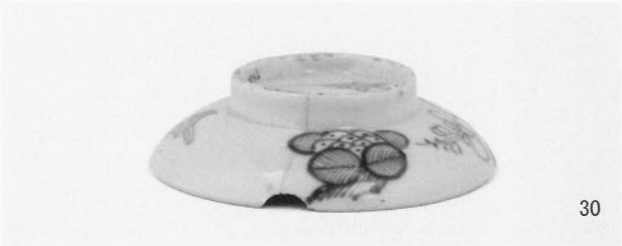
23

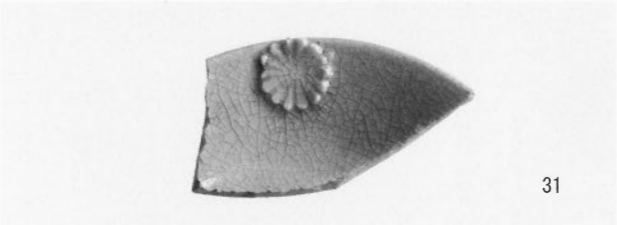
28

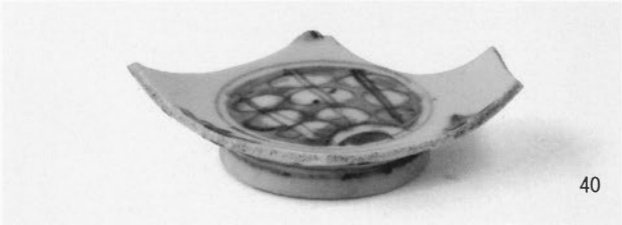
35

SD02・03（1・3・5・6・9・12・14・15）　SD03（18・20・23・28・35）


29


30


31


40

42

43

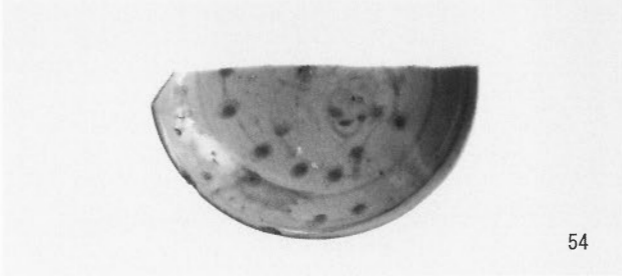
46

48

51

50

47


54

SD03（29～31）　SE06（40）　SK16（42・43）　SK18（46～48）　SK25（50）　SK30（51）　SX03（54）

図版10　下層面遺物（3）

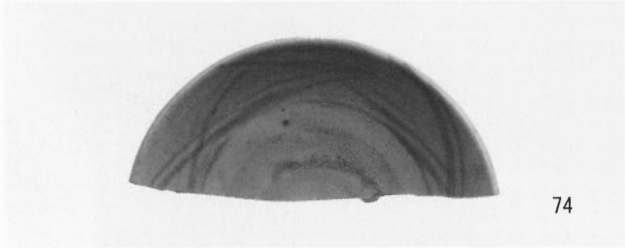
60

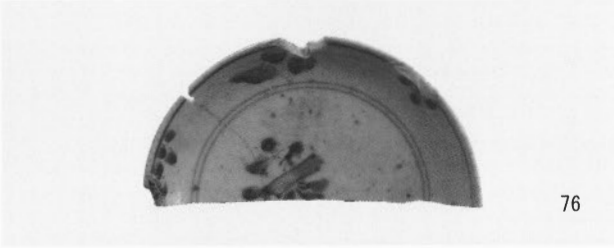
61

65

68

70

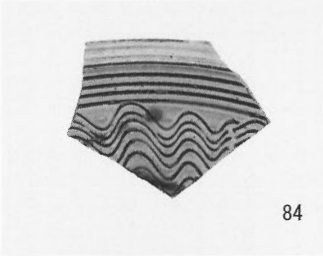

74


76

83

87

85


84

90

91

92

SX07（60・61・83）　SX10（65・84）　SD02・03（68・87・90・91）　SD03（70・74・92）　SK30（76）
包含層（85）

95

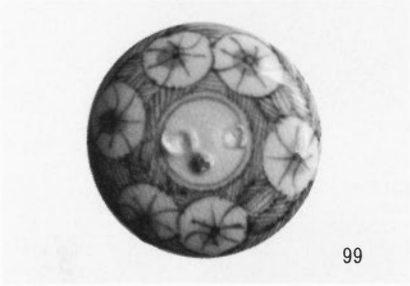
96

106

107

108

109


99

102

118

105

122

123

128

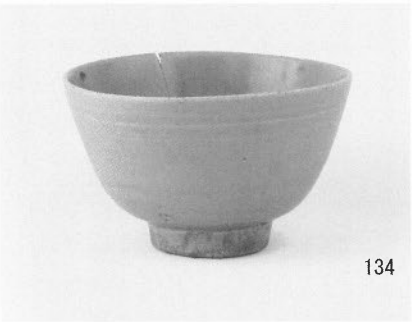
116

117

127

SD03（95・96・99・102・105～109・116～118）　SE03（122・123）　SK16（127）　SK18（128）

図版12　下層面遺物（5）


134

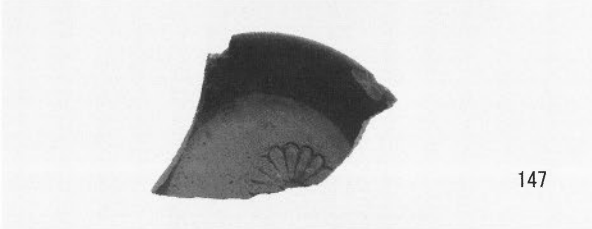
136

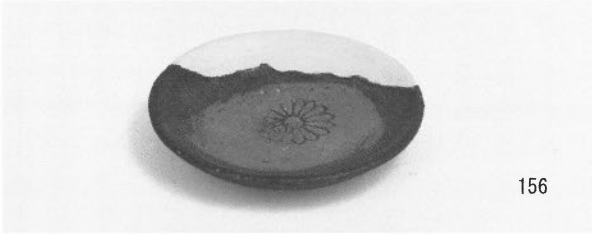
137

138

139

143


147


156

148

158

149

154

155

SK26（134）　SK30（136～139）　SX10（143）　SD02・03（147～149）　SD03（154～156・158）

165

170

171

166

173

167

177

184

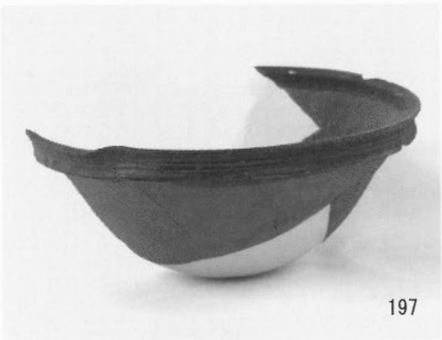
174

188

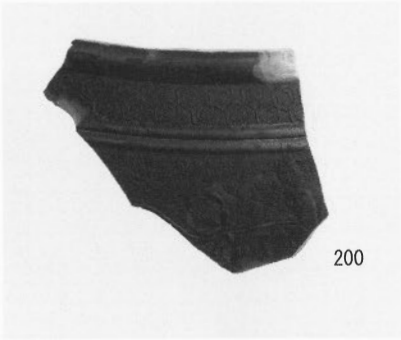
187

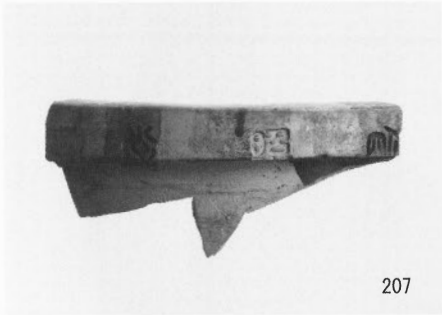
189

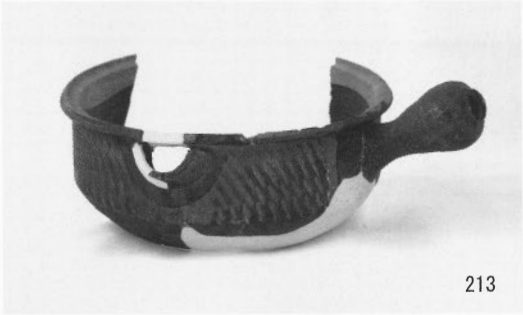
SD03（165～167・177・184・188・189）　SK30（170・171・173）　SX04（174）


197

198


200


207


213

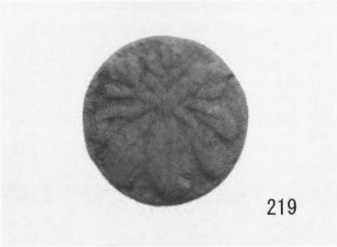
209

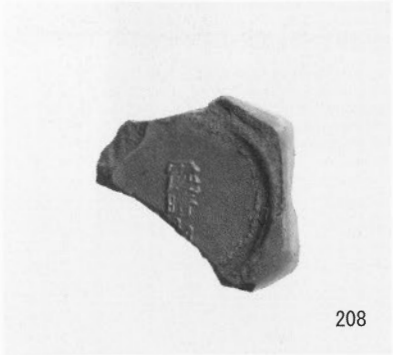
214

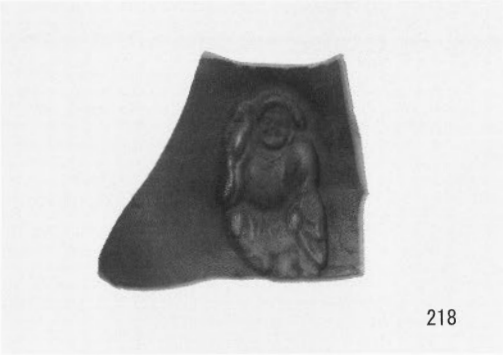
215

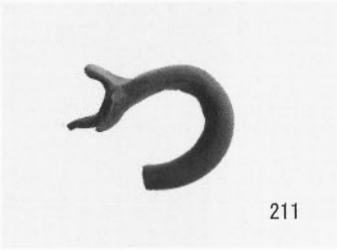
217

216


219

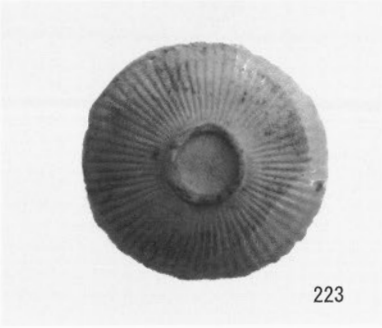

208


218

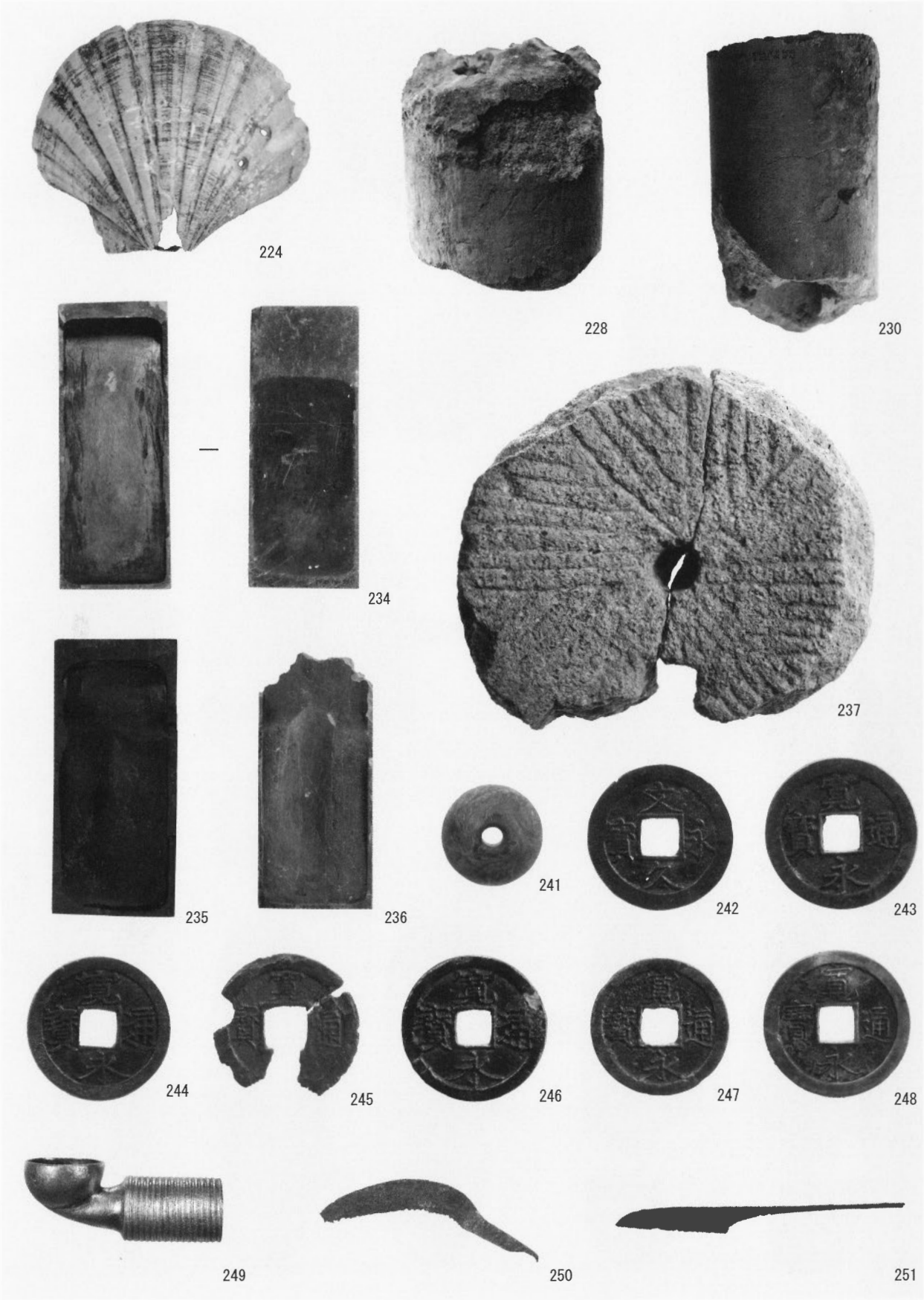

211

220

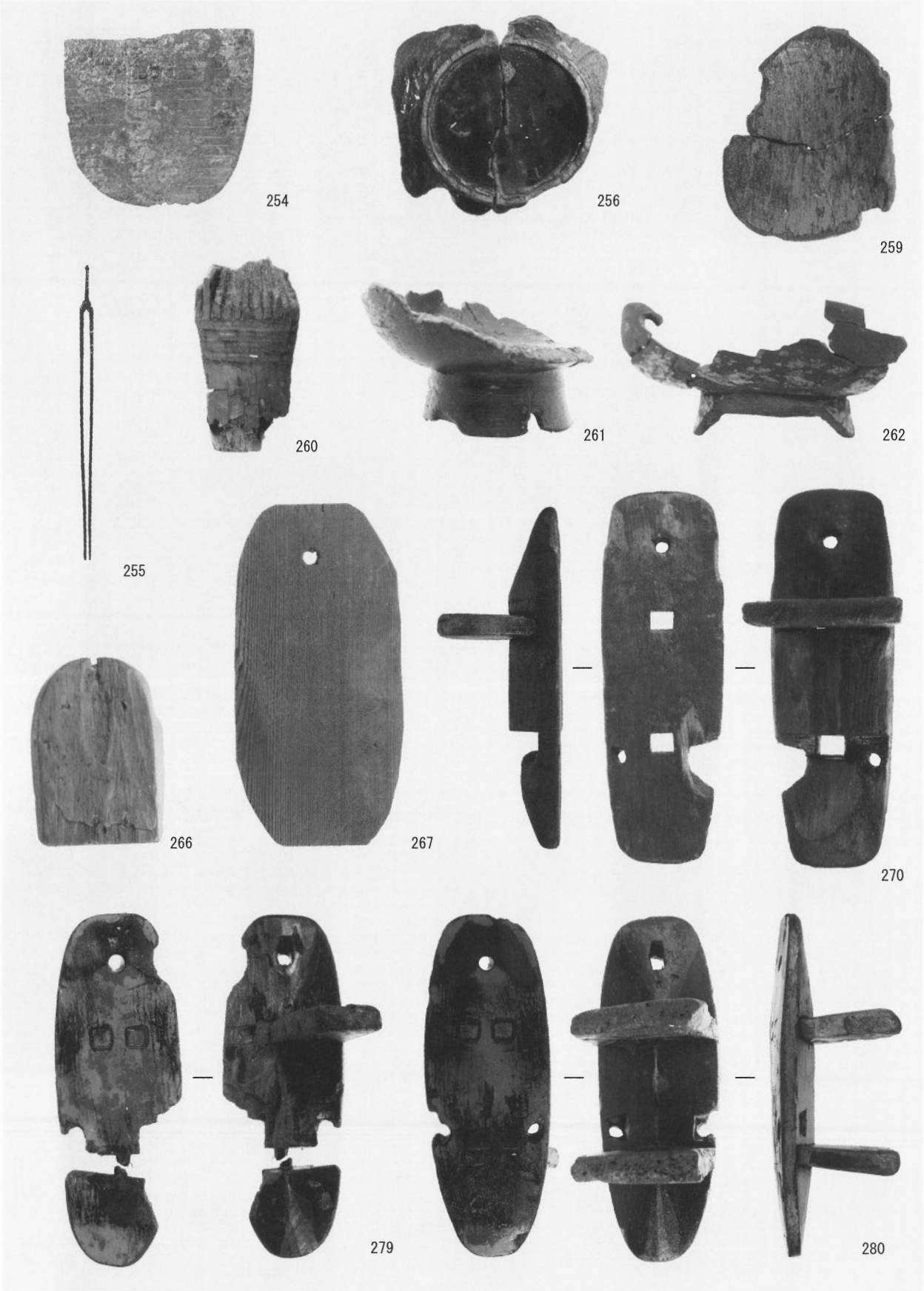
221


223

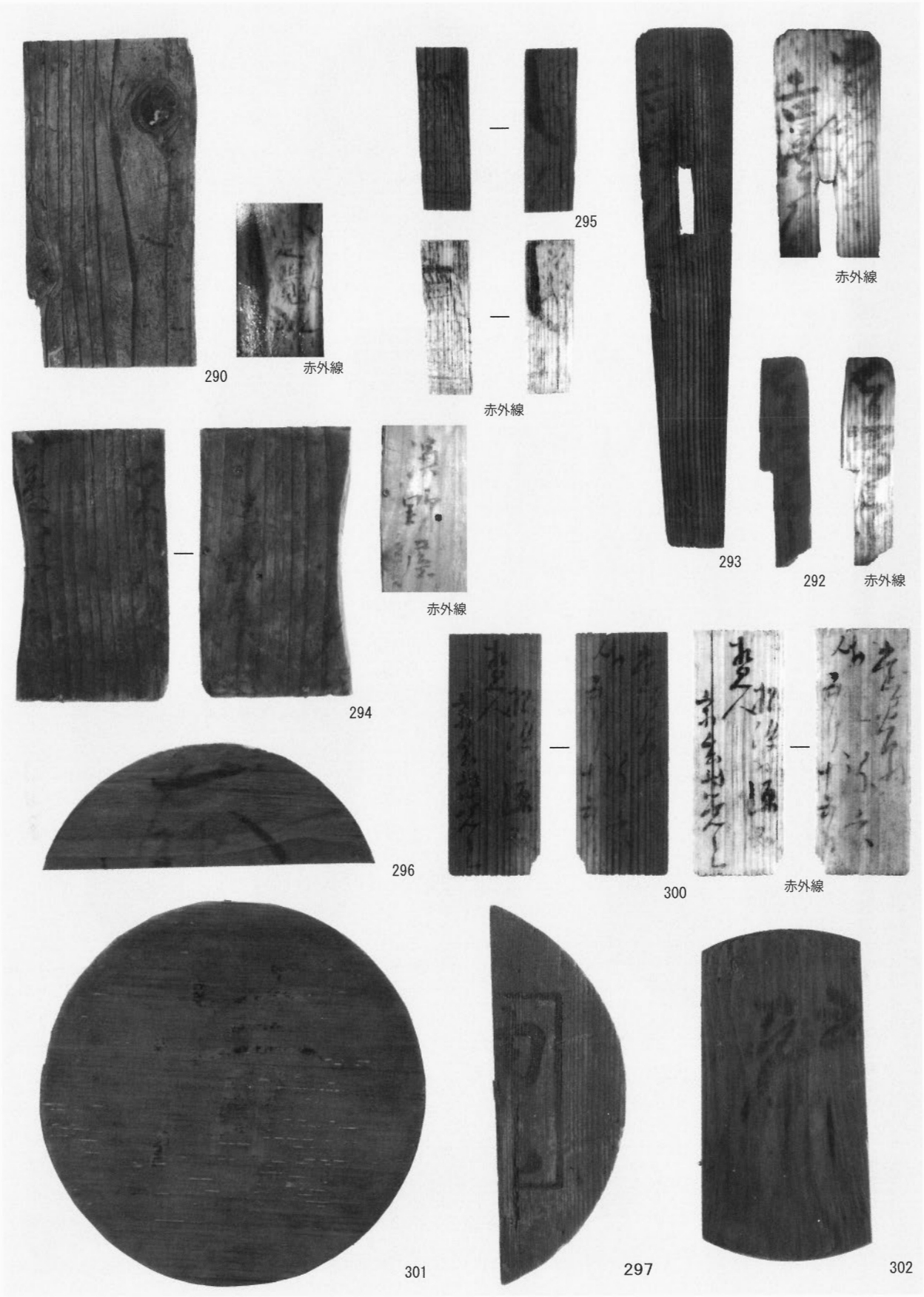
SX04（197）　SD03（198・200・221）　SD02・03（207～209・211・214～216・220）
包含層（213・217～219・223）



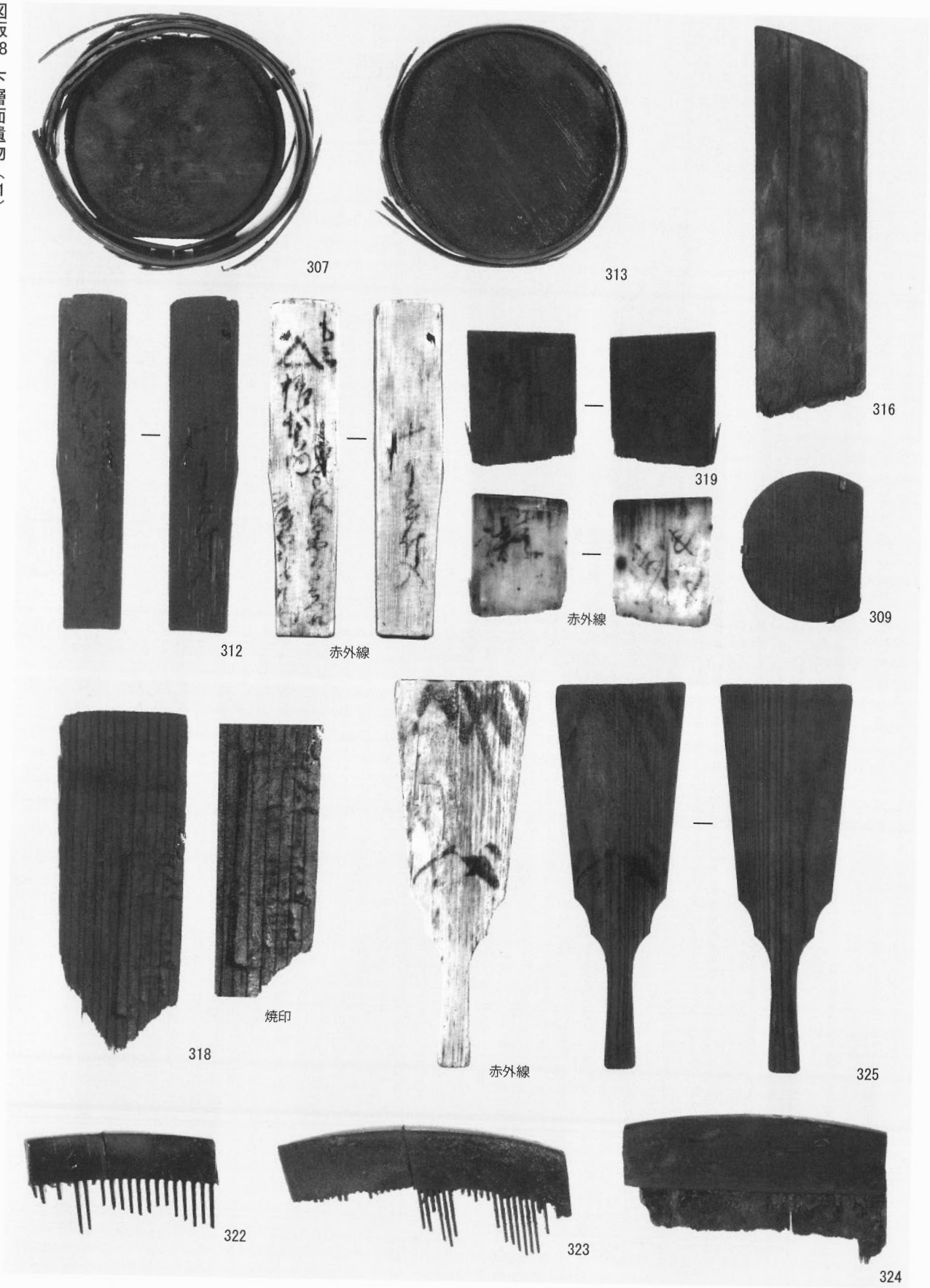
SX07（224・228）　SX09（230）　SD02（234）　SD02・03（235・242・249・250）　SD03（236・237・243・251）
SK29（244）　SX03（245）　包含層（241・246）　試掘トレンチ（247）　B区撹乱（248）



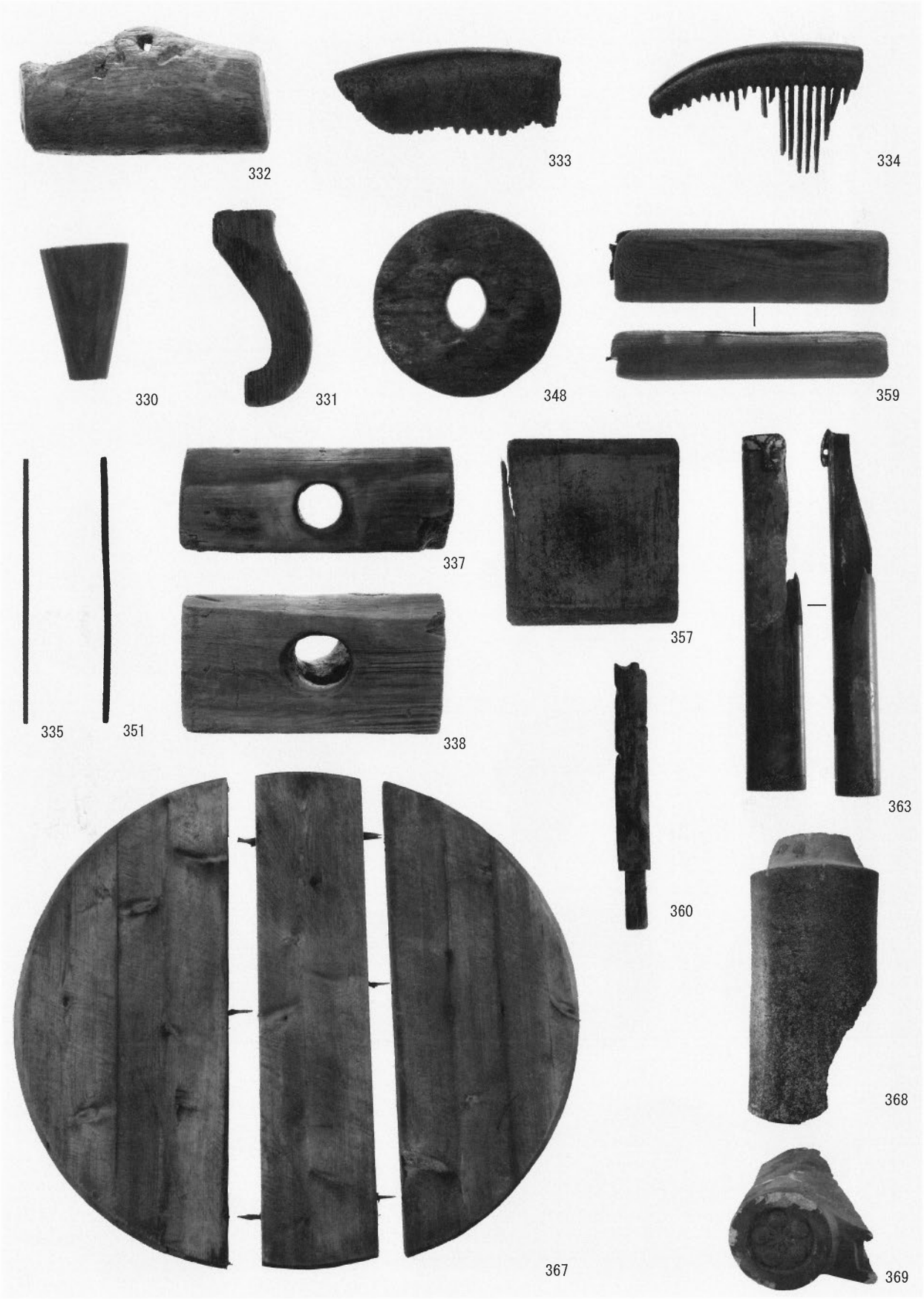
包含層（254・255）　SD02（256）　SD02・03（259）　SD03（260・266・267）　SK09（261）　SK13（262）
SK16（270）　SK30（279・280）



SD02（290）　SD02・03（292～297）　SD03（301・302）

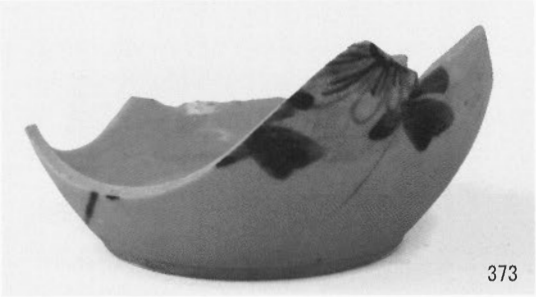


SD05（307・309）　SK25（312）　SK30（313）　包含層（318・319）　SD02・03（322～325）



SD02・03（330～332）　SD03（333～335）　SD03内上水施設（337・338）　SK18（348）　SK26（351）
SX03（357）　SX04（359）　SX07（360）　包含層（363・368・369）　曲物底板（367）

370


373

381

371

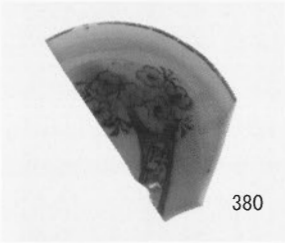
376

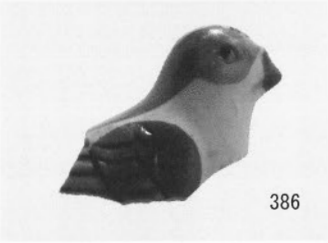
377

379

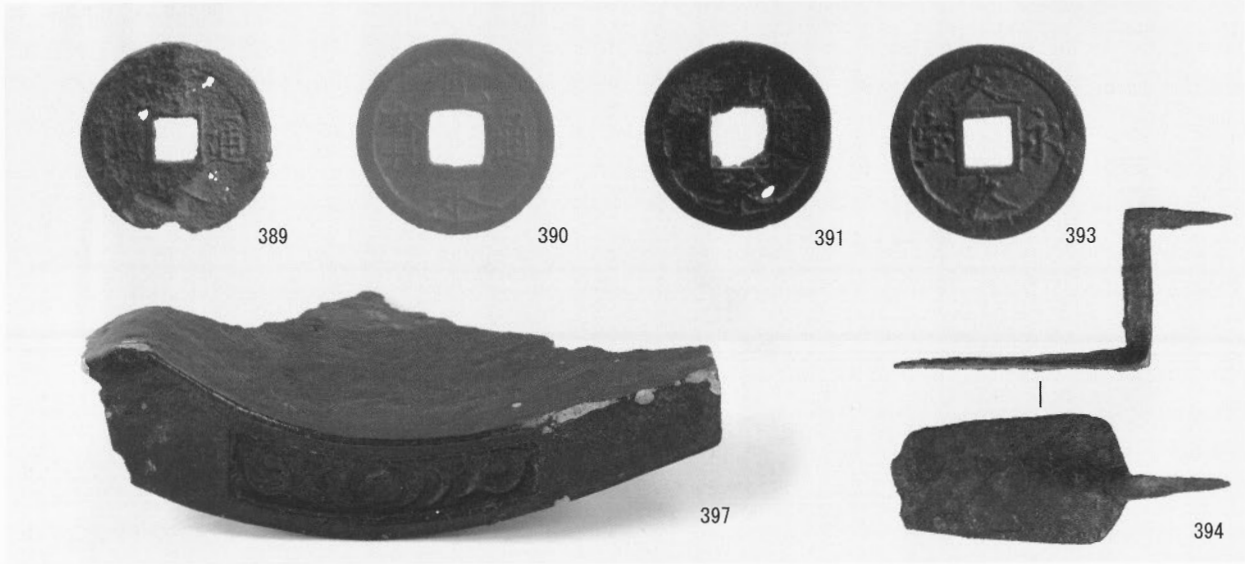
382

385


380


386

387


389
390
391
393
397
394

SD01（370・371・373・376・377・379～381・385～387・391・397）　SX01（394）　包含層（382・393）

報 告 書 抄 録

ふりがな	とやまじょうかまちいせきしゅようぶはっくつちょうさほうこくしょ
書名	富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書
副書名	一番町共同ビル（仮称）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	70
編著者名	野垣好史・納屋内高史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター） 基峰　修・関　容子（株式会社アーキジオ） 田中義文・斉藤崇人・堀内誠示・高橋　敦・馬場健司・松元美由紀・斉藤紀行（パリノ・サーヴェイ株式会社）
編集機関	株式会社アーキジオ
所在地	〒933-0824 富山県高岡市西藤平蔵 581　TEL 0766-63-8850
発行機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0091 富山県富山市愛宕町 1-2-24　TEL 076-442-4246
発行年月日	2014 年 8 月 29 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とやまじょうかまち 富山城下町 いせきしゅようぶ 遺跡主要部	とやまけんとやましいちばんまち 富山県富山市 一番町	16201	2011048	36 度 41 分 21 秒	137 度 12 分 43 秒	20131121 ～ 20140228	423㎡	一番町共同 ビル（仮称） 新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富山城下町 遺跡主要部	城下町	近世	背割水路 上水施設 井戸 土坑 小鍛冶遺構 溝 ピット	肥前、肥前系磁器、唐津、唐津系磁器、瀬戸系磁器、瀬戸・美濃、越中瀬戸、信楽系磁器、丹波系陶器、越前、土師器（カワラケ）、瓦質土器、輸入陶磁器、石製品（硯・石臼）、土製品（土人形・泥面子）、貝杓子、金属製品（煙管・鎌・握り鋏・包丁刃・把手・小判形飾り・簪）、銭貨（寛永通宝・文久永宝）、漆器（椀・杓子・和傘）、木製品（下駄・木札・曲物・横櫛・羽子板・箸・筒か鞘・上水継ぎ手・加工板・井戸側板・栓）、鍛冶製品（羽口・鉄滓）、瓦（丸瓦・軒桟瓦）	富山城下町の武家屋敷と町屋敷を区画する石積の背割水路を良好な状態で検出し、その構造と変遷過程を把握した。
		近代	背割水路 土坑 ピット	統制磁器・人形、九谷、土製品（鳥形・犬形・林檎形）、金属製品（コテ）、木製品（小判状板・栓）、瓦（軒瓦・軒丸瓦）	

要約

本調査区は、富山城南側の北陸街道沿いの城下町主要部に位置する。18 世紀後半から 19 世紀中頃を主体とする下層面と 19 世紀後半以降の上層面の 2 層を検出した。主体となるのは下層面である。

武家屋敷地と町屋敷地を分ける石組みの背割水路を良好な状態で検出し、江戸時代後期頃から昭和初期まで 3 時期の変遷を確認した。当初約 1.5 ～ 1.9m の幅があった水路は、徐々に幅を狭くしながら造り替えられた。周辺の発掘調査成果も総合すると、背割水路全体として少なくとも 4 期の変遷があったことが明らかになった。

町屋敷地からは、井戸・土坑等の遺構を検出した。土坑の一部に鍛冶関連遺物を多く含むものがあり、当該地の商家において自給的な小鍛冶を行っていたことが推測できる。陶磁器のほか、土人形・下駄・櫛・羽子板・傘など多様な遺物の出土があり、町人の暮らしぶりが具体的にわかる良好な資料が得られた。また、自然科学分析から動植物の食物利用や漆器・木製品の素材利用が明らかになった。

富山市埋蔵文化財調査報告70

富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書

－一番町共同ビル（仮称）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

発 行 日　2014（平成26）年8月29日
編　　集　株式会社アーキジオ
発　　行　富山市教育委員会
〒930-0091
富山市愛宕町1-2-24
TEL 076-442-4246　FAX 076-442-5810
印　　刷　株式会社トーザワ